

富雄丸山古墳発掘調査報告書 1

- 第1～5次調査 -



2022
奈良市教育委員会



1. 富雄丸山古墳 遠景（佐紀古墳群を望む：南西から）



2. 富雄丸山古墳 遠景（生駒谷を望む：東から）



湧水施設形埴輪と区画施設（第5次U発掘区：南東から）

富雄丸山古墳発掘調査報告書 1

—第1～5次調査—

2022
奈良市教育委員会

例言

1. 本書は奈良県奈良市丸山一丁目 1079-239 で実施した富雄丸山古墳の第 1～5 次調査報告書である。
2. 本書に係る調査内容は以下の通りである。

第 1 次調査（航空レーザ測量）：20,267㎡（平成 29（2017）年 5 月 22 日～8 月 31 日）
第 2 次調査（発掘調査）：242.5㎡（平成 30（2018）年 12 月 3 日～平成 31（2019）年 1 月 31 日）
第 3 次調査（発掘調査）：275㎡（令和元（2019）年 10 月 21 日～12 月 20 日）
第 4 次調査（発掘調査）：260㎡（令和 2（2020）年 12 月 21 日～令和 3（2021）年 2 月 19 日）
第 5 次調査（発掘調査）：278㎡（令和 3 年 12 月 20 日～令和 4（2022）年 2 月 18 日）
※令和 4 年度に第 6 次調査を計画しているが、その内容については別途報告を予定している。
3. 富雄丸山古墳の調査は、第 1 次調査を鐘方正樹、第 2 次調査を永野智子・村瀬陸、第 3 次調査を森下浩行・村瀬、第 4・5 次調査を村瀬が担当した。
4. 本書は文化財課埋蔵文化財調査センター所長 鐘方正樹の助言をもとに村瀬陸が編集した。本書の執筆は鐘方・村瀬・山口等悟（文化財課埋蔵文化財調査センター）を中心とし、第 2～5 次調査に参加した荒井啓汰（筑波大学大学院）、柴原聡一郎（東京大学大学院）、小林友佳（奈良大学大学院）、木村日向子・水川慶紀（奈良大学）が行なった。
5. 発掘調査および本書の作成にあたっては下記機関・関係者のご指導・ご協力を得た。（50 音順・敬称略）

大手前大学史学研究所 京都国立博物館 奈良県立橿原考古学研究所 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
奈良大学 奈良文化財研究所 埴輪検討会
青柳泰介 池田保信 諫早直人 泉真奈 泉森皎 一瀬和夫 上田直弥 上野あさひ 宇野隆志 梅本康広
大澤嶺 大西貴夫 岡林孝作 奥田尚 小栗明彦 金澤舞 金澤雄太 金田明大 川上洋一 河内一浩
岸本直文 北山峰生 木村理 木許守 國下多美樹 柴田将幹 白石太一郎 白神典之 鈴木一議
竹原千佳誉 橘泉 巽淳一郎 辰巳祐樹 田中晋作 田中秀和 田辺征夫 塚本敏夫 寺沢薫 寺沢知子
寺前直人 豊島直博 中井歩 中野咲 長友朋子 初村武寛 花熊祐基 原田昌浩 春成秀爾 東影悠
肥田翔子 平井洸史 平田政彦 廣瀬覚 福永伸哉 古谷毅 穂積裕昌 前田俊雄 道上祥武 光石鳴巳
宮川禎一 三好美穂 村田泰輔 森岡秀人 森下恵介 森下章司 山口欧志 山田暁 山田隆文 山田幸弘
山本亮 米川仁一 和田晴吾 和田一之輔
6. 古墳の測量は、第 1 次調査で航空レーザ測量を（株）アジア航測、第 4・5 次調査中に UAV レーザ測量を（株）アクセスが行った。遺構の平面・立面のオルソ画像作成業務は、第 2・3 次調査を（株）共和、第 4・5 次調査を（株）アクセスが行なった。
7. 本書に掲載する写真は、村瀬が主に撮影し、一部は令和 2 年度春季発掘調査速報展の際に佐藤右文（アートフォト右文）が撮影したものを利用した。
8. 本書をもって第 1～5 次調査の正式報告とし、図面・出土遺物等は全て文化財課埋蔵文化財調査センターが保管している。ただし、令和 4 年度に実施する第 6 次調査の成果によっては本書の見解を改める可能性がある。その場合は、第 6 次調査終了後に刊行を予定している『富雄丸山古墳発掘調査報告書 II』で改めて記述する。

目次

第1章 調査の経過

第1節 富雄丸山古墳の来歴 (村瀬)	1
第2節 調査に至る経緯 (鐘方)	3
第3節 発掘調査の経過 (村瀬)	4
第4節 整理・報告書作成作業の経過 (村瀬)	8

第2章 地理・歴史的環境

第1節 地理的環境 (小林)	9
第2節 歴史的環境 (小林)	9

第3章 測量・発掘調査

第1節 航空レーザ測量：第1次調査 (柴原)	13
第2節 発掘調査：第2～5次調査 (村瀬・山口・荒井・柴原)	17
第1項 円丘部の調査 (村瀬・山口・荒井・柴原)	17
第2項 造出し部の調査 (村瀬・柴原)	38

第4章 出土遺物

第1節 墳頂部旧発掘区埋土出土遺物 (村瀬)	47
第1項 青銅製品	47
第2項 石製品・玉類	48
第3項 鉄製品	48
第4項 土製品	51
第2節 埴輪 (村瀬・山口・木村・水川)	51
第1項 円筒埴輪 (村瀬)	51
第2項 罎・家形埴輪 (木村)	63
第3項 盾形埴輪 (山口)	71
第4項 蓋形埴輪 (水川)	73
第5項 甲冑形埴輪 (村瀬)	76
第6項 その他の埴輪 (村瀬)	76
第3節 土器 (村瀬)	76

第5章 総括

第1節 墳丘 (柴原)	85
第2節 副葬品 (村瀬)	87
第3節 埴輪 (村瀬)	87
第1項 円筒埴輪	87
第2項 形象埴輪	91
第3項 年代的位置づけ	92

写真図版

図目次

図1 『聖蹟図志』にみる富雄丸山古墳(津久井1854) ……	1	図39 E・J発掘区北東壁断面図 1/100 ……	36
図2 富雄丸山古墳墳頂部埋葬施設出土品(県第1次調査) 1/4(奈良県教委1973から再トレース) ……	1	図40 I・L発掘区平面図 1/60 ……	37
図3 京都国立博物館所蔵富雄丸山古墳出土品 1/4 (京都国立博物館1982から再トレース) ……	2	図41 L発掘区AO・BO間断面図 1/60 ……	38
図4 検討会議での現地検討(第4次調査) ……	3	図42 H発掘区C-C'間断面図 1/20 ……	38
図5 第2次調査参加者集合写真 ……	4	図43 B発掘区北東部・P発掘区 平・断面図 1/100、 B発掘区下段斜面葺石平・立面図 1/50 ……	39
図6 第3次調査参加者集合写真 ……	4	図44 J発掘区 平・立面図 1/30 ……	40
図7 第4次調査参加者集合写真 ……	4	図45 J発掘区 断面図 1/50 ……	40
図8 第5次調査参加者集合写真 ……	4	図46 H発掘区 平・断面図 1/40 ……	41
図9 富雄丸山古墳の位置(地理院地図をもとに作成) ……	9	図47 H発掘区 円丘部1段目・造出し下段埴輪列 平・立・断面図 1/30 ……	42
図10 富雄丸山古墳と周辺の遺跡 1/25,000 ……	10	図48 G・K発掘区 平・断面図 1/80 ……	43
図11 航空レーザ測量等高線図 1/1,000 ……	14	図49 G・K発掘区 平面・葺石立面・A-A'断面図 1/60 ……	44
図12 墳丘の変形状況 ……	15	図50 盾形埴輪出土状態平面・立面・断面図 1/20 ……	45
図13 第1次調査成果をもとにした墳丘復元案 ……	15	図51 墳頂部旧発掘区埋土(A発掘区)出土遺物 1~7: 1/1、8~32: 1/2 ……	47
図14 旧地形との対応関係(奈良県教委1973に加筆) ……	16	図52 A発掘区出土鍬形石(トーン)と 京都国立博物館所蔵品の接合関係 1/2 ……	48
図15 第2~5次調査の発掘区位置図 1/700 ……	17	図53 円丘部2段目(B・M・T発掘区) 埴輪列出土埴輪 1/6 ……	49
図16 上: 主軸・グリッド設定図 下: 墳頂部の調査前測量図 1/400 ……	18	図54 円丘部1段目(D・N発掘区) 埴輪列出土埴輪 1/6(盾形線刻SfMは実大) ……	50
図17 A発掘区と1972年に検出した 粘土槨SZ01 1/100 ……	19	図55 造出し北西部~円丘部1段目(E発掘区) 埴輪列出土埴輪1 1/6 ……	51
図18 A発掘区東拡張区 平・断面図 1/100 ……	20	図56 造出し北西部~円丘部1段目(E発掘区) 埴輪列出土埴輪2 1/6 ……	52
図19 A発掘区西拡張区 平・断面図 1/100 ……	21	図57 造出し北西部~円丘部1段目(E発掘区) 埴輪列出土埴輪3 1/6 ……	53
図20 A発掘区 平・断面図 1/180 ……	21	図58 造出し南東部~円丘部1段目(H発掘区) 埴輪列出土埴輪1 1/6 ……	54
図21 B発掘区南西部 平・断面図 1/100 ……	22	図59 造出し南東部~円丘部1段目(H発掘区) 埴輪列出土埴輪2 1/6 ……	55
図22 E発掘区南西・南東拡張部 平・断面図 1/100 ……	23	図60 造出し南東部~円丘部1段目(H発掘区) 埴輪列出土埴輪3 1/6 ……	56
図23 M・N・O発掘区平・断面図 1/120、 N発掘区2段目斜面葺石平・立面図 1/40 ……	24	図61 造出し南東部~円丘部1段目(H発掘区) 埴輪列出土埴輪4 1/6 ……	57
図24 Q・R発掘区 平・断面図 1/100 ……	25	図62 U発掘区出土円形埴輪 (原位置資料: 実測図) 1/5 ……	58
図25 B発掘区2段目埴輪列平・断面図 1/20 ……	26	図63 U発掘区出土円形埴輪 (原位置資料: SfM) 1/5 ……	59
図26 M発掘区2段目埴輪列平・立・断面図 1/20 ……	26	図64 U発掘区出土円形埴輪 1/5 ……	60
図27 D発掘区1段目埴輪列平・断面図 1/20 ……	26	図65 U発掘区出土家形埴輪 (原位置資料: 実測図・SfM) 1/5 ……	61
図28 N発掘区1段目埴輪列平・立・断面図 1/20 ……	26	図66 U発掘区出土家形埴輪内部の湧水施設 (原位置資料: 実測図・SfM) 1/5 ……	62
図29 T発掘区平・断面図、埴輪列立・断面図 1/40 ……	27	図67 U発掘区出土湧水施設形埴輪 出土状態の復元図 1/5 ……	62
図30 C・D発掘区平・断面図 1/100 ……	28		
図31 O発掘区1段目斜面葺石平・立面図 1/20 ……	29		
図32 S発掘区平・断面図 1/50 ……	30		
図33 U発掘区平・断・立面図 1/30 ……	31		
図34 U発掘区 湧水施設形埴輪平・断面図 1/4 ……	32		
図35 造出し全体平面図 1/250 ……	33		
図36 F発掘区平・断面図 1/60 ……	34		
図37 E発掘区平面図・葺石立面図 1/60、 埴輪列平・立・断面図 1/40 ……	35		
図38 E発掘区A-A'間断面図 1/40 ……	36		

図 68 U 発掘区出土家形埴輪 (70～74)、囲または家形埴輪 (75～80)、各発掘区家形埴輪 (81・82) 1/5 … 63	図 77 G 発掘区出土盾形埴輪 (縦・横断面図) 1/10 …… 72
図 69 G 発掘区出土盾形埴輪 (表面実測図) 1/5 …… 64	図 78 盾形埴輪の部位名称 …… 72
図 70 G 発掘区出土盾形埴輪 (表面 SfM) 1/5 …… 65	図 79 各発掘区出土盾形埴輪 1/5 …… 74
図 71 G 発掘区出土盾形埴輪 (裏面実測図) 1/5 …… 66	図 80 各発掘区出土蓋形埴輪 1/5 …… 75
図 72 G 発掘区出土盾形埴輪 (裏面 SfM) 1/5 …… 67	図 81 甲冑形埴輪・その他出土埴輪 1/5 …… 76
図 73 G 発掘区出土盾形埴輪 (右側面実測図・SfM) 1/5 68	図 82 出土土器 1/4 …… 76
図 74 G 発掘区出土盾形埴輪 (左側面実測図・SfM) 1/5 69	図 83 富雄丸山古墳の墳丘復元図 1/1,000 …… 85
図 75 G 発掘区出土盾形埴輪 (内面実測図・断面図) 1/5 70	図 84 富雄丸山古墳の墳丘設計模式図 …… 86
図 76 G 発掘区出土盾形埴輪 (内左右側面 SfM) 1/5 …… 71	図 85 富雄丸山古墳出土埴輪の復元類型模式図 …… 88
	図 86 工具痕と規格工具の復元 …… 90

表目次

表 1 遺跡一覧表 …… 11	表 2 出土遺物観察表 …… 77～84
-----------------	----------------------

写真図版目次

巻頭図版 1-1 富雄丸山古墳 遠景 (佐紀古墳群を望む：南西から)	PL.5-5 円丘部北東側 2・3 段目全景 (第 3 次 E 区：北東から)
巻頭図版 1-2 富雄丸山古墳 遠景 (生駒谷を望む：東から)	PL.6-1 円丘部北東側 2 段目全景 (第 2 次 B 区南西側：北東から)
巻頭図版 2 湧水施設形埴輪と区画施設 (第 5 次 U 発掘区：南東から)	PL.6-2 円丘部北東側 2 段目埴輪列検出状態 (第 2 次 B 区南西側：北東から)
PL.1-1 入口から墳頂方向を望む (調査前、北東から) 2016 年 9 月 15 日	PL.6-3 溝 SD03 検出状態 (第 2 次 B 区南西側：北西から)
PL.1-2 丸山第 1 号街区公園から墳頂方向 (調査前、北から) 2016 年 9 月 15 日	PL.6-4 円丘部西側 2 段目埴輪列検出状態 (第 5 次 M 区：東から)
PL.1-3 墳頂部 (調査前、東から) 2016 年 9 月 15 日	PL.6-5 円丘部西側 2 段目斜面葺石検出状態 (第 5 次 N 区：東から)
PL.1-4 墳頂から造出し方向 (調査前、南西から) 2016 年 9 月 15 日	PL.7-1 円丘部西側 全景 (第 5 次 M・N 区：西から)
PL.1-5 和田晴吾氏視察 (造出し付近伐採後に墳頂を望む、 北東から) 2018 年 3 月 23 日	PL.8-1 円丘部南西側 2・3 段目全景 (第 5 次 Q 区：南西から)
PL.2-1 航空レーザ測量による赤色立体地図 1/1,500 (第 1 次)	PL.8-2 円丘部南西側 2 段目全景 (第 5 次 R 区：南西から)
PL.2-2 三次元立体画像 南東から (大手前大学史学研究所作成)	PL.8-3 円丘部南西側 2 段目全景 (第 5 次 R 区：北東から)
PL.2-3 三次元立体画像 北東から (大手前大学史学研究所作成)	PL.8-4 円丘部南東側 2 段目全景 (第 5 次 T 区：西から)
PL.3-1 三次元立体画像 1/800 (大手前大学史学研究所作成)	PL.8-5 円丘部南東側 2 段目埴輪列検出状態 (第 5 次 T 区：北東から)
PL.4-1 墳頂部 墓坑全景 (第 3 次 A 区：垂直写真)	PL.9-1 円丘部南東側 2 段目 鱗付円筒埴輪列検出状態 (第 5 次 T 区：南東から)
PL.4-2 墳頂部東側 3 段目全景 (第 3 次 A 区東拡張部：左 [西から]、右 [東から])	PL.9-2 埴輪列 No.T-1 断面 (第 5 次 T 区：南東から)
PL.4-3 墳頂部東側 壇・盛土の状態 (第 3 次 A 区東拡張部：北から)	PL.9-3 埴輪列 No.T-3 断面 (第 5 次 T 区：南東から)
PL.5-1 円丘部西側 3 段目斜面全景 (第 5 次 A 区西拡張部：西から)	PL.9-4 埴輪列 No.T-3 断面 (第 5 次 T 区：北東から)
PL.5-2 墓坑付近の化粧土 (第 5 次 A 発掘区西拡張部：北から)	PL.9-5 埴輪列 No.T-6 断面 (第 5 次 T 区：南東から)
PL.5-3 炭層検出状態 (第 5 次 A 区西拡張部：北から)	PL.10-1 円丘部北東側 1・2 段目 全景 (第 2 次 C・D 区：北東から)
PL.5-4 円丘部北東側 2・3 段目全景 (第 2 次 B 区南西側：北東から)	PL.10-2 円丘部北東側 1 段目埴輪列検出状態 (第 2 次 D 区：北東から)
	PL.10-3 円丘部西側 1 段目 埴輪列検出状態 (第 5 次 N 区：北から)

- PL.10-4 円丘部西側 1 段目 埴輪列壺掘り検出状態
(第 5 次 N 区：北から)
- PL.11-1 円丘部西側 1 段目 埴輪列検出状態
(第 5 次 N 区：西から)
- PL.12-1 円丘部西側 1 段目 埴輪列半截状態
(第 5 次 N 区：西から)
- PL.12-2 円丘部西側 1 段目 小礫敷に混じる埴輪片
(第 5 次 N 区：南東から)
- PL.13-1 円丘部西側 1 段目全景 (第 5 次 O 区：西から)
- PL.13-2 円丘部西側 基底石検出状態 (第 5 次 O 区：西から)
- PL.13-3 円丘部西側 1 段目斜面と堆積状態
(第 5 次 O 区：南から)
- PL.14-1 円丘部北西側 1 段目裾全景 (第 5 次 S 区：北西から)
- PL.14-2 南側断面 (第 5 次 S 区：北東から)
- PL.14-3 北側断面 (第 5 次 S 区：北東から)
- PL.14-4 円丘部南東側 湧水施設形埴輪調査風景
(第 5 次 U 区：南東から)
- PL.15-1 円丘部南東側 区画施設上面検出状態
(第 5 次 U 区：南東から)
- PL.15-2 円丘部南東側 区画施設検出状態
(第 5 次 U 区：南東から)
- PL.16-1 円丘部南東側 区画施設検出状態
(第 5 次 U 区：南から)
- PL.16-2 円丘部南東側 区画施設検出状態
(第 5 次 U 区：南西から)
- PL.17-1 円丘部南東側 区画施設検出状態
(第 5 次 U 区：北西から)
- PL.17-2 円丘部南東側 区画施設検出状態
(第 5 次 U 区：北東から)
- PL.18-1 円丘部南東側 湧水施設形埴輪上面検出状態
(第 5 次 U 区：垂直写真)
- PL.18-2 円丘部南東側 湧水施設形埴輪検出状態
(第 5 次 U 区：垂直写真)
- PL.19-1 円丘部南東側 湧水施設形埴輪検出状態
(第 5 次 U 区：南東から)
- PL.19-2 円丘部南東側 湧水施設形埴輪検出状態
(第 5 次 U 区：北西から)
- PL.20-1 円丘部南東側 湧水施設形埴輪検出状態
(第 5 次 U 区：南西から)
- PL.20-2 円丘部南東側 湧水施設形埴輪内部の状態
(第 5 次 U 区：南西から)
- PL.21-1 円丘部南東側 湧水施設形埴輪と葺石の重複関係
(第 5 次 U 区：南西から)
- PL.21-2 円丘部南東側 湧水施設形埴輪と葺石の重複関係
(第 5 次 U 区：垂直写真)
- PL.22-1 造出し部上段 SX02 全景 (第 3 次 F 区：北東から)
- PL.22-2 造出し部上段 SX02 全景 (第 3 次 F 区：南東から)
- PL.23-1 造出し部南東側 中段の検出状態
(第 4 次 I 区：北東から)
- PL.23-2 造出し部中央 中段平坦面盛土下の列石
(第 2 次 B 区南西側：北東から)
- PL.23-3 造出し部南東側 中段平坦面検出状態
(第 2 次 B 区南東側：北西から)
- PL.24-1 造出し部北西側 中段平坦面検出状態
(第 2 次 B 区北西側：南東から)
- PL.24-2 造出し部北西側 埴輪検出状態
(第 2 次 B 区北西側：北西から)
- PL.24-3 造出し部北西側 下段埴輪列検出状態
(第 2 次 B 区北西側：北西から)
- PL.25-1 造出し部北西側 中・下段全景 (第 3 次 E 区：垂直写真)
- PL.25-2 造出し部北西側 E 発掘区南西壁断面と石組遺構
(第 3 次 E 区：北東から)
- PL.26-1 造出し部北西側 中・下段検出状態
(第 3 次 E 区：北から)
- PL.26-2 造出し部北西側 中・下段検出状態
(第 3 次 E 区：北西から)
- PL.27-1 造出し部北西側 中段斜面検出状態
(第 3 次 E 区：北東から)
- PL.27-2 造出し部北西側 中段斜面葺石・小礫敷検出状態
(第 3 次 E 区：北西から)
- PL.27-3 造出し部北西側 中段平坦面小礫敷検出状態
(第 3 次 E 区：南から)
- PL.28-1 造出し部北西側 中段斜面裾検出状態
(第 3 次 E 区：北から)
- PL.28-2 造出し部北西側 下段石組遺構検出状態
(第 3 次 E 区：北西から)
- PL.28-3 造出し部北西側 下段石組遺構と小礫敷の重複関係
(第 3 次 E 区：北西から)
- PL.28-4 造出し部北西側 下段埴輪列検出状態
(第 3 次 E 区：北から)
- PL.29-1 造出し部北西側 下段埴輪列断割状態
(第 3 次 E 区：北から)
- PL.29-2 造出し部北西側 下段埴輪列の屈曲部配列状態
(第 3 次 E 区：北から)
- PL.30-1 造出し部北西側 下段埴輪列 No.E-1 ～ 7 検出状態
(第 3 次 E 区：南西から)
- PL.30-2 埴輪列 No.E-1 縦断面上部 (第 3 次 E 区：南西から)
- PL.30-3 埴輪列 No.E-1 縦断面下部 (第 3 次 E 区：南西から)
- PL.30-4 埴輪列 No.E-7 縦断面 (第 3 次 E 区：北東から)
- PL.31-1 埴輪列 No.E-4 断面 (第 3 次 E 区：北西から)
- PL.31-2 埴輪列 No.E-5 断面 (第 3 次 E 区：北西から)
- PL.31-3 埴輪列 No.E-9 断面 (第 3 次 E 区：北西から)
- PL.31-4 埴輪列 No.E-10 断面 (第 3 次 E 区：北西から)
- PL.31-5 埴輪列 No.E-11 断面 (第 3 次 E 区：北西から)
- PL.31-6 埴輪列 No.E-12 断面 (第 3 次 E 区：北西から)
- PL.31-7 埴輪列 No.E-13 断面 (第 3 次 E 区：北東から)
- PL.32-1 造出し部南東側 中段平坦面検出状態
(第 4 次 I 区：西から)
- PL.32-2 造出し部南東側 中段斜面検出状態
(第 5 次 L 区：南西から)
- PL.33-1 造出し部南東側 中段と円丘部の接続状態
(第 5 次 L 区：北東から)
- PL.34-1 造出し部北東側 下段崩落葺石の堆積状態
(第 2 次 B 区北東側：北東から)
- PL.34-2 造出し部北東側 下段検出状態
(第 2 次 B 区北東側：北東から)
- PL.34-3 造出し部北東側 下段平坦面検出状態
(第 5 次 P 区：北東から)

PL.35-1	造出し部北西側 下段裾と円丘部1段目裾の接続箇所 検出状態 (第4次J区:北から)	PL.48-1	造出し部南東側 下段斜面葺石検出状態 (第5次K区:南東から)
PL.36-1	造出し部北西側 下段裾と円丘部1段目裾の接続箇所 検出状態 (第4次J区:南西から)	PL.48-2	造出し部南東側 下段斜面崩落状態 (第5次K区:西から)
PL.36-2	造出し部北西側 下段裾と円丘部1段目裾の接続箇所 検出状態 (第4次J区:北西から)	PL.49-1	斜縁神獸鏡 (図51-1)
PL.37-1	造出し部北西側 下段裾と円丘部1段目裾の接続箇所 検出状態 (第4次J区:北東から)	PL.49-2	銅鏃 (図51-2)
PL.37-2	造出し部北西側 円丘部1段目斜面葺石検出状態 (第4次J区:北東から)	PL.49-3	鍬形石 (図51-3)
PL.37-3	造出し部北西側 造出し部下段斜面葺石検出状態 (第4次J区:北西から)	PL.49-4	管玉 (図51-4~7)
PL.38-1	造出し部南東側 全景 (第4次G・H・I区:東から)	PL.49-5	鉄器 (図51-8~23)
PL.38-2	造出し部南東側 上~下段全景 (第4次H・I区:南東から)	PL.49-6	円板状土製品 (図51-27~34)
PL.39-1	造出し部南東側 円丘部1段目~造出し部下段全景 (第4次H区:東から)	PL.50-1	円筒埴輪:底部 (図53-1)
PL.40-1	造出し部南東側 円丘部1段目~造出し部下段埴輪列 検出状態 (第4次H区:北東から)	PL.50-2	円筒埴輪:底部 (図53-2)
PL.40-2	造出し部南東側 円丘部1段目~造出し部下段埴輪列 (拡張部) 検出状態 (第4次H区:北東から)	PL.50-3	円筒埴輪:底部 (図53-3)
PL.41-1	造出し部南東側 円丘部1段目~造出し部下段埴輪列 検出状態 (第4次H区:北東から)	PL.50-4	円筒埴輪:底部 (図53-4)
PL.42-1	造出し部南東側 中段斜面と埴輪列検出状態 (第4次H区:東から)	PL.50-5	円筒埴輪:口縁部 (図53-5)
PL.42-2	造出し部南東側 埴輪列と中段斜面の収束状態 (第4次H区:南東から)	PL.50-6	円筒埴輪:胴部 (図53-6)
PL.42-3	埴輪列 No.H-3 断面と掘方 (第4次H区:北西から)	PL.50-7	円筒埴輪:底部 (図53-7)
PL.42-4	埴輪列 No.H-5 断面 (第4次H区:北東から)	PL.51-1	鱗付円筒埴輪:口縁部 (図53-8)
PL.42-5	埴輪列 No.H-15 断面 (第4次H区:南東から)	PL.51-2	鱗付円筒埴輪:底部 (図53-9)
PL.42-6	造出し部南東側 下段全景 (第4次G区:南西から)	PL.51-3	底部の線刻 (図53-9)
PL.43-1	造出し部南東側 円丘部1段目・造出し部下段 接続箇所全景 (第4次G・H区:東から)	PL.51-4	鱗の剥離部分 (図53-9)
PL.44-1	造出し部南東側 下段裾・盾形埴輪検出状態 (第4次G区:南東から)	PL.51-5	鱗付円筒埴輪:口縁部 (図53-10)
PL.44-2	造出し部南東側 円丘部1段目・造出し部下段 接続箇所検出状態 (第4次G区:北東から)	PL.51-6	鱗付円筒埴輪:底部 (図53-11)
PL.45-1	盾形埴輪検出状態 (第4次G区:南西から)	PL.51-7	鱗付円筒埴輪の側面と鱗の剥離部分 (図53-11)
PL.45-2	盾形埴輪内部断面状態 (第4次G区:南西から)	PL.52-1	円筒埴輪:底部 (図54-13)
PL.45-3	盾形埴輪内の埴輪出土状態 (第4次G区:垂直から)	PL.52-2	円筒埴輪:底部 (図54-14)
PL.45-4	造出し部南東側 下段裾転落石検出状態 (第5次K区:南西から)	PL.52-3	円筒埴輪:底部 (図54-15)
PL.46-1	造出し部南東側 下段裾検出状態 (第4次G区:南西から)	PL.52-4	円筒埴輪:口縁部 (図54-16の上部)
PL.46-2	造出し部南東側 下段裾外側土師器杯出土状態 (第5次K区:南から)	PL.52-5	円筒埴輪:底部 (図54-16の下部)
PL.46-3	造出し部南東側 下段斜面出土須恵器蓋出土状態 (第5次K区:南東から)	PL.52-6	円筒埴輪:口縁部 (図54-17)
PL.46-4	造出し部南東側 下段裾外側整地土と埴輪包含状態 (第5次K区:南西から)	PL.52-7	円筒埴輪:口縁部 (図54-18)
PL.47-1	造出し部南東側 溝SD04 検出状態 (第5次K区:北東から)	PL.52-8	円筒埴輪:底部 (図54-19)
PL.47-2	造出し部南東側 下段裾検出状態 (第5次K区:南西から)	PL.53-1	円筒埴輪:口縁部 (図54-20)
		PL.53-2	円筒埴輪:底部 (図54-21)
		PL.53-3	底部の盾形線刻 (図54-21)
		PL.53-4	円筒埴輪:口縁部 (図55-22)
		PL.53-5	円筒埴輪:底部 (図55-23)
		PL.53-6	円筒埴輪:口縁部 (図55-24)
		PL.53-7	円筒埴輪:底部 (図55-25)
		PL.54-1	円筒埴輪:底部 (図56-26)
		PL.54-2	突帯上辺の刺突工具圧痕 (図56-26)
		PL.54-3	円筒埴輪:底部 (図56-27)
		PL.54-4	円筒埴輪:底部 (図56-28)
		PL.54-5	底部の刺突痕跡 (図56-28)
		PL.54-6	円筒埴輪:底部 (図56-29)
		PL.54-7	円筒埴輪:底部 (図56-30)
		PL.54-8	円筒埴輪:底部 (図56-31)

- PL.54-9 1方向の底部透孔(図56-31)
- PL.55-1 朝顔形埴輪：口縁部(図56-32)
- PL.55-2 朝顔形埴輪：底部(図56-33)
- PL.55-3 鱗付楕円筒埴輪：底部(図57-34)
- PL.55-4 鱗付楕円筒埴輪：底部(図57-35)
- PL.56-1 鱗付楕円筒埴輪：底部、鱗剥離部分(図57-36)
- PL.56-2 鱗付楕円筒埴輪：底部(図57-37)
- PL.56-3 円筒埴輪：胴部(図58-38)
- PL.56-4 円筒埴輪：底部(図58-39)
- PL.57-1 円筒埴輪：口縁部(図58-40)
- PL.57-2 円筒埴輪：底部(図58-41)
- PL.57-3 4方向の底部透孔(図58-41)
- PL.57-4 円筒埴輪：底部(図58-42)
- PL.57-5 円筒埴輪：口縁部(図58-43)
- PL.57-6 円筒埴輪：底部(図58-44)
- PL.57-7 円筒埴輪：底部(図58-45)
- PL.58-1 円筒埴輪：口縁部(図58-46)
- PL.58-2 円筒埴輪：底部(図58-47)
- PL.58-3 底部内面の板ナデ痕跡(図58-47)
- PL.58-4 円筒埴輪：底部(図59-48)
- PL.58-5 円筒埴輪：口縁部(図59-49)
- PL.58-6 円筒埴輪：底部(図59-50)
- PL.58-7 円筒埴輪：底部(図59-51)
- PL.58-8 円筒埴輪：底部(図59-52)
- PL.59-1 円筒埴輪：口縁部(図59-53)
- PL.59-2 円筒埴輪：胴部(図59-54)
- PL.59-3 円筒埴輪：底部(図59-55)
- PL.59-4 円筒埴輪：口縁部(図60-56)
- PL.59-5 円筒埴輪：胴部(図60-57)
- PL.59-6 円筒埴輪：底部(図60-58)
- PL.59-7 朝顔形埴輪：頸部(図60-59)
- PL.59-8 朝顔形埴輪：底部(図60-60)
- PL.60-1 朝顔形埴輪口縁部と内面の竹管文(図61-61)
- PL.60-2 朝顔形埴輪：口縁部(図61-62)
- PL.60-3 朝顔形埴輪：肩～胴部(図61-63)
- PL.60-4 朝顔形埴輪：底部(図61-64)
- PL.61-1 湧水施設形埴輪(図62-65・図65-68・図66-69)
- PL.62-1 湧水施設形埴輪(罫形埴輪の破片)(図64-66・67)
- PL.62-2 湧水施設形埴輪(家形埴輪の破片：両面)(図67-70～74)
- PL.62-3 湧水施設形埴輪(罫または家形埴輪の破片)(図67-75～80)
- PL.62-4 各発掘区出土家形埴輪(図67-81・82)
- PL.63-1 盾形埴輪 表面(図69-83)
- PL.64-1 盾形埴輪 口縁部断面(図69-83)
- PL.64-2 盾形埴輪 口縁部の赤色顔料(図69-83)
- PL.64-3 盾形埴輪 中央部破片(図69-83)
- PL.64-4 盾形埴輪 裏面の線刻(図71-83)
- PL.65-1 盾形埴輪 裏面(図71-83)
- PL.65-2 盾形埴輪 方形刺突(図71-83)
- PL.65-3 盾形埴輪 内側面の圧痕(図76-83)
- PL.65-4 盾形埴輪 右側面(図73-83)
- PL.65-5 盾形埴輪 左側面(図74-83)
- PL.66-1 盾形埴輪(A区出土：図79-84・85、C区出土：図79-86)
- PL.66-2 盾形埴輪(F区出土：図79-87～91)
- PL.66-3 盾形埴輪(E区出土：図79-92・93)
- PL.66-4 盾形埴輪(R区出土：図79-94)
- PL.67-1 蓋形埴輪の立ち飾り部A面(図80-95～102)
- PL.67-2 蓋形埴輪の立ち飾り部B面(図80-95～102)
- PL.68-1 蓋形埴輪の軸受部(図80-103)
- PL.68-2 蓋形埴輪の笠部(図80-104～107)
- PL.68-3 その他の形象埴輪(図81-108～112)
- PL.68-4 弥生土器(図82-1)、土師器(図82-2・3)、須恵器(図82-4～6)
- PL.68-5 土師器杯(図82-7)

第1章 調査の経過

第1節 富雄丸山古墳の来歴

富雄丸山古墳は、富雄川西岸に位置する大型の円墳として知られてきた。古くは江戸時代末期の『聖蹟図志(上)』(津久井 1854)に藤原帯子墓である河上陵として絵図が示されている。この絵図では富雄丸山古墳が茶臼山とされ、現在茶臼山と認識されているものが丸山となっており、古くから両者の混乱がみられたようである。

明治時代になると、墳頂部が盗掘されて多数の出土品が骨董市場へ流れた。守屋孝蔵氏が購入した「丸山古墳出土品」は昭和10(1935)年5月10日に重要美術品となっており、同年8月3日には守屋孝蔵氏名義で「伝丸山古墳出土品」として三角縁神獣鏡3面も重要美術品に認定された。ただし、後者には伝が付いていることや、重要美術品認定の時期が異なることなどから、その真偽が定かではない。昭和32(1957)年2月19日には、同氏ご息女の津田佳代子氏名義で「丸山古墳出土品」が国の重要文化財に指定され、翌年4月1日に津田氏は京都国立博物館へ寄託した。その後、昭和43(1968)年

9月5日に京都国立博物館がそれを購入し現在に至る。また、「伝丸山古墳出土品」である銅鏡は、天理大学附属天理参考館が現在所蔵し、常設展示されている。なお、亀井正道による「琴柱形石製品考」のなかで明治末期の盗掘を実見した人の聞き取りとして「地表下約2.4m程のところに礫層があり、この真中の粘土中に、刀・鏡・

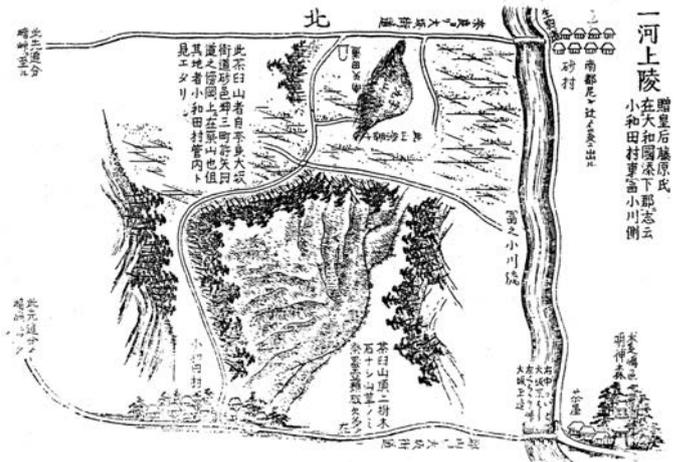
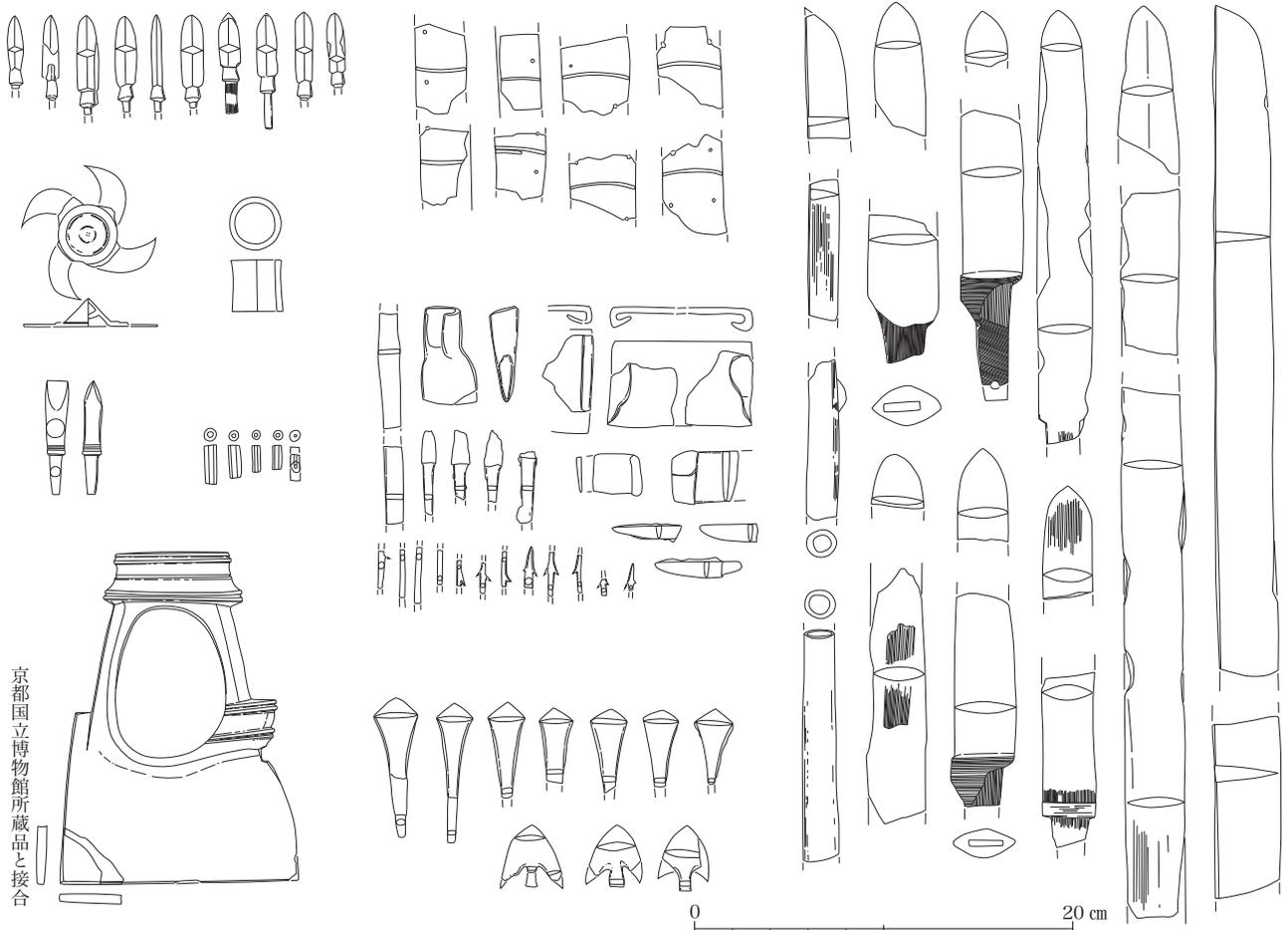


図1 『聖蹟図志』にみる富雄丸山古墳 (津久井 1854)



京都国立博物館所蔵品と接合

図2 富雄丸山古墳墳頂部埋葬施設出土品 (県第1次調査) 1/4 (奈良県教委 1973 から再トレース)

石製品等がきれいに並んでいた」という記載がある（亀井 1973）。

初めて発掘調査が行われたのは、奈良県教育委員会による宅地造成に伴う緊急調査（県第1次調査：1972年）である。この調査では、測量調査および墳頂部の埋葬施設が調査され、巨大な粘土槨と副葬品等が出土した（奈良県教育委員会 1973）。古墳の規模も直径約 86m とさ

れ、大型の円墳であることが示された。また、このとき出土した鍬形石の破片が京都国立博物館が所蔵する「丸山古墳出土品」と接合したことから、京都国立博物館所蔵品が富雄丸山古墳から出土したものであることが確実となり、その後資料の全容が公表された（京都国立博物館 1982）。また、東側に位置する富雄丸山 2・3号墳も同時に調査され、2号墳は横穴式石室をもつ後期古墳

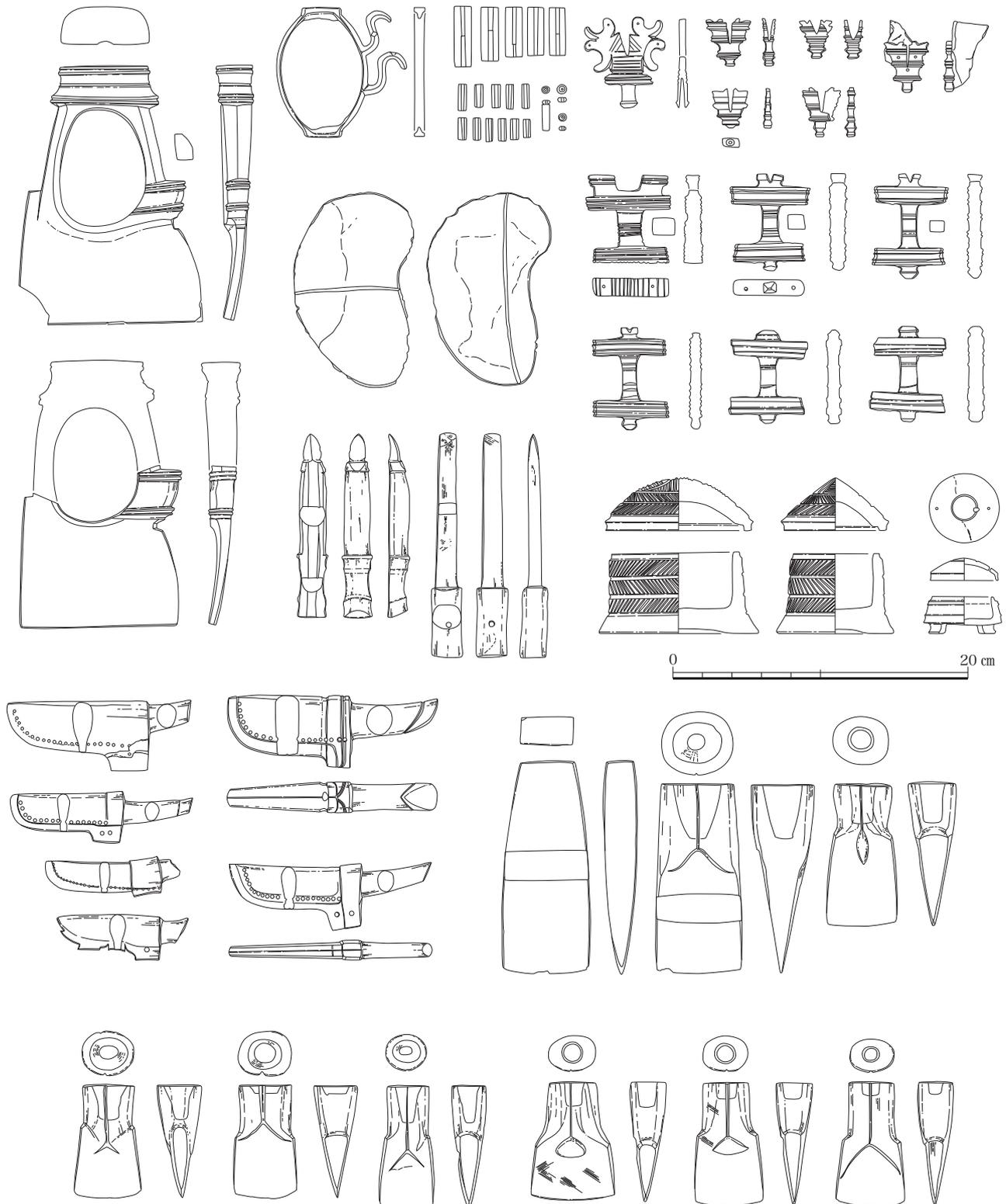


図3 京都国立博物館所蔵富雄丸山古墳出土品 1/4（京都国立博物館 1982 から再トレース）

であることが明らかとなった。

この調査によって、富雄丸山古墳および2・3号墳は開発されることなく、丸山第1号街区公園の緑地として保存されることとなった。しかし、古墳南側の道路建設に際して当時墳丘外と判断された墳丘1段目が一部削られる形となり、その工事中に1段目平坦面の円筒埴輪列が露出し奈良県による緊急調査が行われた（未報告）。その後、昭和57（1982）年に古墳の範囲確認調査として県第2次調査が行われた。これにより、円墳には造出しが取り付くことや、直径も102m程度となるであろうことが示された（泉森1986）。（村瀬 陸）

第2節 調査に至る経緯

丸山第1号緑地（奈良市丸山一丁目1079-239）の中に保存されている富雄丸山古墳は、東急不動産による大和田団地造成工事に伴って昭和47年に発掘調査が実施された。その結果、直径86mの大型円墳であることがわかり、北東側にある2・3号墳とともに公園緑地として保存された。団地完成後に公園緑地や区画道路は市有地となり、現在は市が古墳を管理している。しかし、古墳の周囲はフェンスで囲われて中へ立ち入りできず、雑木が繁茂して内部を観察することもできない状態となっていた。また、古墳の存在を示す案内板もなく、市民からの問い合わせにも十分対応できない状況が続いていた。

平成28（2016）年度 市長から各課へ今後活用可能な市有地の洗い出しと報告について指示があった。そこで、埋蔵文化財調査センターから富雄丸山古墳が市西部の新たな魅力発信を秘めた文化遺産である可能性を報告し、活用を検討するための測量調査経費予算を要求した。

平成29（2017）年度 新たな文化観光資源の活用の重点施策として富雄丸山古墳の地形測量を実施し、次年度以降の発掘調査及び活用計画を策定することになった。文化財課・総合政策課・観光戦略課・観光振興課・公園緑地課が出席して富雄丸山古墳調査活用検討協議を2回行い、現状の課題を共有した。7月には古墳北東側にある県有地で道の駅を整備する方針を奈良県が公表し、それとの連携を模索することも確認した。

雑木が繁茂する現況下でも地形を計測できる航空レーザ測量（6月12日撮影）を行い赤色立体地図を作成し、調査用基準点を墳丘上に設置した（7月27日）。測量の結果、従来認識されてきた直径86mの円丘の外側に一回り大きい墳丘形状を読み取ることができた。その規模は直径約110mとなり、日本最大の円墳として有名な埼玉県丸墓山古墳の規模（直径105m）をわずかに

上回っている。国内最大の円墳である可能性が想定できることを11月15日に市長定例記者会見で報道発表し、全国的に大きな反響があった。地元の丸山自治会から測量調査成果の報告会を開いてほしいとの要望があり、108名の参加を得て12月4日に若草台集会所で調査報告をした後、古墳の現地案内を行った。また「ならしみんだより」（平成30年1月号）で特集記事が急遽組まれることになり、古墳見学者が多く来ることを想定して簡易な古墳解説板を現地の2箇所に設置した。

こうして、今後の史跡指定も視野に入れて活用整備に必要な資料を得るために5年計画で古墳の範囲と構造を確認するための発掘調査を実施するとともに、発掘体験学習などの活用事業を併せて行う工程案を作成した。国庫補助事業で実施できるよう奈良県及び文化庁と協議を重ね、了承を得ることができた。

なお、富雄丸山古墳が所在する丸山第1号緑地内には丸山2・3号墳も保存されており、史跡指定するにあたってはこれらも同時に指定されるため、合わせて再調査し詳細を確認しておくよう文化庁から指示があった。

平成30年度から発掘調査を開始するにあたり、墳丘上に繁茂する雑木の伐採整理が必要となった。丸山自治会の有志で公園整備のボランティア活動を行う丸山グリーンサポートの支援を得て、古墳出入口部分から造出しにかけての雑木を2月に伐採した。その後、ここを伐採作業の起点として、墳頂部までの約2,700㎡の雑木を奈良市森林組合に委託して8月に伐採することができた。

また、活用事業として行う発掘体験学習は、対外的な窓口業務が必要となる点から奈良市観光協会と連携して実施することとなり、その内容や方法について協議した。

平成30（2018）年度 奈良市と奈良大学は平成16年に連携協定を締結し、文化財課では考古学実習の講義に講師を派遣するなど文化財分野での連携実績を重ねてきた。そこで、人材育成の観点から富雄丸山古墳の発掘



図4 検討会議での現地検討（第4次調査）

調査現場に考古学専攻学生を受け入れ、協働しながら実践的に調査技術を学ぶ機会を創出することになった。なお、両者の協定は平成31年2月13日付けで包括連携協定に改定されている。

前年度の文化庁との協議の中で、富雄丸山古墳の発掘調査を実施するにあたっては、奈良市文化財保護審議会の意見を得ながら行う計画である旨を説明した。しかし、文化庁からは古墳の重要性を考慮し専門の有識者を入れた委員会をつくって調査方針・調査箇所の選定と規模、発掘体験場所の妥当性などの意見を得たうえで、対外的に説明可能な調査と活用事業を進めるよう指導を受けていた。10月17日に文化庁藤井文化財調査官の現地視察があり、その際も委員会設置とその会議に文化庁調査官を招聘するよう指導を受けた。そこで、和田晴吾（兵庫県立考古博物館長）を座長とし、田辺征夫（奈良市文化財保護審議会議長）・岡林孝作（奈良県立橿原考古学研究所調査部長）・豊島直博（奈良大学教授）の4名（肩書は当時のまま表記）で構成する富雄丸山古墳発掘調査検討会議を設置することとし、平成31年3月26日付け奈良市教育委員会告示第9号で開催要綱を制定した。

発掘体験学習は、昭和47年に発掘調査された墳頂部既掘箇所を利用し、職員監理のもとで細片化した未回収品の収集作業を行う方向で実施することになった。

なお、中町「道の駅」との連携に関する協議は関係各課とともに平成30年度以降継続中である。（鐘方正樹）

第3節 発掘調査の経過

以上の経緯をふまえて、5ヶ年の発掘調査を計画し、国庫補助による緊急調査経費での範囲確認発掘調査事業を実施することになった。第2次調査前の10月には奈良文化財研究所と連携研究協定を結び、墳頂部と造出しの地中レーザ探査を実施した。現在5年計画の発掘調査を実施中であるため、本報告書では航空レーザ測量（第1次調査）、第2～5次発掘調査の成果を報告する。

第1～5次調査の概略・体制は以下の通りである。

【第1次調査】

調査内容：航空レーザ測量

調査期間：平成29年5月22日～8月31日

調査面積：20,267㎡

調査体制：文化財課

課長 立石堅志

埋蔵文化財調査センター

所長 篠原豊一

所長補佐 三好美穂・鐘方正樹



図5 第2次調査参加者集合写真



図6 第3次調査参加者集合写真



図7 第4次調査参加者集合写真



図8 第5次調査参加者集合写真

調査グループ長 中島和彦

調査担当 鐘方正樹

【第2次調査】

調査内容：発掘調査

調査期間：平成30年12月3日～平成31（2019）年
1月31日

調査面積：242.5㎡

調査体制：文化財課

課長 立石堅志

埋蔵文化財調査センター

所長 三好美穂

所長補佐 鐘方正樹

活用係長 原田憲二郎

調査・活用担当 永野智子・村瀬 陸

調査補助員 大澤嶺（大阪市立大学 M2）

※活用係が調査・活用を担当

第2次調査参加学生：柴原聡一郎（東京大学4年）、上野あさひ・漆原尚輝・中村優仁・広瀬夏友・古谷真人・松島隆介・丸山亮（奈良大学3年）

【第3次調査】

調査内容：発掘調査

調査期間：令和元（2019）年10月21日～12月20日

調査面積：275㎡

調査体制：文化財課

課長 松浦五輪美

埋蔵文化財調査センター

所長 三好美穂

所長補佐 鐘方正樹

調査係長 中島和彦

調査担当 森下浩行・村瀬 陸

活用係長 原田憲二郎

活用担当 永野智子

調査補助員 柴原聡一郎（東京大学 M1）

大村 陸（筑波大学 M1）

※調査と活用を分担

第3次調査参加学生：橋本有正・馬場彩加（奈良大学 M1）、上野あさひ・漆原尚輝・古谷真人・松島隆介・丸山亮（奈良大学4年）、荒木清花・中川恋歌・福田ことり（奈良大学3年）、的場紗希（奈良大学2年）

発掘調査検討会議参加者：和田晴吾・田辺征夫・岡林孝作・豊島直博（会議委員）、斉藤慶吏（文化庁）、光石鳴巳・前田俊雄（奈良県文化財保存課）

【第4次調査】

調査内容：発掘調査

調査期間：令和2（2020）年12月21日～令和3（2021）
年2月19日

調査面積：260㎡

調査体制：文化財課

課長 松浦五輪美

埋蔵文化財調査センター

所長 鐘方正樹

所長補佐 中島和彦

調査係長 森下浩行

調査担当 村瀬 陸

活用係長 原田憲二郎

活用担当 永野智子

調査補助員 柴原聡一郎（東京大学 M2）

大村 陸（筑波大学 M2）

※調査と活用を分担

第4次調査参加学生：荒井啓汰（筑波大学 D1）、清原啓護（法政大学 M1）、中江隆英・松島隆介・丸山亮・三好祐佳・山本美喜（奈良大学 M1）、小林友佳・中川恋歌（奈良大学4年）、的場紗希・金田将徳（奈良大学3年）

発掘調査検討会議参加者：和田晴吾・田辺征夫・岡林孝作・豊島直博（会議委員）、坂靖・廣岡孝信・宇野隆志（奈良県文化財保存課）

【第5次調査】

調査内容：発掘調査

調査期間：令和3年12月20日～令和4（2022）年2
月18日

調査面積：278㎡

調査体制：文化財課

課長 松浦五輪美

埋蔵文化財調査センター

所長 鐘方正樹

所長補佐 中島和彦

活用係長 原田憲二郎

調査・活用担当 村瀬 陸・森下浩行

調査員 荒井啓汰（筑波大学 D2）

柴原聡一郎（東京大学 D1）

山口等悟（大阪大学 M2）

※活用係が調査・活用を担当

第5次調査参加学生：清原啓護（法政大学 M2）、松島隆介・丸山亮・三好祐佳・山本美喜（奈良大学 M2）、

小林友佳（奈良大学 M1）、的場紗希（奈良大学 4 年）、
奥井大生・木村日向子・櫻木海渡・重松浩成・高井秀樹
（奈良大学 3 年）、篠原志織・近田奈々海・松田青空・水
川慶紀（奈良大学 2 年）、池本優衣（奈良大学 1 年）
発掘調査検討会議参加者：和田晴吾・田辺征夫・岡林孝
作・豊島直博（会議委員）、芝康次郎（文化庁）、光石鳴
巳・中野咲（奈良県文化財保存課）

富雄丸山古墳発掘調査検討会議は、各年度 2 回実施し
た。年度当初に行う検討会議をもとに調査方針を確定し、
調査中に現場の検討を行うとともに調査成果の内容につ
いて議論いただきご意見を頂戴した。

以下に、調査日誌を抄録する。

【第 2 次調査】

2018 年 10 月 11・12 日 奈良文化財研究所の金田明大・山口欧志氏と
ともに墳頂部・造出し部のレーダ探査を実施。
2018 年 12 月 3 日 調査開始。設備等搬入。墳頂部の平板測量(12.5cm 間隔)、
B 発掘区の設定。
12 月 4 日 A 発掘区の表土掘削。1972 年調査区の輪郭を一部確認。
12 月 6 日 A 発掘区 SE 区の表土掘削中に鉄器（刀子？）出土。
12 月 10 日 B 発掘区南東部分でキセル出土。近代遺物も出土しており、
削られている可能性を示唆。
12 月 12 日 B 発掘区での小礫敷残存状態から造出し上端（のちに中段と
判明）を想定。部分的に断ち割りして検出面に問題がないことを確認。
12 月 13 日 B 発掘区北西部で小礫敷と葺石が良好に残存していることを
確認。
12 月 14 日 B 発掘区北東部で墳丘裾近くの断ち割りを行う。そこから
MT15～TK10 の須恵器杯身出土。平田政彦氏（斑鳩町）来訪。
12 月 16 日 丸山自治会向けの現地説明会と発掘体験。B 発掘区北西部で
葺石の斜面中に原位置の円筒埴輪 1 点を確認。
12 月 17 日 一般向けの体験事業開始。A 発掘区で管玉出土。
12 月 18 日 A 発掘区で管玉出土。C 発掘区を設定。
12 月 21 日 A 発掘区 NEb2 区で鉄バケツ出土。1972 年の埋戻し時に廃棄
されたか。出土した鉄製品には近代遺物が混じる可能性を示唆。森下恵
介氏（元センター長）来訪。
12 月 23 日 こども発掘体験実施。C 発掘区で墳丘裾とみられる傾斜変換
を確認。
12 月 24 日 A 発掘区で鋳形石片出土。
12 月 27 日 B 発掘区北西部で検出した埴輪の横を断ち割ると新たに埴輪
を検出。検出していたのが転落石上面であったことが判明し、本来の葺
石面を確認。D 発掘区の設定。和田晴吾氏来訪、地山まで断ち割りをす
るほうが良い等のご指導を得る。
12 月 28 日 B 発掘区北西部で埴輪列 4 本分を確認。埴輪は平坦面に存在し、
造出しに段がある可能性が浮上。
2019 年 1 月 4 日 B 発掘区北東部で基底石らしき裾を確認。
1 月 7 日 B 発掘区南西部で埴輪片が出た部分を拡張すると埴輪列（2 段目
だが、当時は平坦面が広くなるとは想定しておらず、1・2 段目の中間
点で出土したと認識）を検出。豊島直博氏来訪。
1 月 8 日 B 発掘区各所で断ち割りし地山を確認。山田隆文氏・宇野隆志氏
（樞考研）来訪。
1 月 10 日 B 発掘区南西部で確認した葺石を全面検出。下方を断ち割ると
地山を削って盛土しており、階段状になっている（後の SX02）。D 発掘
区で埴輪列を検出。

1 月 11 日 D 発掘区では蓋形埴輪がまとまって出土。A 発掘区で朱付きの
管玉 2 点出土。
1 月 14 日 D 発掘区を拡張し傾斜変換を確認したことで 1 段目平坦面の幅
を確認。埴輪列が各段の中央にめぐることが判明。一瀬和夫氏（京都橋
大学）、山田暁氏（西宮市）、原田昌浩氏（大阪府）、道上祥武氏（奈良研）、
泉真奈氏（藤井寺市）来訪。
1 月 15 日 B 発掘区南西部の盛土下に墳丘内石列を確認。本日で発掘体験
終了。
1 月 16 日 遺構清掃。村瀬は京都国立博物館へ行き鋳形石の接合関係を確認。
京博資料は樹脂で復元されていたため決定的ではないが、宮川禎一氏・
古谷毅氏とともに同一品である可能性が高いことを確認。
1 月 17 日 オルソ画像作成作業。和田晴吾氏、春成秀爾氏（国立歴史民俗
博物館）、岡林孝作氏・米川仁一氏（樞考研）来訪。
1 月 18 日 掃除。樞考研の現検約 20 名来訪。
1 月 21 日 各所の図面作成。奥田尚氏（樞考研共同研究員）、中井歩氏（埼
玉県）、白神典之氏・橋泉氏（堺市）、山田幸弘氏（藤井寺市）、池田保信氏（天
理教調査団）来訪。
1 月 22 日 現説準備。奥田氏が石材検討。寺沢薫氏（纏向学術センター）、
寺沢知子氏（神戸女子大学）、竹原千佳蓉氏（茨木市）来訪。
1 月 23 日 記者発表。
1 月 24 日 オルソ画像を下図に平面図作成。和田一之輔氏（奈良研）、岸
本直文氏（大阪市立大）来訪。
1 月 25 日 サポーター向け説明会。神野恵氏・小田裕樹氏・若杉智宏氏・
浦蓉子氏（奈良研）、坂井秀弥氏・植野浩三氏（奈良大）、福永伸哉氏（大
阪大）、森岡秀人氏（樞考研共同研究員）来訪。
1 月 26 日 現地説明会開催。960 名参加。
1 月 28 日 埋戻し。1・2 段目埴輪列の取り上げ。
1 月 29 日 埋戻し完了。
1 月 30 日 道具撤収。円丘部東側の窪みに露出する埴輪を記録して回収。
1 月 31 日 設備搬出。調査終了。

【第 3 次調査】

2019 年 10 月 21 日 調査開始。A 発掘区の土嚢上げ。
10 月 24 日 E 発掘区の表土掘削。
10 月 28 日 E 発掘区で埴輪列は主軸に平行しているが、斜面上端はハの
字にひらく形状になりそうなことを確認。
10 月 30 日 埴輪列の屈曲部を確認。
11 月 1 日 A 発掘区での発掘体験開始。
11 月 2 日 F 発掘区の設定・表土掘削開始。
11 月 5 日 E 発掘区で斜面葺石とは方向の異なる石積みを確認（墓道か？）。
F 発掘区では第 2 次調査で確認した落ち込みの輪郭が方形にめぐりそう
であることを確認。
11 月 6 日 F 発掘区では検出面の中心付近が凹んでいる印象。
11 月 9 日 A 発掘区で斜縁神獸鏡片が出土。F 発掘区は遺構が南東側への
びるため 3m 拡張。
11 月 12 日 E 発掘区の検出写真撮影。
11 月 13 日 F 発掘区をさらに南東側へ拡張。A 発掘区東拡張区を設定。
11 月 15 日 F 発掘区の遺構は幅 3m、長さ 9m 程度になりそう。A 発掘
区東拡張区では段を確認し方形壇の可能性を示唆。樞考研の現検(11 人)、
奈良市議会伊藤剛議員来訪。
11 月 19 日 F 発掘区の遺構は非常に土がわかりにくく検出が難しい。和田
晴吾氏来訪。
11 月 20 日 E 発掘区では斜面の葺石の下方に石列があり、さらにその下
に葺石が施されていて、傾斜変換があり平坦面の小礫敷、埴輪列がある。
11 月 26 日 富雄丸山古墳発掘調査検討会議を現地で行う。
11 月 27 日 現地説明会準備。諫早直人氏（京都府立大）来訪。

11月28日 記者発表。
 11月29日 寺沢知子氏、福永伸哉氏来訪。
 11月30日 現地説明会開催。600人参加。
 12月3日 各発掘区断割調査。上田直弥氏（大阪大）来訪。
 12月4日 A発掘区東拡張区で土手状盛土を確認。柳本照男氏（元豊中市）来訪。
 12月5日 各発掘区の掃除。森下章司氏（大手前大）、梅本康広氏（向日市）、池田保信氏来訪。
 12月7日 オルソ画像作成業務。
 12月9日 E発掘区埴輪列の断ち割り。奥田尚氏来訪。
 12月10日 E発掘区を北西側へ拡張し盛土と地山の接点を探しに行く。奥田氏の岩石分析所見でF発掘区の石材とE発掘区の墓道状遺構の石材だけが三笠山安山岩が入り他と異なるとのこと。白石太一郎氏（大阪府立近つ飛鳥博物館名誉館長）、森岡秀人氏来訪。
 12月11日 E発掘区埴輪列断面作成、南西部への拡張で3段目斜面を確認。
 12月12日 A発掘区埋戻し。田中秀和氏（津市）来訪。
 12月13日 A発掘区東拡張区の壇は地山を削り出して水平に盛土する様子を確認。宇野隆志氏来訪。
 12月16日 E発掘区埴輪列の取り上げ。
 12月18日 埴輪列 No.1・15のみ現地保存して埋戻し。
 12月19日 埋戻し完了。
 12月20日 設備搬出し調査終了。

【第4次調査】

2020年12月21日 調査開始。草刈り、設備搬入。
 12月23日 G発掘区表土掘削。
 12月25日 G発掘区で斜面の転落石がはじまる。
 12月28日 G発掘区の堀に近い部分で樹立した埴輪を検出。列にならず形象埴輪片が多く見られる。H発掘区を設定し掘削。くびれ部を検出。
 2021年1月4日 H発掘区を拡張し1段目埴輪列のものとみられる埴輪1本を検出。
 1月5日 I発掘区表土掘削。造出し中心部は石が少ない。
 1月6日 G発掘区では基底石らしき大きめの石を確認。H発掘区では埴輪列6本分を確認。I発掘区の小礫敷は中心部が削られており上段の痕跡か。
 1月7日 富雄南地区自治連合会の発掘体験。ただし、一般の発掘体験は新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止となる。
 1月10日 G発掘区では埴輪周辺を掃除して撮影。H発掘区は拡張しI発掘区と連結した。埴輪列の屈曲部を確認したが、埴輪はこぶし大の石に覆われている。
 1月12日 積雪により富雄丸山古墳が雪化粧となる。
 1月15日 H発掘区で埴輪列のある平坦面とI発掘区の平坦面との間に段がある可能性を示唆。
 1月16日 奈良市議会伊藤剛議員来訪。
 1月17日 G発掘区で基底石のコーナーを確認。円丘部側の葺石は残りが悪い。柴田将幹氏（田原本町）来訪。
 1月21日 J発掘区を掘削、一面に転落石を確認。豊島直博氏来訪。
 1月26日 G発掘区北東トレンチでは、前面の低い段はほぼ取束しており見当たらず、その外側では下段の斜面を確認。
 1月27日 J発掘区で基底石のコーナーを確認。B発掘区の中段斜面部分を再発掘し、断ち割りして低い段を確認。
 1月28日 H発掘区埴輪列まわりを精査。盛土の境界と掘方を確認。
 1月29日 富雄丸山古墳発掘調査検討会議を現地で行う。
 2月1日 G発掘区出土埴輪の記録作業。散ってる埴輪片を取り上げ。盾の破片が多い。諫早直人氏来訪。
 2月2日 H・I発掘区間を拡張し埴輪列を追求。

2月3日 オルソ画像作成業務。奈良市議会伊藤剛議員、吉村升平氏来訪。
 2月4日 現地公開準備。H発掘区埴輪列の半裁。寺沢薫・知子氏来訪。
 2月6日 地元向け現地公開。160人参加。同日に記者にも現地公開。
 2月9日 A発掘区埋戻し。和田晴吾・森岡秀人・福永伸哉・森下章司・梅本康広・和田一之輔・金澤雄太（御所市）各氏が来訪。
 2月10日 H発掘区埴輪列は立面図作成後半裁。榎考研の現検約15名来訪。
 2月11日 H・G発掘区埴輪の記録作業。木許守・花熊祐基氏（龍谷大）、大澤嶺氏（大阪府）、上野あさひ氏（京田辺市）、肥田翔子氏（堺市）、平井洸史氏（榎考研）、道上祥武氏（奈文研）来訪。
 2月12日 H発掘区埴輪列は圧痕を保護してNo.2～15を取り上げ。
 2月16日 盾形埴輪の取り上げ。埋戻しは全体の半分が完了。
 2月18日 埋戻し完了。
 2月19日 整地作業。設備搬出し調査終了。

【第5次調査】

2021年12月20日 調査開始。草刈りとA発掘区の土嚢上げ。
 12月21日 土嚢上げ終了。
 12月22日 K・L発掘区の設定・掘削。
 12月23日 見学用通路の再整備（委託）開始。
 12月24日 L発掘区で中段上端がハの字にひらいていくの確認。
 12月27日 K発掘区全体で転落石を検出。L発掘区では円丘部との接続部を確認。地元小学生の発掘体験。
 12月28日 A発掘区西拡張区・M発掘区掘削開始。
 2022年1月4日 M発掘区で2段目埴輪列を確認。
 1月5日 富雄南地区連合自治会の発掘体験。
 1月6日 K発掘区転落石上面で古墳後期の須恵器蓋出土。N発掘区設定。
 1月7日 M発掘区で3段目堀を確認。M・N発掘区間を繋げた。
 1月8日 一般向け発掘体験開始。
 1月9日 N発掘区で2段目堀の基底石を確認。
 1月12日 N発掘区の想定よりやや外側で1段目埴輪列を検出。
 1月13日 K発掘区で葺石の検出完了。盾形埴輪の近くに土坑？検出（後の排水溝）。この近くの北東壁で7世紀頃の完形土師器杯出土。O発掘区掘削をするも造成土が厚く掘削困難。P発掘区掘削開始。
 1月14日 K発掘区の土坑と思われたものが排水溝であることを示唆。
 1月15日 K発掘区出土土師器の記録作業。Q・R発掘区掘削開始。木村理氏（奈文研）、岩越陽平氏（榎考研）来訪。
 1月17日 Q発掘区で2段目の落ちを確認。埴輪列は見当たらない。
 1月22日 S発掘区掘削開始。削られている可能性がありそう。
 1月23日 K発掘区の排水溝を一部掘削し深さ0.4m程度と確認。
 1月24日 A発掘区西拡張区断ち割りをして盛土であることを確認。T・U発掘区の設定。本来は埋葬施設直交位置の予定だったが伐採木が多いため墳丘主軸直交方向に変更した。
 1月27日 T発掘区で埴輪列検出。奈良市議会伊藤剛議員、吉村升平氏来訪。
 1月28日 T発掘区埴輪列で鱗付円筒埴輪の樹立状態を確認。富雄丸山古墳発掘調査検討会議を現地で行う。
 1月29日 T発掘区埴輪列は6本分だがうち3本が抜き取られている。U発掘区では2段目斜面葺石を検出中であるが、もともと尾根がのびていた方向にむけて転落石が張り出すように検出された。そのため南西方向に拡張。木村理氏来訪。
 1月31日 T発掘区埴輪列平面図作成。U発掘区では転落石に埴輪が混じるのでとり上げていくと径40cmほどありそうな埴輪の基部が出土。豊島直博氏来訪。
 2月1日 U発掘区埴輪列は家・円形埴輪で原位置とみられる。奥田尚・福永伸哉・寺前直人（駒沢大）各氏が来訪。
 2月2日 オルソ画像作成業務。P・S発掘区断ち割り。U発掘区埴輪まわりは造出しというより平坦面に溝を掘って谷部をつくりだしたよう

な印象をもつ。三好美穂氏来訪。

2月3日 記者発表。奥田尚氏による岩石分析。和田晴吾・一瀬和夫・寺沢知子・青柳泰介（樞考研）・和田一之輔各氏が来訪。

2月4日 各発掘区の清掃。長友朋子（立命館大）・上田直弥・巽淳一郎（元奈文研）・大西貴夫・小栗明彦・東影悠（樞考研）各氏が来訪。

2月5日 地元向け現地公開（150人参加）。

2月8日 M・N・T発掘区埴輪列の掘削。諫早直人・穂積裕昌（三重県）・塚本敏夫・初村武寛（元文研）・田中晋作（山口大）各氏が来訪。

2月9日 N発掘区では規格の大きい個体のみ壺掘りして深く埋めていることを確認。森下章司氏来訪。

2月10日 A発掘区西拡張区でさらに断ち割りをを行い炭化物が水平に入る層を確認。奈良市議会佐野和則議員・村田泰輔（奈文研）各氏が来訪。

2月11日 各発掘区の記録作業。U発掘区撮影。金澤雄太・金澤舞（和歌山県）・河内一浩（羽曳野市）・國下多美樹・木許守・花熊祐基（龍谷大）・山本亮（東京国立博物館）各氏が来訪。

2月14日 U発掘区埴輪の図面作成。奈文研村田氏がA発掘区西拡張区・P発掘区の土壌サンプルを採取。和田晴吾・池田保信・川上洋一・鈴木一議・北山峰生・前田俊雄・辰巳祐樹（樞考研）各氏が来訪。

2月15日 各発掘区の埋戻し。N・T発掘区埴輪列の断ち割り写真撮影。U発掘区埴輪の精査・撮影。塚本敏夫氏来訪。

2月16日 U発掘区図面完了。O発掘区の掘削で基底石を確認。K発掘区の断ち割りで埴輪の崩落と改修の可能性を示唆。

2月17日 N発掘区埴輪列取り上げ。U発掘区埴輪列の取り上げ。

2月18日 U発掘区家形埴輪の取り上げ。埋戻し完了。設備撤出し調査終了。

第4節 整理・報告書作成作業の経過

富雄丸山古墳に関する整理作業は、出土遺物を年度内に洗浄し、翌年度以降に注記・接合作業・台帳作成を実施する流れで基礎整理を行った。

5年計画の発掘調査を進める上で、3ヶ年度分の調査が終了した段階に概要報告書を作成するよう、初年度発掘調査開始前に文化庁から指導を受けた。そのため、第1～3次調査の概要報告を『奈良市埋蔵文化財調査年報平成30年度』（2021年3月刊行）に掲載し、令和3年度に第1～4次調査の概要報告書を刊行予定であった。しかし、令和2年度末、会計検査院の指摘により文化庁の方針が変更され、正式報告書の刊行が必要となった。この段階ではすでに次年度予算が内定していたため、令和3年度内の報告書作成を断念した。以上の経過から、令和4年度に報告書を作成する計画を立て、第5次調査までの内容を本書で報告することにした。

遺構に関する整理作業は、業務委託したオルソ画像をもとにデジタルトレースすることで平面図を作成した。第2次調査では計測データを簡易処理し紙出力したオルソ画像を見ながら石の稜線等を書き足す作業を行ったが、富雄丸山古墳の葺石が非常に小さいことと、簡易処理であるがゆえに画像が粗くなってしまふことで、非効率的であった。そのため、第3次調査以降は可能な限り調査を行った上で計測を行い、必要なデータは別途図

面や写真等で記録しておき、処理されたオルソ画像をみながらデジタルトレースする方法へ変更した。また、予算の都合から成果品はオルソ画像のみであったため、発掘区内の等高線がない状態であった。しかし、オルソ画像の作成は SfM-MVS により行われたため、オルソ画像作成の過程データ（obj.txt 等）から CloudCompare や QGIS を用いて等高線を表現した。この作業は容易ではなく、柴原聡一郎の全面的な協力があったり可能となった。これらのデータをもとに、平面図の作成は主に村瀬が行い、山口等悟・荒井啓汰・柴原・山本美喜の協力を得た。

また、第1次調査で実施した航空レーザ測量については、(株)アジア航測の計測した点群データを大手前大学史学研究所により再処理していただいた。その結果は写真図版 PL. 2・3の通りであるが、標高による色分け等で視覚的効果の高い陰影段彩図を得た。

遺物に関する整理作業は、接合までを主に整理補助員が行い、遺物実測・トレースは主に村瀬が行った。ただし、第4次調査出土盾形埴輪を山口、第5次調査出土資料のうち湧水施設形埴輪を木村日向子、蓋形埴輪を水川慶紀が図化した。また、埴輪頂部墓坑内出土資料については、第6次調査で引き続き調査を予定していることや、1972年に調査された奈良県立橿原考古学研究所所蔵資料等との接合関係が未確認であるため、第6次調査終了後に改めてすべての資料の検討を予定している。よって、本報告書では主な資料のみについて整理し報告する。

遺物の写真撮影は、令和2年度春季発掘調査速報展の際に佐藤右文により一部が撮影されていたが、埴輪等多くが未撮影であったため、村瀬が撮影した。撮影はセンター写場で Nikon D780 を使用して行った。

報告書編集作業は、令和4年度に村瀬が担当した。印刷は令和4年度の緊急調査経費（富雄丸山古墳範囲確認発掘調査経費）で行った。（村瀬）

引用文献

- 泉森皎 1986 「富雄丸山古墳の埴輪について」『青陵』59 奈良県立橿原考古学研究所
- 亀井正道 1973 「琴柱形石製品考」『東京国立博物館紀要』8 東京国立博物館
- 京都国立博物館 1982 『京都国立博物館蔵 富雄丸山古墳・西宮山古墳出土遺物』
- 津久井清影 1854 『聖蹟図志（上）』
- 奈良県教育委員会 1973 『富雄丸山古墳発掘調査報告』

第2章 地理・歴史的環境

第1節 地理的環境

富雄丸山古墳は、奈良盆地北西部に広がる矢田・西ノ京丘陵地帯のうち、矢田丘陵の東北より派生する尾根上に位置する。東側を流れる富雄川を眼下に見下ろし、若草山まで遠望できる好立地にある。

富雄丸山古墳の位置する矢田丘陵は、竜田川と富雄川に挟まれた南北方向に走る標高300m程度の丘陵であり、南に向かって緩傾斜をなす。矢田丘陵の南端部は斑鳩地域に該当し、法隆寺など多くの遺跡が存在する。また、矢田丘陵から富雄川を隔てた東側にある西ノ京丘陵は、矢田丘陵と南北にほぼ並走するが、西ノ京丘陵の西側は富雄川に浸食され急峻な崖となっているために遺跡は少ない。対して、東側は緩傾斜をなしており、平城京や寺院など各時代の遺跡が多く存在する。

第2節 歴史的環境

本節では富雄丸山古墳周辺における縄文～奈良時代までの遺跡を年代順に概説する(図10)。本節における遺跡の記述は表1に挙げる文献に拠る。

縄文時代 該当地域で縄文時代の遺跡が確認できるのは中期以降であるが、遺跡数が少なく現時点で様相は不明瞭である。ただし、菅原東遺跡(30)において中～晩期の土器・石器の出土がある。また、後～晩期の遺跡である秋篠川流域の秋篠・山陵遺跡(23)、宝来遺跡(36)でも該当時期の縄文土器が出土していることから、縄文時代における生活拠点は沖積地が主であったと考えられ

る。このように、縄文時代以前の様相は今後の調査の進展に期する所が大きい。

弥生時代 前時代に比べ遺跡数は若干増加する。弥生時代も前～中期までは沖積地を中心に集落が営まれる。秋篠川上流域の佐紀地域に位置する平城宮下層で検出された右馬寮下層遺跡(27)、佐紀遺跡(28)では住居跡のほか方形周溝墓が検出されており、大規模な低地性集落として注目される。このうち佐紀遺跡は、検出された遺構・遺物から後期まで継続する。注目すべきは秋篠川上流の丘陵斜面(19)から出土した中期の秋篠銅鐸である。銅鐸は明治以前に1点、明治22(1889)年に3点が出土しており、そのうち1点が外縁付鈕式、ほか3点が扁平鈕式である。出土地周辺には生活痕跡や関連する遺跡が認められず詳細は不明であるが、秋篠銅鐸は弥生時代の秋篠川流域の様相を理解する上で重要である。

後期になると、前・中期と同様に沖積地に立地する右京四条一坊一坪下層(横領遺跡(29))などに加えて、狭い谷状地形に展開する可耕地をより広く利用するため、遺跡の立地を沖積地から丘陵上へと拡大する傾向がみられる。西ノ京丘陵上に位置する六条山遺跡(44)では、5棟の竪穴建物、方形特殊土坑が検出されている。同時期の遺跡には同じく西ノ京丘陵上に位置する一ノ谷遺跡(46)がある。さらに、本書で述べる富雄丸山古墳(1)、および2・3号墳(2・3)から後期の土器片が確認されていることから、この付近にも後期の遺跡が存在すると考えられる。

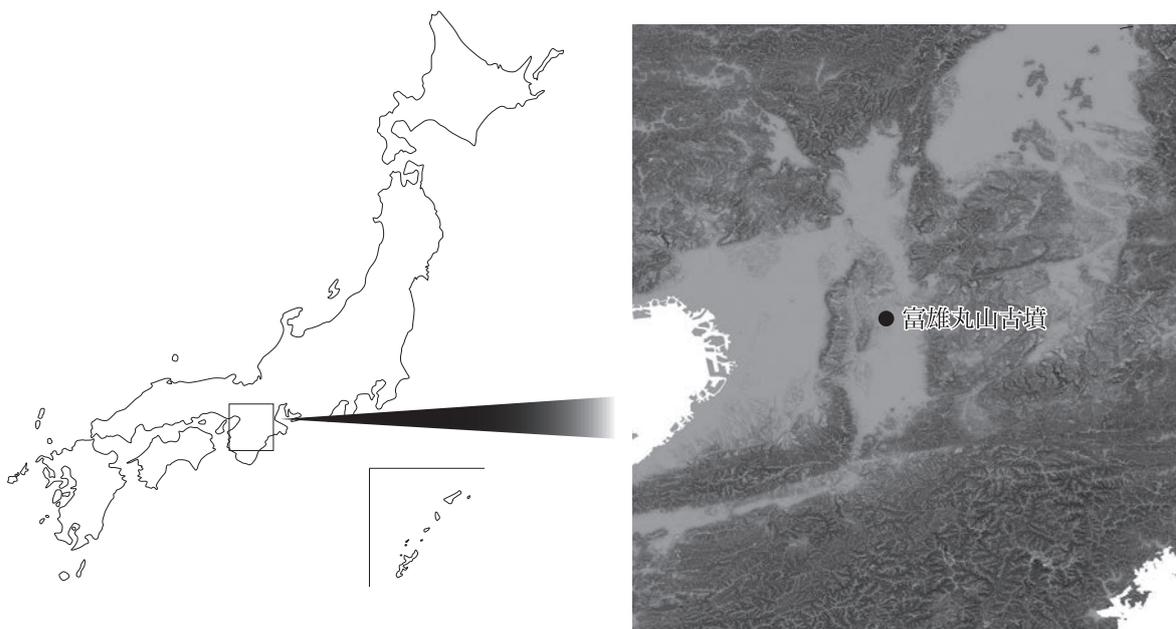


図9 富雄丸山古墳の位置(地理院地図をもとに作成)

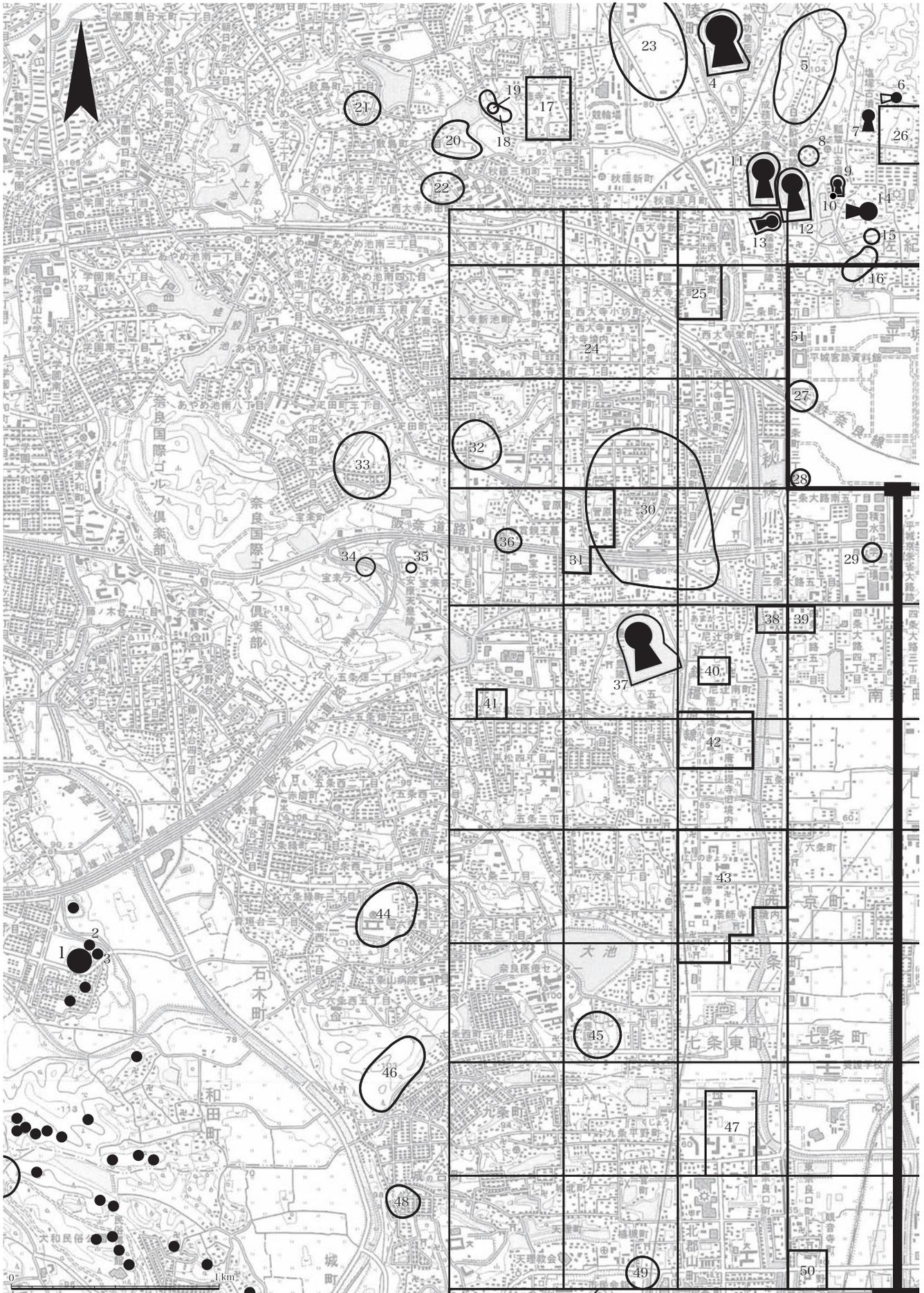


図10 富雄丸山古墳と周辺の遺跡 1/25,000

表1 遺跡一覧表

番号	遺跡名	出典
1	富雄丸山古墳	本書、奈良市 1968『奈良市史 考古編』、奈良県教委 1973『富雄丸山古墳発掘調査報告』、京都国立博物館 1982『京都国立博物館所蔵 富雄丸山古墳・西宮山古墳出土遺物』
2	富雄丸山2号墳	奈良県教委 1973『富雄丸山古墳発掘調査報告』
3	富雄丸山3号墳	奈良県教委 1973『富雄丸山古墳発掘調査報告』
4	五社神古墳	宮内庁書陵部 2004『書陵部紀要』56、末永雅雄 1961『日本の古墳』朝日新聞社
5	秋頭古墳群	奈良大学考古学研究会 2001『盾列』11
6	オセ山古墳	奈良市 1968『奈良市史 考古編』、榎考研 1979『奈良県遺跡調査概報 1978年度』
7	塩塚古墳	榎考研 1979『塩塚古墳環境整備に伴う事前発掘調査』
8	マエ塚古墳	奈良県教委 1969『マエ塚古墳』
9	瓢箪山古墳	奈良市 1968『奈良市史 考古編』、宮内庁書陵部 1992『書陵部紀要』44、榎考研 1997『佐紀盾列古墳群 航空自衛隊奈良基地試掘調査概要報告』、『奈良県遺跡調査概報 1996年度』、榎考研 1998『佐紀・盾列古墳群 松林苑発掘調査概要報告』、『奈良県遺跡調査概報 1997年度』
10	衛門戸丸塚古墳	奈良市 1968『奈良市史 考古編』、榎考研 2005『3次元デジタルアーカイブを活用した古鏡の総合的研究』
11	佐紀石塚山古墳	末永雅雄 1961『日本の古墳』朝日新聞社、宮内庁書陵部 1996『書陵部紀要』48、宮内庁書陵部 2007『書陵部紀要』49
12	佐紀陵山古墳	石田茂輔 1967『日葉酢媛命御陵の資料について』、『書陵部紀要』19 宮内庁書陵部、宮内庁書陵部 1980『書陵部紀要』32、宮内庁書陵部 1986『書陵部紀要』38、宮内庁書陵部 1991『書陵部紀要』43、奈文研 1993『1992年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』、榎考研 2005『3次元デジタルアーカイブを活用した古鏡の総合的研究』、奈良国立博物館 2017『北和城南古墳出土品調査報告書』
13	佐紀高塚古墳	末永雅雄 1961『日本の古墳』朝日新聞社
14	猫塚古墳	後藤守一 1919『銅鏃について』、『考古学雑誌』6-1・2・3・5・6・9 日本考古学協会、奈良県教委 1963『奈良縣史跡名勝天然記念物調査抄報』12
15	超昇寺跡	村田修三 1980『超昇寺跡』、『日本城郭大系』10 新人物往来社
16	佐紀池遺跡	奈文研 1977『昭和51年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』、大和弥生文化の会 1995『大和の弥生遺跡 基礎資料Ⅰ』
17	秋篠寺	榎考研 1071『秋篠寺境内発掘調査報告』奈良県文化財調査報告書 15
18	西山火葬墓	小島俊次 1956『大和出土の二例の骨壺』、『古代学研究』15・16 古代学研究会
19	秋篠銅鐸出土地	梅原末治 1927『銅鐸の研究』木耳社
20	秋篠阿弥陀谷遺跡	奈良市教委 2022『秋篠阿弥陀谷遺跡・横穴墓群の調査 AAM第1次』、『奈良市埋蔵文化財調査年報 令和元年度』
21	阿弥陀山鹿寺跡	福山敏男 1948『奈良朝寺院の研究』高桐書院、泉森皎 1970『阿弥陀山寺の調査』、『青陵』19 榎考研、榎考研 1998『奈良市敷島町阿弥陀谷鹿寺発掘調査概報』、『奈良県遺跡調査概報 1997年度』
22	赤田横穴墓群	奈良市教委 2015『赤田横穴墓群・赤田1号墳』、奈良市教委 2021『赤田横穴墓群 第6次調査(現地公開資料)』
23	秋篠・山陵遺跡	奈良大学考古学研究室 1998『秋篠・山陵遺跡』
24	西大寺	大岡実 1966『南都七大寺の研究』東京公論美術出版、奈文研 2007『西大寺食堂院・右京北辺発掘調査報告』、奈良市教委 2013『西大寺旧境内発掘調査報告書Ⅰ』
25	西隆寺跡	奈文研 1976『西隆寺発掘調査報告書』、奈文研 1993『西隆寺発掘調査報告書』
26	松林苑内郭推定地	榎考研 1990『松林苑跡Ⅰ』
27	右馬寮下層遺跡	奈文研 1995『右馬寮の調査』、『1994年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』、大和弥生文化の会 1995『大和の弥生遺跡 基礎資料Ⅰ』
28	佐紀遺跡	奈文研 1965『昭和39年度平城宮跡発掘調査概要』、奈文研 1981『平城宮跡発掘調査Ⅹ』奈文研学報 39、大和弥生文化の会 1995『大和の弥生遺跡 基礎資料Ⅰ』
29	横領遺跡	奈良市教委 1991『平城京右京四条一坊一坪 第197次』、『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成2年度』
30	菅原東遺跡	奈良市教委 1991『奈良市埋蔵文化センター紀要』、奈良市教委 1992『平城京右三条三坪・菅原東遺跡の調査』、『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成5年度』、榎考研 2011『平城京右京三条二・三坊、菅原東遺跡』
31	菅原寺跡(喜光寺)	奈良県教委 1969『菅原寺一喜光寺旧境内緊急発掘調査報告書Ⅰ』
32	法世寺	(奈良県遺跡地図)
33	菅原遺跡	奈良大学 1982『菅原遺跡』、奈良市教委 2019『菅原遺跡の調査 試掘2016-5・2017-2次』、『奈良市埋蔵文化財調査年報 平成28年度』
34	宝来横穴墓群	榎考研 1992『奈良県遺跡調査概報 1991年度(第1分冊)』
35	古城古墳	宮内庁書陵部 1999『書陵部紀要』51
36	宝来遺跡	奈良市教委 1999『平城京右京三条四坊十坪・宝来遺跡の調査 第386次』、『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成10年度』
37	宝来山古墳	末永雅雄 1961『日本の古墳』朝日新聞社、宮内庁書陵部 2004『書陵部紀要』56
38	弘文院跡	保井芳太郎 1932『大和上代寺院志』慶文堂書店
39	禪院寺跡	福山敏男 1948『奈良朝寺院の研究』高桐書院
40	濟恩院跡	新人物往来社 1980『日本城郭大系』10
41	平松廃寺	奈良市 1985『奈良市史社寺篇』、奈良市教委 2021『平城京跡(右京四条四坊十二坪)・平松廃寺 第731次』、『奈良市埋蔵文化財調査年報 平成30(2018)年度』
42	唐招提寺	大岡実 1966『南都七大寺の研究』東京公論美術出版、奈良県教委 2009『国宝唐招提寺金堂修理工事報告書 瓦調査・発掘調査編』榎考研 1990『唐招提寺境内発掘調査資料』、榎考研 2017『史跡唐招提寺旧境内:緊急防災施設改修事業に伴う発掘調査報告書』
43	薬師寺	大岡実 1966『南都七大寺の研究』東京公論美術出版、奈文研 1987『薬師寺発掘調査報告』
44	六条山遺跡	榎考研 1980『六条山遺跡』
45	三松寺跡	(奈良県遺跡地図)
46	一ノ谷遺跡	榎考研 1996『一ノ谷遺跡』
47	西市跡	奈文研 1982『平城京西市跡 右京八条二坊十二坪の発掘調査』
48	城の台遺跡	奈良市 1968『奈良市史 考古編』、榎考研 1980『六条山遺跡』
49	植(殖)規寺跡	保井芳太郎 1932『大和上代寺院志』慶文堂書店、福山敏男 1948『奈良朝寺院の研究』高桐書院、大和郡山市教委 1995『山内瓦窯1号窯発掘調査概報』
50	観音寺跡	保井芳太郎 1932『大和上代寺院志』慶文堂書店、大和郡山市 1966『大和郡山市史』、榎考研 1995『奈良県遺跡調査概報 1994年度(第1分冊)』
51	下ツ道	近江俊秀 2014『日本の古代道路』角川選書

古墳時代 古墳時代の遺跡は主に集落と古墳である。集落の立地条件等は前時代と大きく変わらない。全国各地で古墳の築造がはじまるなか、奈良市内では古墳時代前期前半に遡る古墳が確認されておらず、概ね前期後半の佐紀古墳群の出現と同時に築造が始まる。

前期後半～中期は、奈良盆地北側を限る奈良山丘陵の南西斜面に佐紀古墳群が築造される。佐紀古墳群は西群と東群に分かれ、前者は五社神古墳（神功皇后陵）（4）、マエ塚古墳（8）、佐紀陵山古墳（日葉酢媛命陵）（12）、佐紀石塚山古墳（成務天皇陵）（11）、佐紀高塚古墳（称徳天皇陵）（13）などの前期後半～中期前半の大型前方後円墳・円墳を中心に構成される。後者は図示の範囲外だが、コナベ古墳、市庭古墳（平城陵）、ウワナベ古墳、ヒシャゲ古墳（磐之媛命陵）など中期前～後半の大型前方後円墳を中心に構成される。佐紀古墳群を構成する古墳の多くは、陵墓であり調査事例に乏しい。また、西ノ京丘陵東裾には宝来山古墳（垂仁天皇陵）（37）が築かれる。この北側には菅原東遺跡があり、出土土器や特徴の類似する埴輪の存在から、両者は関係性の深い遺跡と評価できる。なかでも東西50m、南北38m、幅6mの濠で囲まれた方形区画は首長居館と推定されている。ただし、宝来山古墳の築造が終了した中期初頭には遺跡が一旦廃絶するようである。宝来山古墳の南西には本書で報告する富雄丸山古墳（1）があり詳細は後述するが、暗越奈良街道と南北河川の交差点に宝来山古墳、富雄丸山古墳、そして竜田川との交差点には竹林寺古墳が単独で立地することは、これらの古墳が築造された背景を考える上で重要である。なお、宗教法人大倭大本宮が所蔵する伝菅谷出土の車輪石があり、付近に前期古墳が存在した可能性がある。

中期には、佐紀古墳群東群を中心に活性化し、富雄丸山古墳周辺では遺跡が希薄である。

後・終末期になると、赤田横穴墓群（22）、宝来横穴墓群（34）等の横穴墓や秋頭古墳群（5）など小規模な古墳群が多く築かれるようになる。このうち横穴墓では陶棺が出土する事例が多くみられる。近隣では中町陶棺も知られている。富雄川中流域では富雄川右岸に横穴式石室をもつ富雄丸山2号墳（2）、古墳であるか不明確であるが3号墳（3）が築かれる。

菅原東遺跡では再び集落が営まれ、拠点的な埴輪生産が開始される。「菅原」という地名や埴輪生産が土師氏に関わる点からみて、史料にみる菅原土師氏がこの遺跡に関連することは疑いない。

飛鳥時代 飛鳥時代になると古墳に代わり寺院が建立さ

れるようになる。しかし、奈良市内では飛鳥時代の寺院は少ない。図示した範囲では平松廃寺（41）があり、飛鳥時代後半の瓦が出土していることから遷都以前から存在した可能性が考えられている。

該当地域には、奈良盆地の南北を縦貫する古代の官道である下ツ道（51）がある。下ツ道は、平城京の朱雀大路などの地割基準となっており、奈良盆地の土地利用を考えるうえで非常に重要な道路である。下ツ道の敷設時期については、道路自体やそれに関連する遺構が調査された事例は多くなく、現時点で断定することは難しい。

奈良時代 和銅三（710）年に都が藤原京から平城京に遷都されたことにより、奈良盆地では土地開発が活発になる。平城京の周辺では、奈良山丘陵上や斜面を中心に窯業生産遺跡が複数確認できる。これらの遺跡では平城宮造営・寺院建立に伴い大量の瓦が生産された。

奈良時代になると数多くの寺院が建立される。図示した範囲では秋篠寺（17）、西大寺（24）、唐招提寺（42）や薬師寺（43）などの著名な寺院のほかにも多くの寺院（跡）が存在する。多くは奈良時代後期の創建であり超昇寺（15）、西隆寺（25）、菅原寺（喜光寺（31））、弘文院（38）、禅院寺（39）、済恩院（40）、三松寺（45）がある。これらに先行する可能性があるものには観音寺（50）がある。また、発掘調査によって阿弥陀山廃寺（21）や法世寺（32）などの小規模寺院の存在も確認されている。特に平城京右京内でも秋篠川西岸地域は、奈良時代寺院および寺院跡の分布が濃密である。

以上が富雄丸山古墳周辺の地理・歴史的環境である。富雄丸山古墳の北東に位置する佐紀地域や、南方の小泉・斑鳩・平群地域では古墳の築造系譜が継続しているのに対し、その中間に位置する富雄・矢田・郡山地域では、古墳の存在が単独・散発的であるために系譜を追うことが難しい。しかし、それこそが富雄丸山古墳の特質であるととらえることもできる。加えて、富雄丸山古墳が大型前方後円墳が築造される佐紀古墳群にほど近い位置に立地しながらも、前方後円墳でなく円墳である点にも注意する必要がある。また、富雄丸山古墳の築かれた矢田丘陵とその周辺は、古墳時代前～中期における大和から北河内方面への入出経路に該当する場所であったと考えられる。以上の点を考慮しつつ、矢田丘陵周辺を取り巻く地域状況が大和全体の中で、どのような位置づけであったかを考える必要がある。（小林友佳）

第3章 測量・発掘調査

第1節 航空レーザ測量：第1次調査

調査の概要 第1次調査はアジア航測株式会社に委託して平成29(2017)年6月に実施した。ヘリコプターが対地高度500m、速度20m/sで調査地上空を飛行し、搭載したレーザ計測器 Harrier 68i (Trimble 社) から地表へ向けてレーザ光を放射して反射した測点を1,828,647点得た。周辺の道路や公園地を含めた計測範囲の面積は29,346㎡である(うち調査地の面積は20,267㎡)。そこから樹木や下草、人工物などの地物に反射した測点を消去し、地表に反射した242,828点の測点を抽出したデータがグラウンドデータとして納品された。これに加え、グラウンドデータから生成された50cm格子のグリッドデータ、主曲線間隔25cmの等高線図(図11)と赤色立体地図(図版PL. 2)、両者を重ね合わせた立体等高線図が納品された。なお、標高値は東京湾平均海面(T.P.)を基準とする。以下、1972年の奈良県調査で作成された測量図を「旧測量図」、第1次調査で作成した測量図を「新測量図」と呼ぶ。

測点データ品質の評価 取得されたグラウンドデータに含まれる242,828点の測点は、ヘリコプターに搭載された計測器から無作為に地上へ放射されたレーザ光のうち、植生の隙間をすり抜けて地表から反射したもののみを抽出したものである。その密度は均等ではなく、地表を覆う植生の状況によって粗密がある。したがって、地表面が上空から視通できる調査地外の舗装道路やグラウンド、公園地に比べ、植生条件の悪い調査地内は得られる点群密度が低下する。特に調査を実施した6月は下草が多く繁茂しており、このことも調査地内の計測条件を悪くした。このように最善の条件下での計測ではなかったが、調査地内の有効な測点は60,000点前後を得た。平均的な点群密度は約3点/㎡であり、古墳の墳丘構造を読み取るのに支障のない品質であると言える。一方、近年実践される点群位置情報の定量的分析手法は均等な密度かつより高密度の点群が前提となるので、本調査で得られた測点群を適用することはできない。

墳丘構造の認識 これまで、富雄丸山古墳は直径86mの造出しを持たない2段築成の円墳と認識されていた。大阪湾最低潮位(O.P.)を基準とした旧測量図で標高99.50mの等高線が「墳丘西裾とみられる」とあるから、新測量図での標高98.20m付近を墳丘裾と捉えていることになる。旧測量図で墳丘とみなされた範囲は新測量図でも読み取れる。特に、わずかな傾斜変化の表現にお

いて等高線図よりも有利な赤色立体地図では、墳丘を上下に分ける平坦面の円周がより明確に表現されている。新測量図で墳丘の東北東方向に着目すると、標高97.50～98.50m付近に緩斜面があり、その下位の標高95.00～97.50mにやや勾配の大きい斜面がある。勾配の大きい斜面の下端の傾斜変換線はわずかに弧状となり、その中心は墳丘中心と一致することから、従来墳丘と認識されていた範囲のさらに外側(下側)にもうひとつの段が認められる。

標高95.00mの等高線を反時計回りに追いかけていくと、北東付近で大きく方形に張り出しており、墳丘と一体の突出部がある。旧報告では当該部分について造出しの可能性を棄却しているが、昭和58年の調査によって造出しの存在を認めている。新旧測量図を比較すると、旧測量図では明確に表現されていなかった突出部前端やくびれ部が新測量図、特に赤色立体地図ではより明瞭に表現されており、これをもって造出しの可能性を積極的に評価できるようになった。

以上の検討から、富雄丸山古墳の墳丘は北東方向に造出しをもつ3段築成の円墳であることがわかった。

墳丘の現況 墳丘の現況の観察には赤色立体地図が適する(図12)。各所で地すべりが発生した痕跡があり(a)～(n)、とくに円丘部第3段北側斜面で著しく、地すべり堆積物とみられる凸形地形(c')がみられる。人為的な地形改変には、円丘部北側に大規模な採土の痕跡(o)があるほか、南東側には溜池の設置に伴う掘り込み(p)・(q)が残る。このように一部で墳丘の変形があるが、概して墳丘の旧状はよく残っていると言える。

また、旧測量図が作成された1972年から現在までの間に、近隣での宅地開発の影響で周辺地形が大きく変化している。「東側(引用注:『西側』の誤記か)墳丘裾部は西南から派生してくる尾根を切断しており、南北長35m、幅14mにわたって掘割状の空地がみられ、現在幅狭の水路と畑地になって残っている」とある部分は、奈良市西部生涯スポーツセンターのグラウンドとしてすべて削平されている。同様に旧測量図に示された墳丘から南東へ延びる尾根も奈良市道西部第996号線の建設によって消滅した(v)。

墳丘の復元 本項では第1次調査で得られた現況地形の情報に基づいて築造当時の姿を復元する。したがって、第2～5次調査の成果は反映しておらず、発掘調査を経た見解と一致するものではないことを断っておく。

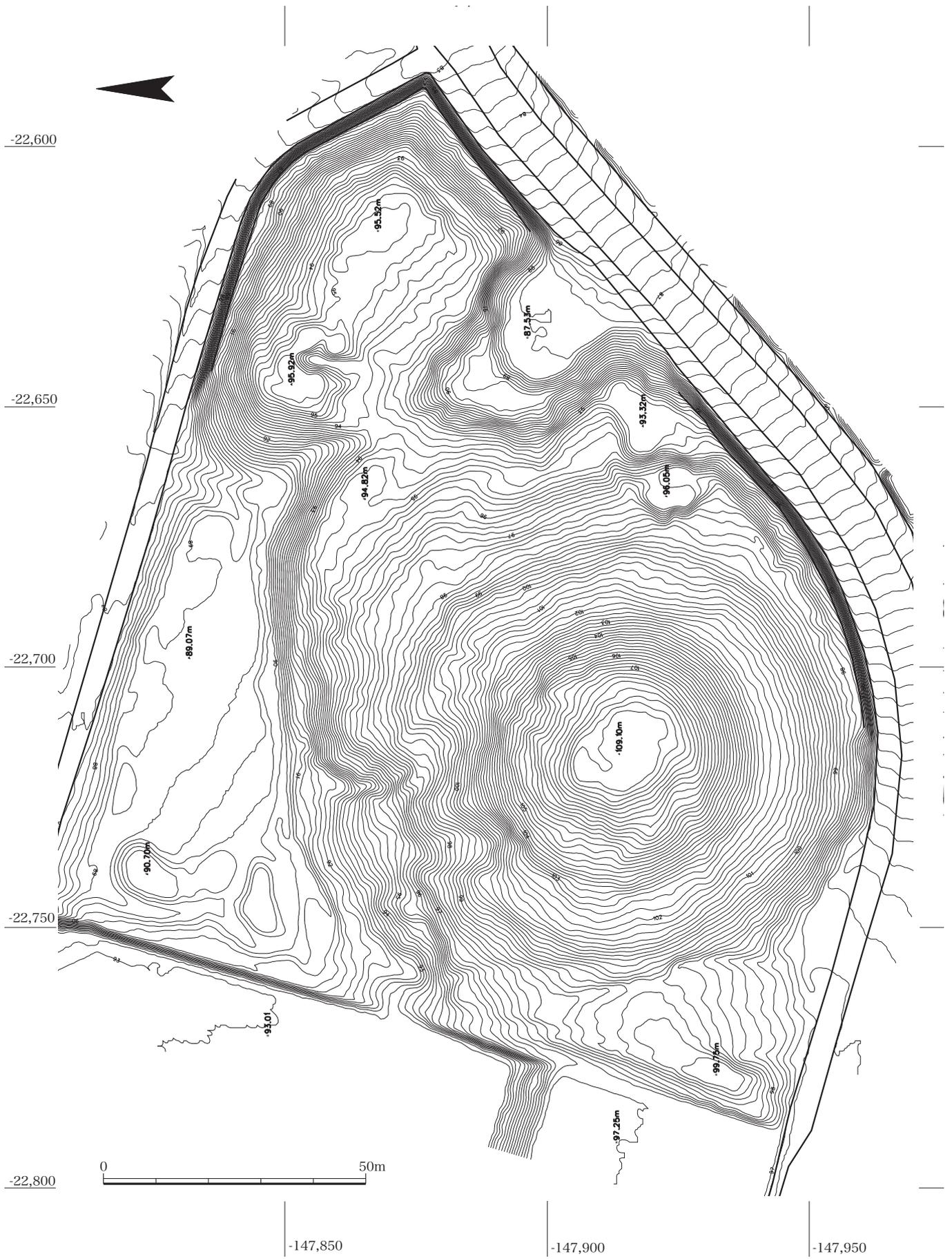


図 11 航空レーザ測量等高線図 1/1,000

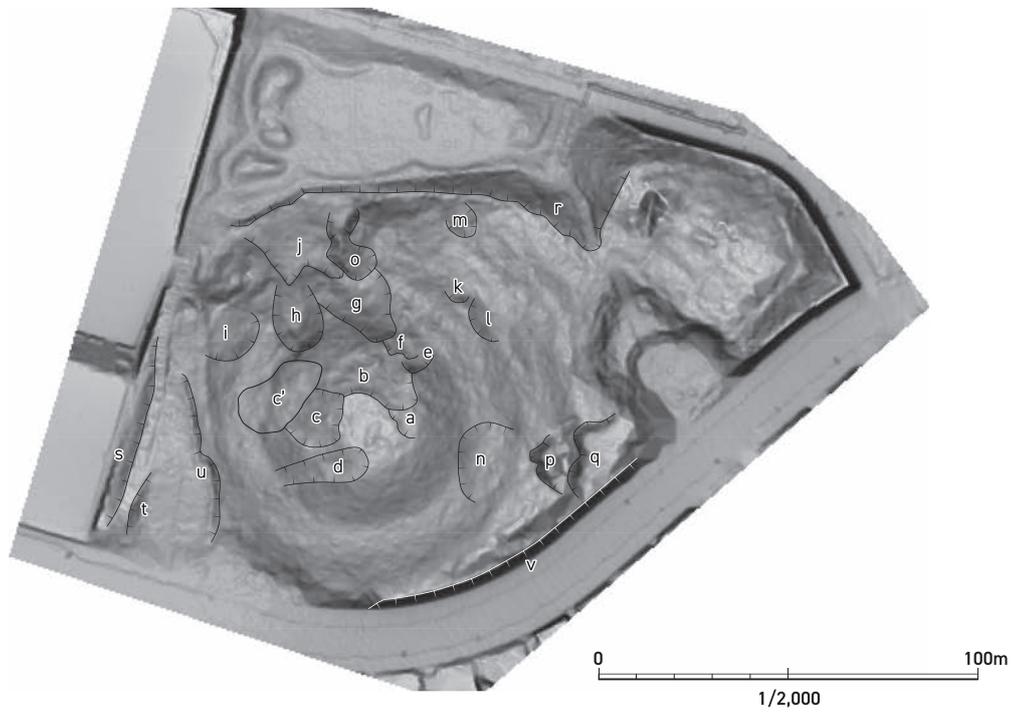


図12 墳丘の変形状況

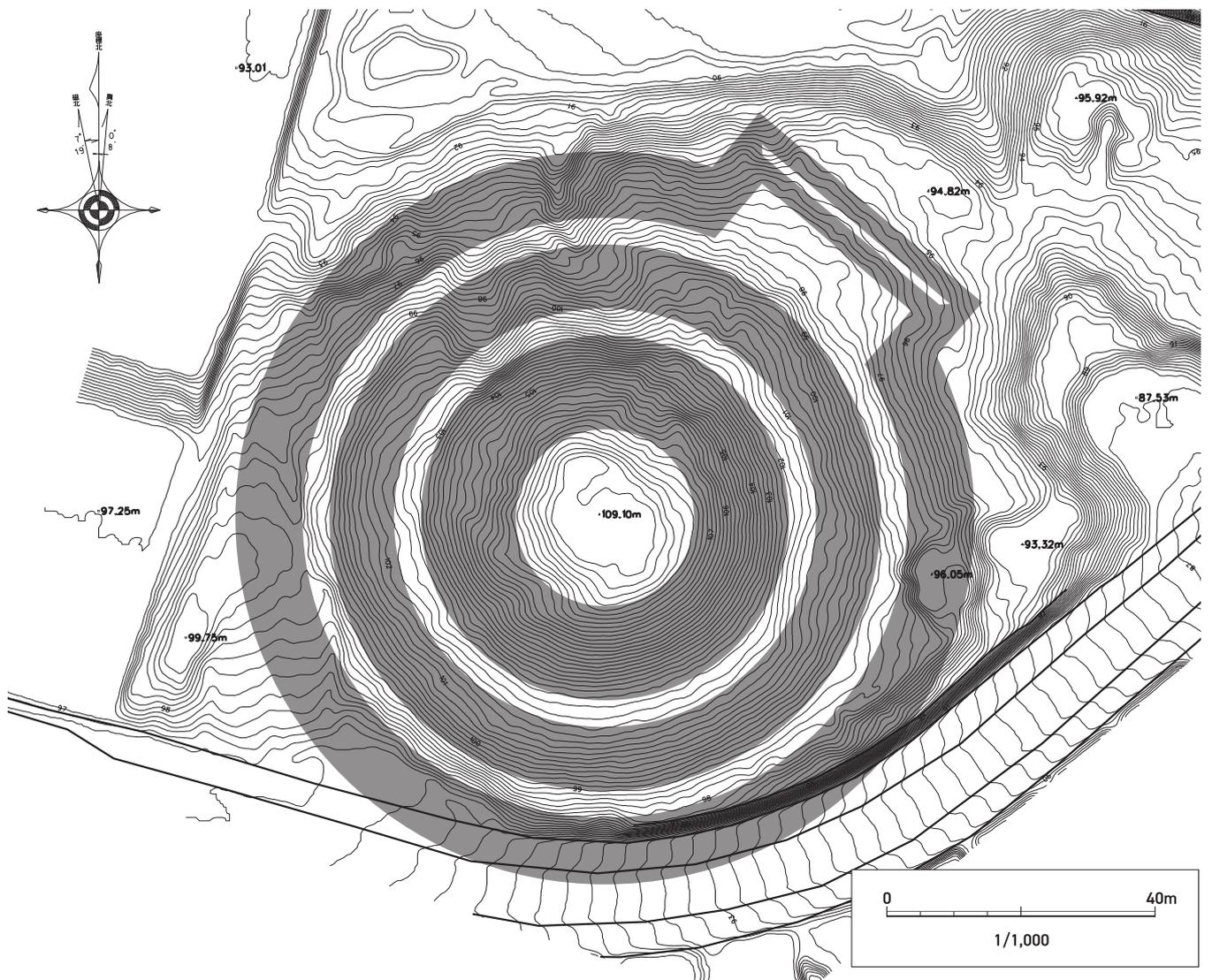


図13 第1次調査成果をもとにした墳丘復元案

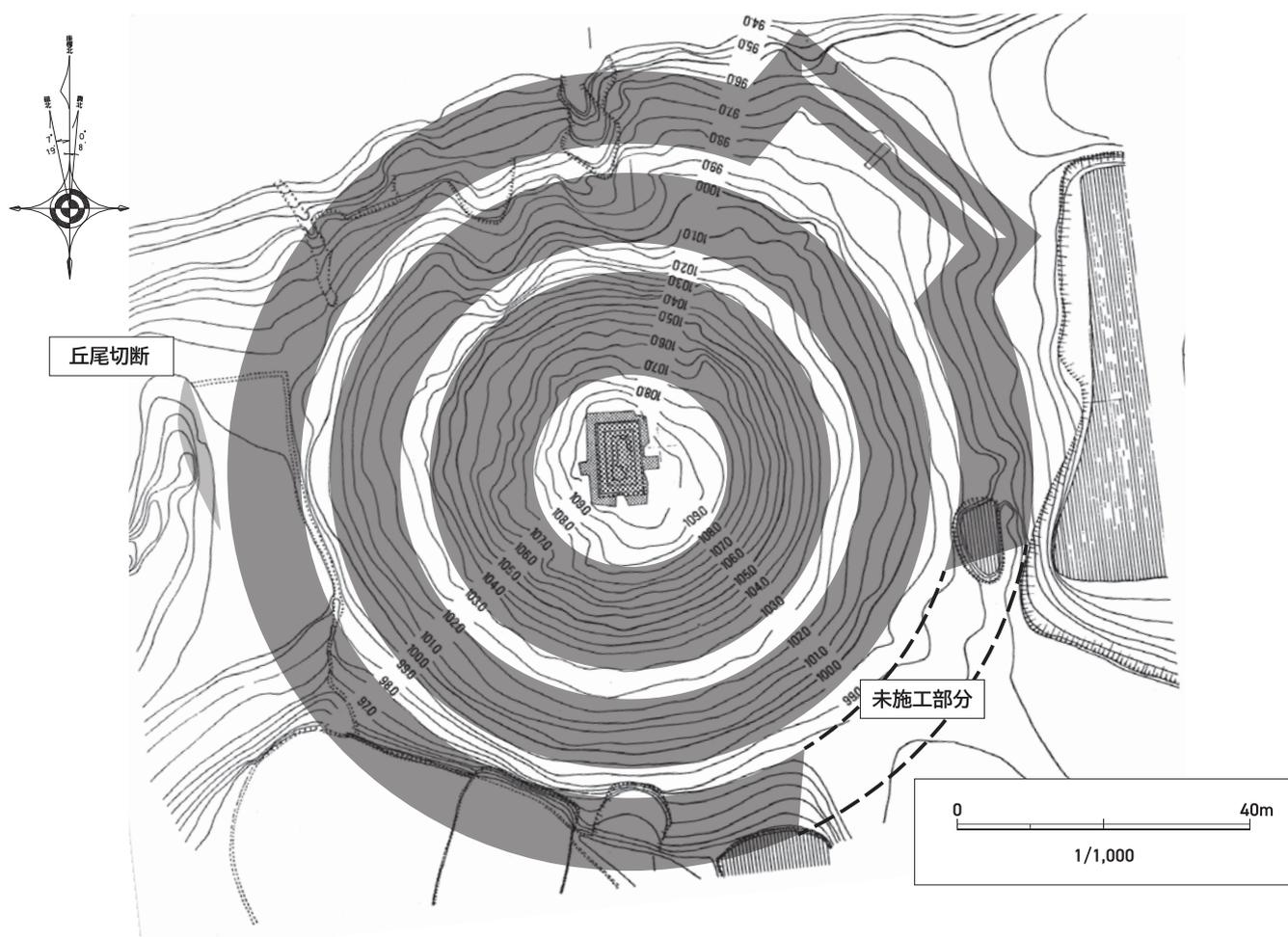


図 14 旧地形との対応関係 (奈良県教委 1973 に加筆)

まずは比較的良好に遺存する円丘部第3段から検討する。第3段斜面下端には比較的名瞭な傾斜変換線が直径約55mの正円をなしてめぐっており、その中心点を O_3 とする。第3段斜面下端の標高は102.50～102.75mで安定している。現況の最高点は標高109.10mであるが、安定して等高線の回る109.00mを墳頂平坦面の標高とすると、第3段の高さは6.25～6.50mとなる。109.00mの等高線はいびつな形をしているが、 O_3 からもっとも離れる点は O_3 からの距離が10mほどであるから、墳頂平坦面の直径を20mと見積もっておく。

円丘部第2段はやや分かりにくいだが、標高102.00～102.75mにかけて円形にめぐる第2段テラスと、その下位の第2段斜面が認められる。第2段斜面の下端は墳丘の東半分で明瞭なほか蚕食の多い西半分でも部分的に残存し、標高は98.50～99.00m、直径は82mとなる。下端円周の中心 O_2 の位置は O_3 とほぼ一致している。第2段テラスは肩部の土壌流出により判然としないが、緩傾斜の分布からは4m程度の幅であろう。

円丘部第1段は削られており復元が難しい。第1段の中心 O_1 が O_2 、 O_3 と一致し、下端が標高94.75mに一定して全周すると仮定して復元すると、第1段の直

径は110m、高さ3.5～4.0mと推定できる。第1段テラスも第2段テラスと同じく幅4m程度とみられる。

次に造出しを検討する。造出し前面斜面の途中には標高95.50m付近にテラス状の緩傾斜が認められるが、側面では不明瞭である。造出しの高さは約3mで、頂部の平坦面は円丘部第1段テラスとほぼ同一の高さである。

以上の墳丘復元案を旧測量図に重ねて、現状では失われた旧地形との対応関係を確認しておく(図14)。円丘部第1段の西側には、丘尾切断によって残された切断面が残っている。同様に南東へ延びる尾根も削り残され、第1段斜面は途切れる。円丘部南南東から南西にかけては第1段斜面に対応すると思われる斜面があるが、これが第1段斜面として施工されたものなのか、それとも無加工の自然地形が偶然そのように見えるだけなのかは判然としない。当該部分は現在大部分が削平されている。

以上の検討から、富雄丸山古墳は直径110m、高さ14mの3段築成の円丘部に、幅44m、長さ9m、高さ3mの造出しが北東方向に取り付く造出し付円墳であることが明らかになった。(柴原聡一郎)

第2節 発掘調査：第2～5次調査

第2～5次調査は、円丘部および造出し部にA～U発掘区を設定して行った。以下では、円丘部（3・2・1段目）と造出し部（上・中・下段）に分けて、対応する発掘区での成果を報告する。

なお、第1次調査成果をもとに円丘部および造出し部の中心をそれぞれ求め、これを繋いだ線を主軸とした。また、墳頂部は埋葬施設の中心軸、造出し部は主軸に沿ってグリッドを設定した。詳細は図16上の通りである。

第1項 円丘部の調査

円丘部は基本的に三段築成であるが、地形等の制約により平坦面・斜面幅や傾斜角度等が場所によって異なる。また3段目墳頂部の中央に壇がある構造を想定でき、北東部には造出しが接続する。

I. 3段目（墳頂部）

墳頂部は、明治時代の盗掘、1972年の発掘調査により大幅に改変されている。第2次調査開始時に墳頂部を12.5cm間隔で平板測量した(図16下)。調査前の現況は、墳頂部の中心付近が全体的に窪んでおり、その周りに3箇所程度の高まりを確認できた。その最も高い部分で標高109.513mであった。また、墳頂部の中央は全体的に周りより若干高まっているようであり、とくに南東側付近は方形状を呈するようにもみえる。

A発掘区（第2～5次） 1972年に奈良県が調査した埋葬施設（粘土槨SZ01）は、国土座標をもとにした正確な墳丘との位置関係が不明であり、緊急調査であったため微細な遺物を回収できていない可能性が高いことから、これらを再確認することを目的に発掘区を設定した。

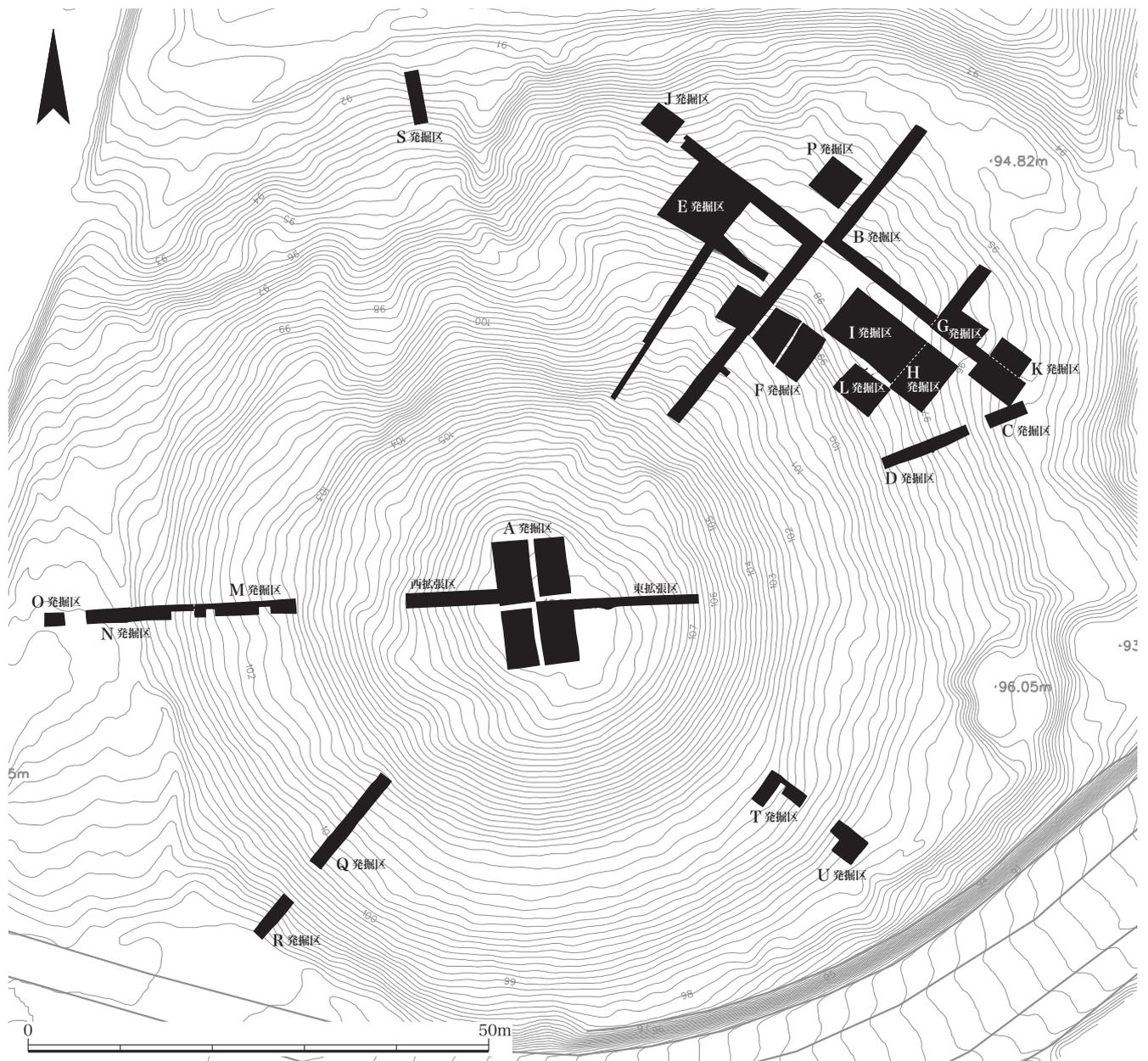


図15 第2～5次調査の発掘区位置図 1/700

旧発掘区埋土の掘削は同時開催した発掘調査体験に参加した一般市民等と共に行い、ふるいを使用して掘削土から微細な遺物を回収した。

その結果、4ヶ年で概ね現地表下約0.5mまで掘り下げを行い、墓坑1段目の輪郭を検出した。1972年に検出した粘土槨を墓坑1段目の輪郭で合わせると概ね一致することから、目的の一つであった粘土槨の正確な位置を特定できた。一度掘削されているため、やや不整形であるが墓坑1段目の輪郭は長さ約10m、幅約7mで、南東隅は盗掘坑により壊されている(図17)。

A発掘区東拡張区(第3次) 墳頂部の埴輪列や壇・副次埋葬施設の有無を確認することを目的として、A発掘区の東側に設定した(図18)。

その結果、墳頂部の中心から約8.5m東側で高さ約0.8mの段を確認し、墳頂部の中央が1段高くなることわかった。この部分は、砂質の地山(標高約108m)を2段となるよう削り出し、その周縁に厚さ約0.1mずつ水平に盛土をして高まりをつくり出している。上面には厚さ約0.2mの化粧土を置き、その表面の一部で小礫敷を確認した。よって、調査地点付近はあまり削られていないと判断できるが、周囲の大部分がその面より低いため、高まりの規模や形状は不明確である。また、小礫敷が残る部分より中心部側はやや高くなり、高まりの上面が水平でなかった可能性がある。この高まりは調査前の測量で南東側が方形状を呈していたことなどから、墳頂部に設けられた方形壇の可能性はある。段の斜面部分は、攪乱により壊されていたため形状や詳細な構造は不明であるが、傾斜角度は約26度に復元できる。

段がのる3段目平坦面は、地山上に約0.6mの盛土を土手状にめぐらせている。現状はやや傾斜があるが、平坦面の小礫敷が流出していることから崩れていると考えられるため、本来は水平に近い平坦面であったと想定できる。そのため、3段目で埴輪列は確認できなかった。

また、3段目斜面との傾斜変換点は崩れており不明確であるが、やや動いた状態の葺石を検出した。斜面の傾斜角度は約20度である。

墳頂部中心の埋葬施設SZ01に併設するような埋葬施設は東側で確認できなかった。ただし、朱や粘土ブロック土を含む平面不整形の土坑(深さ約0.5m)を検出した。深さ等からみて盗掘坑の一部であると考えられる。

A発掘区西拡張区(第5次) 墳頂部の埴輪列や壇・副次埋葬施設の有無を確認することを目的として、A発掘区の西側に設定した(図19)。

その結果、遺構はなく測量図にみられるように西側は

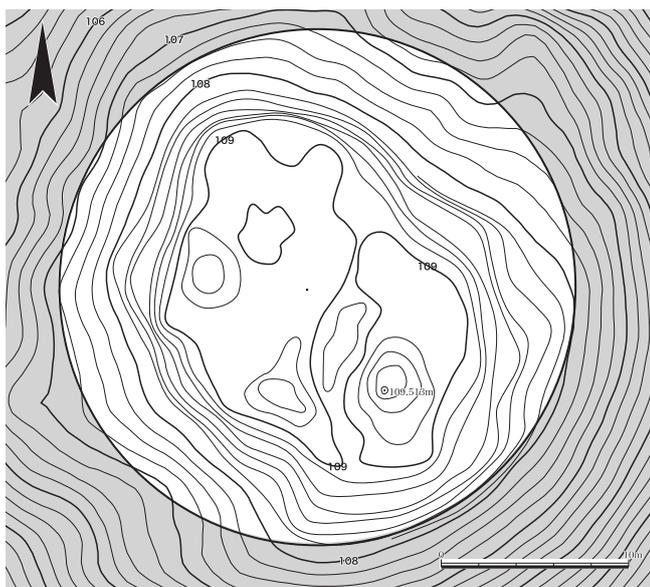
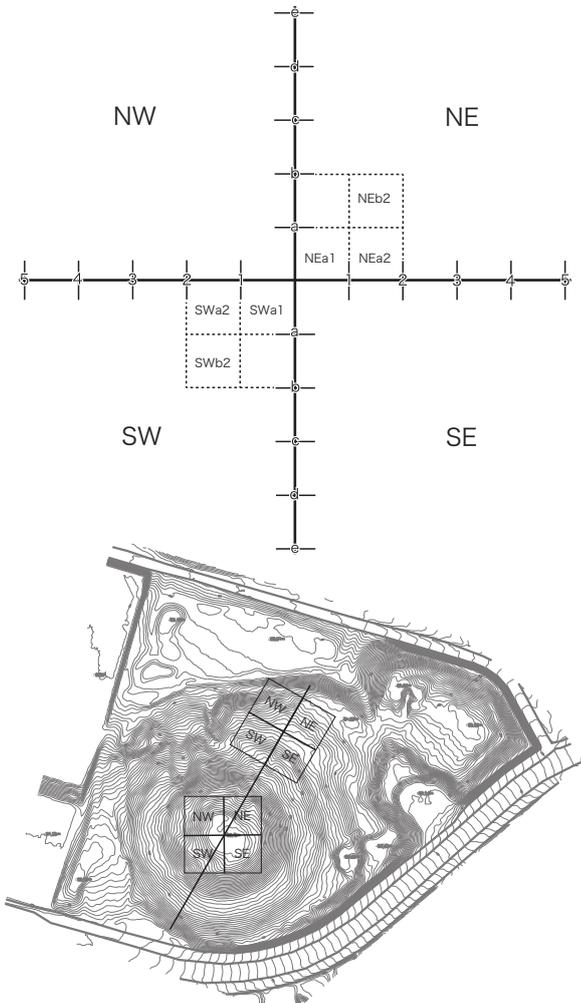


図16 上:主軸・グリッド設定図
下:墳頂部の調査前測量図 1/400

墳丘が大きく崩れており、葺石も全く残存していない。現況の斜面傾斜角度は約18度である。

墓坑に近接する部分では、わずかに埴輪片がみられ(図17の★)、墓坑南西隅付近でも同様に埴輪片が出土した。1972年調査時には粘土槨の盗掘坑から鱗付円筒埴輪や形象埴輪が多数出土していることから、埋葬施設を囲

う埴輪列が存在した可能性がある。

また、断割調査で盛土の状態を確認した。墳頂部西側の地山は標高約106.2mで確認し、東側に比べて約2m低く、粘土槨の底面よりはわずかに高い。地山面は水平に削って整形し、直上にうすく整地土を置いて、その上に厚さ約0.05mの炭層が水平方向に広がることを

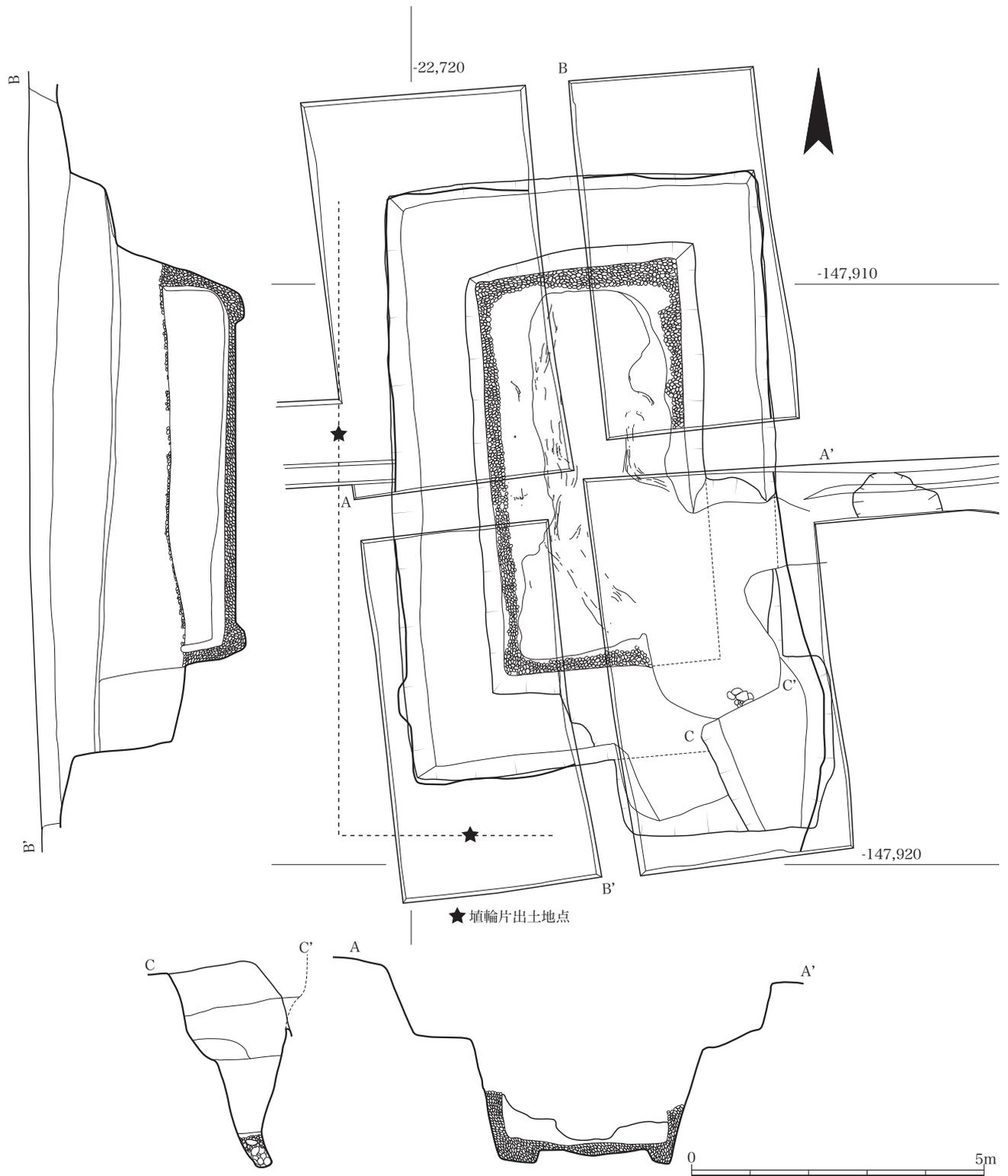
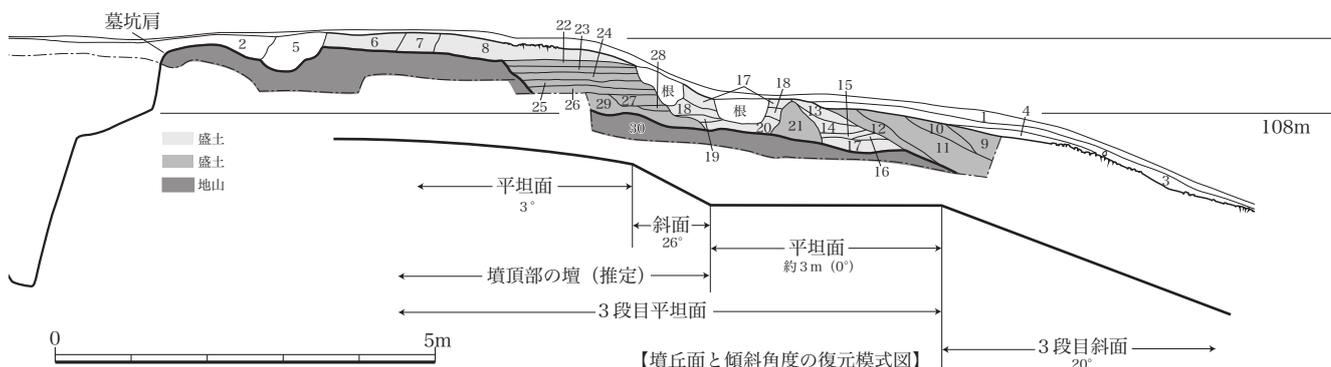
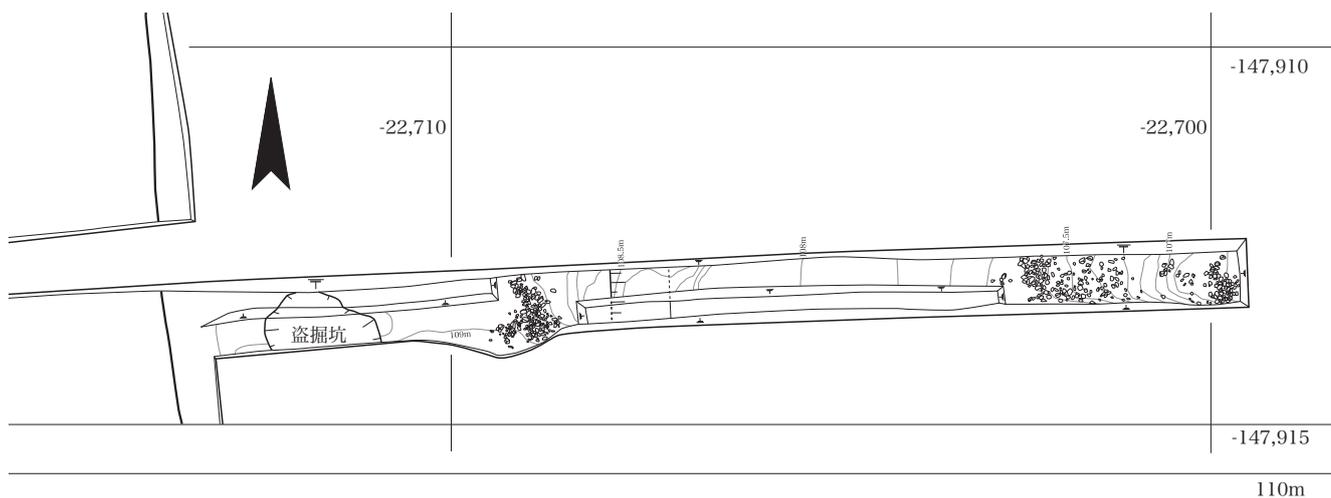


図17 A発掘区と1972年に検出した粘土槨SZ01 1/100



- | | | | |
|------------------------|----------------------|----------------------------|---------------|
| 1. 表土 | 9. 淡褐色砂質土、地山ブロック土含む | 17. 暗オリーブ褐色土 | 25. 黄褐色土 |
| 2. 黄褐色土 (旧発掘区埋土) | 10. 淡褐・黄褐色土混合土 | 18. 灰白土 | 26. 橙色土 |
| 3. 褐色土、白色ブロック土含む (盗掘坑) | 11. 淡褐色砂質土、地山ブロック土含む | 19. 暗オリーブ褐色土 | 27. 橙・灰褐色土混合土 |
| 4. 暗褐色土 | 12. 淡褐色砂質土、橙色ブロック土含む | 20. 暗オリーブ褐色・灰白土混合土 | 28. 橙色土 |
| 5. 淡褐色砂質土 | 13. 暗オリーブ褐色土 | 21. 暗オリーブ褐色・灰白土混合土 (土手状盛土) | 29. 黄褐色土 |
| 6. 灰褐色砂質土 (化粧土) | 14. 暗オリーブ褐色・灰白土混合土 | 22. 黄褐色土 | 30. 黄褐色土 (地山) |
| 7. 明灰褐色砂質土 (化粧土) | 15. 暗オリーブ褐色土 | 23. 黄褐色土 | |
| 8. 灰褐色砂質土 (化粧土) | 16. 灰白土 | 24. 黄褐・灰褐色土混合土 | |

図 18 A 発掘区東拡張区 平・断面図 1/100

確認した。盛土は墳頂中心部からおこなっている。盛土の最上層には厚さ約0.2mの化粧土を置き、墳頂部西側には全体として約3mの盛土をしていることがわかった。なお、墓坑はすでに発掘されているため、化粧土との重複関係は不明である。

以上、A 発掘区での成果をまとめると、地山は東側が高く西側が低い。そこでまず東側の地山を2段に削り出し、壇の基本形を整える。西側は東側の地山下段の高さ(標高約108m)まで盛土をする。この高さは概ね墓坑1段目の高さと一致する。次に、東側は地山上段の周囲に水平方向の盛土をして整形し、西側は3段目基盤構築盛土と同様の方法で盛土を行う。その上面に置く化粧土は概ね東西で厚さが揃う。墓坑との関係は不明であるが、化粧土上面に小礫敷を施すことや他の類例からみて、化粧土を施す前に埋葬を行い、最後に化粧土を置いたと考えられる(図20)。ただし、前方後円墳等にみる墳頂部の壇の多くは埋葬施設の上を覆う程度のものであり、今

回確認した壇が一般的な方形壇として理解できるかは墳頂部での追加調査を行い判断する必要がある。

B・E・M・Q 発掘区 (2・3・5次) これらの発掘区では、一部3段目斜面にかかる部分を調査した。

その結果、B 発掘区南西側(図21)では、3段目斜面に葺石がほとんど残存しないが、地山の傾斜変換(標高約101.5m)があり、そこを3段目裾と認定した。この付近にはやや大きめの石が散在しており、基底石が崩れたものと想定できる。斜面の傾斜角度は約22度である。

E 発掘区南西拡張部(図22)でも葺石や基底石は崩れて確認できなかったが、B 発掘区で確認した裾の延長上で傾斜変換(標高約101.6m)を確認した。斜面の傾斜角度は約22度である。

M 発掘区東端(図23)では3段目斜面の一部と裾の傾斜変換を確認した。葺石はほとんどが流出していたが、約0.4mの石材1点の位置が地山の傾斜変換点とほぼ一致し、原位置からさほど動いていない基底石とみられ、

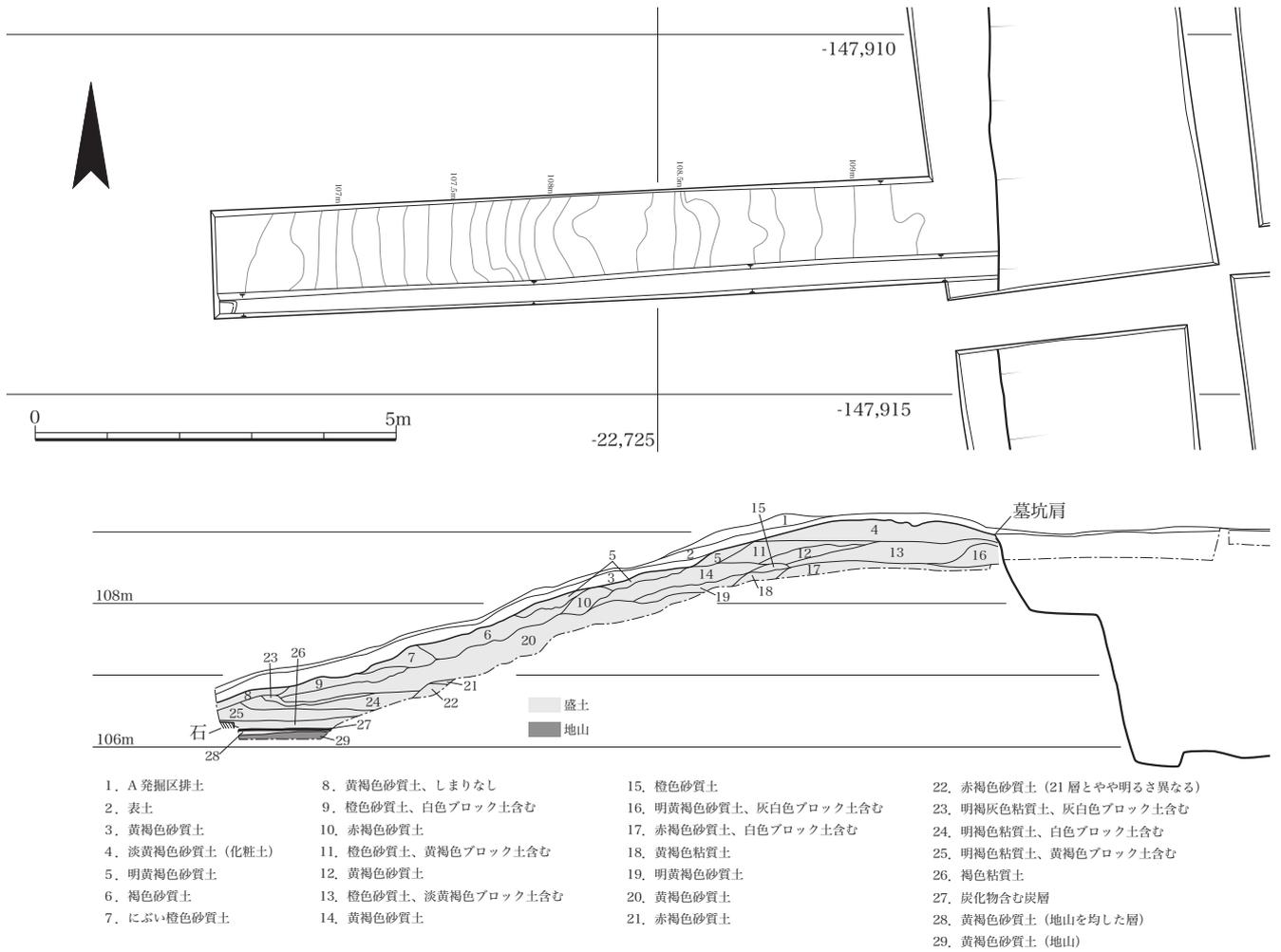


図19 A発掘区西拡張区 平・断面図 1/100

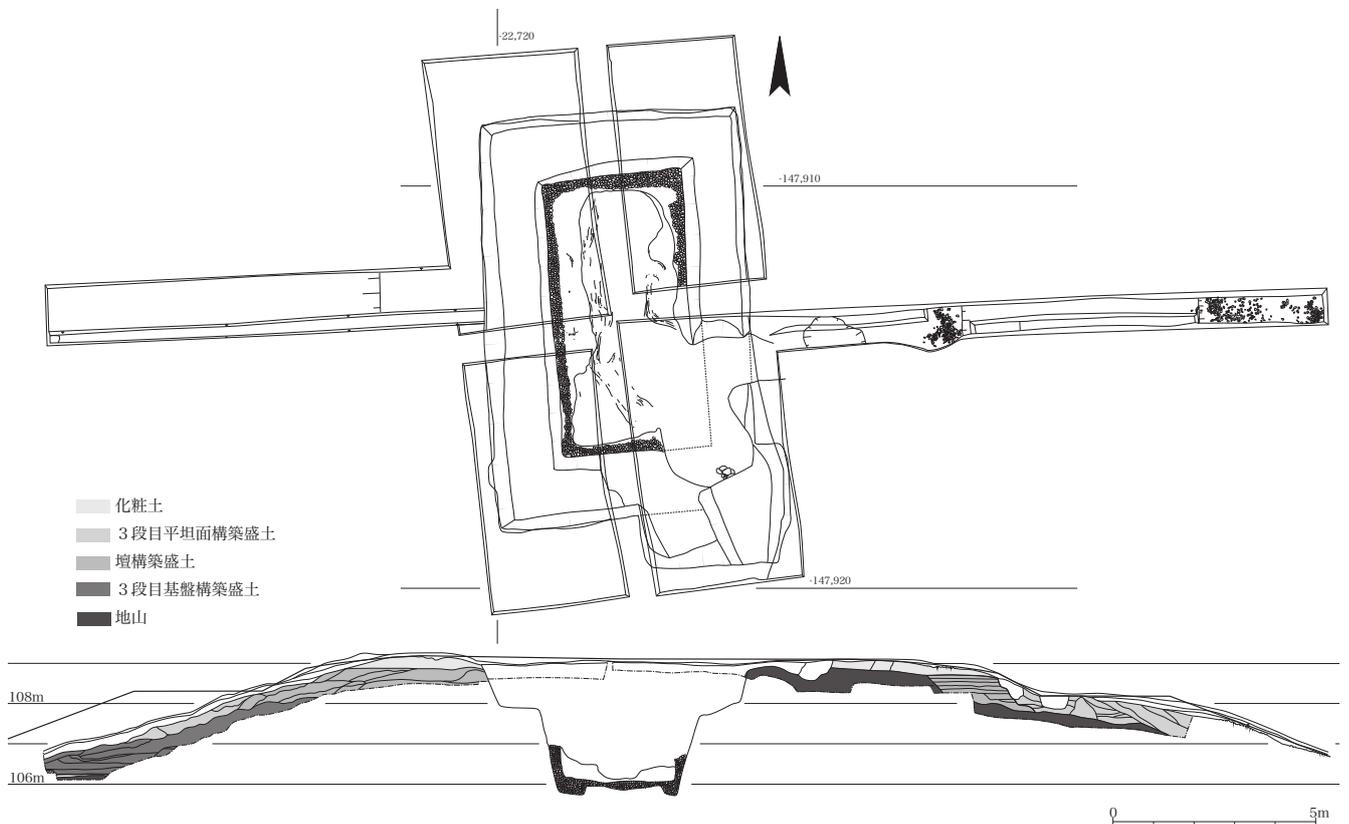


図20 A発掘区平・断面図 1/180

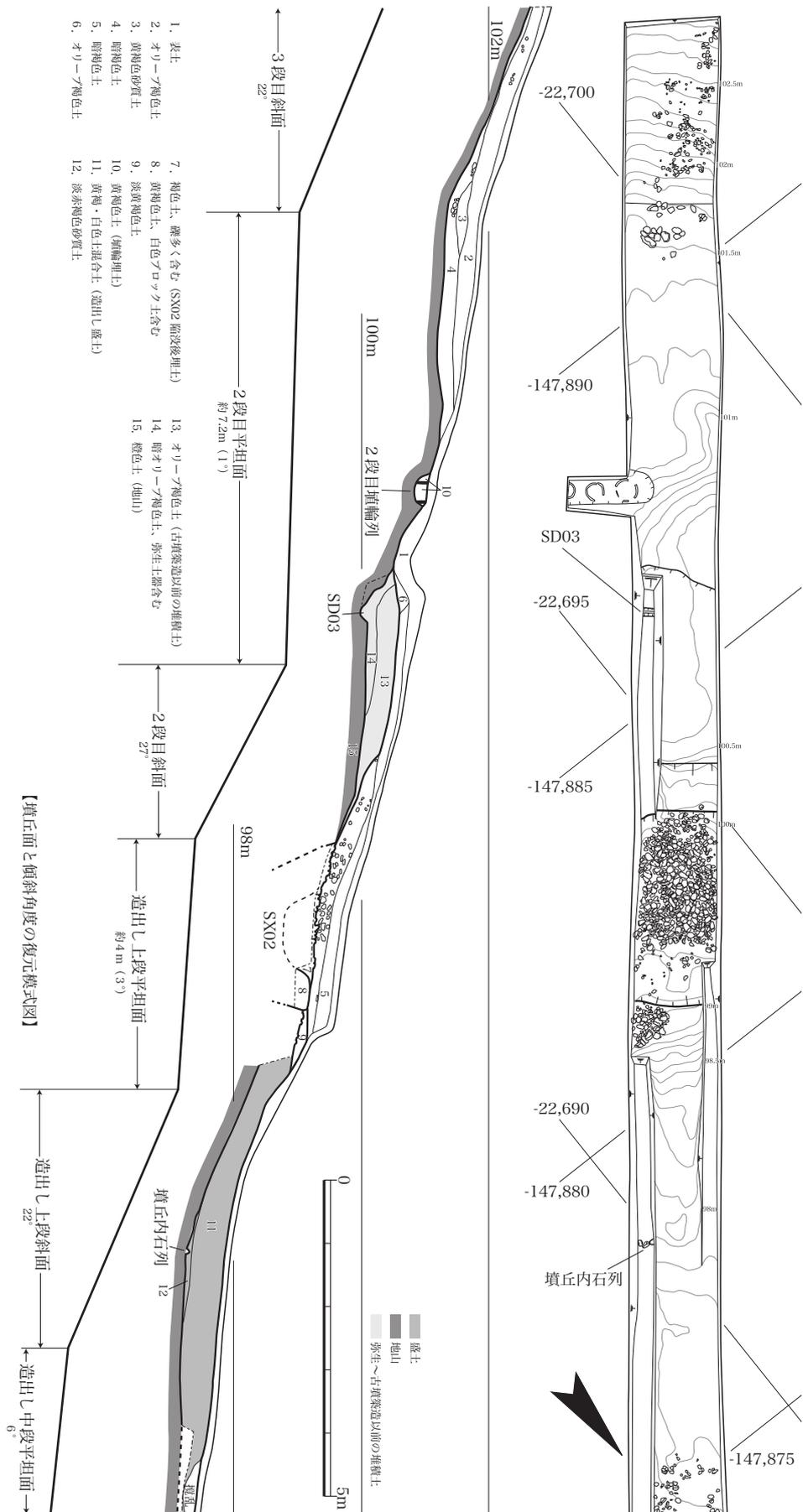


図 21 B 発掘区南西部 平・断面図 1/100

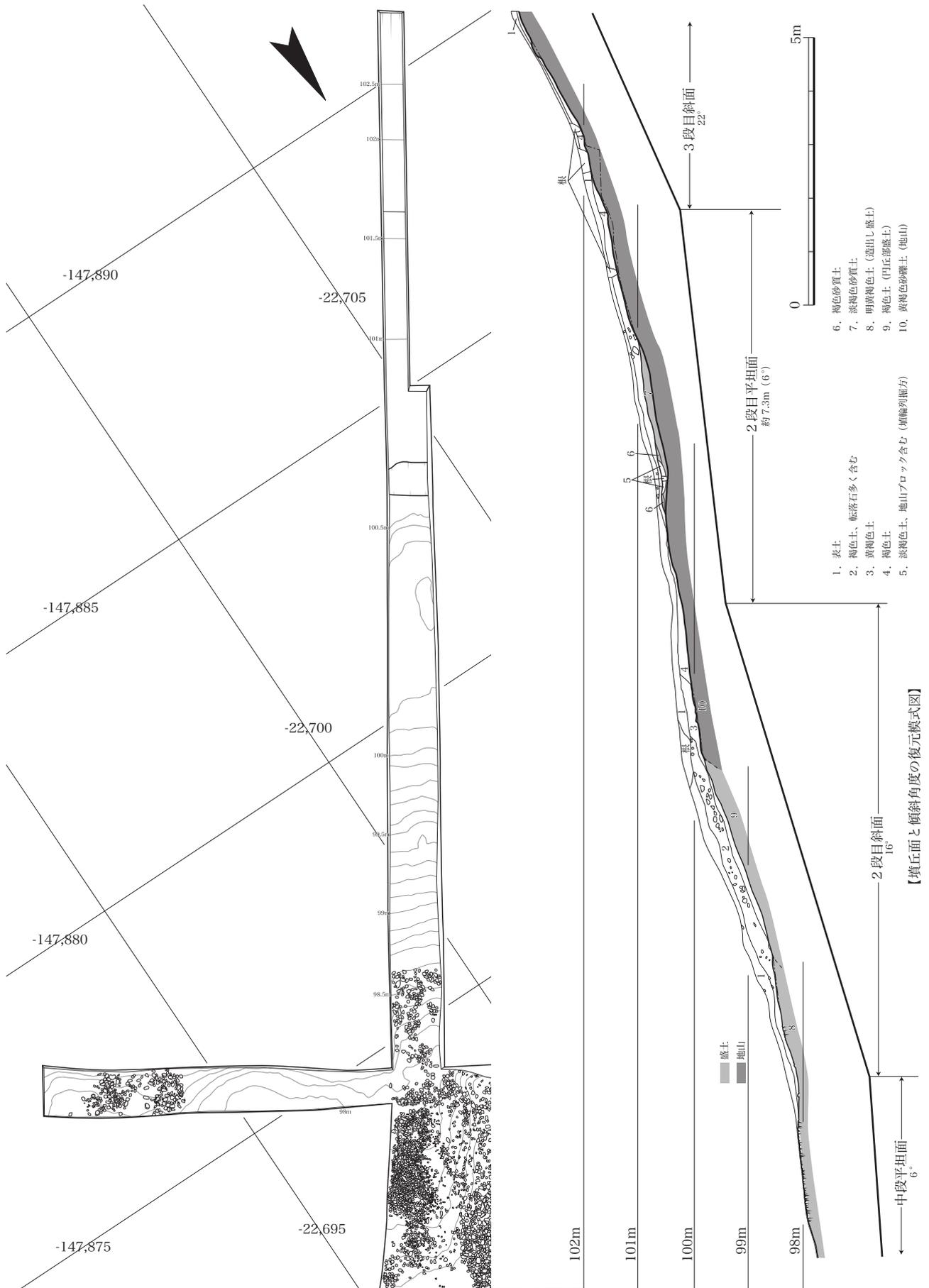


図 22 E 発掘区南西・南東拡張部 平・断面図 1/100

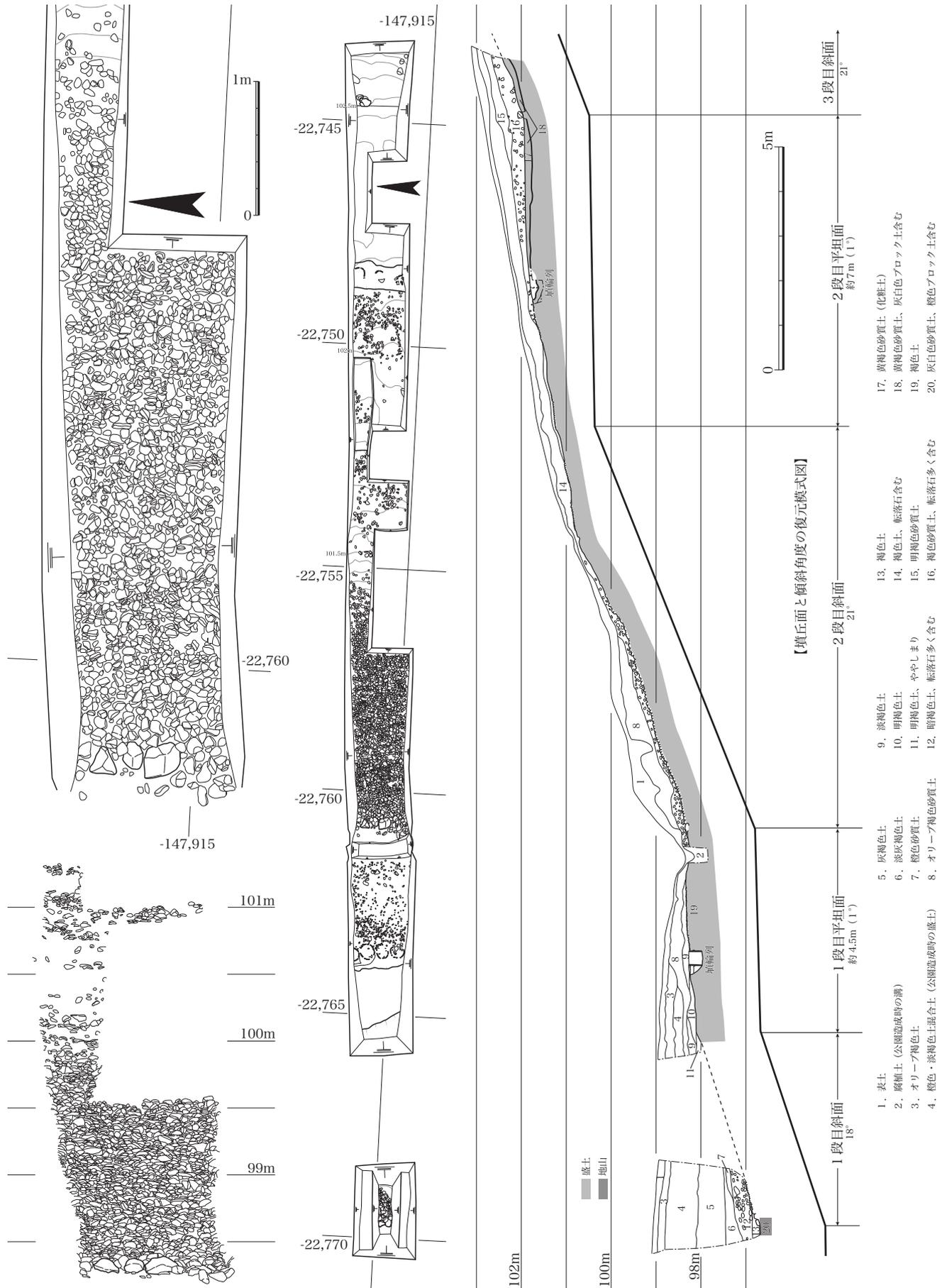


図 23 M・N・O 発掘区平・断面図 1/120、N 発掘区 2 段目斜面葺石平・立面図 1/40

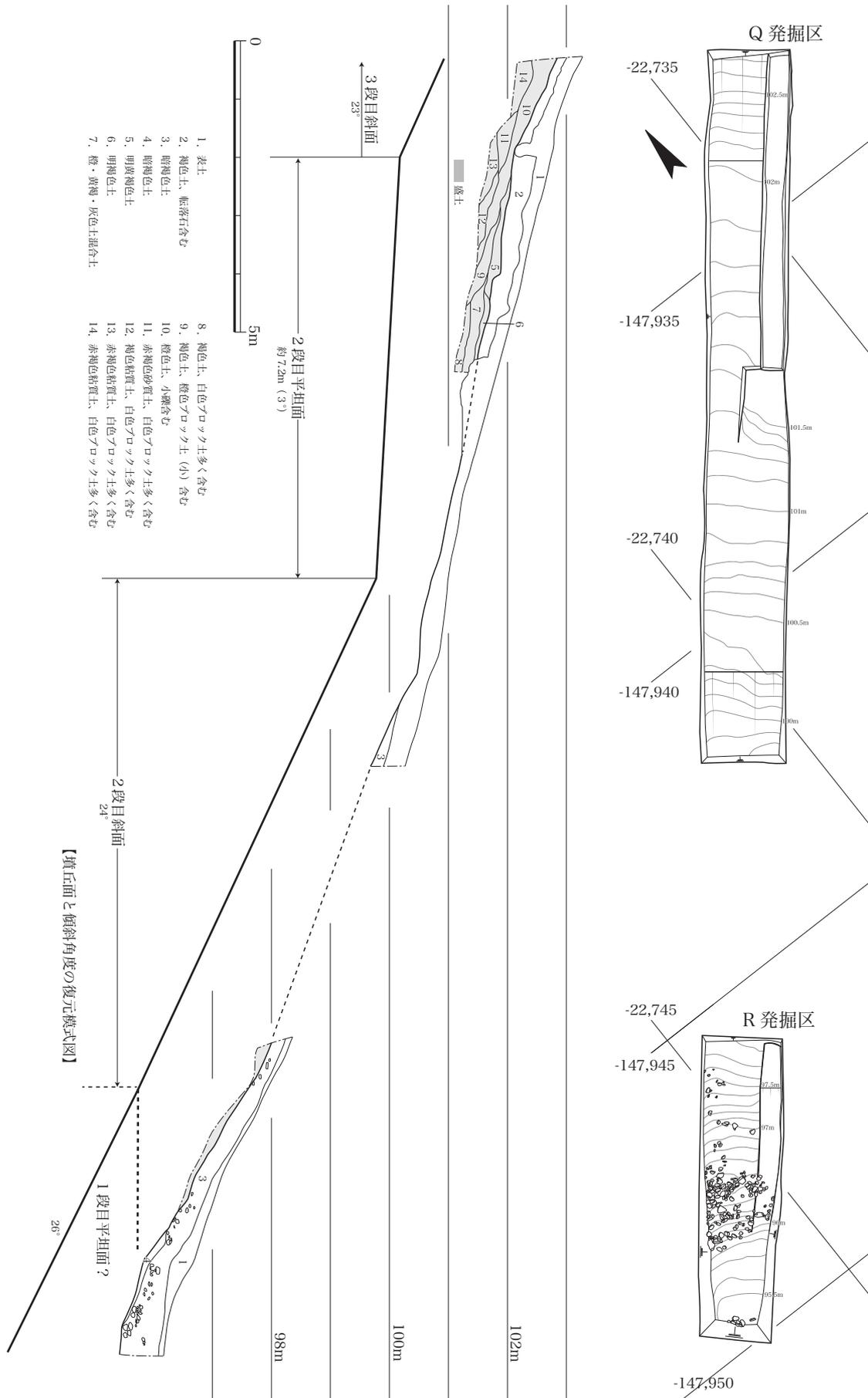


図24 Q・R発掘区 平・断面図 1/100

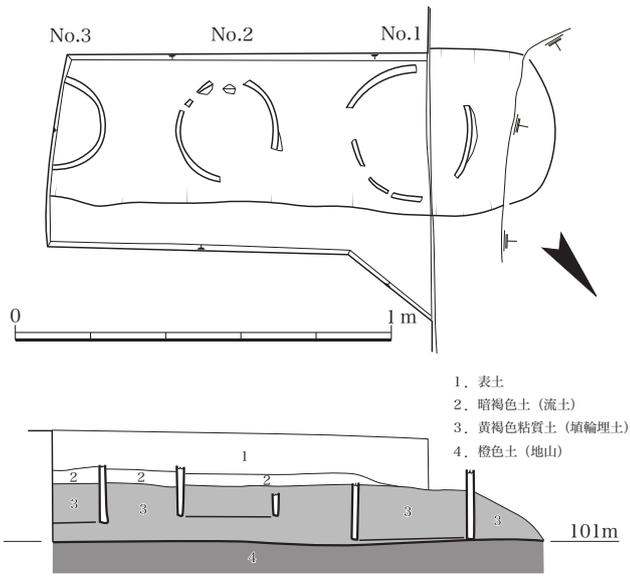


図 25 B 発掘区 2 段目植輪列平・断面図 1/20

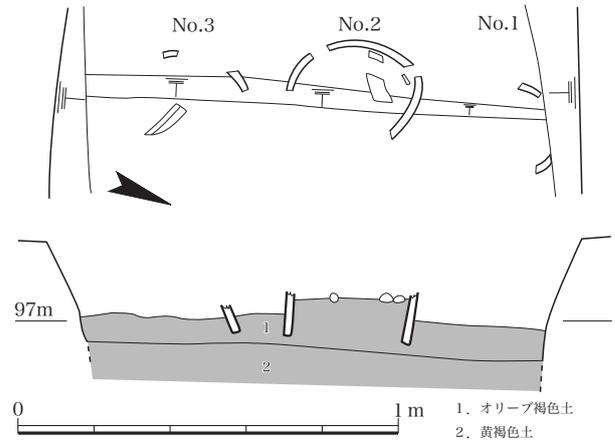


図 27 D 発掘区 1 段目植輪列平・断面図 1/20

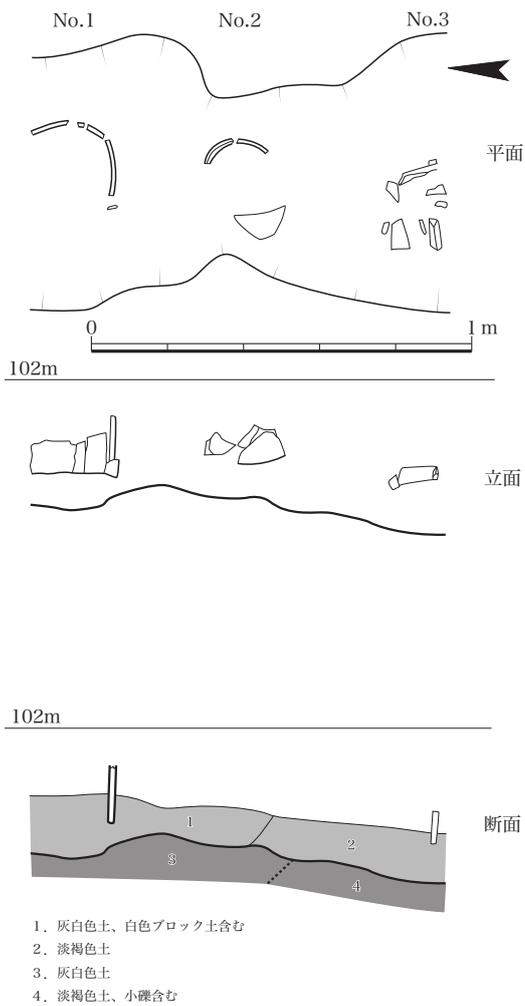


図 26 M 発掘区 2 段目植輪列平・立・断面図 1/20

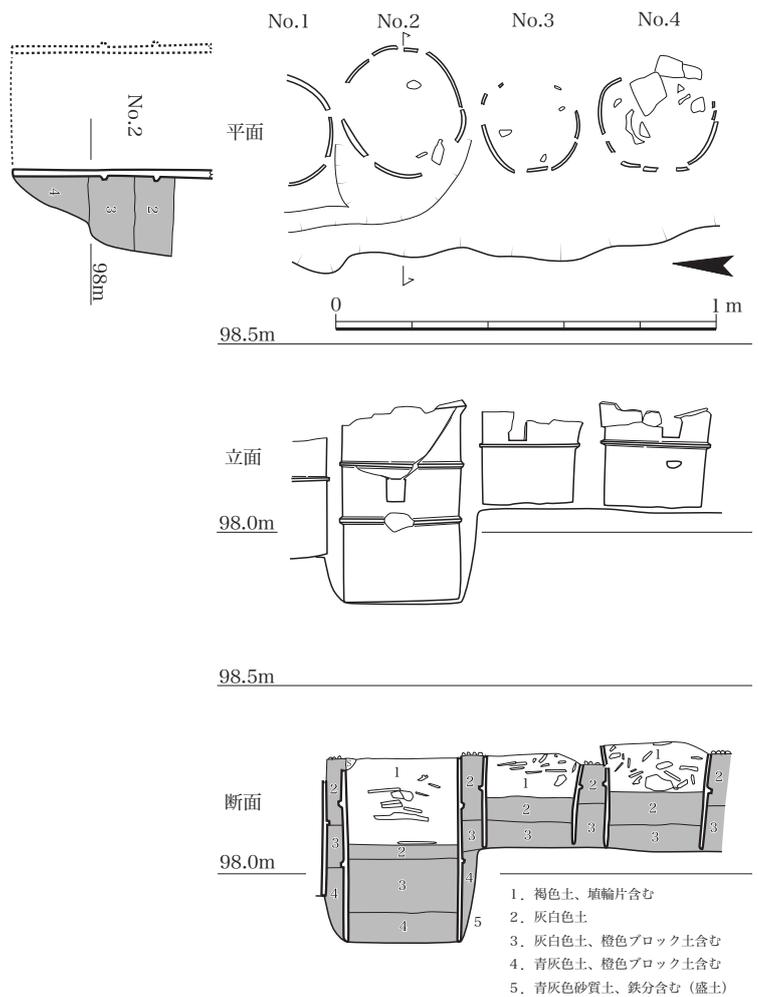


図 28 N 発掘区 1 段目植輪列平・立・断面図 1/20

その標高は約 102.0m である。3 段目斜面はわずかに検出ただけであるが傾斜角度は約 21 度である。

Q 発掘区 (図 24) でも 3 段目斜面の一部と裾の傾斜変換を確認した。葺石は流出するが傾斜変換する裾の標高は約 102.0m で、概ね M 発掘区と整合する。3 段目斜面の傾斜角度は約 23 度である。

II. 2 段目

B 発掘区 (第 2 次) B 発掘区南西側 (図 21) の一部で 2 段目の構造を確認した。

その結果、この部分に対応する 2 段目平坦面は、現況でも崩れているように残存状態が悪い。盛土が流れたた

めか、検出面の大部分が地山である。平坦面は復元幅約 7.2 m で、その中央やや外側寄りで円筒埴輪列 (図 25) を検出した。検出面の標高は約 101.2m である。ただし、埴丘が崩れたことで北西側は埴輪や掘方も消失している。埴輪列は地山に幅約 0.4m の布掘りをしてから据えており、検出した部分の底部は意図的に内外を埋めて固定する。埴輪の底部が約 0.2m 間隔をあけて設置されており、付近で出土する鱗付円筒埴輪の鱗部幅が約 0.1m であることから鱗付円筒埴輪列であった可能性が高い。

B 発掘区部分の 2 段目斜面には造出し上段が取りついているためこだけ距離が短く、復元される傾斜角度も約 27 度とやや急である。

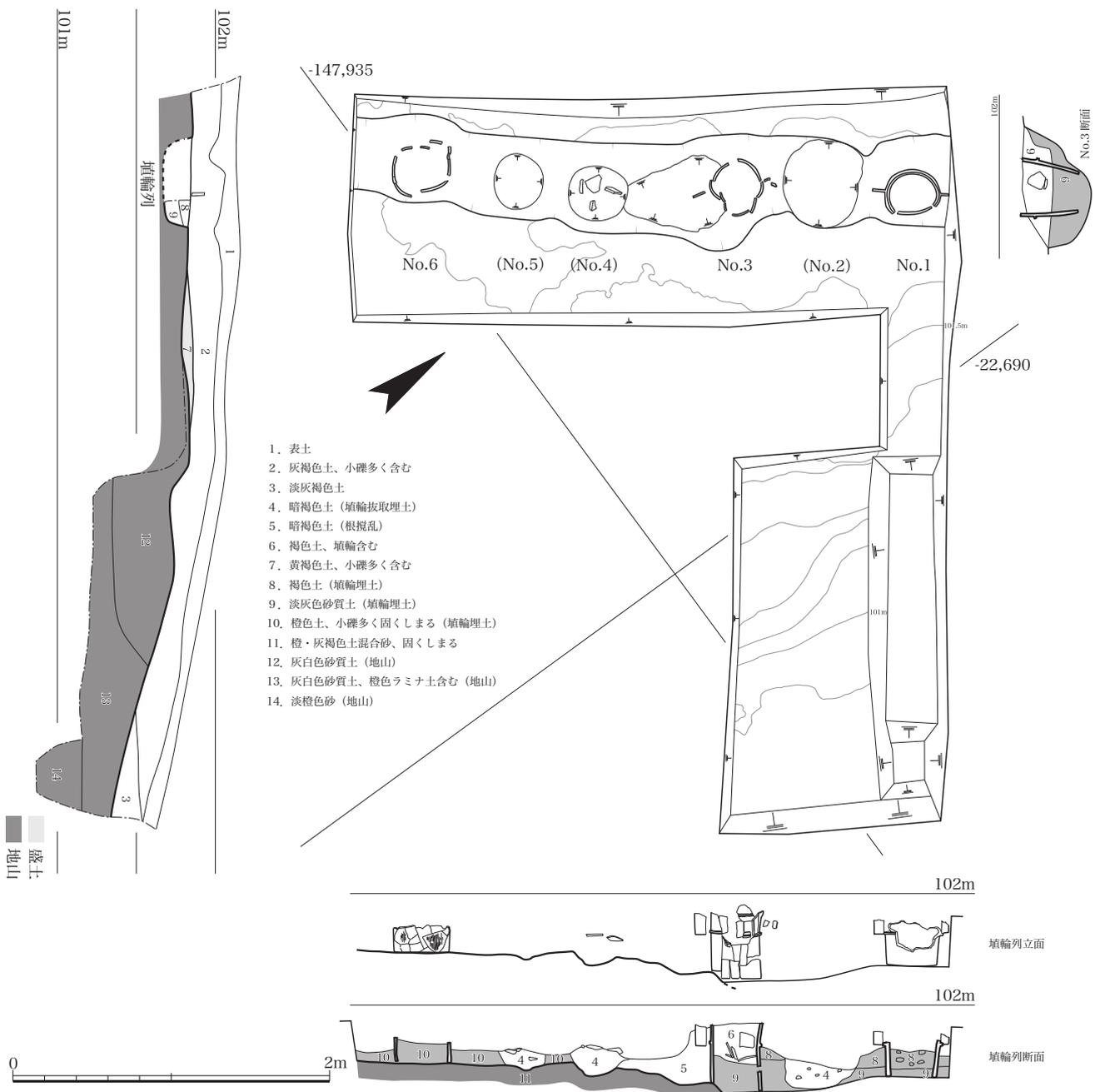


図 29 T 発掘区平・断面図、埴輪列立・断面図 1/40

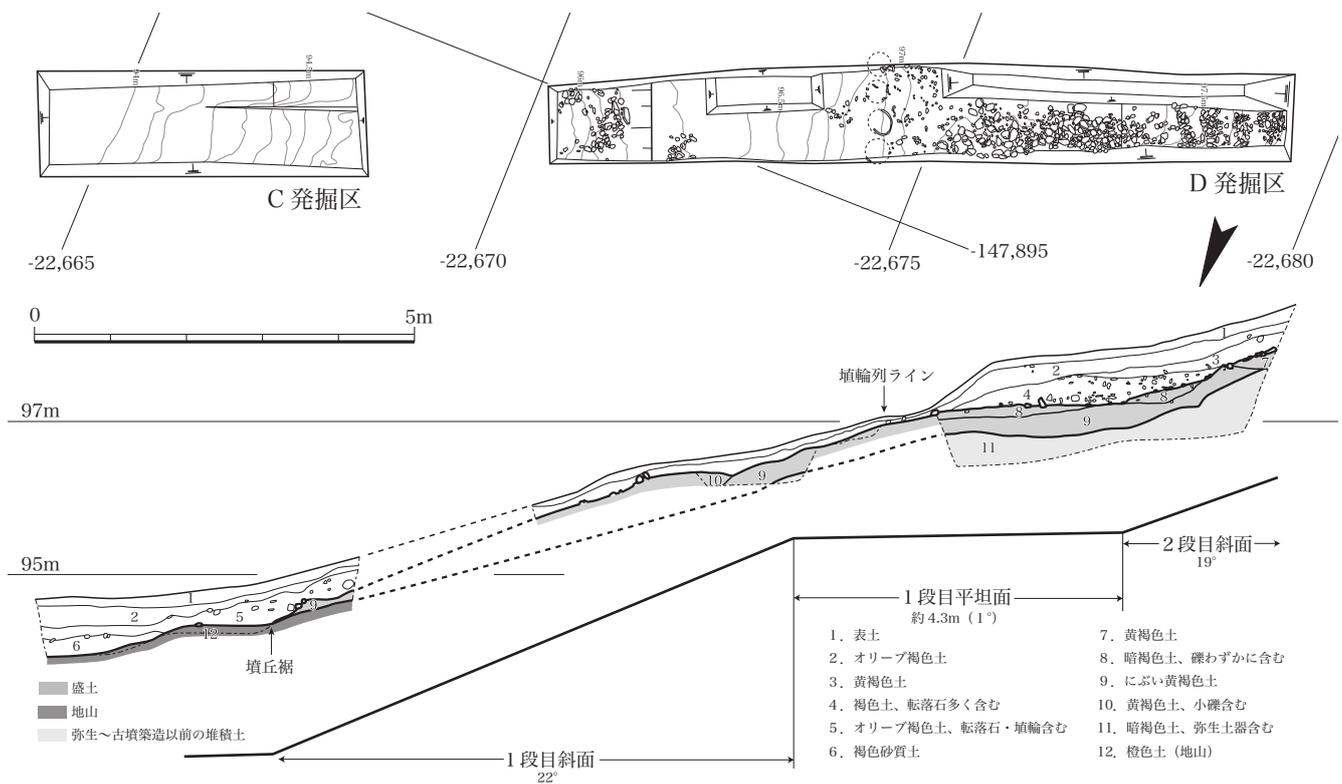


図30 C・D発掘区平・断面図 1/100

また、2段目墳輪列よりやや北東側では、地山上に弥生時代後期の土器を含む堆積層があり、この部分では地山をL字状に掘り込んで平坦面をつくりだしている。平坦面の端には地山を掘り込む溝SD03も確認できることから、弥生時代後期の竪穴建物が墳丘下に存在する可能性がある。後述するように、墳丘盛土下に弥生土器を含む堆積層が各所で認められることから、弥生時代の遺跡が下層に重複する可能性が高い。(村瀬)

M発掘区(第5次) 墳頂部埋葬施設の主軸に直交する発掘区(図23)で、円丘部西側の構造を確認するために設定した。

その結果、3段目裾から外側に約3.9mの位置で2段目墳輪列(標高約101.9m)を検出した。幅約0.4～0.7mの布掘り掘方内で3個体を確認したが、底部がわずかに残存するのみで状態は悪い(図26)。底部の間隔が約0.2mであることや、周辺に鱗部の破片が集中していたことから、鱗付円筒墳輪列であると考えられる。

墳輪列より外側は緩斜面となるが、2段目斜面との関係からみて崩れている可能性が高い。よって検出した小礫敷も動いた状態であるとみられる。2段目斜面の傾斜、および残存する2段目平坦面の傾斜を延長して復元すると、2段目平坦面の幅は約7mとなり、墳輪列はその中央やや外側寄りに位置することになる。

N発掘区(第5次) 1・2段目の構造を確認すること

を目的に設定した。なお、調査の過程でN発掘区は東側に拡張し、M発掘区と接続した(図23)。

その結果、ほぼ崩れずに残存する2段目斜面の葺石を検出した。傾斜角度は約22度である。約0.1mの石材をやや乱雑に葺いており、明瞭な目地は確認できない。基底石には約0.3mの石材を用い、その標高は約98.3mである。検出した基底石はいずれも小口を外側に向けて置かれ、発掘区南端では基底石が流出する。この付近の転落石中から蓋形墳輪笠部の破片が集中して出土した。(柴原)

Q・R発掘区(第5次) 円丘部南西側の主軸上に、1・2段目の構造を確認するために設定した(図24)。

その結果、Q発掘区では3段目裾(標高約102.0m)を確認した。2段目斜面の上端想定付近で傾斜変換点(標高約100.4m)を確認したが、その間を2段目平坦面とすると、幅約9.0mとなる上に約9度の傾斜がつく。墳輪列や葺石等が確認できないことから、盛土が大きく崩れている可能性が高い。

R発掘区では、表土下に墳輪片や転落石を含む暗褐色土の流土層があり、その直下で盛土を確認した。ただし明確な2段目斜面裾が検出されず、円丘部西側で確認した2段目裾に相当する標高(約98m)付近からさらに傾斜が急になる(傾斜角約26度)。通常、墳丘裾が崖面に直接接続するような構造は考え難い。また、旧地形

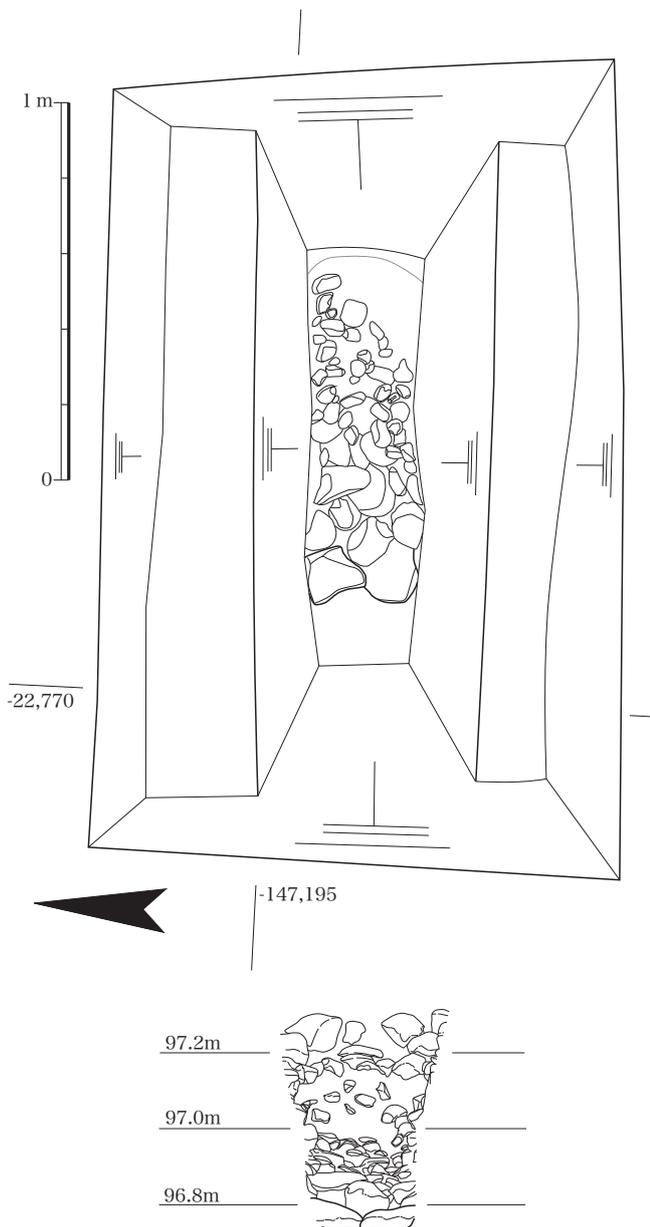


図31 O発掘区1段目斜面葺石平・立面図 1/20

では谷に向かってのことからも、1段目平坦面以下の盛土が崩れている可能性が高い。

これらをもとに構造を復元すると、2段目平坦面は幅約7.2m、2段目斜面の傾斜は約24度で平面幅約8.7mとなり、概ね他の成果とも整合的である。(山口等悟)

T発掘区(第5次) 主軸から南東側へ90度ふった位置で2段目の構造を確認するために設定した(図29)。

その結果、2段目埴輪列(標高約101.8m)を確認した。ただし、埴輪列より外側の平坦面は盛土が崩れて地山が露出する。検出状態では埴輪列の外側約2mで傾斜変換しているようにみえるが、U発掘区で検出した2段目斜面の角度と合わず、崩れていると判断できる。埴輪列の位置は概ね同一円周上で一致することから、平坦面の幅も他の発掘区と同様であったと考えられる。

6個体分の埴輪配列痕跡を確認したが、そのうち3個体は抜き取られていた。『富雄村史』には富雄丸山古墳の南側中腹に埴輪が露出していることや、底部の個体2点の写りが掲載されており、かつてこの周辺で埴輪が抜き取られた可能性があることと合致する。埴輪列のうち2個体は鱗が残存した状態で検出した。このことから、第2次調査以降想定していた2段目埴輪列が鱗付円筒埴輪を配列したものであることが明らかとなった。

埴輪列は盛土上面から幅約0.6mの布掘りをし、埴輪の内外を概ね第1段突帯まで埋めて固定する。埴輪の据え付けレベルは概ね一致するが、底部高の規格が他よりやや大きいNo.3の個体はやや深く掘り込んで設置されている。したがって、基本的には口縁部の高さを揃えることを意識して樹立されたものとみられる。

III. 1段目

C発掘区(第2次) 墳丘裾の確認を目的に発掘区を設定した(図30)。

その結果、表土下に転落石を含むオリーブ褐色土の流土が堆積し、その下にわずかに黄褐色粘質土の盛土を確認した。盛土下は橙色砂礫土の地山が削り出されており、1段目斜面の傾斜(約22度)が屈曲して水平となる部分で盛土もみられなくなる。盛土直上面で葺石は残存しておらず、基底石も確認できなかったが、この傾斜変換点(標高約94.1m)が墳丘裾である可能性が高いと判断した。その後の第4次調査において、造出しとの接続箇所でも基底石列を検出し、位置関係からみてこの判断が妥当であることを確認した。裾から約1.4mの平坦面があり、その先は地形に沿って下降する。

D発掘区(第2次) 1段目平坦面付近の墳丘構造を確認することを目的に発掘区を設定した(図30)。

その結果、表土掘削後オリーブ褐色土、転落石を多く含む褐色土の流土があり、それを除去して墳丘面を確認した。墳丘面を一部断ち割りすると、弥生時代後期の遺物包含層があり、これを成形した後、黄褐色土の盛土を行う。

前後斜面の傾斜やその変換点から復元すると、平坦面は幅約4.3mとなる。その中央やや外側寄りで円筒埴輪列(標高約97.1m)を確認した。埴輪列の設置方法は、該当箇所が崩れており、埴輪もほとんど残存しない状態であったため、掘方の有無を確認できなかった。後述するように、H発掘区ではこの埴輪列に続く部分で掘方を確認できたため、同様の設置方法が想定できる。平坦面には拳大の礫および0.02m前後の小礫を検出したが、転落してきたものと当初より施されていたものとの判別

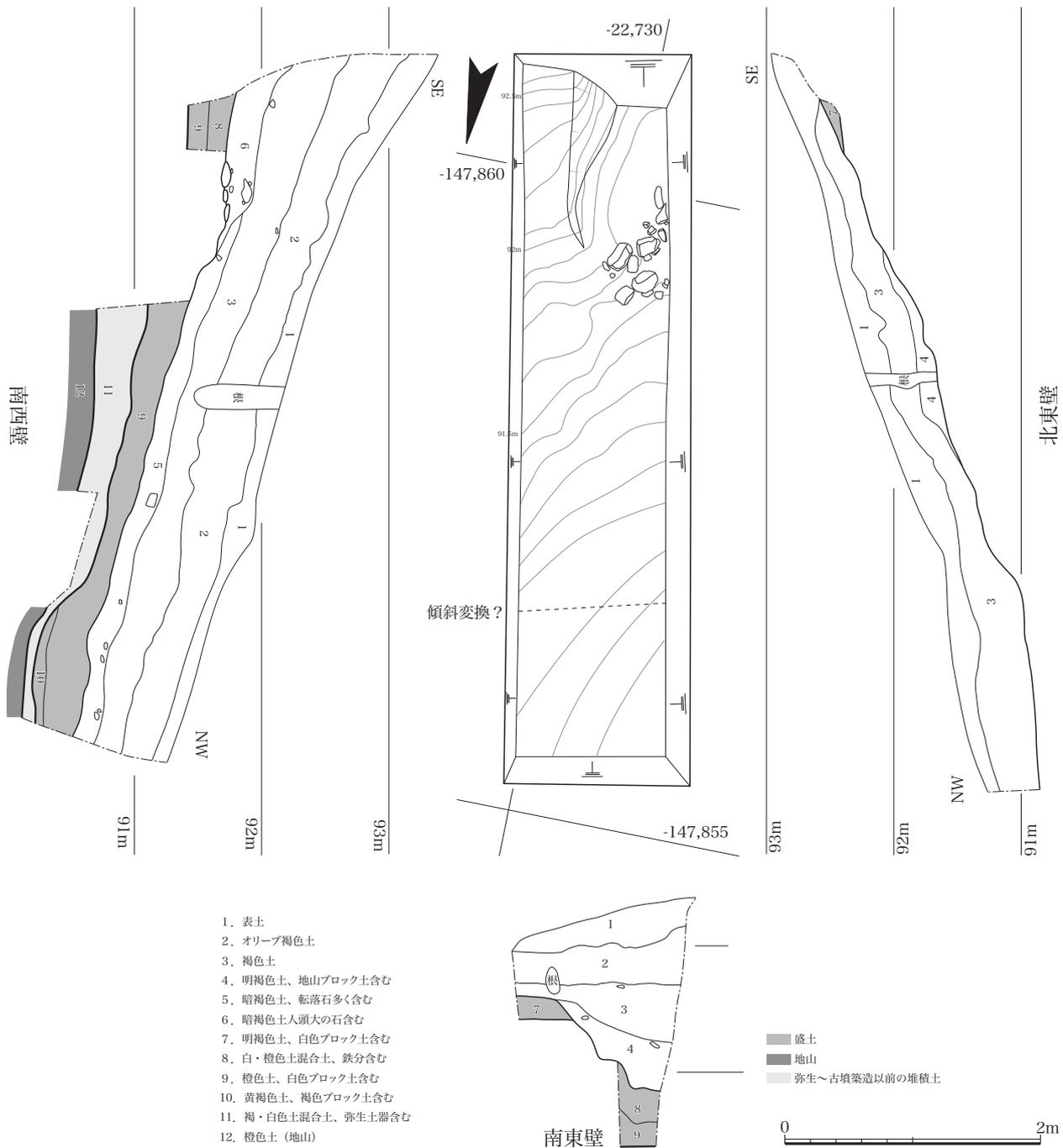


図 32 S 発掘区平・断面図 1/50

が困難であった。前後の 1・2 段目斜面部分には、わずかに葺石が残存する。

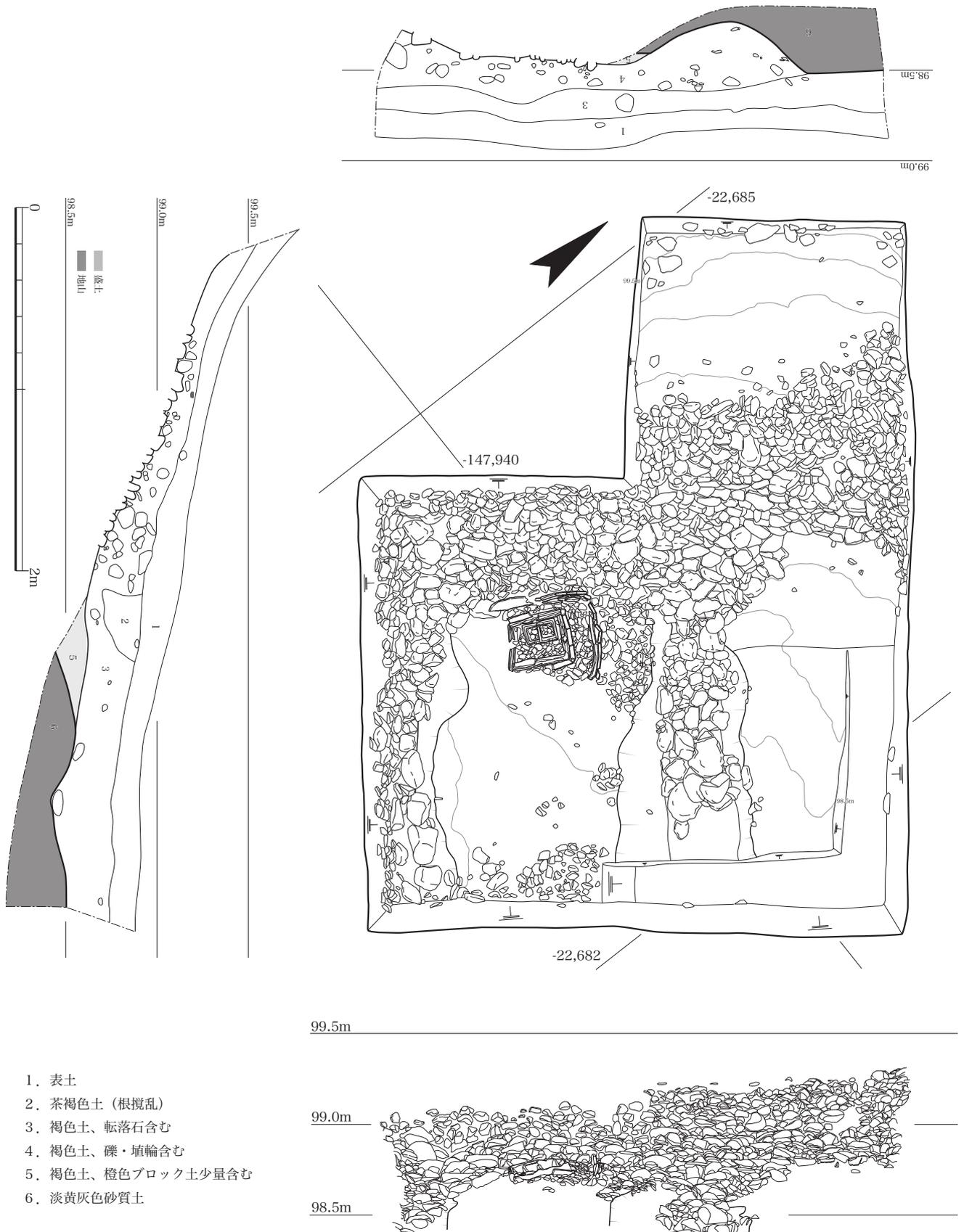
2 段目斜面の裾付近が一部発掘区にかかっているが、基底石が流出しており、盛土の傾斜変換点（標高約 97.2m）でその位置を判断した。2 段目斜面の傾斜角度は約 19 度である。（村瀬）

N・O 発掘区（第 5 次） 墳頂部埋葬施設の主軸に直交する発掘区で、M 発掘区の延長上に 1・2 段目の構造を確認するために設定した（図 23）。

その結果、2 段目基底石列の外側約 0.4m には丸山第

1 号緑地を整備する際に掘削されたとみられる排水溝があり、1 段目平坦面が一部壊されていたが、それ以外は良好に残存することを確認した。

1 段目平坦面の幅は約 4.5m で、2 段目裾から約 2.8m 外側の位置に円筒埴輪列（図 28）がめぐる。埴輪は布掘りを行い設置しているが、規格の大きい個体 No. 1・2 は、さらに壺掘りして設置面の高さを調整している。No. 1 は第 2 段突帯まで、No. 2 は第 3 段突帯まで、No. 3・4 は 2 段目の途中までを埋めて固定している。いずれも普通円筒埴輪で、互いに接するほど密に設置す



- 1. 表土
- 2. 茶褐色土 (根攪乱)
- 3. 褐色土、転落石含む
- 4. 褐色土、礫・埴輪含む
- 5. 褐色土、橙色ブロック土少量含む
- 6. 淡黄灰色砂質土

図33 U発掘区平・断・立面図 1/30

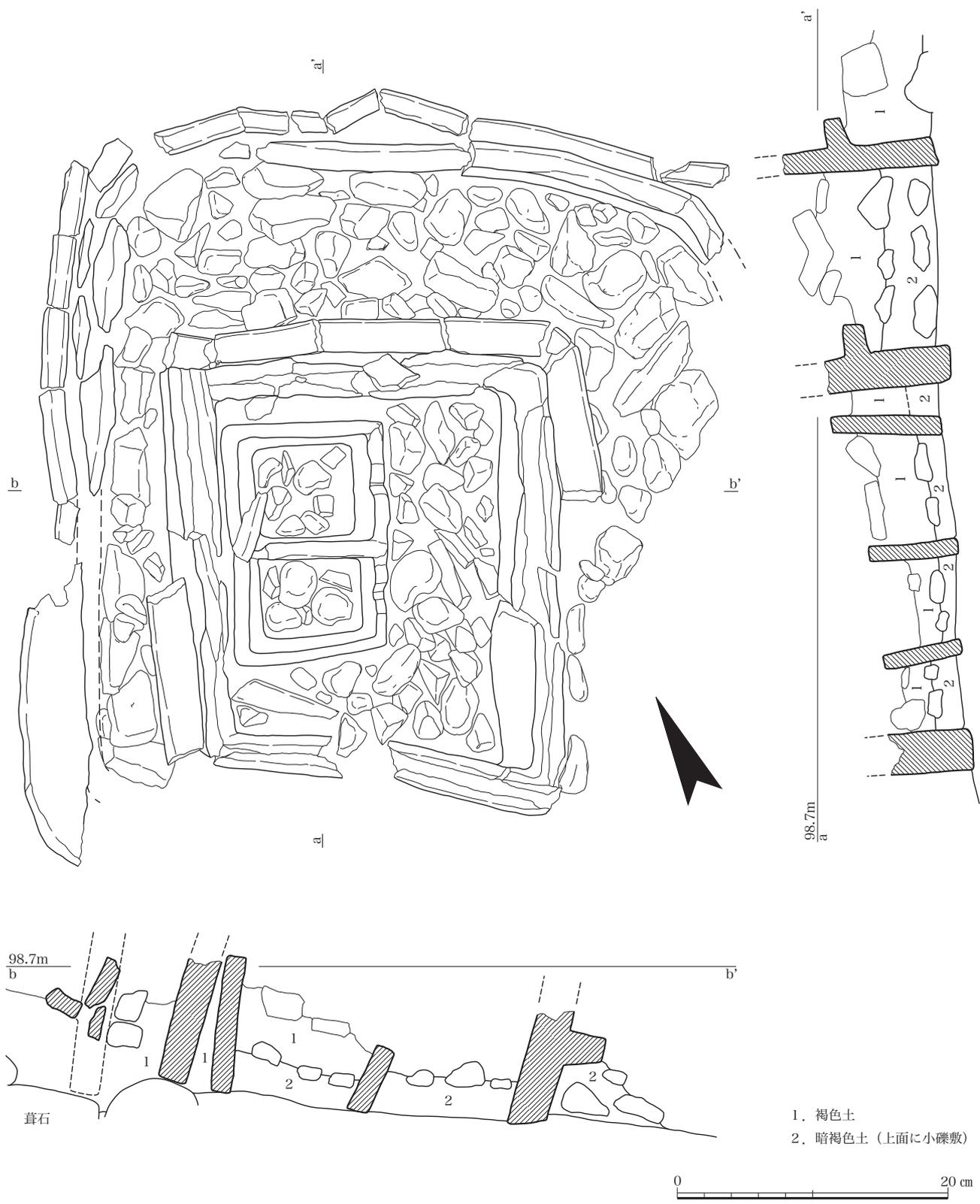


图 34 U 発掘区 湧水施設形埴輪平・断面図 1 / 4

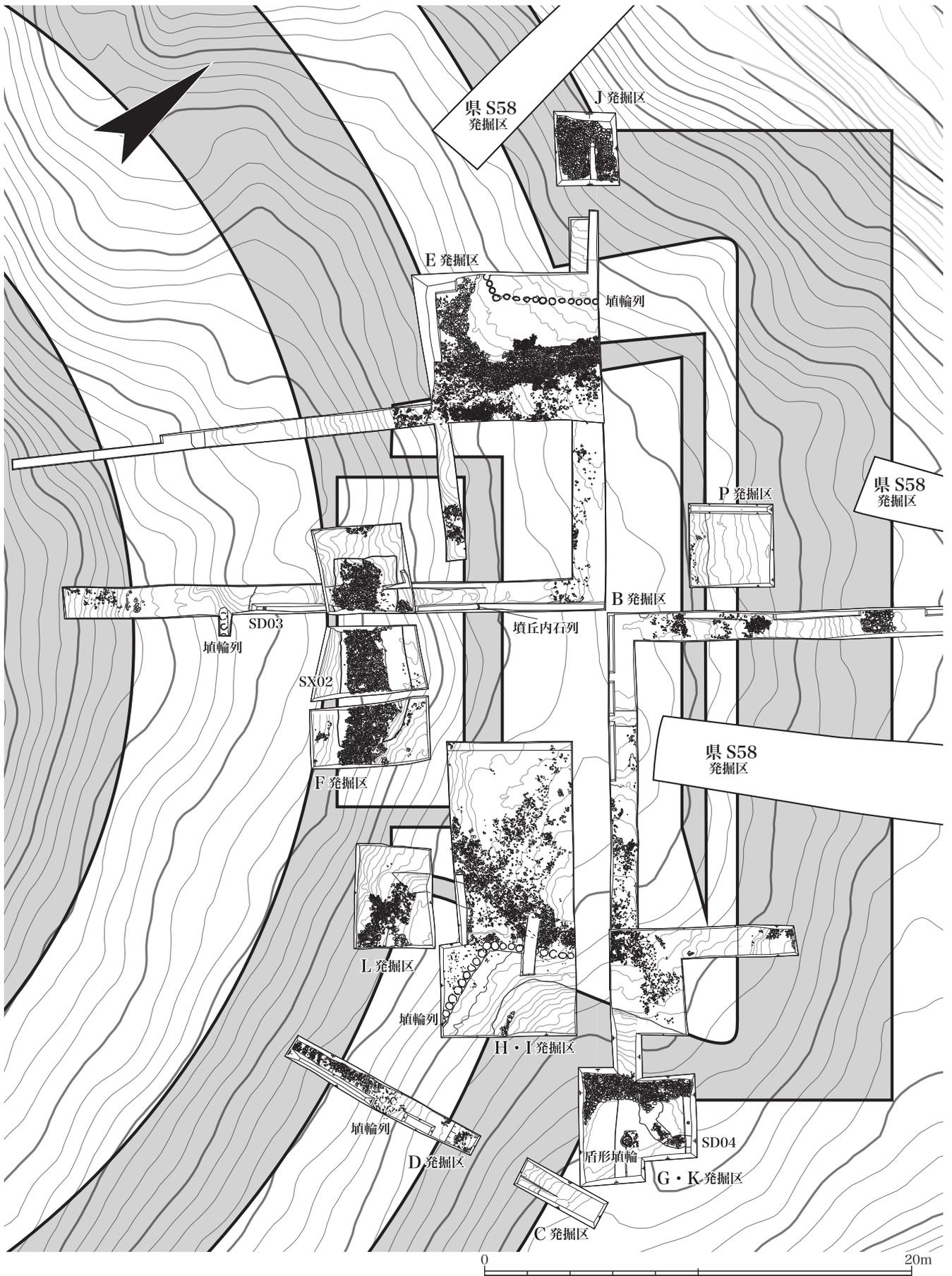


図 35 造出し全体平面図 1/250

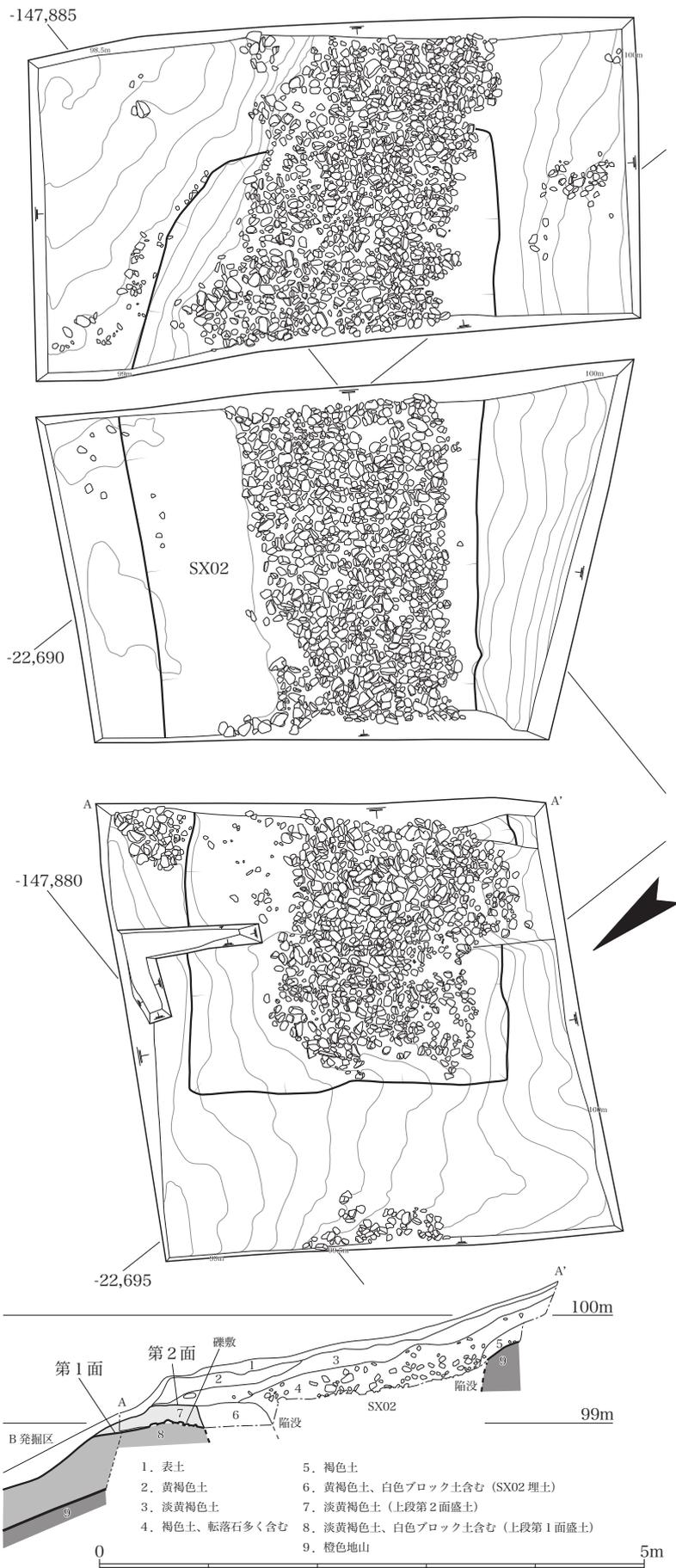


図 36 F 発掘区平・断面図 1/60

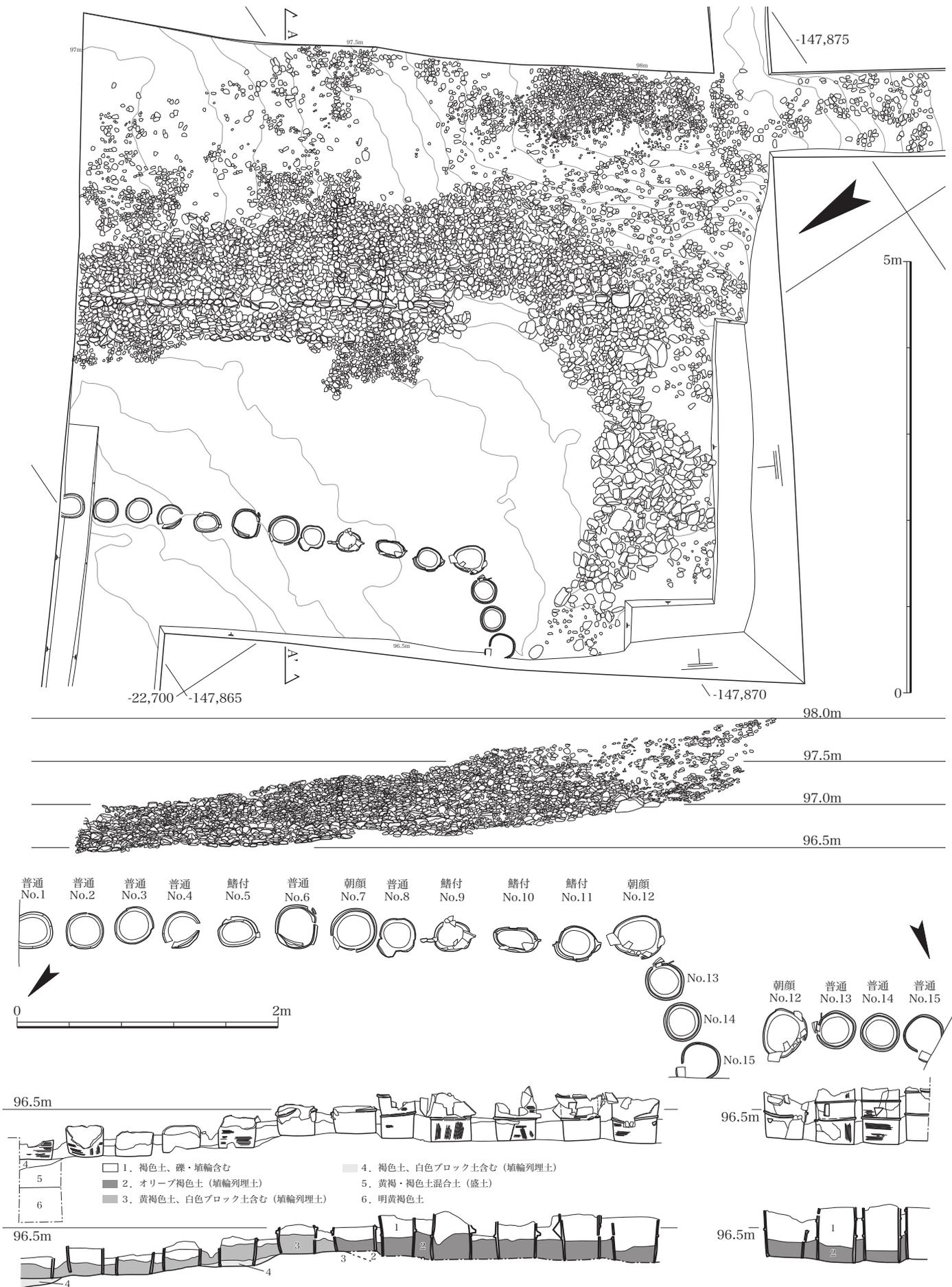


図37 E 発掘区平面図・葺石立面図 1/60、埴輪列平・立・断面図 1/40

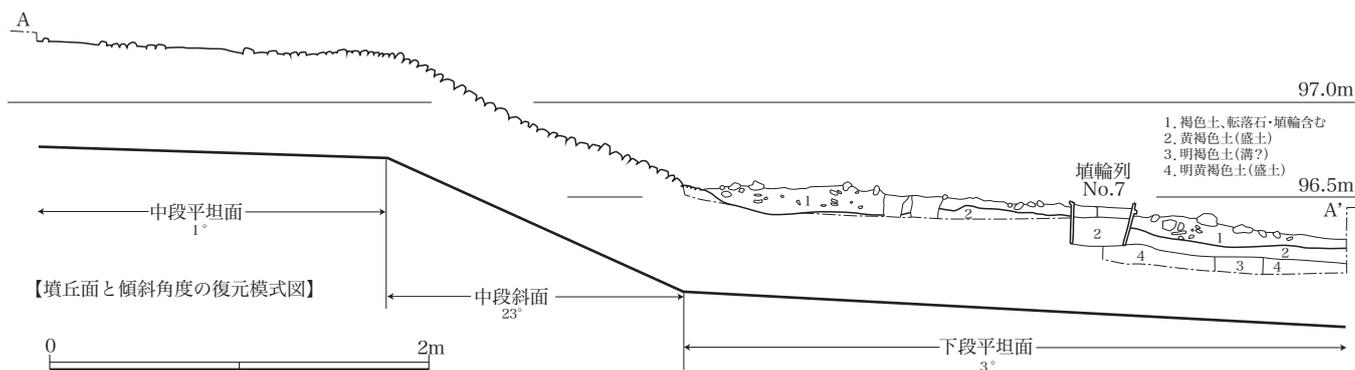


図 38 E 発掘区 A-A' 間断面図 1/40

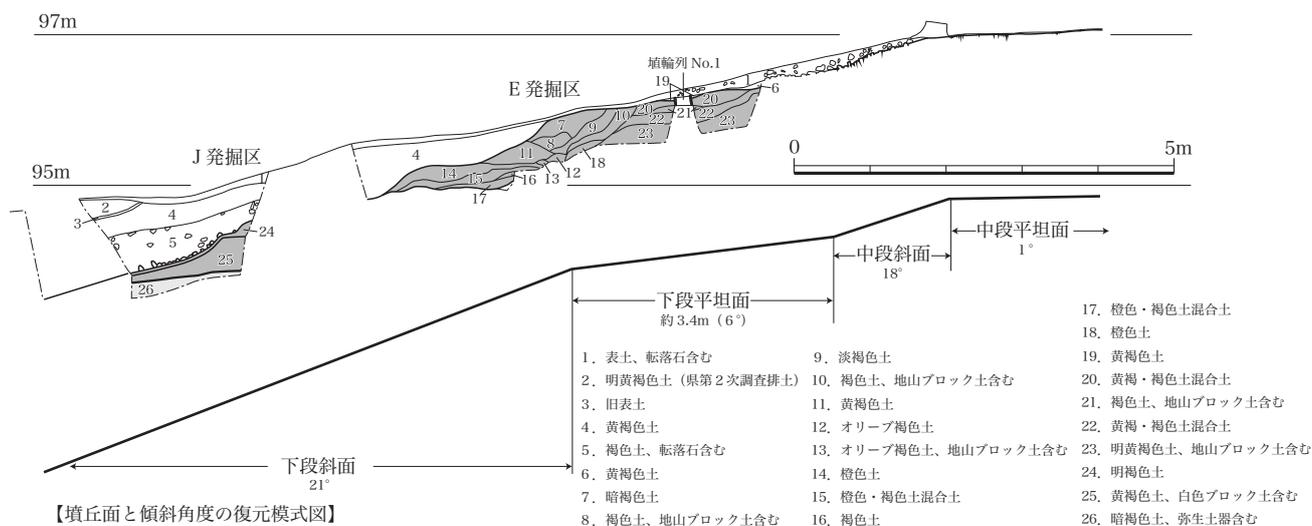


図 39 E・J 発掘区北東壁断面図 1/100

る。小礫敷は植輪列より内側だけで検出したが、外側は施していないのか流出したのか不明確である。

O 発掘区では表土下で淡褐色土と黄褐色土が厚さ約 1.7m 互層になる層を確認した。旧地形図の標高に比べて約 1.5m 現地形が高くなっていることから、丸山第 1 号緑地を造成した際の造成土と考えられる。その下に約 1.1m の植輪片や転落石を含む流土層があり、その直下で 1 段目斜面の葺石を検出した。基底石は約 0.2m の石材で、2 石分を確認した。墳丘裾の標高は 96.7m、1 段目斜面の傾斜角度は約 18 度である。(柴原)

S 発掘区 (第 5 次) 墳丘裾を確認するために設定した (図 32)。

その結果、地山上に弥生時代後期の土器を含む堆積層があり、その直上で盛土を確認した。しかし、発掘区の約半分で盛土が大きく崩れており、葺石等も残存しないため墳丘裾は確定できない。標高 91m 付近が概ね復元される裾の位置であるが、ほかで検出している墳丘裾より標高が 3m 以上低いいため判断が困難である。斜面の傾斜角度

は約 22 度である。盛土はさらに外側へと続いており、墳丘裾の外側にまで盛土をしている可能性が高い。(村瀬)

U 発掘区 (第 5 次) 2 段目の裾および 1 段目平坦面の残存状態を確認することを目的とし、南東側にの軸と直交する位置に設定した (図 33)。

その結果、2 段目斜面の一部を検出したほか、2 段目裾から 2 条の溝がのびて 1 段目平坦面を区画した施設と、その区画内部で湧水施設形植輪を検出した。

2 段目斜面は、標高 98.8m ~ 99.3m の間で良好に葺石が残存した。斜面は傾斜角度が約 26 度であるが、明確な基底石は確認できず、裾付近にやや大きめの石材が散在的に用いられている。葺石石材は径 0.1 ~ 0.3m である。積み方は小口積みが主体で、石材が小型のために目地は明瞭でないが、全体的に横目地が意識されている。また、区画施設から北西方向にやや大型の石材をななめに配置しており、発掘区の西側になんらかの遺構が広がる可能性がある。

1 段目平坦面は地山を削り出して整形しているが、標



図40 I・L発掘区平面図 1/60

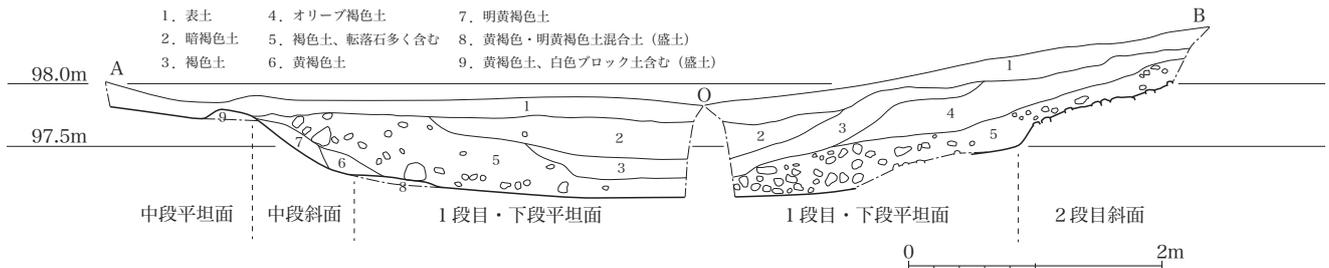


図 41 L 発掘区 AO・BO 間断面図 1/60

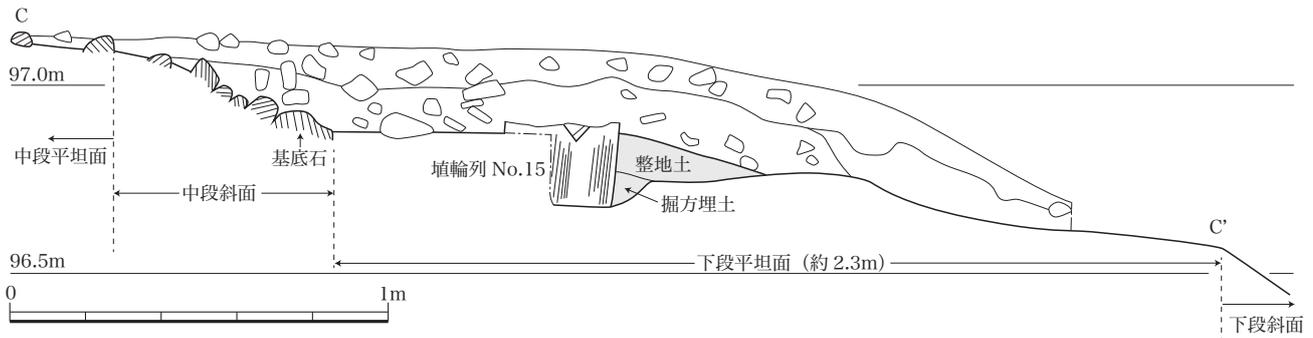


図 42 H 発掘区 C-C' 間断面図 1/20

高約 98.5m 以上の斜面部には褐色土の盛土が施されている。区画施設の内部は、地山上面に若干の盛土を行う。北東側の平坦面の標高は約 98.5m、区画内部上面の標高は 98.4m であり、区画内部上面のほうが若干低い。

区画施設は 1 段目平坦面を 2 条の溝で区画しており、内部は上端で幅約 1.1m、長さ 1.8m 以上である。北東側の溝は最大幅約 0.8m、深さ約 0.3m で、南西側の溝は発掘区外に広がり規模が不明である。いずれも南東側の発掘区外へ向かってのびる。溝内には 2 段目斜面から連続した葺石が認められ、これらは一連の構造物として理解できる。区画内部の上面には小礫敷が一部残存する。区画溝内の石材は、一部が 2 段目斜面の葺石と噛み合っているほか、溝内端部の石材にはやや大型のものが使用されている。また、北東側の溝内からは土師器のミニチュア高杯 2 個体の破片が出土した。

区画施設がとりつく 2 段目裾からは、湧水施設形埴輪が出土した (図 34)。隅丸長方形を呈する圀形埴輪の内部に家形埴輪が配置されており、家形埴輪の内部にはさらに 2 つの方形槽が連結したような構造物が配置される。圀形埴輪は、北側隅のみが L 字状に残存する。圀・家形埴輪に掘方はなく直接設置する。圀形埴輪の一部は 2 段目斜面最下部の葺石上に置かれているため、外側に向かって若干前傾する。圀・家形埴輪に底板は無く、これらを設置後に、少量の土を入れて固定し小礫を充填している。小礫面は、家形埴輪内ではほぼ同一のレベルで

一層のみ認められるが、家形埴輪と圀形埴輪の間は 2 層程度みられる。家形埴輪と圀形埴輪は、安定のため突帯下に小礫をかませている。なお、区画内部上面に施された小礫敷と、圀形埴輪内の小礫が一連であるかどうかは確認できなかった。

家形埴輪内部に設置された 2 槽式の構造物は、家形埴輪の隅に接するように設置されていたが、家形埴輪と一連で製作されたものではなく組み合わせで使用したものである。埴丘外側の方向に 2 槽それぞれ割り込みがあるが、そこから導水するような施設は見つからず、家形埴輪自体にも導水のルートとなるような痕跡は認められないため、湧水施設と考えておく。(荒井啓汰)

第 2 項 造出し部の調査

造出しは、円丘部の北東側に接続し、上・中・下段の三段築成に復元できる。ただし、その形状は主軸に対して対称的ではなく特異な構造である。

I. 上段

F 発掘区 (第 3 次) B 発掘区南西側 (第 2 次) で確認した掘り込み SX02 の範囲を確認することを目的に設定した (図 36)。

その結果、SX02 は上段平坦面にある幅約 3m、長さ約 9m の長方形を呈する土坑と考えられ、掘方の内側に葺石と同様の石材が堆積した状態で検出した。検出面の標高は約 99.4m である。

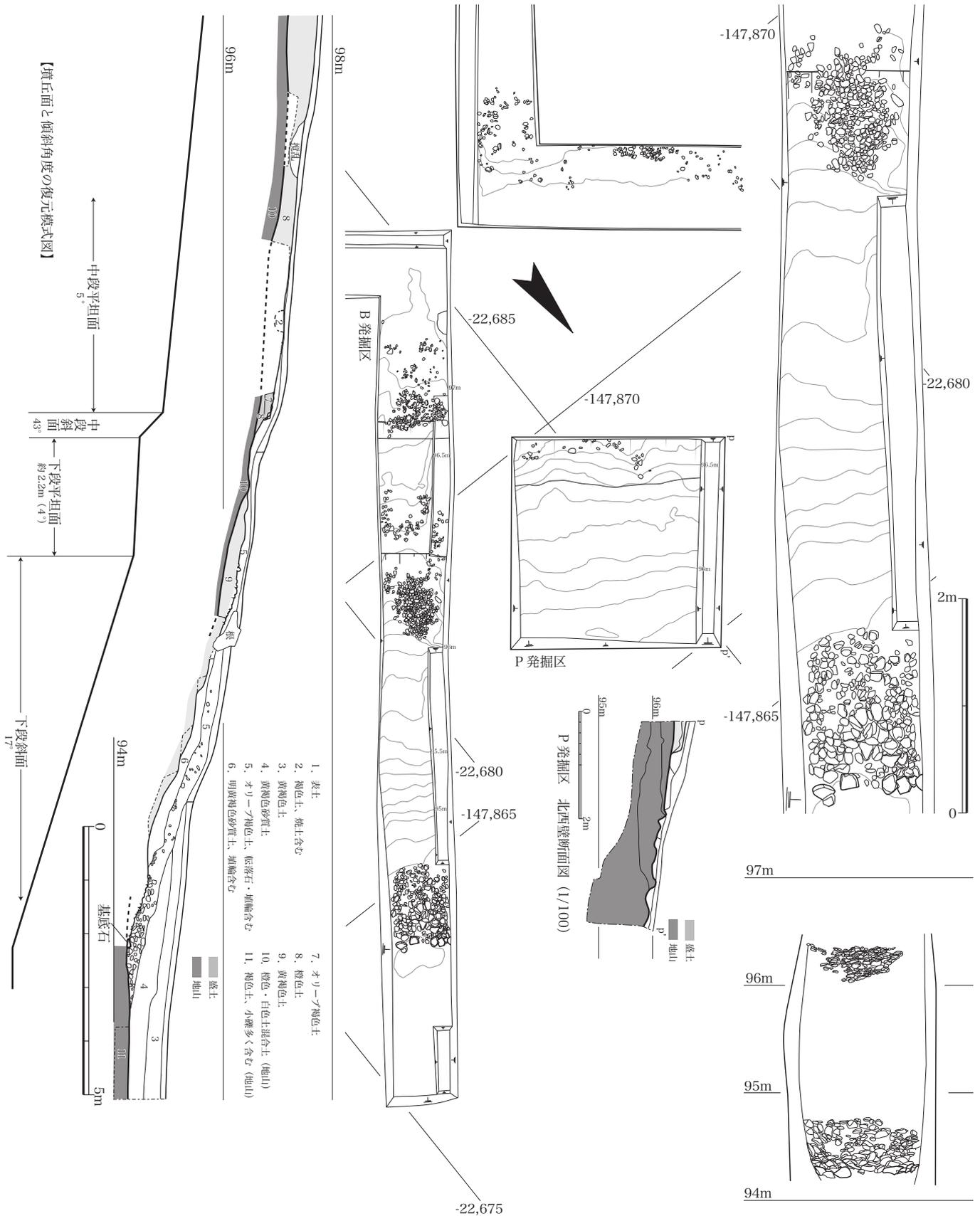


図 43 B 発掘区北東部・P 発掘区 平・断面図 1/100、B 発掘区下段斜面葺石平・立面図 1/50

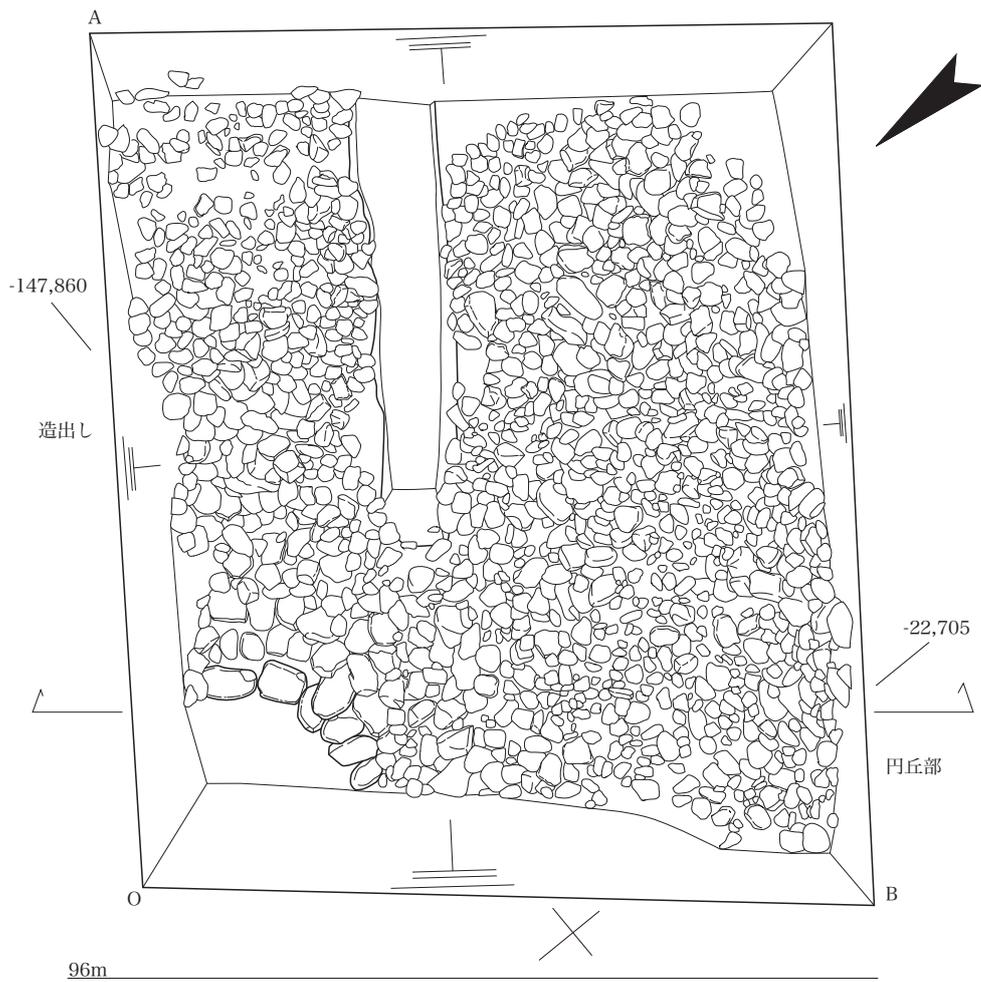


图 44 J 発掘区 平・立面图 1/30

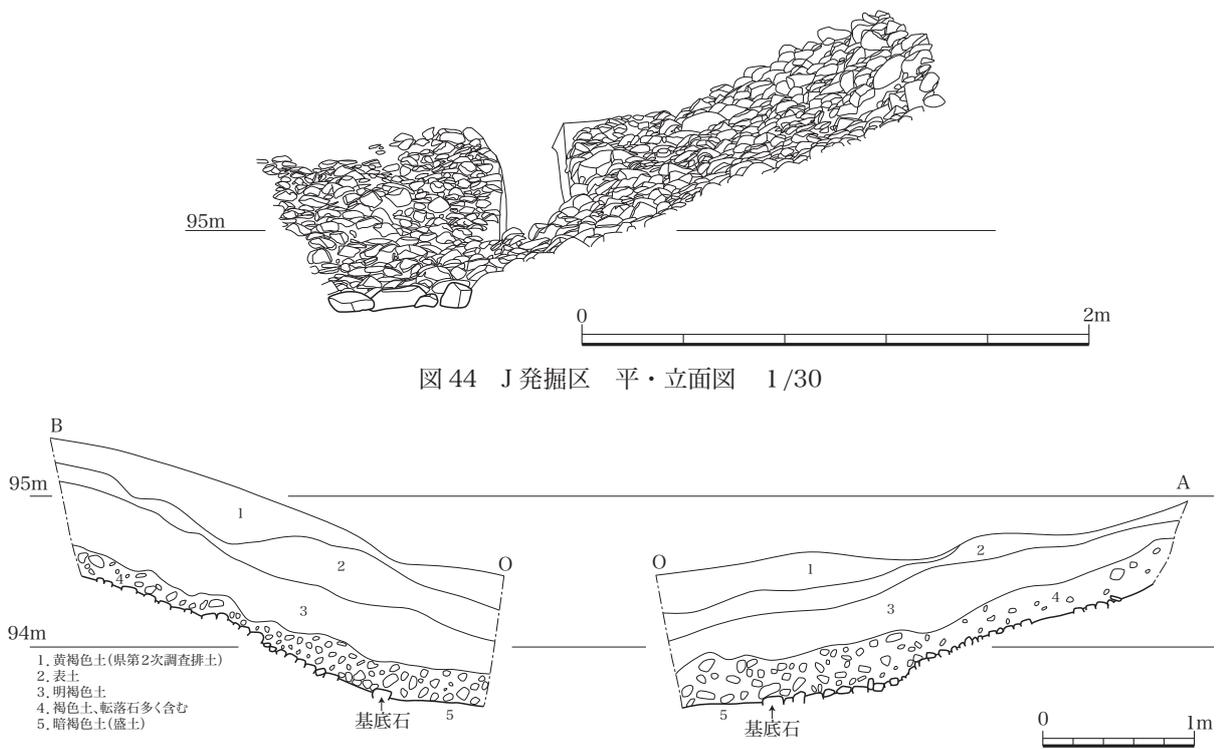


图 45 J 発掘区 断面图 1/50

次に、造出しおよび円丘部とSX02の関係性を述べる。まず地山を削り出して円丘部を成形した後、造出しを盛土で構築する。この際、主軸上の造出しと円丘部の接続部分付近に、造出し中段平坦面よりさらに1段高い高まり（上段）を設け、その平坦面に葦石と同様の石材で礫敷を行う（第1面）。土層の観察所見から、その後に厚さ約0.2mの盛土を行うことで礫敷を埋めて整地し、その上面からSX02を掘り込んでいる（第2面）。また、SX02を埋め戻した土は中心部分が陥没しており、そこに葦石や埴輪片を含む流土が堆積する。この状態から、SX02の内部には何らかの施設があり、それが腐朽し陥没したところに、2段目斜面の葦石が崩れて堆積したと想定できる。

B・E・I発掘区（第2～4次） これらの発掘区では、上段裾が想定される位置に一部がかかっている。ただし、上段周囲が大きく崩れている現状や、近代遺物が表採され松茸小屋があったという証言があることなどから、近現代に周囲が大きく削られたようである。

I発掘区（図40）では中段平坦面の小礫敷を検出しているが、南西側に広く小礫敷が認められない部分がある。位置関係からみて、この範囲が上段裾の位置を反映している可能性がある。一方、E発掘区の南東へ拡張したトレンチ（図22）で確認した小礫敷の位置で上段裾を復元すると、SX02の範囲と齟齬をきたし、ややいびつな復元となる。小礫敷の多くは原位置に近いものの、平坦

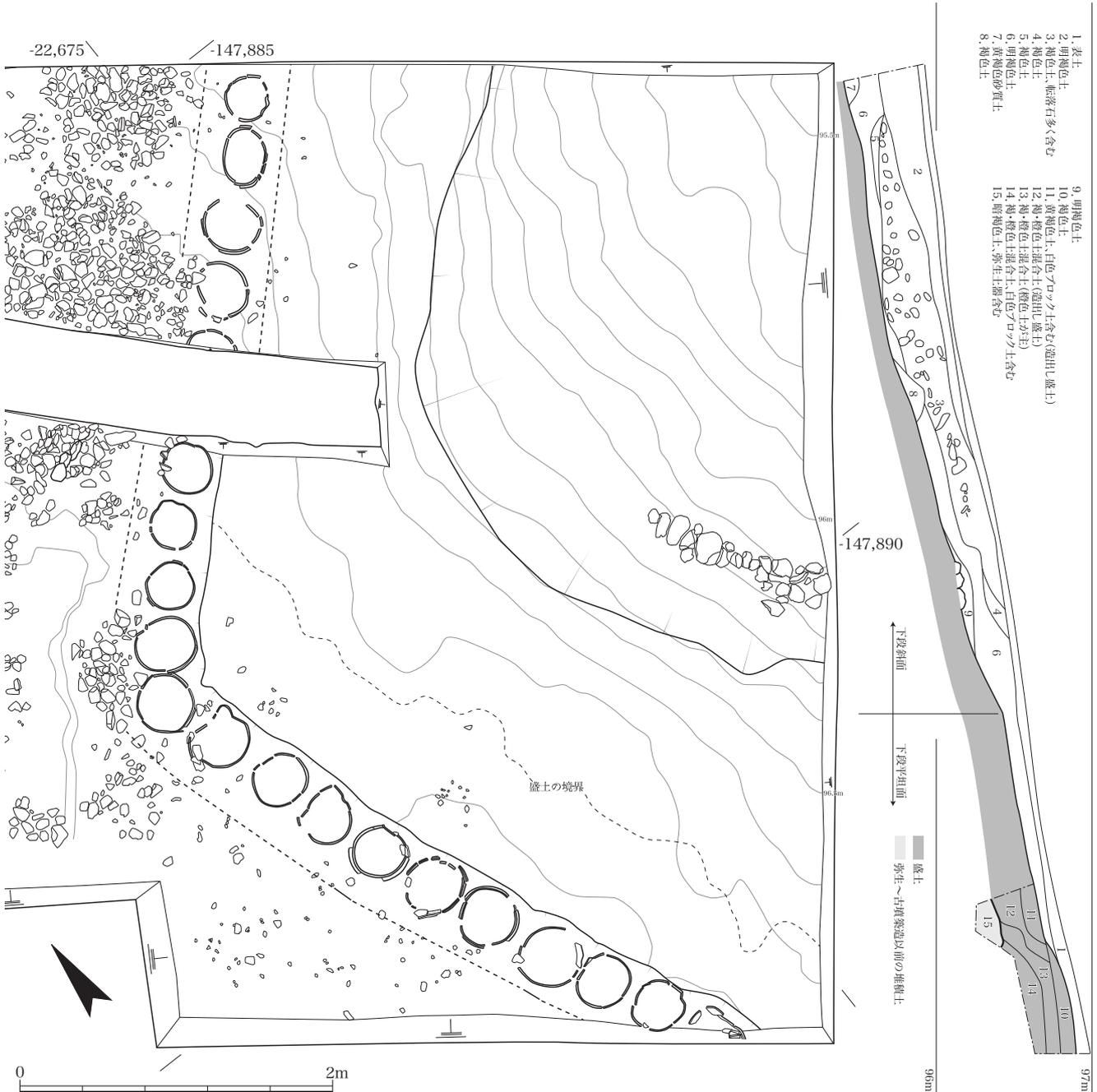


図46 H発掘区 平・断面図 1/40

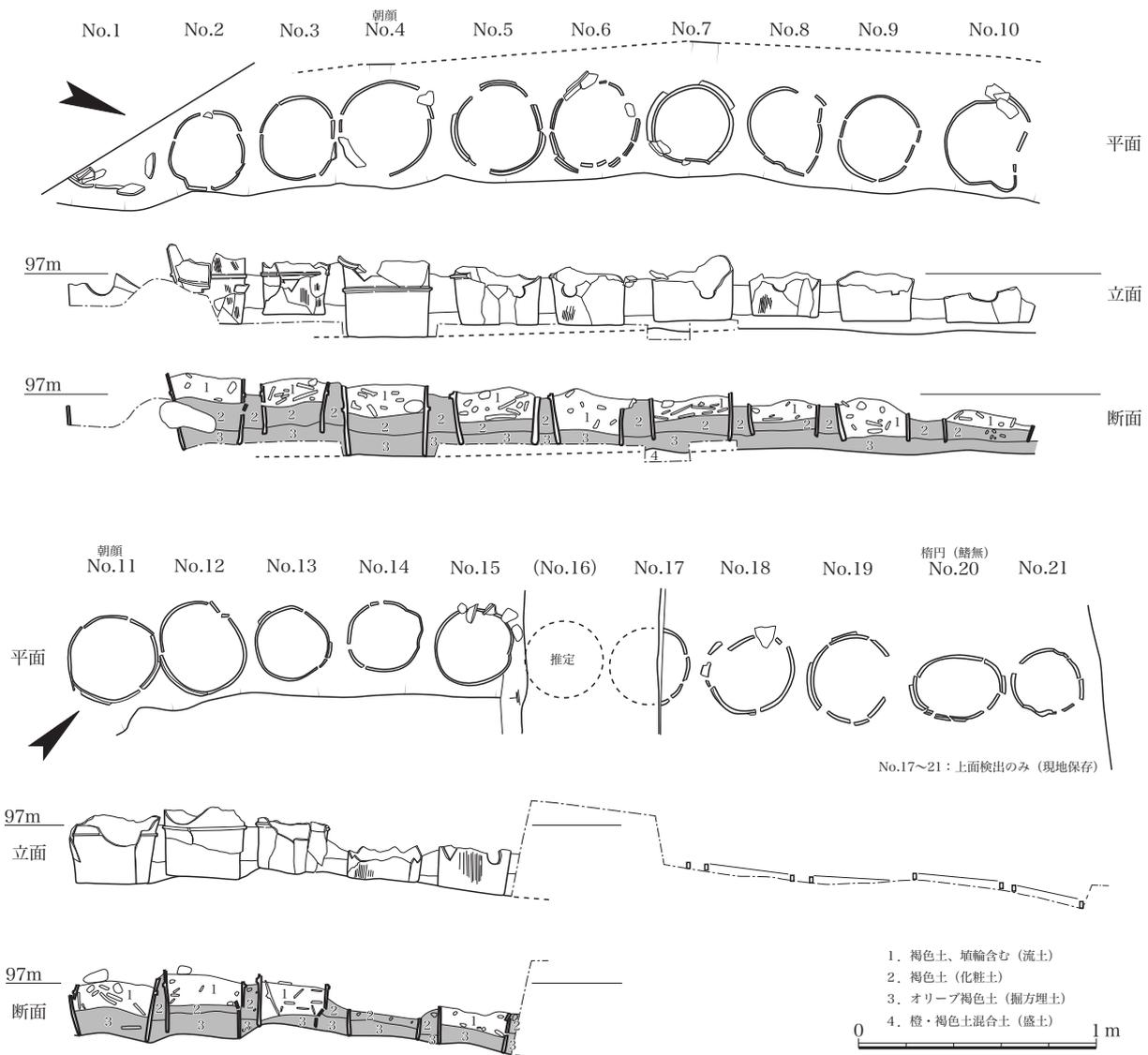


図 47 H 発掘区 円丘部 1 段目・造出し下段埴輪列 平・立・断面図 1/30

面自体が傾斜していることから若干動いていることを想定する必要がある。したがって、上段裾は該当箇所を広く調査することで手がかりを得られる可能性があるが、現状は不明瞭である。さらに調査し上段の規模を確認する必要がある。

II. 中段

B 発掘区 (第 2 次) 中段の主軸および直交する部分を調査した (図 21・43)。

その結果、中段平坦面には小礫敷を除いて顕著な遺構を確認できなかった。断ち割りすると、中段は最大約 0.8m の盛土をして構築されており、主軸上で前面に向かって約 6 度の傾斜がある。また、主軸墳丘下の地山直上で埴丘内石列を 3 石分確認した。I 発掘区北壁沿いを断割調査して石列の続きを追求したが検出されず、その行方や機能は不明である。

造出し北東側 (前面) では、高さ約 0.4m で傾斜角約 43 度の中段斜面を検出した。斜面裾の標高は約 96.6m である。中段平坦面が緩斜面となっているため、前面に向かって低くなりつつ、前面へと屈曲していくと想定される。ただし、葺石等が残存せず、後述するように南東側に向かって収束する。

E 発掘区 (第 3 次) 造出し北西側にあたる部分を調査した (図 37)。

その結果、中段平坦面の小礫敷を検出した。0.03m 程度の礫が多く、斜面の葺石と比べてもさらに小さい。また、中段斜面の上端は若干外側にひらき、前面に向かって約 6 度の傾斜で低くなる。よって、くびれ部付近では斜面高が約 0.8m であるのに対し、前面に近い部分では約 0.4m となる。斜面裾の標高はくびれ部付近で約 96.8m である。斜面の葺石は 0.1m 程度と小さいことや、若干崩れた部分もあるため目地が判然としない。2 列の

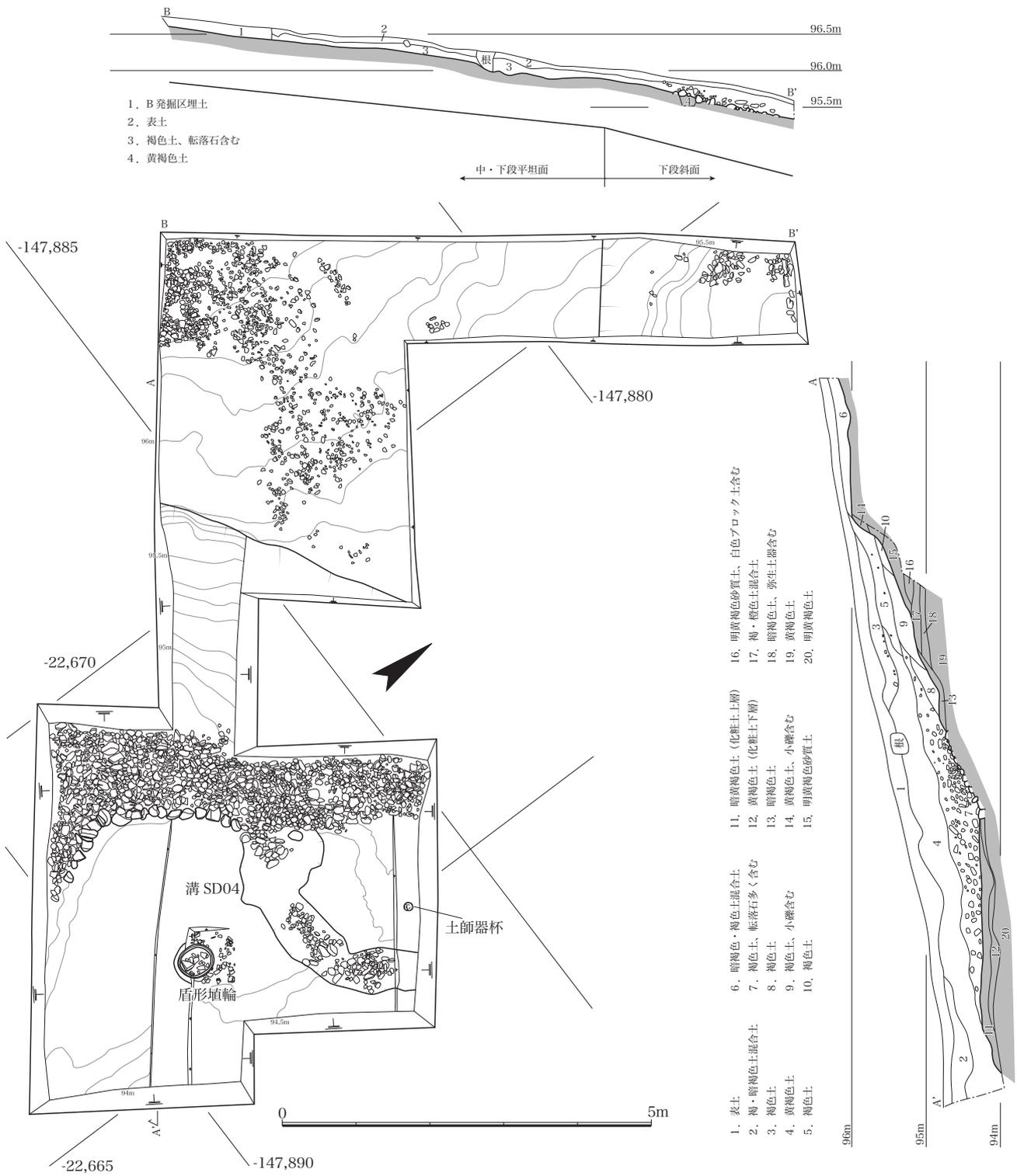


図 48 G・K発掘区 平・断面図 1/80

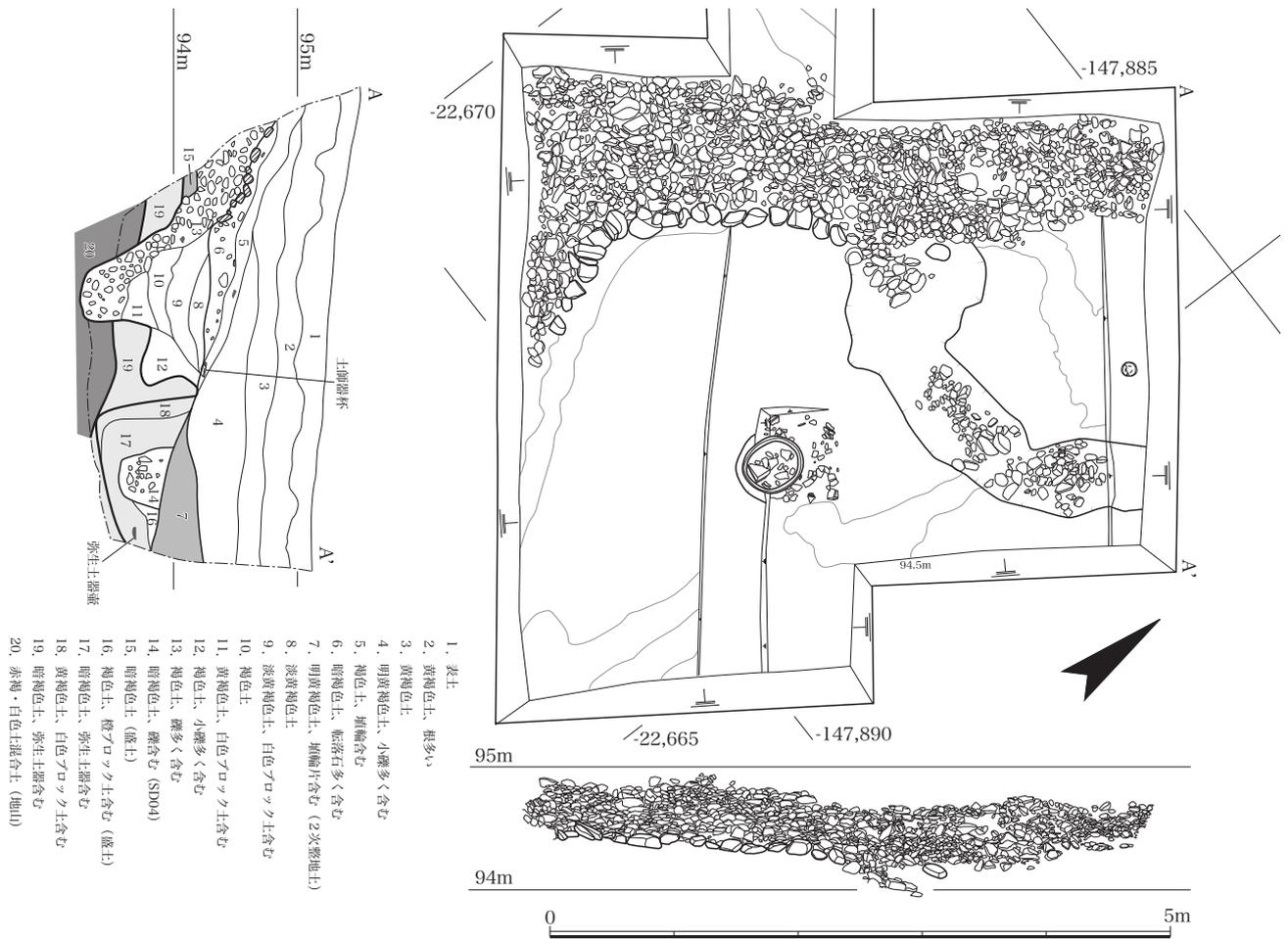


図49 G・K発掘区 平面・葺石立面・A-A'断面図 1/60

縦目地を確認し、その間隔は約0.5mである。基底部付近にはやや横長の石材を用いた横目地が通るが、そこからさらに3石分ほど下方に葺石を施して基底部に目地の通る石列が認められる。このように、本来の基底部から付け足したような葺石が施される事例は、巢山古墳(広陵町)でも確認されている。

I・L発掘区(第4・5次) 造出し南東側にあたる部分で、L発掘区は円丘部との接続部分を確認するために設定した(図40)。

その結果、中段平坦面は円丘部2段目斜面に接続して途切れることを確認した。この付近での中段斜面高は約0.4mで北西側と比べると低いが、斜面裾の標高は約97.3mと北西側より約0.5m高いことから、斜面高で帳尻を合わせることを意図したとみられる。この付近では中段斜面の葺石は崩れていたものの、円丘部側は基底石こそ不明確であったが幾分葺石が残存した状態であった。中段平坦面には小礫敷がみられるものの、それ以外の遺構はなかった。

中段斜面の上端は、北西側よりも大きくハの字形にひら

き、前面に向かって約5度の傾斜で下降するため、I発掘区のなかで段が収束する。この付近は下段埴輪列が途切れる位置と概ね一致する。収束する手前で確認調査を行い、低い段に施された葺石や基底石を検出した(図42)。

III. 下段

B・P発掘区(第2・5次) 第3次調査成果から、造出し前面にも下段がめぐる可能性が出てきたため、第4次調査でB発掘区の該当箇所を再掘削し断割調査した。

その結果、中段斜面から幅約3mの下段平坦面を確認した。しかし、平坦面に埴輪列は検出されなかったため、第5次調査のP発掘区でその有無を追求したが埴輪列はなかった(図43)。造出し南東側の下段埴輪列が後述するように確実に途切れることから、前面には埴輪列がめぐっていない可能性がある。ただし、前面の下段平坦面の盛土がほとんどみられない状態であるため、流出した可能性も否定できない。

下段斜面に残存する葺石は部分的で、ほとんどが転落している。斜面の傾斜角は約17度である。裾付近では

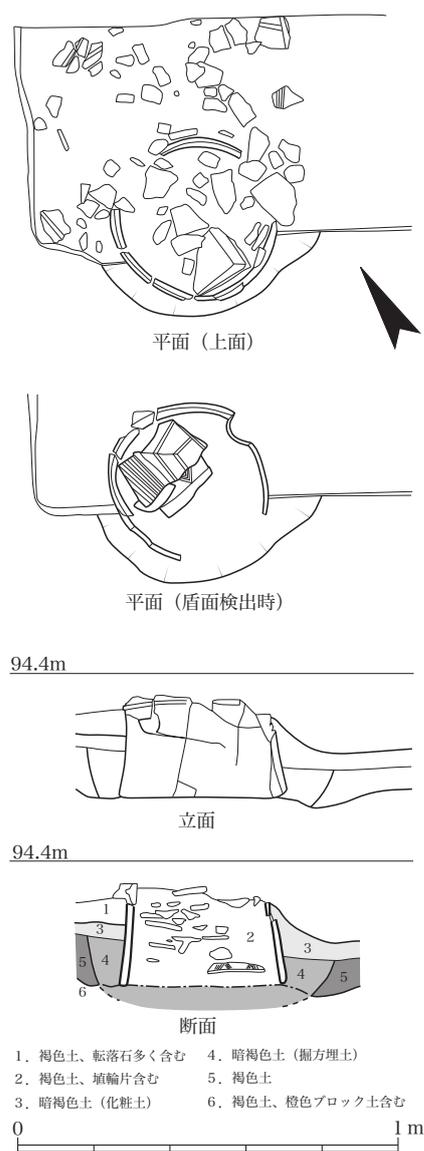


図50 盾形埴輪出土状態平面・立面・断面図 1/20

人頭大の基底石を確認し、その標高は約94.2mである。

また、転落石を含む検出面直上の埋土からは、6世紀中頃～後半の須恵器杯身(図82-5)が出土しており、これに近い時期に自然災害等に伴う墳丘崩落が起こった可能性も考えられる。

E 発掘区 (第3次) 造出し北西側の構造を確認する目的で設定した(図37)。

その結果、下段平坦面の幅は確認できた部分で約3.8mである。中段斜面裾付近で平坦面の小礫敷が良好に残存していることから、本来は全面に施されたと思われるが多くが流れて原位置で残存しない。

また、くびれ部から円丘部埴輪列に向かって屈曲していく石の配列が認められた。この石列は雑然としており転落石と一部混在するような状態であり、下段平坦面の小礫敷の上にあることから築造当初のものとは考え難

い。しかし、後から付加された遺構の可能性が想定できなかったため、これを残して調査を終えた。そのため、くびれ部周辺では円丘部2段目の葺石が十分に調査できていない。この点は今後の課題として記しておきたい。

平坦面のほぼ中央には円筒埴輪列(標高約96.2～96.5m)がめぐる。この部分では掘方が認められず、埴輪盛土と同時に埴輪を設置し、底部の内外を埋めて固定している。そのため、やや埴輪列の軸がずれていたり、間隔も不均等である部分が認められる。また、くびれ部付近には鱗付筒埴輪が集中するなど、他の埴輪列と異なる点が多い。No. 2～14の埴輪は、その圧痕を現地に残して取り上げた。

下段斜面部分は、幅約0.5mのトレンチを拡張し土層の確認のみを行なった(図39)。盛土は崩れており斜面上部では葺石が残存しない。下部は第4次調査のJ発掘区に重複する部分であるが、若干動いた状態の葺石と転落石との区別がつかず、結果的に掘り抜いてしまった。J発掘区中央に断割部分があるのはこのためである。ただし、この断割調査によって、葺石に裏込めを用いていないことが確認できた。斜面の傾斜角度は約21度である。(村瀬)

J 発掘区 (第4次) 円丘部と造出し裾付近の接続部分を確認することを目的に設定した(図45)。

その結果、発掘区の南西側約半分には、埴輪片や礫を含む黄褐色土が表土下に最大約0.4m堆積していたが、現代遺物を多く含むことから第2次調査時の排土とみられる。これを除去すると旧表土があり、以下明褐色土、転落石を多量に含む褐色土と堆積し、その直下に概ね原位置を保つ葺石が遺存した。最下部には緩やかに屈曲する基底石6石分を検出し、目的とした裾のくびれ部を確認できた。

基底石の標高は約93.6mであり、B・G発掘区で確認した埴輪裾よりやや低い。いずれも葺石より大きな人頭大の石材を利用しており、円丘部側基底石は縦置き、造出し側基底石は横置きを主体とする。

造出し側の基底石から1mほどは葺石が緩い傾斜で上昇し、そこから屈曲して約19度の傾斜となる。葺石石材は約0.1mと小さく、水平距離で約1.8m、基底石からの高さ約0.5mほどの範囲で良好に遺存していたが、標高94.2m以上ではあまり残存しない。石材が小さく動いているものもあり、積み方は全体的に不明瞭な部分が多いが、長軸を埴輪斜面に突き刺すような小口積みとなる部分もみられる。ただし、目地は確認できない。

円丘部側は、基底石から一定して約27度の傾斜であり、造出し側より急傾斜である。葺石石材は約0.2mの

ものが多く、造出し側に比べるとやや大きめの印象をもつ。小口積みが主体で目地は顕著でないが、造出しとの接続部に相当する位置に大きめの石材が点在する。基底石の屈曲点とこれらの石材を結んだ延長線上は、E 発掘区で検出した埴輪列の屈曲点付近と合致する。(柴原)

H 発掘区 (第4次) 下段と円丘部の接続部分を確認するために設定し、調査の過程でI 発掘区と接続させた(図46)。

その結果、下段と円丘部のくびれ部、および1段目埴輪列を検出した。下段と円丘部1段目の平坦面同士が接続し、これらの斜面の上端は緩やかに屈曲する形状を呈する。上端の延長上はG 発掘区で確認できており、ハの字状にひらく。斜面の葺石はほとんどが崩れているが、目地であった可能性のある石列の一部だけが約1.5m分残存する。斜面の傾斜角は約16度である。

斜面上端から約2m内側では、円筒埴輪列(図47)を検出した。円丘部側では1段目埴輪列10本分を確認し、11本目が造出し側との屈曲部に位置し、そこから造出しにむけて11本分を確認した。No.21の延長上にあたるG 発掘区では埴輪列やその掘方もなかったため、この付近で埴輪列が途切れているとみられる。No.21とG 発掘区の間には見学用通路があり、埴輪列が途切れる位置は確認できていない。埴輪列の検出面は化粧土上面であり、掘方の有無が確認できなかったため、外側のみ掘り下げると布掘りを検出した。設置方法は、布掘り後に埴輪を据えて掘り方を埋める。この際、埴輪の内部も同様の土で埋めて固定する。その後、化粧土を外側に置くが、同質の土を埴輪の内部に入れるものと入れないものがある。この差に規則性はみられない。設置レベルは概ね揃うが、やや深く埋める個体(No.4)があり、内部で出土した破片から朝顔形埴輪であるようだが、どの程度の割合で朝顔形埴輪が樹立されたのかは不明である。なお、円丘部埴輪列の外側約1mの位置で、埴輪列掘りに沿って円丘部と造出しの盛土の境界を確認した。土層の重複関係から円丘部の盛土後、造出しを構築している。また、埴輪列の掘りは円丘部側と造出し側とが一括して掘削されており、造出しの盛土まで終わってから設置されたことがわかる。埴輪はNo.2～15まで圧痕を半分残した状態で取り上げ、No.16は畔で未掘削、No.17～21は上面検出のみで現地保存した。

G・K 発掘区 (第4・5次) 造出しおよび円丘部の裾を確認することを目的に設定した(図48・49)。

その結果、まず裾の基底石を含む葺石とそのくびれ部を確認した。基底石は約0.2mの石材を用い、葺石には

約0.1m程度のやや小ぶりな石材を使い分けている。くびれ部付近の基底石は残りが良いが、円丘部側は崩れて不明確である。この延長上にあたるC 発掘区では葺石がほとんど崩れていたこととも整合的である。造出し側も約2m分までは残存状態が良好であるが、その先は不明確である。斜面の葺石は基底部から約1.5m分残存しており、それ以上は崩れている。葺石が残存する基底部付近の斜面傾斜角は約25度である。葺石は基底石が残存する範囲は比較的整然としているが目地は不明瞭である。くびれ部の稜線にはやや大きめの石材が用いられており、目印として利用した可能性がある。

造出し側の葺石も基底石が不明瞭になるあたりからは、粗雑な印象を受ける。そのため、北東側の壁際で断割調査をした結果、おそらく地震が原因の崩落痕とみられる土層を確認した。これにより遺構面が凸凹に変形し、凹部(本来の遺構面から深さ約1m)に葺石が流れ込んだ状態にみえる。しかし、その後崩落部分の窪みが人為的に埋め戻され、基底石のラインに合わせた補修が行われている。補修時に行なったとみられる整地層(図49-7層)に比較的多くの埴輪片が含まれていたことも、築造当初の遺構ではない可能性を示唆する。また、この補修された葺石直上では6世紀後半頃の須恵器杯蓋(図82-4)、補修された遺構面直上では6世紀後半～7世紀の完形土師器杯身(図82-7)が出土した。仮にこの時期の巨大地震であるとみるならば、『日本書紀』の記録に残る最古の震災記録である推古7(599)年4月27日に大和国で発生した推古地震と概ね一致する。

基底石が不明瞭になるあたりから幅約0.7m、深さ0.4m以上のL字形を呈する溝SD04を検出した。SD04内には葺石と同様の石材が詰められており、葺石付近は浅く石が少ないが、北東方向へ屈曲するあたりから深くなり石が多くなる。古墳にみられる排水溝と類似するが、詰められた石材や深さが一定でないことや、巨大地震の影響で変形した土層の上から掘り込まれることから、変形以降に構築された遺構と考えられる。

くびれ部基底石の外側約2mの位置からは、盾形埴輪1点が原位置で出土した(図50)。盾形埴輪より一回り大きい掘り方をもうけて、その底をやや整地した上に盾形埴輪を設置する。埴輪の位置はくびれ部稜線の延長線上とほぼ一致し、盾面を外側に向ける。掘りを埋めた後、概ね1条目突帯まで化粧土を置く。ただし、円筒埴輪列のように埴輪の内部には置土しておらず、割れた盾面等の破片が底内部付近まで落ち込んで出土した。その他の割れた破片の多くは北東側に集中する。(村瀬)

第4章 出土遺物

第1節 墳頂部旧発掘区埋土出土遺物

第1節で報告する出土遺物は、1972年に実施された奈良県第1次調査の旧発掘区内墓坑埋め戻し土を再発掘して出土したものである（第5次調査時点で地表下約0.5mまで掘削）。したがって、粘土槨に伴う副葬品の一部であると考えられるが、出土地点は必ずしも本来の副葬位置を反映するものではない。また、第6次調査でも掘削を予定しているため、本報告では主要な遺物のみ

を抽出して報告し、第6次調査報告書で総合的な報告を行いたい。したがって、ここに記す点数は第2～5次調査時点での確認数である。

第1項 青銅製品

銅鏡（図51-1） 乳と脇侍の一部が残る破片が1点ある。凶像文様から斜縁神獸鏡の一部であると判明した。長さ2.8cm、幅1.7cm、厚さ0.1cm、重さ3gで、乳は直径1.1cm、高さ0.35cmである。漆黒色を呈し、部分的

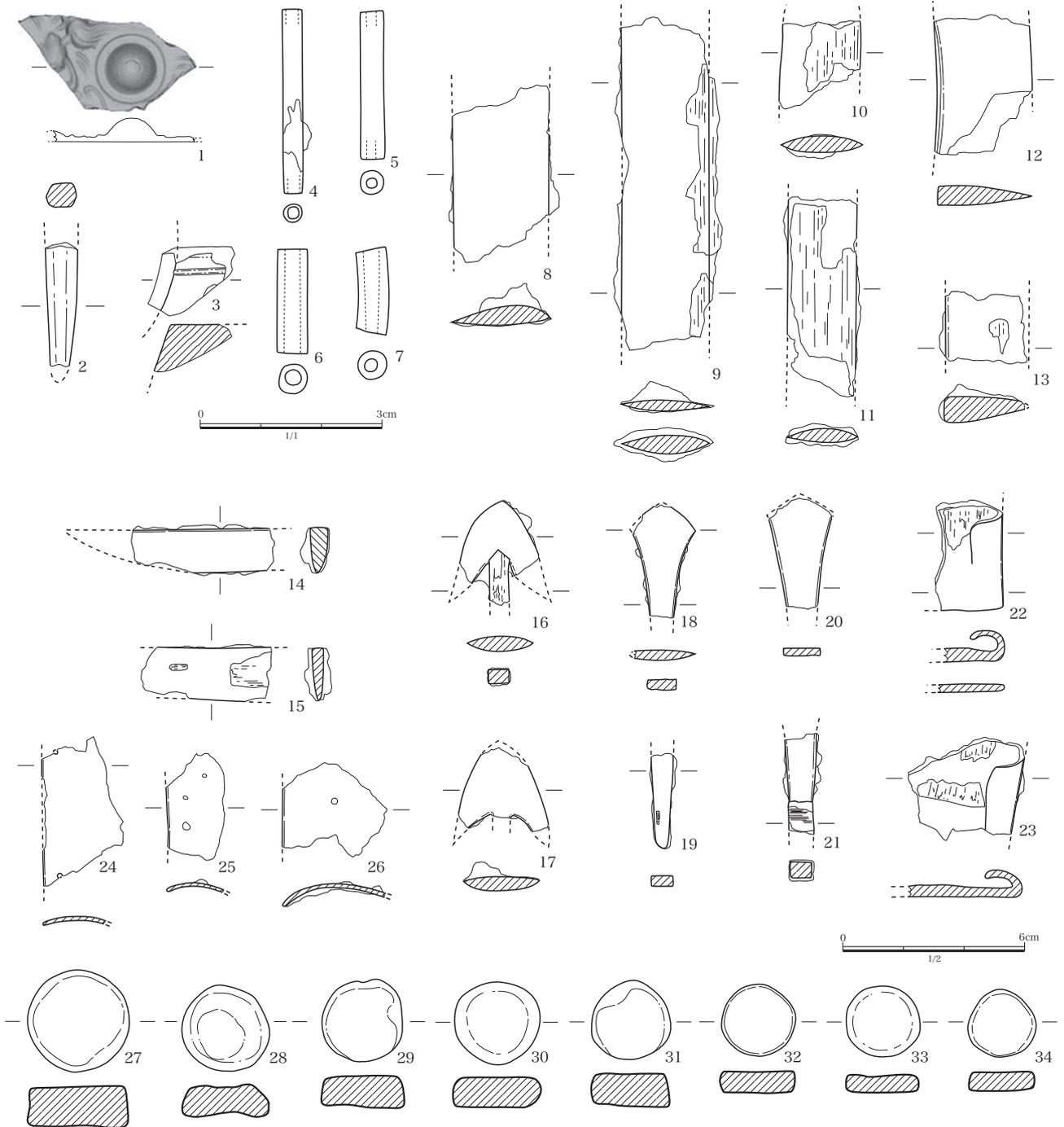


図51 墳頂部旧発掘区埋土（A発掘区）出土遺物 1～7：1/1、8～32：1/2

に赤色顔料の痕跡がみられる。鋳上がりは良好で、頂部を含めて摩滅はほとんどみられず範傷もない。同様の脇侍表現をもつものには、京都府金比羅山古墳出土鏡がある。周知の出土地不明斜縁神獸鏡で内区が欠損するものは数例あるが接合しない。

銅鏃 (図 51-2) 茎部の破片が1点、残存状態が悪く図化できない篋被の破片が1点ある。2は茎部で長さ2.1cm、幅0.5cm、重さ1gで、淡緑色を呈する。奈良県の調査で銅鏃は9点出土しており、茎部を欠損するもの含まれるため、それらに接合する可能性もある。

第2項 石製品・玉類

鋏形石 (図 51-3) 内孔の一部が残存する裏面の破片が1点ある。長さ1.2cm、幅1.4cm、重さ0.5gである。緑色凝灰岩製であるが、鉄分が付着し褐色を呈する。鋏形石裏面の内孔から横方向にのびる沈線の一部が観察できる。京都国立博物館所蔵の富雄丸山古墳出土品のなかには鋏形石が2点あり、1点はほぼ完形、もう1点は欠失する上半部が復元されている。後者の裏面復元箇所に接合する可能性が高い (図 52)。

管玉 (図 51-4～7) 4点ある。4・5は朱にまみれた粘土塊に貼り付き副葬時の状態を残して出土した。4は長さ3.05cm、直径0.3cm、孔径0.2cm、重さ0.5g、5は長さ2.45cm、直径0.4cm、孔径0.2cm、重さ0.5gである。ともに緑色凝灰岩製で赤色顔料が付着し、両面穿

孔とみられる。6は長さ1.7cm、直径0.5cm、孔径0.25cm、重さ0.5gである。表面が風化して灰白色を呈し、材質は不明確である。両面穿孔とみられる。7は長さ1.4cm、直径0.5cm、孔径0.2cm、重さ0.5gの碧玉製である。外形は緩やかに湾曲するが穿孔は直線的に施され、両面穿孔とみられる。その形状から手玉の一部である可能性が高い。

第3項 鉄製品

鉄剣 (図 51-8～11) 破片が47点ある。いずれも剣身の破片で最も残りの良いものが9である。身幅は2.3～3.1cmまでのものがあり、概ね図化した3種類に分けられる。両側に刃がつき、鞘とみられる木質が表面に付着するものが多い。鋒や茎の破片はない。

鉄刀 (図 51-12・13) 刀身の破片が7点ある。身幅は3.1cmのもの (12) と2.8cmのもの (13) がある。鞘とみられる木質が表面に付着する。鋒や茎の部分の破片はない。

刀子 (図 51-14・15) 破片が16点ある。身幅は1.4cmのもの (14) と1.8cmのもの (15) がある。鞘とみられる木質が表面に付着するものがある。鋒や茎の部分の破片はない。

鉄鏃 (図 51-16～21) 破片が23点ある。鏃身が三角形を呈し腸袂をもつ短茎鏃 (16・17) と、圭頭形を呈する無頸有茎鏃 (18～21) がある。短茎鏃では16

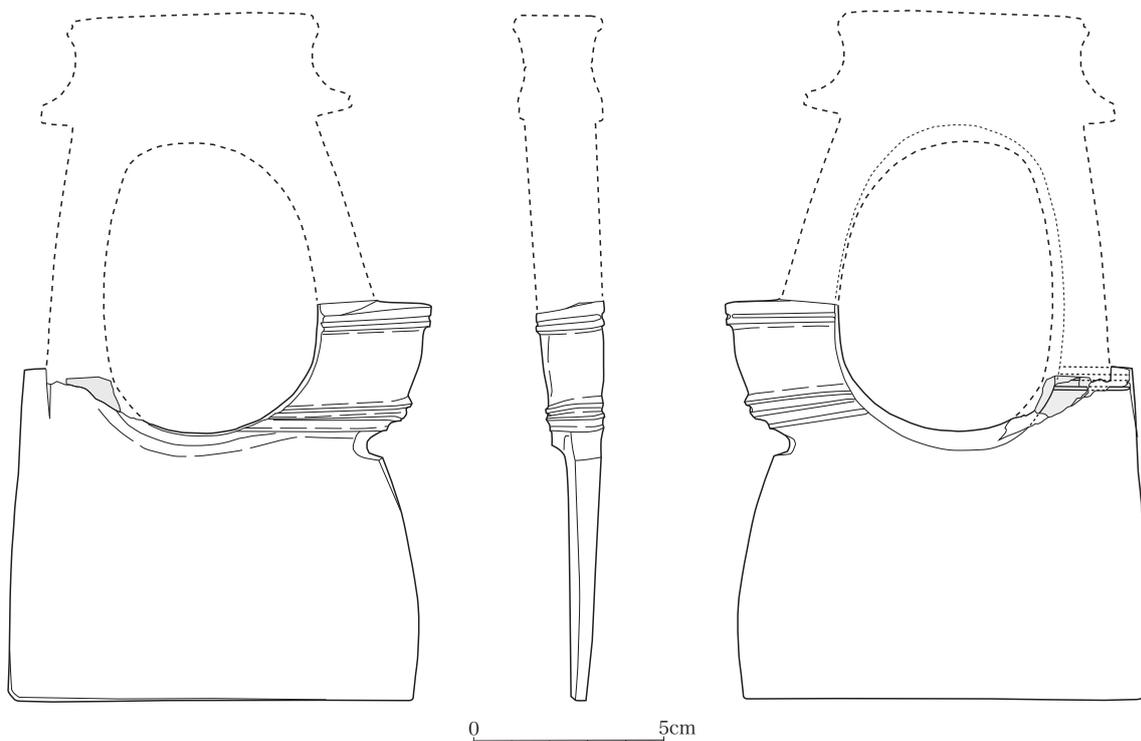


図 52 A 発掘区出土鋏形石 (トーン) と京都国立博物館所蔵品の接合関係 1 / 2

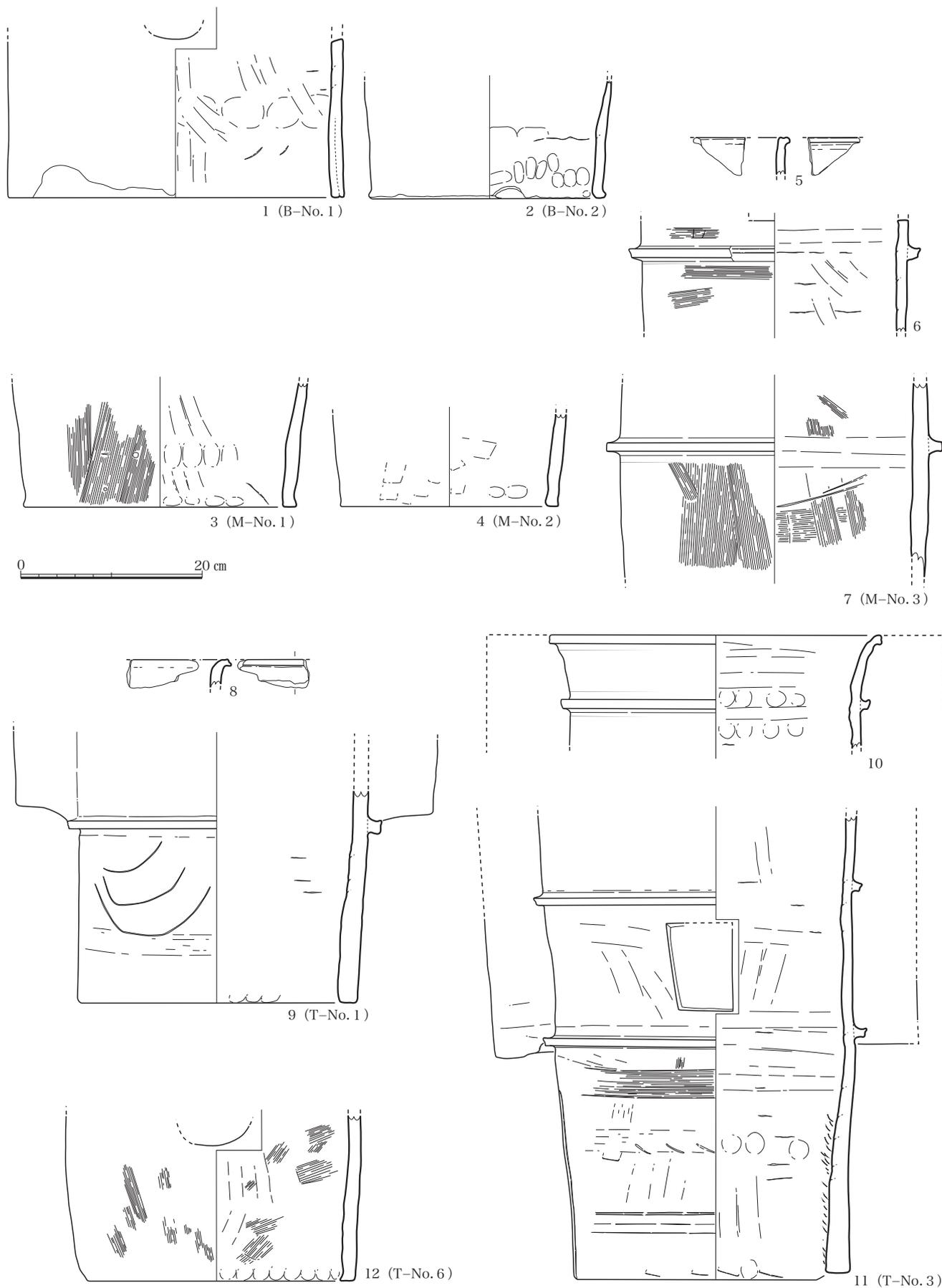
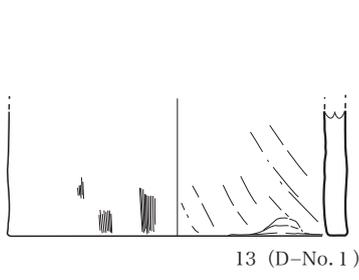
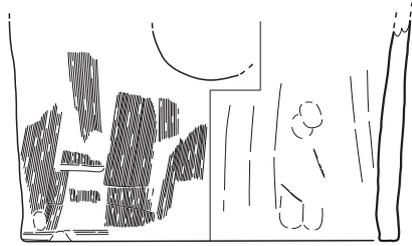


图53 円丘部2段目(B・M・T発掘区)埴輪列出土埴輪 1/6



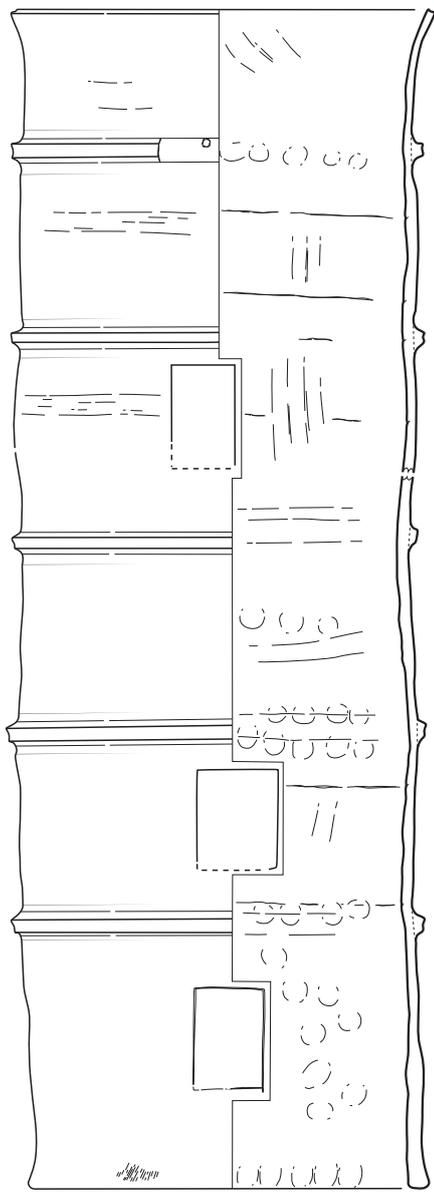
13 (D-No. 1)



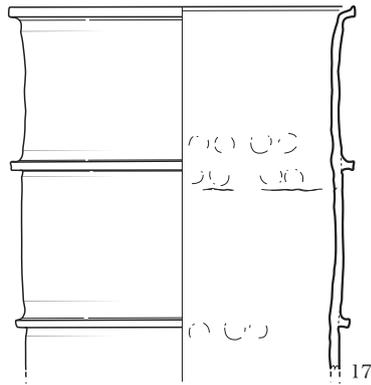
14 (D-No. 2)



15 (D-No. 3)



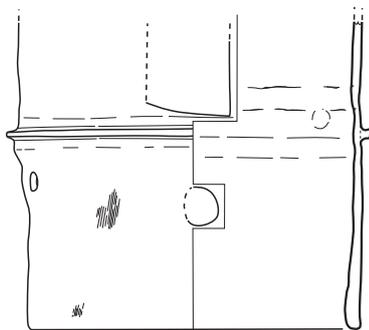
16 (N-No. 2)



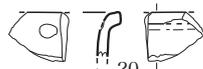
17



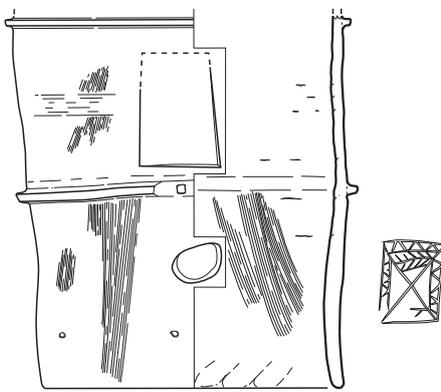
18



19 (N-No. 3)



20



21 (N-No. 4)



実大

図 54 円丘部 1 段目 (D・N 発掘区) 埴輪列出土埴輪 1 / 6 (盾形線刻 SfM は実大)

に根挟みの木質が残る。圭頭形鋤の茎(21)に口巻きの痕跡が残る。

農工具 (図 51-22・23) 鋤先の破片が2点、その他農工具の可能性のある破片が10点ある。22・23は鋤先片で片側の折り曲げ部が残存し、袋部に木質が残存する。その他の農工具片は鎌等の可能性のあるものの特定できない。

小札 (図 51-24～26) 破片が26点ある。いずれも緩やかに湾曲する。図示したものは端面が残り、直径約0.1cmの小孔がみられる。湾曲具合などから奈良県報告では籠手の可能性が指摘されており、それらと同一の小札とみられる。

第4項 土製品

円板状土製品 (図 51-27～34) 完形品が8点ある。他の出土品とは異なり、副葬品ではなく埋葬後に墳頂部

で行われた祭祀用の土製模造品と考えられる。直径は2.3～3.5cmまでのものがあり、形状は概ね似るが、胎土にシャモットを含むもの(28～32・34)と含まないもの(27・33)がある。既往の調査では出土が知られていなかった遺物である。

第2節 埴輪

第1項 円筒埴輪

円筒埴輪には、普通円筒埴輪、鰭付円筒埴輪、鰭付楕円筒埴輪がある。口縁部が出土して朝顔形埴輪と認識できるものもあるが、判別できないものもあるため、朝顔形埴輪もここで合わせて報告する。ほとんどの個体に黒斑がみられ、すべて野焼き焼成品である。

円丘部2段目埴輪列 (図 53-1～12) 円丘部2段目ではB・M・T発掘区で埴輪列を検出し、原位置資料を合計8点取り上げた。

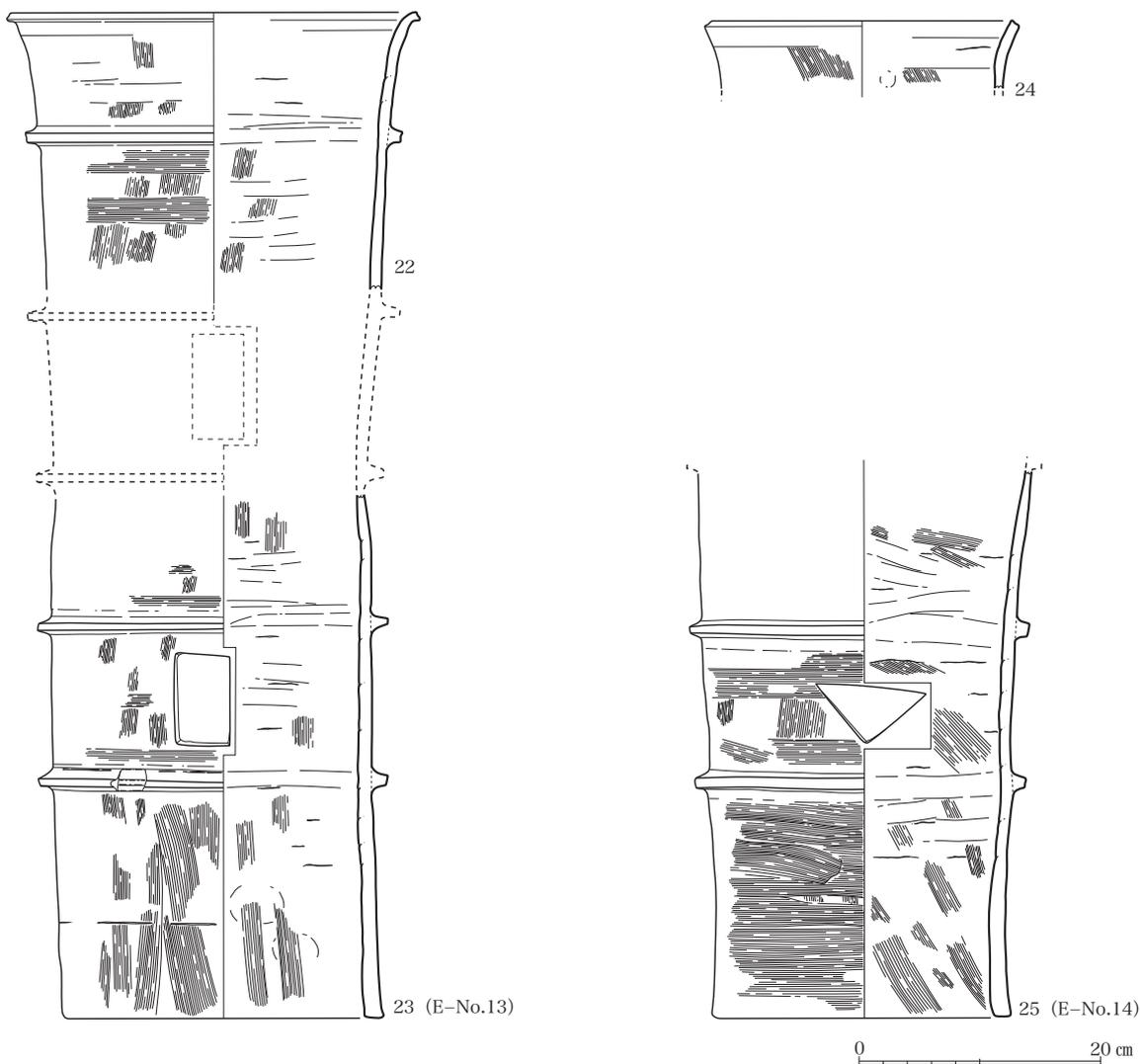


図 55 造出し北西部～円丘部1段目 (E発掘区) 埴輪列出土埴輪 1 / 6

B・M 発掘区出土埴輪（1～7）は、遺存状態が悪く第1段突帯すら残存しない。やや径の大きな1は朝顔形埴輪となる可能性があり、底部に半円または円形透孔がある。

T 発掘区では、鱗が残存した状態の個体2点を含む3点（8～12）を確認した。9は底部高約20cmで、底部外面に3条のU字状線刻がみられる。鱗は第1段突帯から縦方向に筋状の刻み目を入れた後に貼り付けられ、下辺はやや斜めに立ち上がる形状を呈する。10・11は

出土状態と胎土から同一個体とみられ、底部高約27cm、突帯間隔約16cm、口縁部高約7.2cmで、概ね突帯間隔の1/2で口縁部高を割り付ける相関性をもつ。外面はタテハケのちヨコハケであるが、タテハケ後にナデ調整されており、ヨコハケが部分的であるため表面は平滑である。2段目以上に赤色顔料を塗布する。底部から約7cmの位置にはヨコハケとは異なる横方向の工具痕が認められる。鱗は第1段突帯のやや下方から縦および斜め方向の刻み目を入れた後に、口縁端部まで貼り付けている。

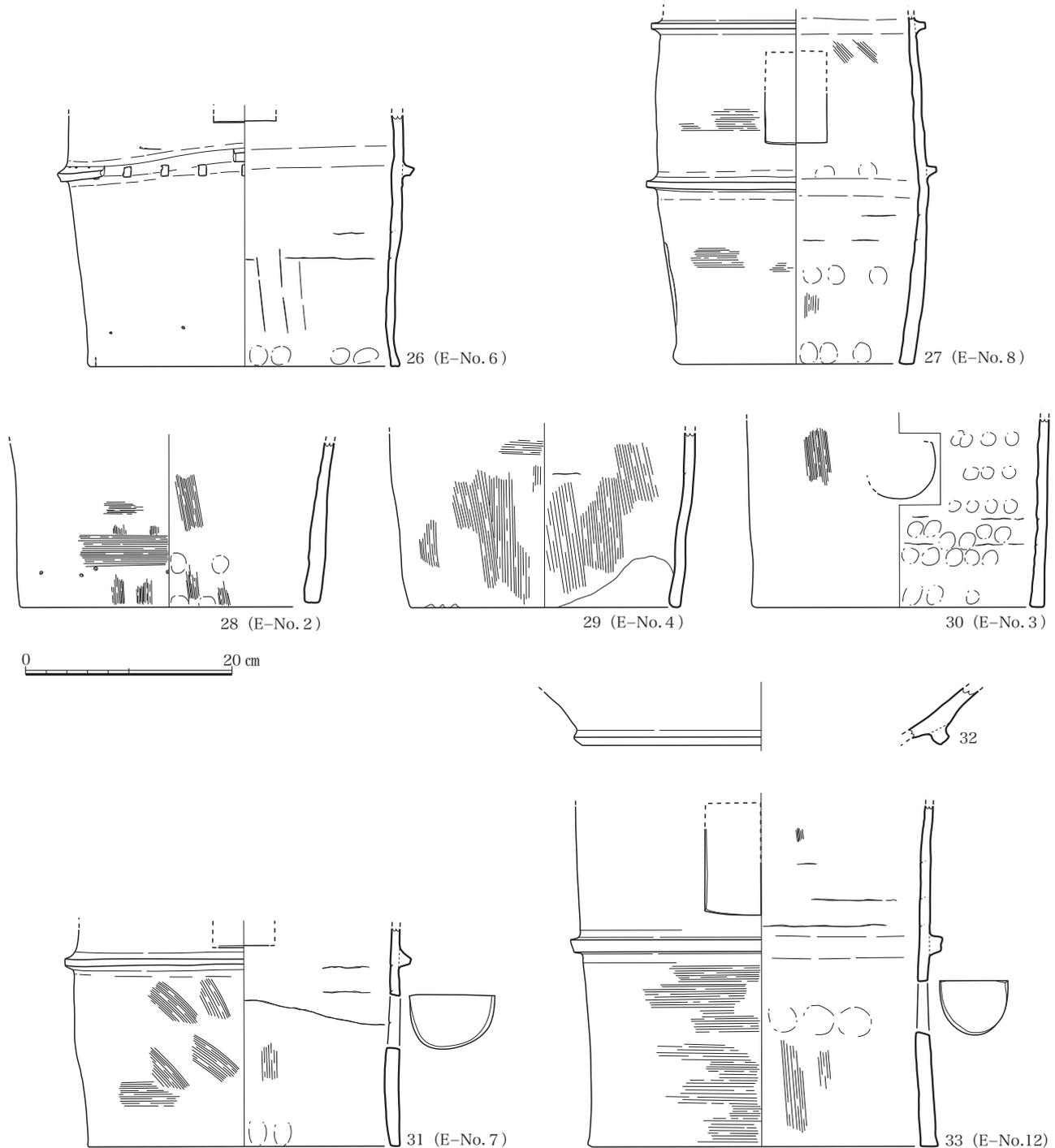


図56 造出し北西部～円丘部1段目（E 発掘区）埴輪列出土埴輪2 1 / 6

下辺は水平を呈する。12は底部に半円または円形透孔がある点で他2つとは異なるが、詳細は不明である。

円丘部1段目埴輪列 (図54-13～21) 円丘部1段目ではD・N発掘区で埴輪列を検出したほか、後述するE・H発掘区でも造出し下段～円丘部1段目へと接続する

埴輪列を確認した。

D発掘区では遺存状態が悪く、第1段突帯すら残存しない(13～15)。14は底部に半円または円形透孔をもつ。

N発掘区では、検出した4点中3点(16～21)を取り上げた。16は出土状態や胎土から同一個体とみられ

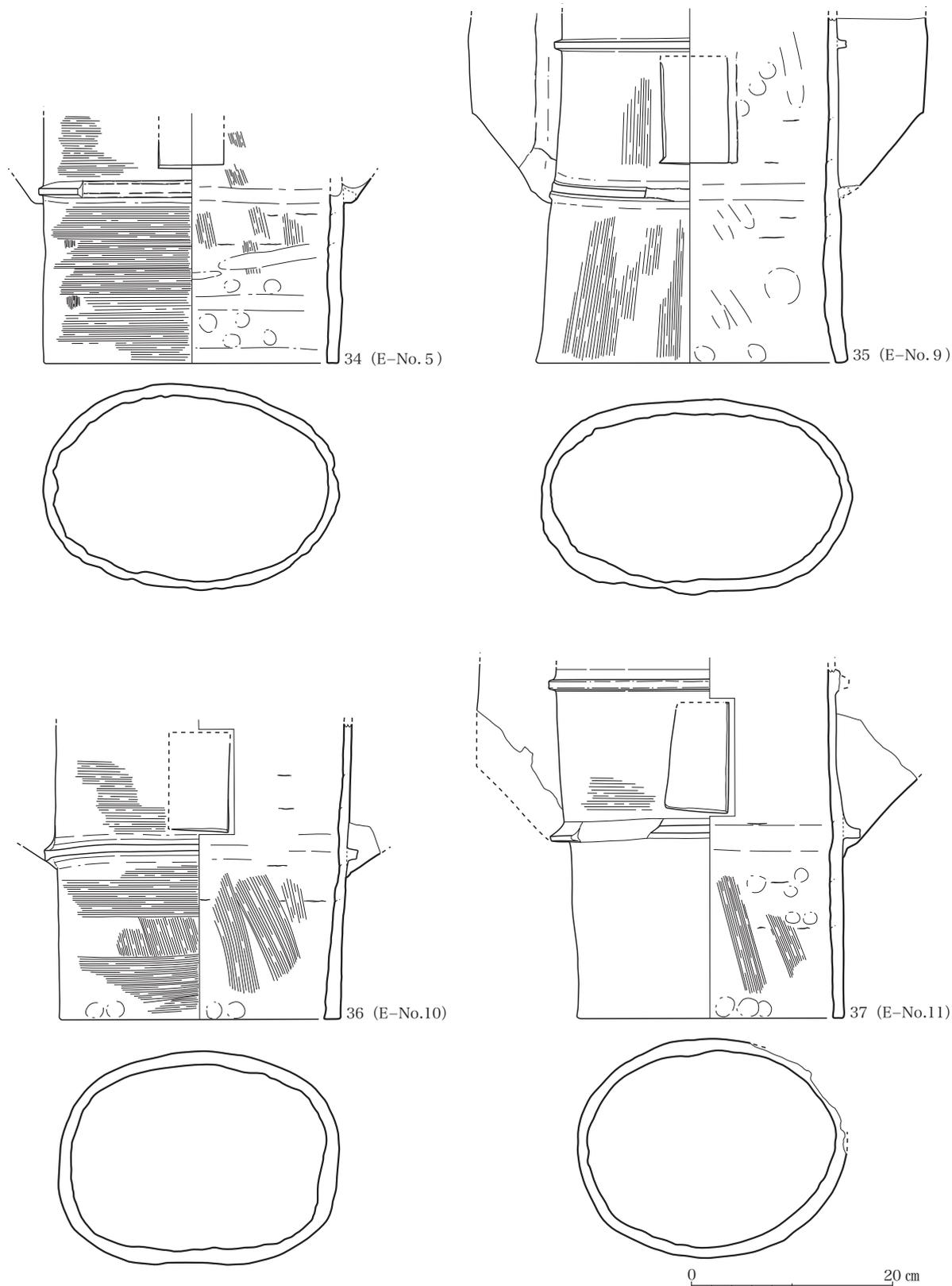


図57 造出し北西部～円丘部1段目 (E発掘区) 埴輪列出土埴輪3 1/6

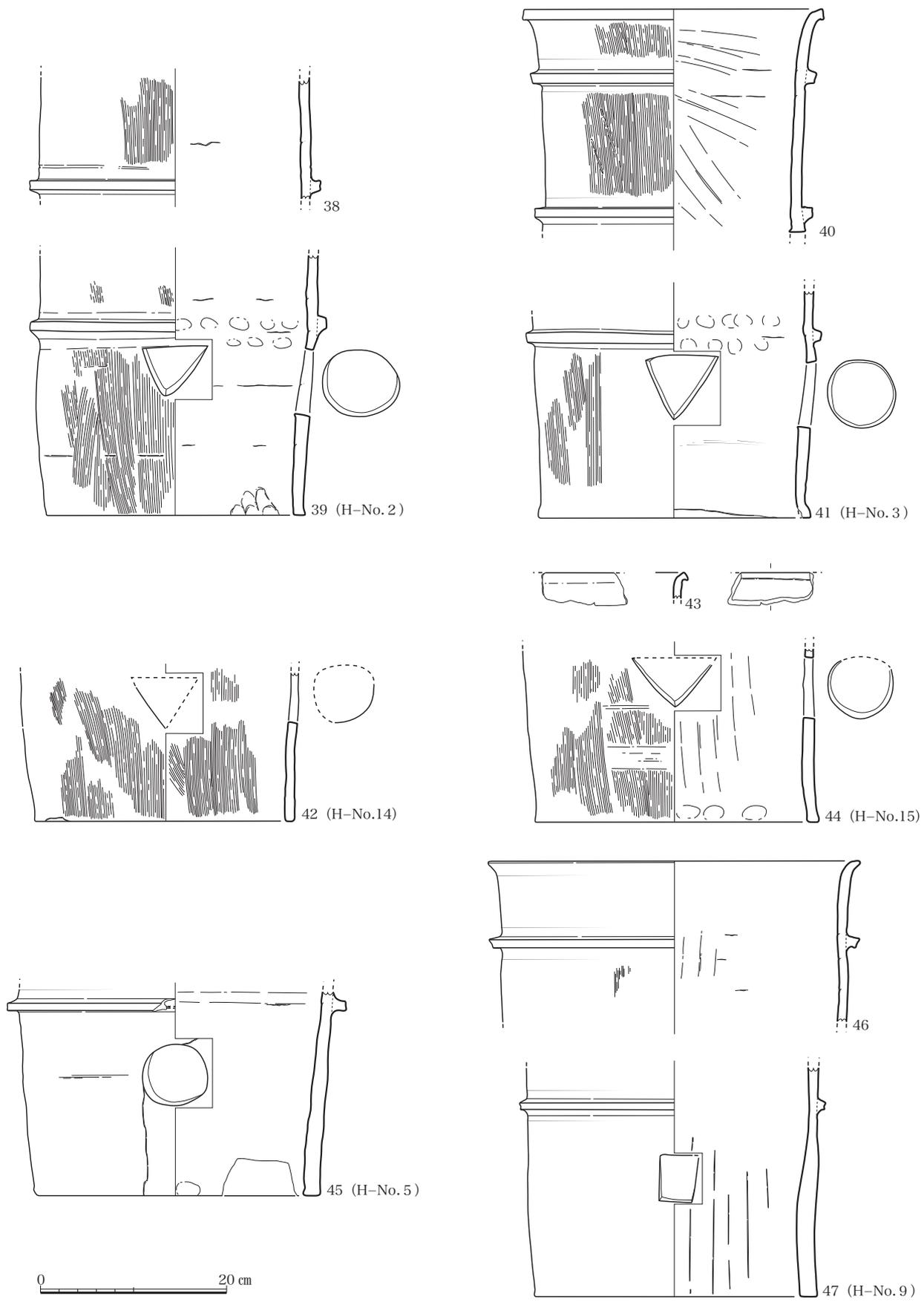


図 58 造出し南東部～円丘部 1 段目 (H 発掘区) 埴輪列出土埴輪 1 1 / 6

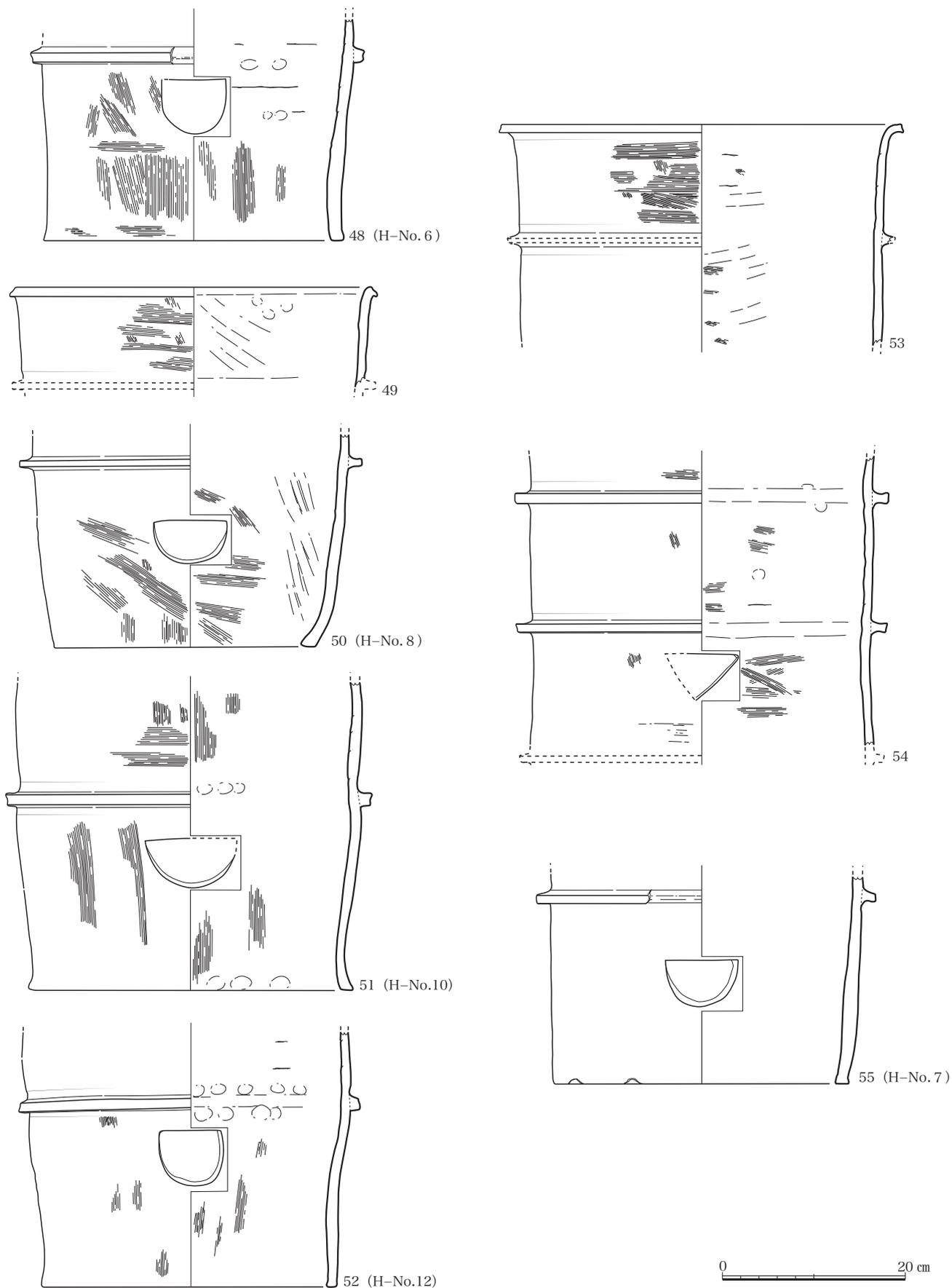


図 59 造出し南東部～円丘部 1 段目 (H 発掘区) 埴輪列出土埴輪 2 1 / 6

るが直接接合しないため全形を図上復元した。透孔配置から5条6段構成と推定できる。底部高約21.5cm、突帯間隔約15.4cm、口縁部高約10.7cmで、口縁部高を底部高の1/2で割り付ける相関性をもつ。2・4段目に長方形透孔2つを対向配置するが、1段目にもそれと形がよく似る長方形の線刻がある。ただし、透孔配置と異なって、線刻は片面のみであることから、その意図は不明である。

16の底部の内部には2種類の口縁部片(16上部・17)が落ち込んでいたが、16に伴う口縁部は胎土・焼成等の特徴から復元した個体が妥当であり、19の内部に落ち込んだ18と類似する口縁部形態をもつ17は、19の口縁部であると判断した。17～19を同一個体とみると、これらの段数構成は不明であるが、底部高約15.8cm、突帯間隔約12.5cm、口縁部高約12.4cmとなり、口縁部高を突帯間隔と同様に割り付けて、底部をやや高く規格するものであることがわかる。底部にはやや小さめの円形透孔が1方向のみに穿たれ、約50度ふった位置にさらに小さな円孔が1つ認められる。

21は底部高約16cm、突帯間隔13.3cmで底部に1方向のみのやや小さな円形透孔・2段目に長方形透孔を配置する点で17～19と同一規格品であるといえる。第1段突帯を方形刺突で設定しているほか、第1段突帯の

下方約12cmの位置に連続する刺突痕が認められる。その間隔が概ね突帯間隔と一致することから、1つの工具で底部高と突帯間隔(口縁部高)が設定できることになり、底部高を設定する際に突帯間隔を設定するための刺突工具が当たったものとみられる。また、底部の透孔と直交する位置には盾を表現する線刻がある。線刻は長方形のなかを×で区画し、外縁に鋸歯文、内区の上方にみに綾杉文を刻む。

造出し北西部下段～円丘部1段目埴輪列(図55～57-22～37) E発掘区で検出した造出し下段および円丘部1段目平坦面の埴輪列では円筒埴輪10点、朝顔形埴輪1点、鱗付楕円筒埴輪4点を確認し、そのうちNo. 2～14の13点を取り上げた。

円筒埴輪(22～30)は、底径26～30cm程度、底部高18～20cm程度、突帯間隔12.5～14cm程度で概ね揃い、口縁部高のわかるものは10.0cm(22)である。全形を復元できる個体はないが、22・23は底部から3段分、口縁部から2段分が残存し、透孔配置から5条6段構成に復元できる。底部に透孔のないものが主体で、2段目に長方形または逆三角形透孔がある。30は底部に半円または円形透孔がある。外面はタテハケのちCa種ヨコハケを施すものが多く、内面はハケ調整が基本である。突帯間隔設定技法は方形刺突のもの(26)と、

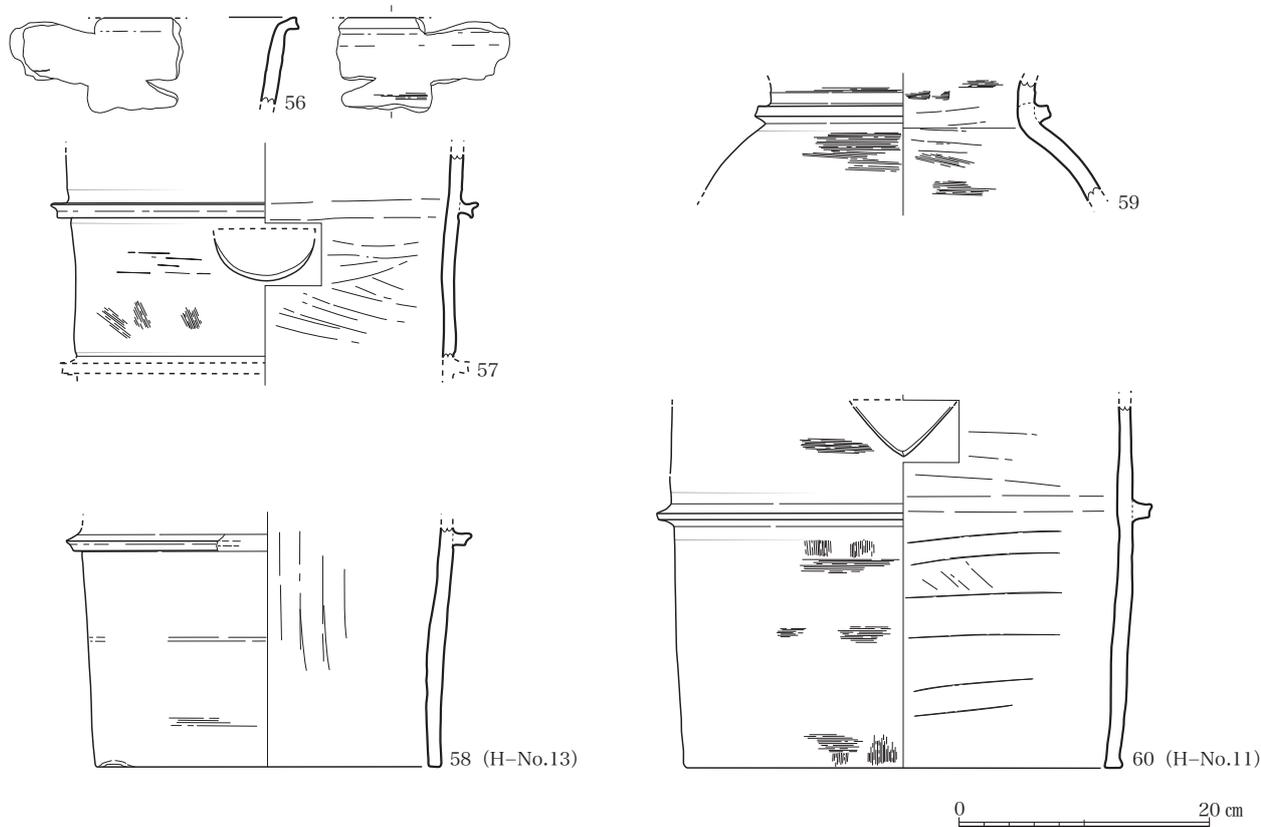


図60 造出し南東部～円丘部1段目(H発掘区)埴輪列出土埴輪3 1/6

凹線のもの (23) がある。26 は突帯が歪んでおり、よく観察すると方形刺突上に突帯が一部貼り付けられておらず、刺突が突帯外に露出した部分がある。また底面から約4 cm上方の外面に刺突痕跡があり、28 にも同様の痕跡がある。さらに第1段突帯の上辺には第2段突帯を設定した際に工具を置いた圧痕が認められる。23 には底部から約8 cm上方に横方向の擦痕が観察できる。これ

らの底部にみられる痕跡は、概ね突帯間隔や口縁部高の数値と相関性のある位置に認められるため、底部高の設定とともに口縁部高・突帯間隔も設定できるような工具の存在を想定することができる。

33 は内部に朝顔形埴輪の口縁部片 (32) が落ち込んでおり、埴輪列の屈曲部であることや他より底径が大きいことから朝顔形埴輪と判断した。底径約34cm、底部

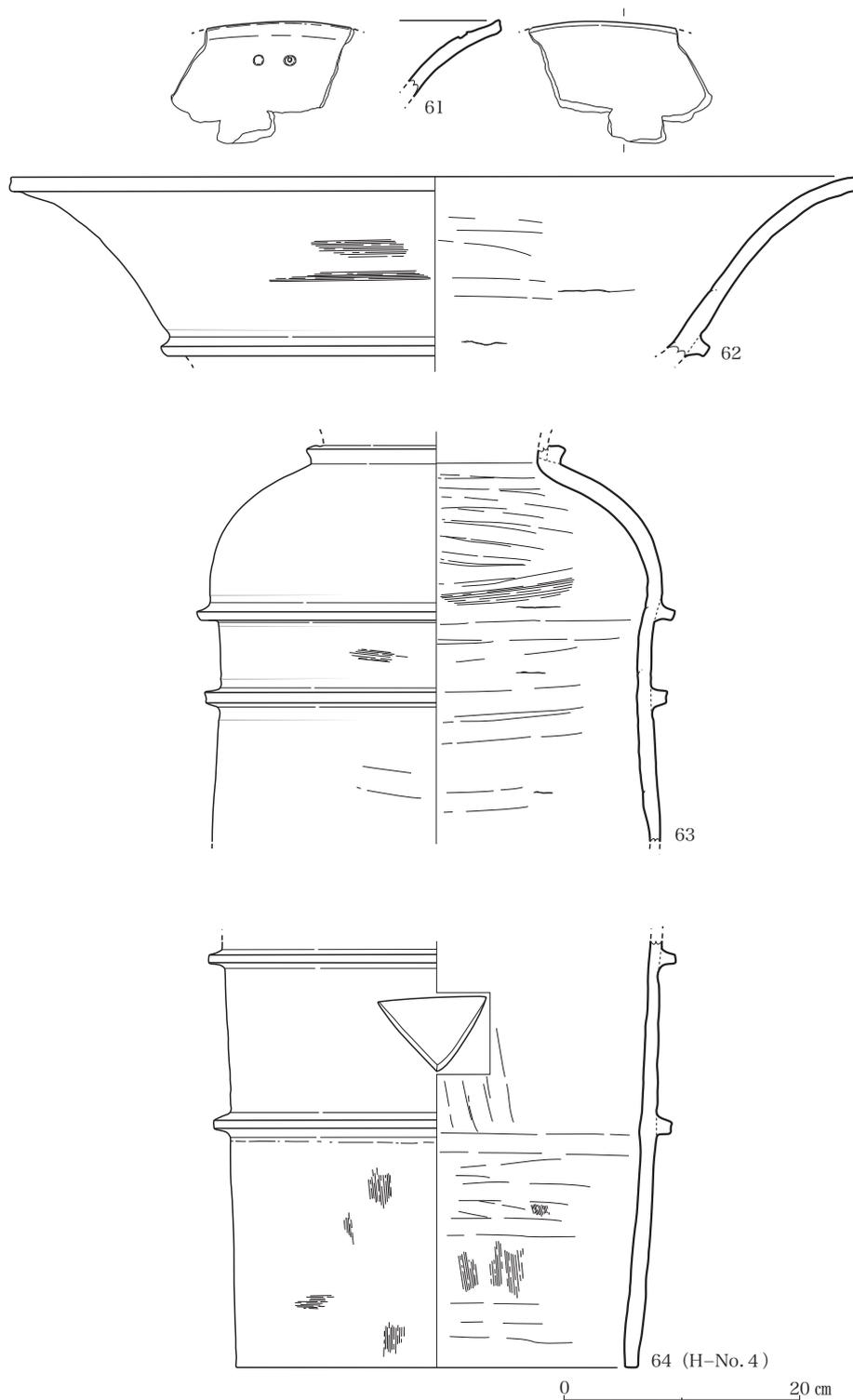


図 61 造出し南東部～円丘部1段目 (H発掘区) 埴輪列出土埴輪 4 1 / 6

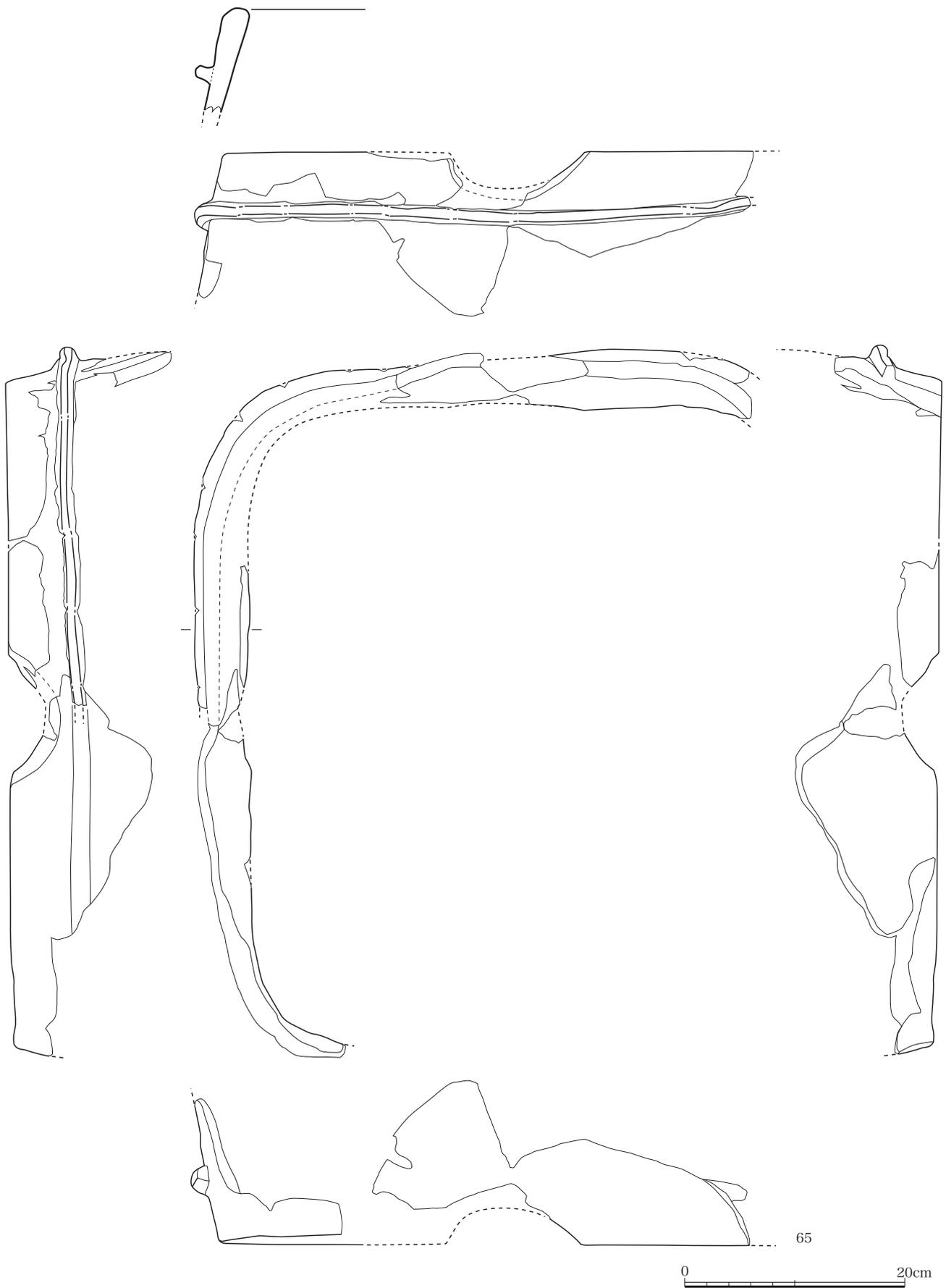


图 62 U 瓮掘区出土圜形埴輪 (原位置資料: 実測図) 1 / 5



图 63 U 瓮掘区出土圆形埴輪 (原位置資料: SfM) 1 / 5

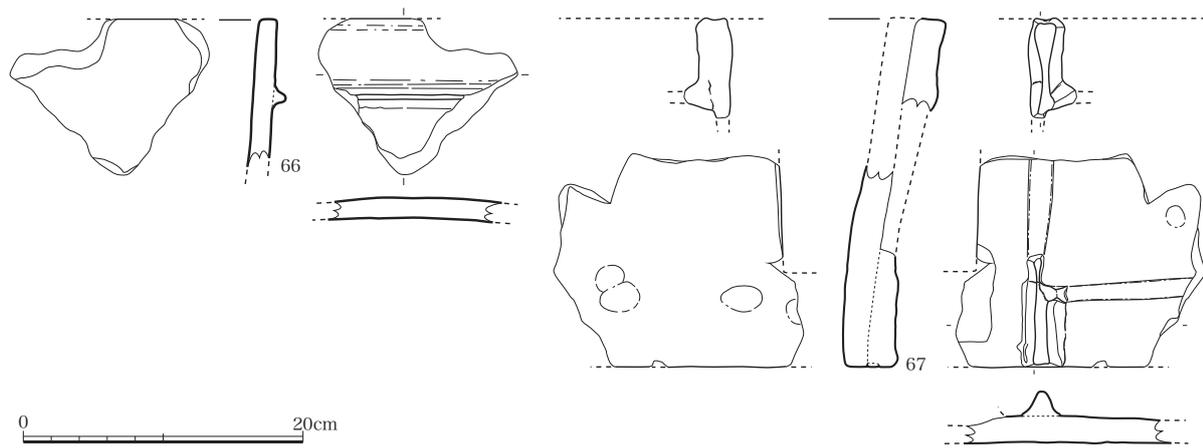


図 64 U 発掘区出土圀形埴輪 1 / 5

高約 20.2cm、突帯間隔 14.1cm 以上であり、規格は円筒埴輪と類似する。ただし、円筒埴輪と異なり底部に半円形透孔、2 段目に底部とは千鳥配置の長方形透孔がある。外面は Ca 種ヨコハケ、内面はタテハケ基調である。これと同様の特徴をもつ 31 も朝顔形埴輪である可能性が高い。

鱗付楕円筒埴輪 (34～37) は、底部の短径約 20cm、長径約 30cm であり、底部高 17～19cm、突帯間隔約 15cm である。第 1 段突帯の位置から鱗を貼り付けるが、刻み目は認められない。いずれも下辺は斜め方向に立ち上がる。底部に透孔はなく、2 段目に長方形透孔がある。外面はタテハケのち Ca 種ヨコハケで、内面はハケ・ナデ調整である。突帯間隔設定技法のわかるもの (34) には凹線がある。

造出し南東部下段～円丘部 1 段目埴輪列 (図 58～61～38～64) H 発掘区で検出した造出し下段および円丘部 1 段目平坦面の埴輪列では円筒埴輪 18 点、楕円筒埴輪 1 点、朝顔形埴輪 2 点を確認し、そのうち No. 2～15 の 14 点を取り上げた。

円筒埴輪 (38～58) は、特徴からさらに 4 つに分類できる。38～44 は、底部に 4 方向透孔を配置するもので円形と逆三角形が交互に施される。底径 28～30cm、底部高 20～21cm、40 は突帯間隔が約 14.6cm、口縁部高が 6.9cm であるため、概ね口縁部高は底部高-突帯間隔となる相関性をもつ。このことは、39 の底部から約 6.5cm 上方に横方向の擦痕が観察できることから、前述したのと同様に底部高を設定する工具で突帯間隔・口縁部高を設定したことを傍証する。39 や 41 では 2 段目に透孔が認められない。外面はタテハケのみでヨコハケはみられず、内面はハケ・ナデ調整であるが、41 には部分的にケズリが認められる。

45 は円形透孔、47 は小さめの方形透孔が底部にある。

底径はいずれも約 30.2cm、底部高は約 21.0cm である。45 は外面が Ca 種ヨコハケとみられ、突帯間隔設定技法に凹線を用いる。47 は外面不明瞭であるが、内面は板ナデ調整する。47 の内部から出土した 46 は、復元口径約 40cm、口縁部高約 8.4cm であり、47 よりやや直径が大きいため同一個体かどうかは判断できない。

48～55 は、いずれも底部に半円形透孔がある。底径は約 28～35cm、底部高は約 21cm で、突帯間隔がわかるもの (54) は約 14.3cm である。口縁部高のわかるものは約 10.5cm のもの (49) と約 12.4cm (53) のものがある。底径が大きく底部に半円形透孔をもつ点は、E 発掘区で出土した朝顔形埴輪と共通する特徴であるが、2 段目の残存するもの (51・52) では透孔が認められず、円筒埴輪の口縁部が出土していることや埴輪列で隣り合う場合があることから朝顔形埴輪ではないと考えられる。外面はタテハケ、内面はハケ・ナデ調整である。突帯間隔設定技法のわかるもの (48・55) は凹線である。53～55 は同一個体とみられるが、直径がやや大きく接合関係や透孔配置からみて 6 条 7 段以上となる可能性がある。

56～58 は、底径約 27.5cm、底部高 18.6cm で底部に透孔をもたず、接合関係からみて 57 の半円透孔は 3 段目以上に穿たれたものとみられる。

朝顔形埴輪として認識できたものは、埴輪列中に 2 個体ある (59・60、61～64)。いずれも底部に透孔がなく、2 段目に逆三角形透孔を配置する。外面はタテハケ基調で Ca 種ヨコハケも一部認められる。内面はハケ・ナデ調整であるが、60 は板ナデを施す。60 は底径約 34.8cm と大きく、内部から 59 が出土しており朝顔形埴輪と認識できる。底部高は約 21.1cm で円筒埴輪と概ね揃う。61～64 は同一個体で、底部高約 21cm、突帯間隔約 14.3cm、円筒埴輪の口縁部高に相当する部分は約 6.9

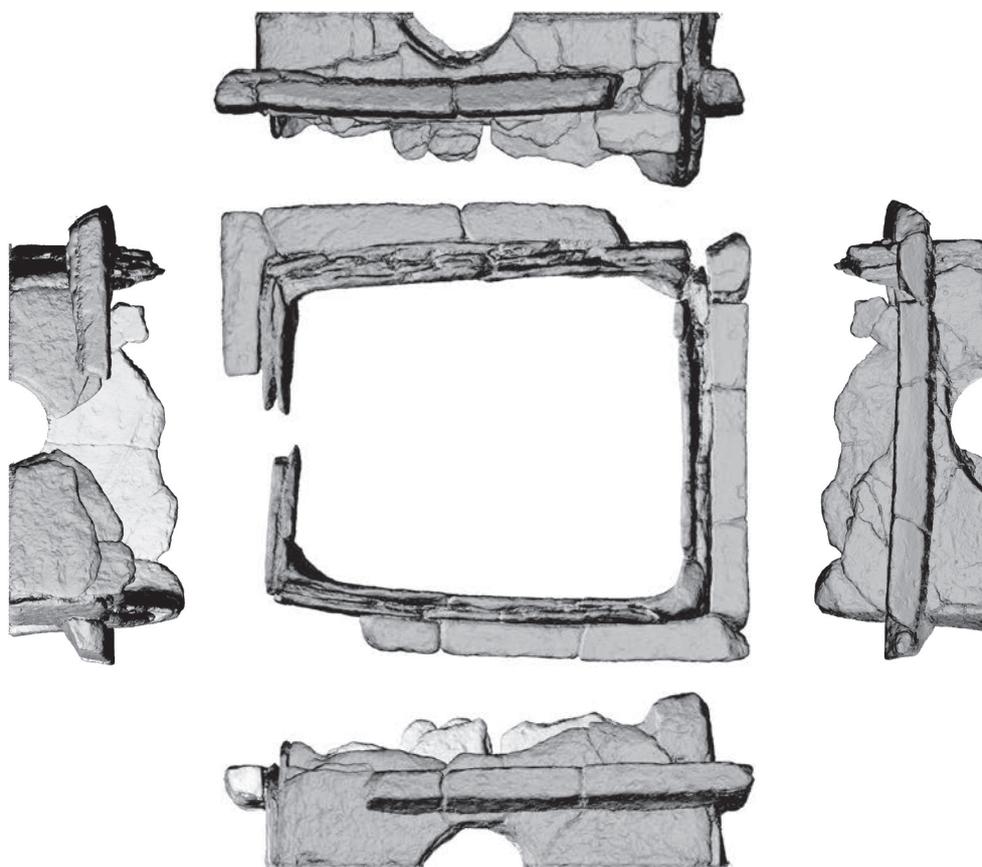
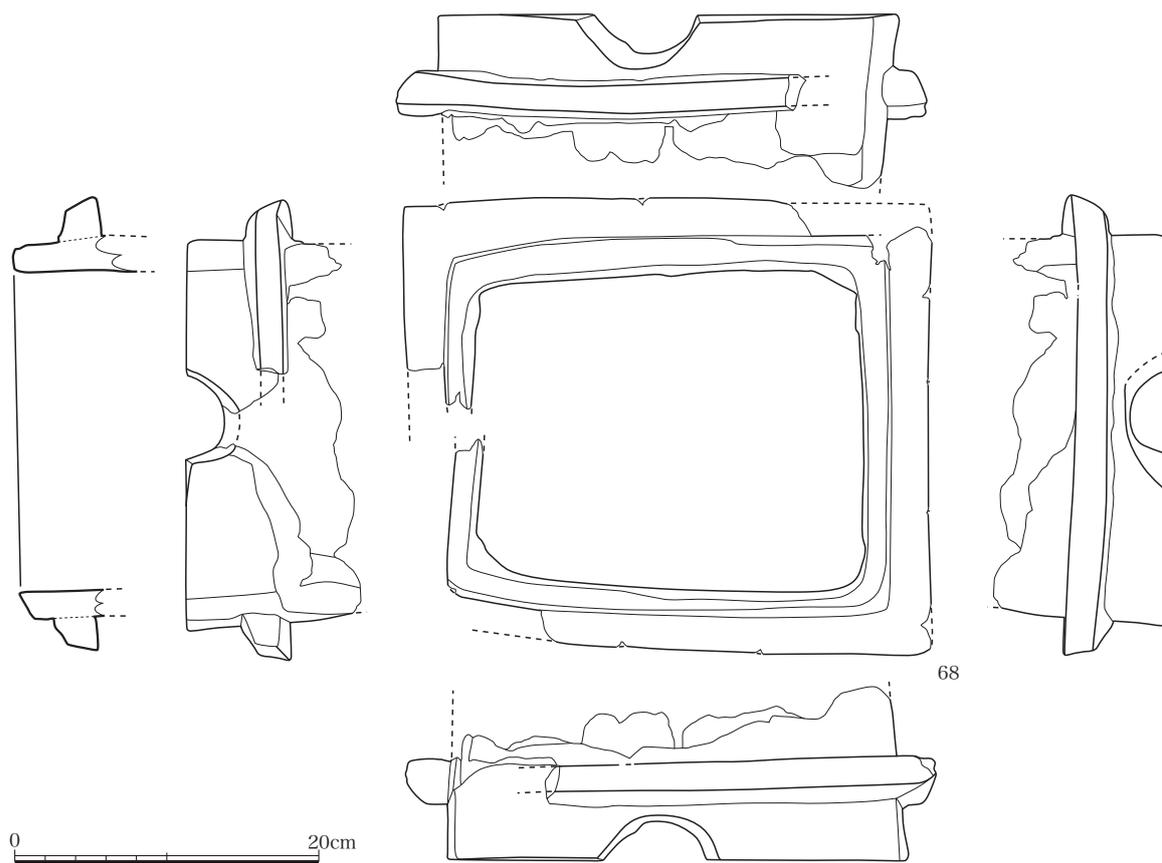


図 65 U 発掘区出土家形埴輪 (原位置資料: 実測図・SfM) 1 / 5

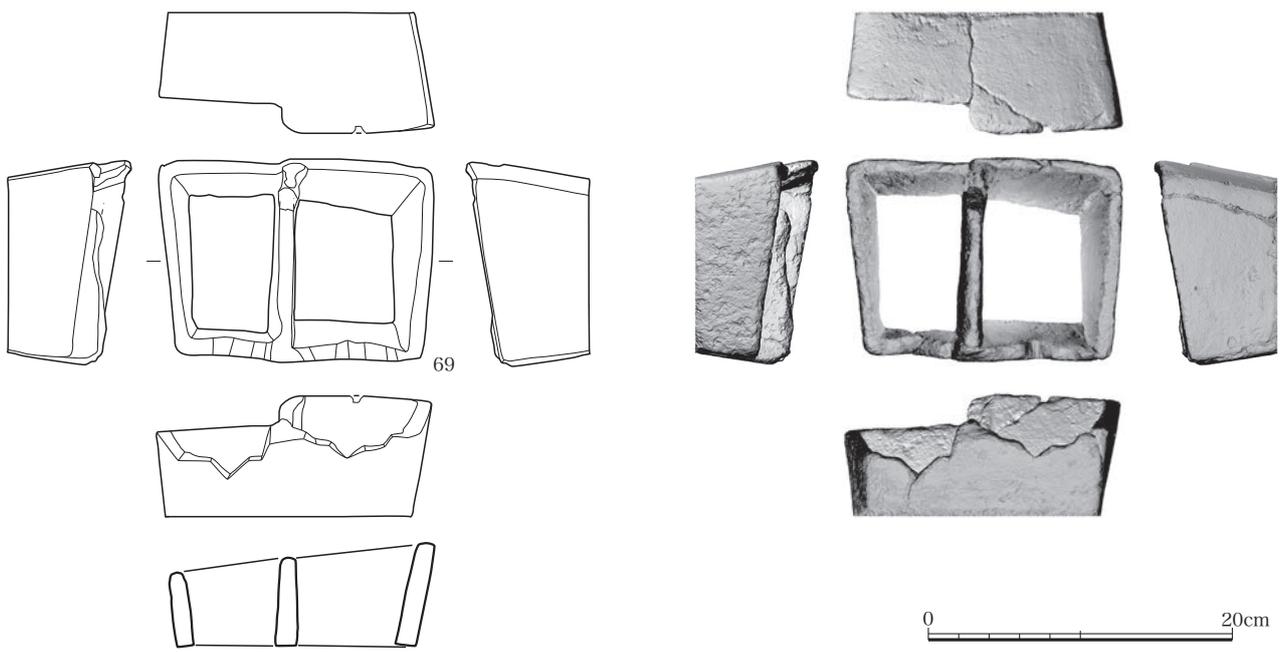


図 66 U 発掘区出土家形埴輪内部の湧水施設（原位置資料：実測図・SfM） 1 / 5

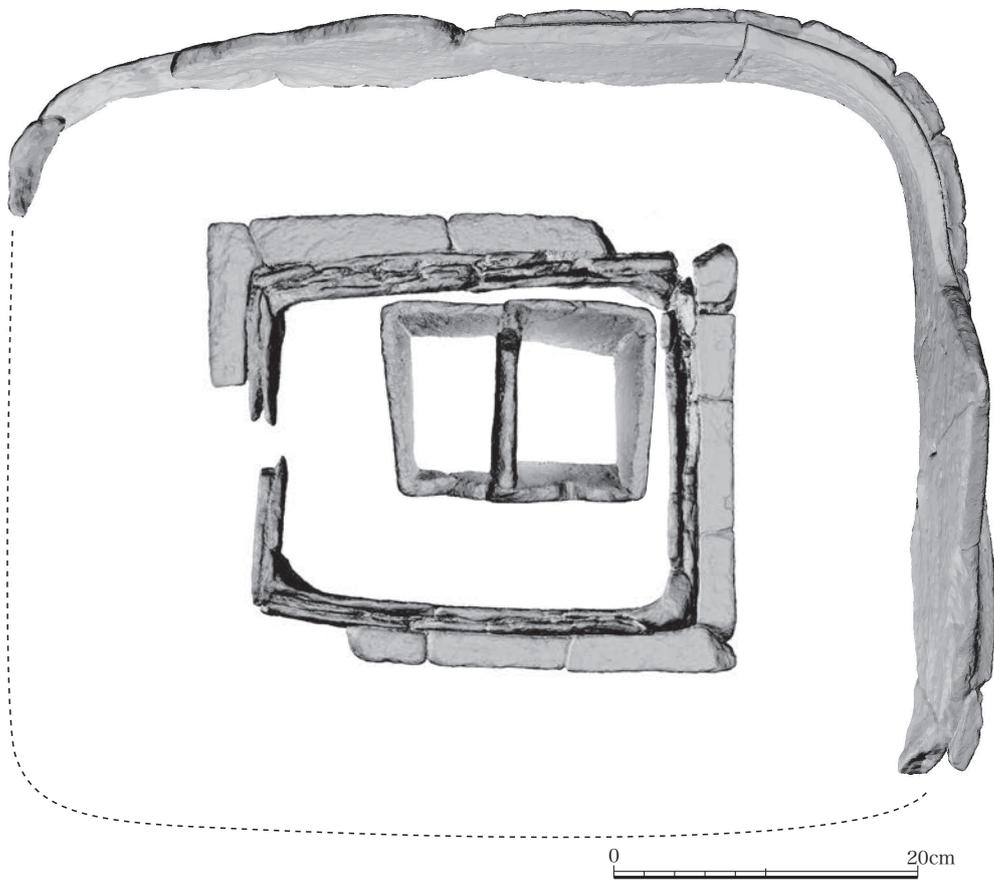


図 67 U 発掘区出土湧水施設形埴輪 出土状態の復元図 1 / 5

cmである。口縁部高に相当する部分は、概ね突帯間隔の1/2とみることもできるが、底部高-突帯間隔の数値とも相関性があるため、いずれかは判断できない。また、61は口縁部の破片であるが、内面に2つの竹管文が認められる。同様の竹管文がある例は天理市東大寺山古墳出土の朝顔形埴輪のほか、兵庫県五色塚古墳出土の円筒埴輪にも類例がある。(村瀬)

第2項 罎・家形埴輪 (図62～68・65～82)

罎・家形埴輪には主にU発掘区の原位置およびその周辺で出土した資料(65～80)と墳頂部から転落したとみられる資料(81・82)がある。前者は罎形埴輪の内側に家形埴輪を配置し、さらにその内部には二槽式の構造物を設置した湧水施設形埴輪として配置されたものと考えられる。

罎形埴輪 罎形埴輪と判断できる個体は3点(65～

67)あり、65のみが原位置で出土したものである。65は底部が約1/2残存し、概ね長辺約60cm、短辺約50cmの平面隅丸長方形に復元できる。残存する3つの隅はいずれも緩やかに屈曲する。底辺中央には外側から内側へ剥り抜かれた幅約11cmの半円形の剝込みがある。底端部の厚みは約2.5cmである。壁体はやや外側に傾斜するように立ち上がり、底面より約6cmの位置に1条の横方向の突帯がつく。突帯は風化しているが幅約1cm、高さ約1.5cmで円筒埴輪の突帯とよく似ている。内外面ともに表面が風化し調整は不明瞭である。接合痕も不明瞭であるが、割れ面の痕跡から幅約5.5cmの粘土紐を積み上げて製作したとみられる。

66は、壁体の端面から約6cmの位置に1条の横方向の突帯がつく。65と同様の位置関係であるため、底部の可能性もあるが、端部の厚さが約1.1cmと底部に比べて薄いことから口縁部の破片であると考えた。

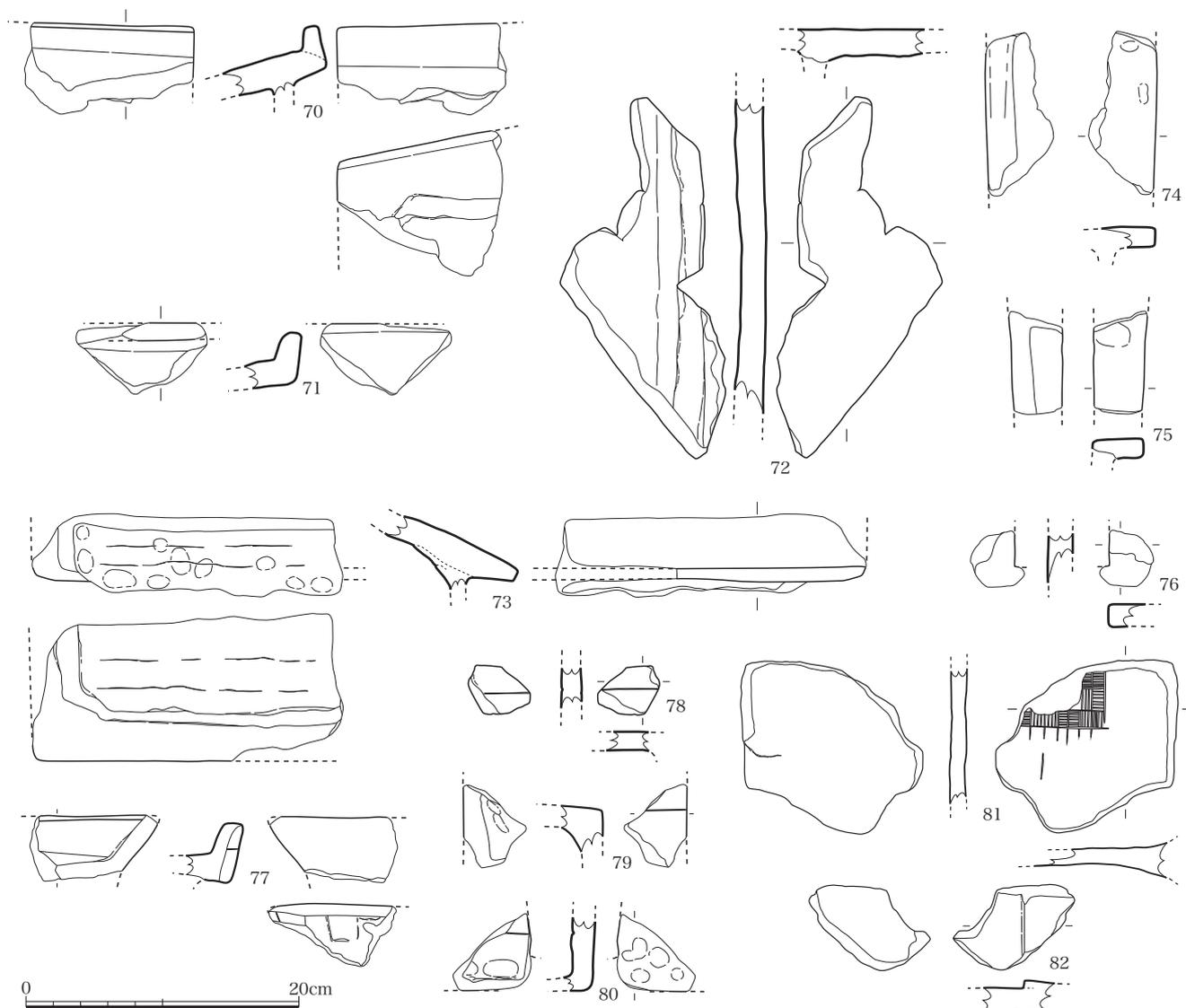


図68 U発掘区出土家形埴輪(70～74)、罎または家形埴輪(75～80)、各発掘区家形埴輪(81・82) 1/5

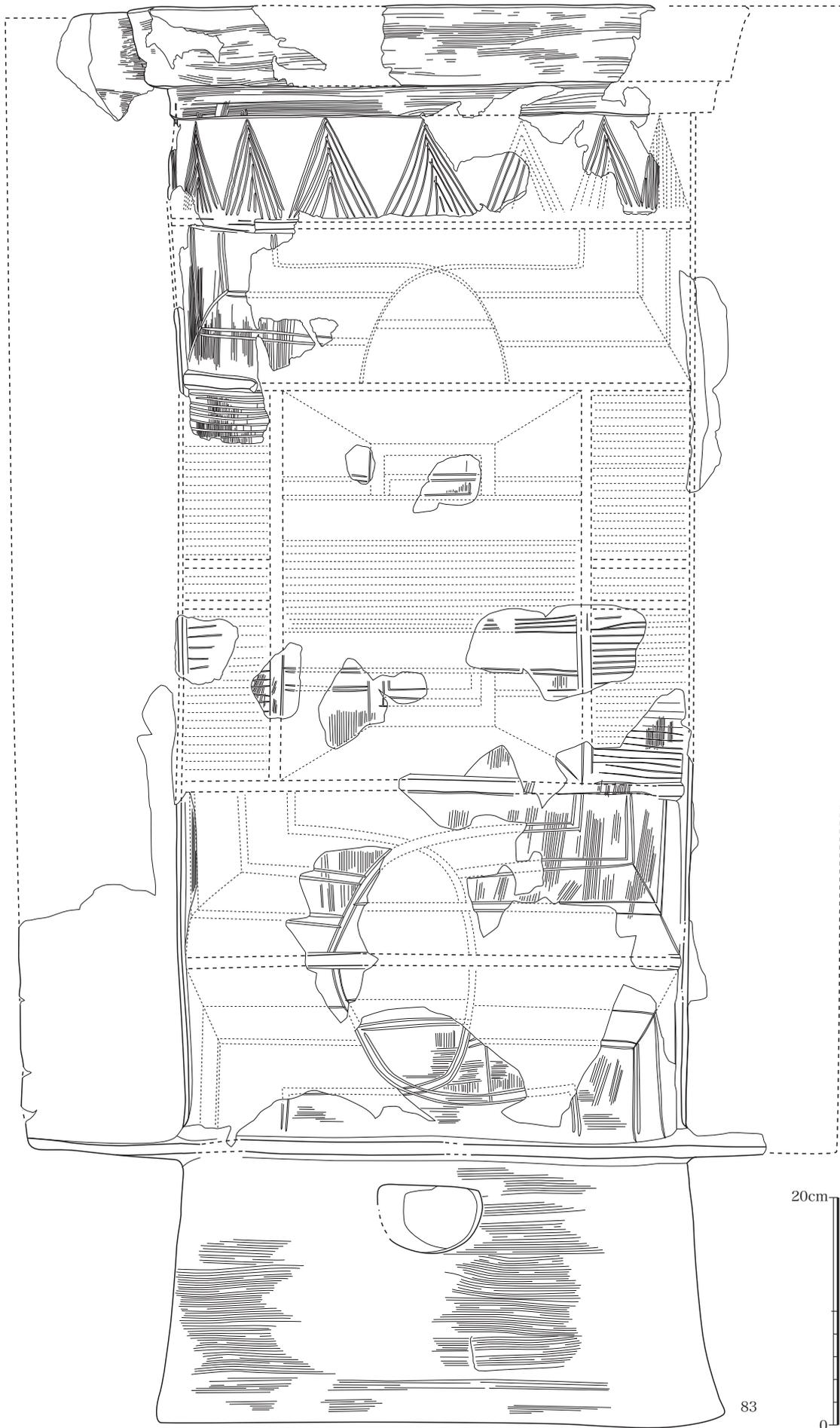


图 69 G 瓮掘区出土盾形埴輪（表面実測図） 1 / 5

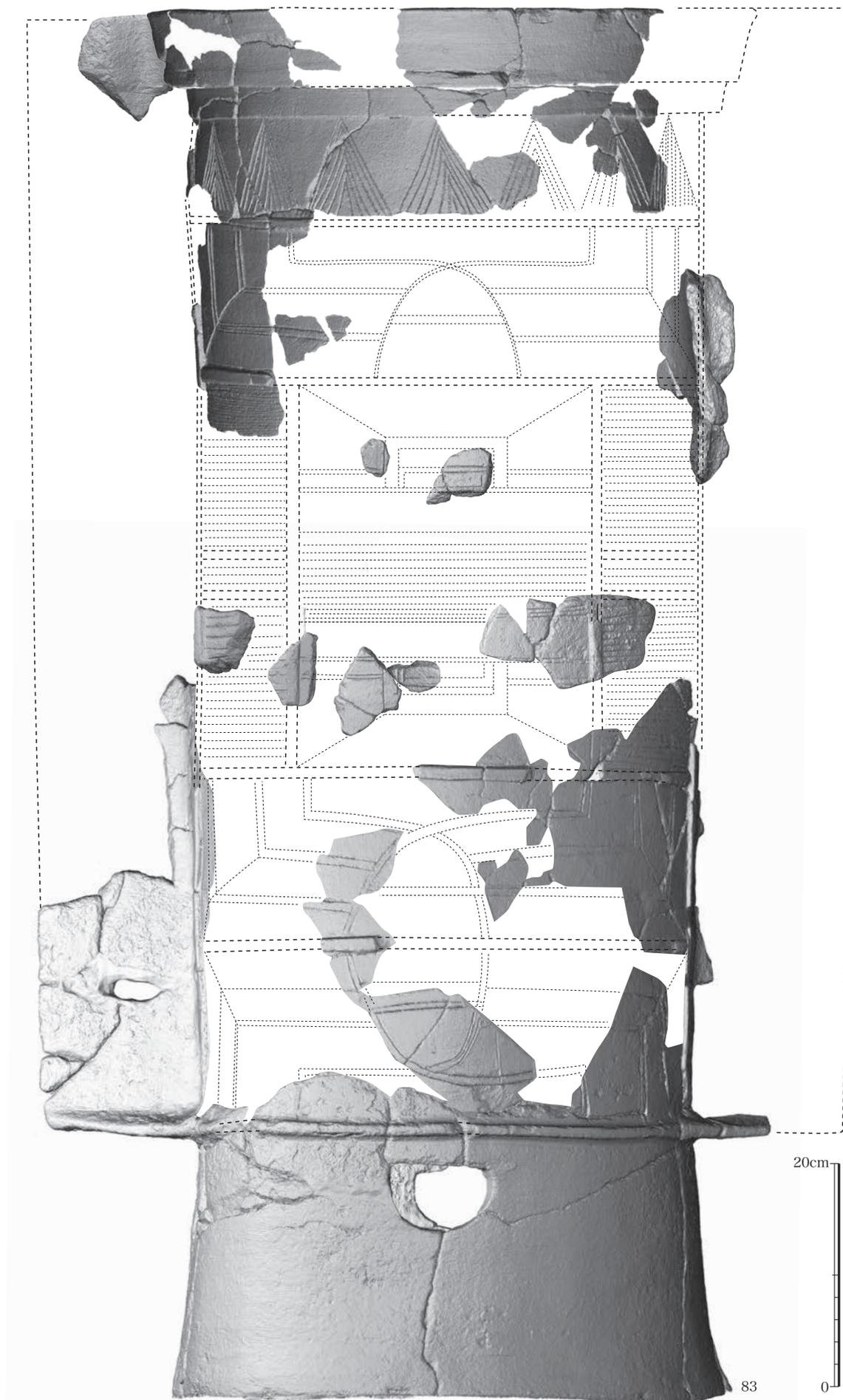


图70 G 発掘区出土盾形埴輪（表面 SfM） 1 / 5

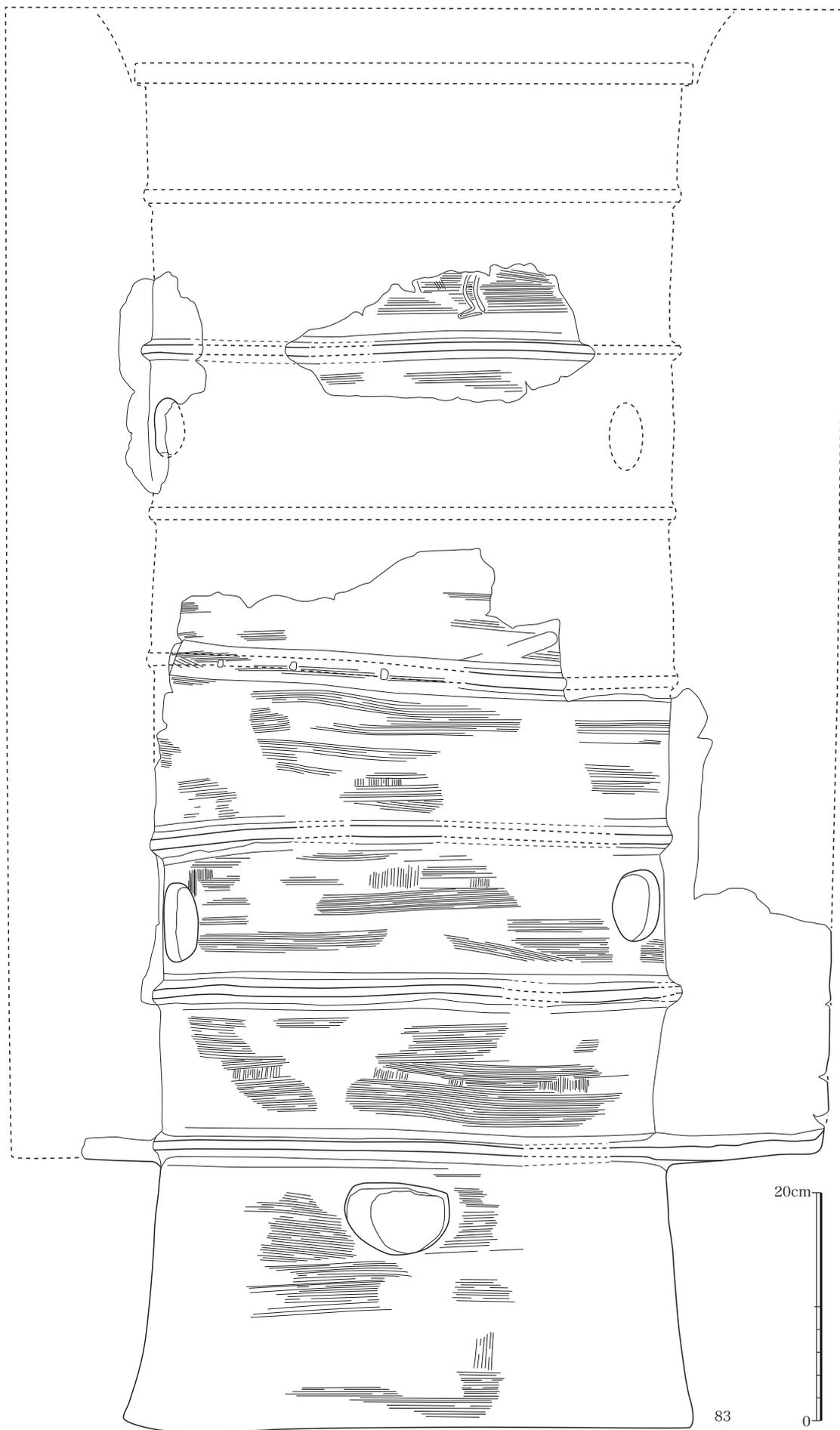


图 71 G 瓮掘区出土盾形埴輪（裏面実測図） 1 / 5

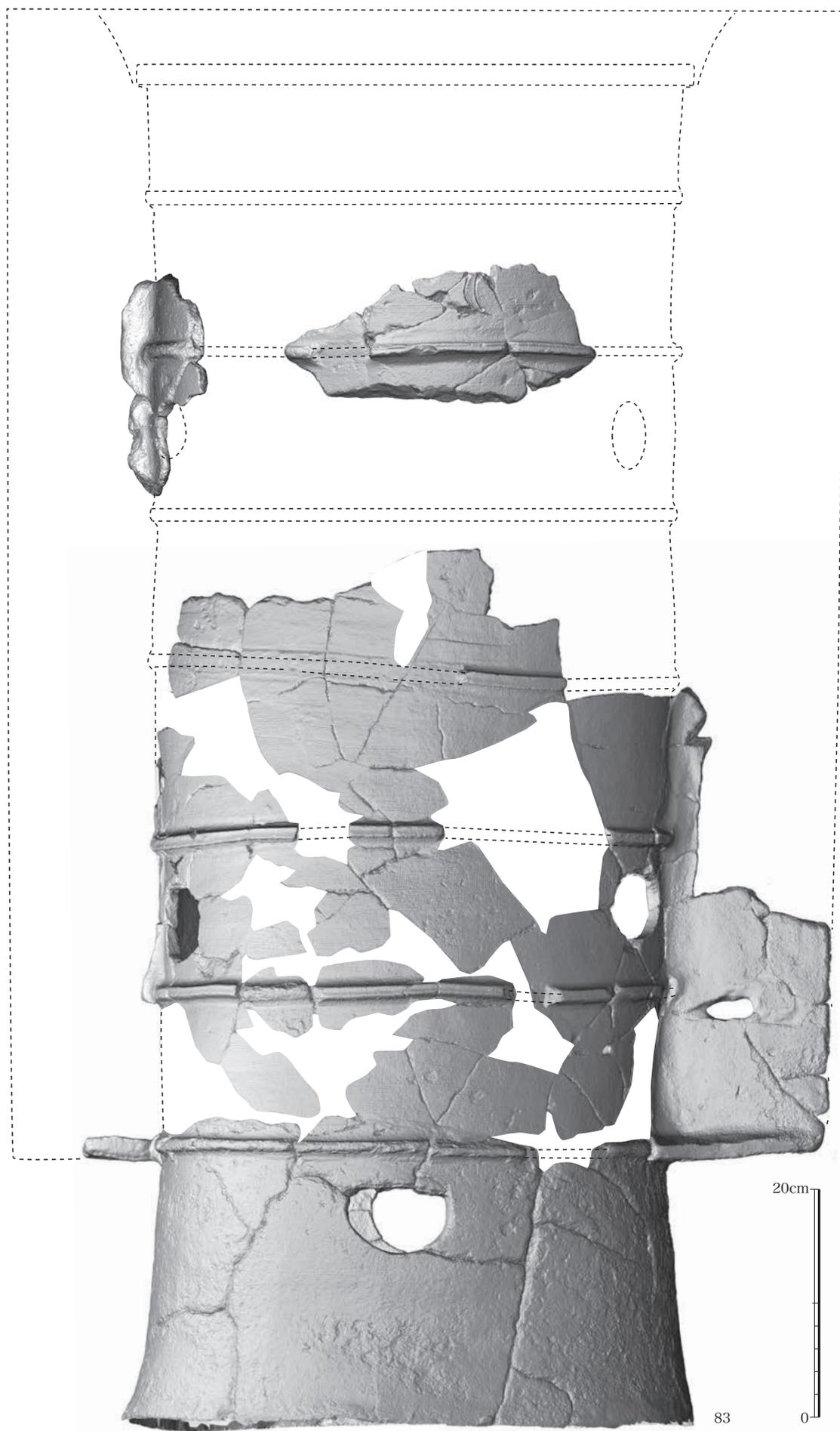


图 72 G 発掘区出土盾形埴輪（裏面 SfM） 1 / 5

67は底端部から約6cmの位置に1条の横方向の突帯がつき、これに直交するやや太めの突帯が貼り付けられる。さらにその内側には縦方向の突帯に平行する透かしの痕跡が認められる。突帯の位置関係から65と同一個体の冪形埴輪とみられ、透かしは入り口を表現したものと考えられる。縦方向の突帯が剥離した破片も出土しており、対置するものの可能性もあるが、やや薄いことから口縁部側として図上復元した。

出土した破片のなかに、鉤型に屈曲するような破片が認められないことから、平面形は隅丸方形となる可能性が高い。また、山形突起の破片がないことからそういった装飾のない冪形埴輪を想定することができる。

冪形埴輪 冪形埴輪と判断できる個体は9点(68～74・81・82)あり、68・69のみ原位置から出土したものである。68は一部が割れているため、接合復元する際にやや歪みを生じているが、長辺約30cm、短辺約27.5cmとほぼ正方形に近い形状を呈する。各辺の底部中央に、幅約7cmの半円形の刳込みをもつ。底面より約6cmの位置に1条の裾廻突帯がある。突帯は幅約2cm、高さ約2.5cmと台形状を呈し、突帯上辺は工具で平滑に調整され、壁体にその際の擦痕が認められる。突帯より上部の残存する壁体部に透かしの痕跡は認められない。同時期の壁体は一般に粘土紐を積み上げて成形する場合が多いが、68は厚さ0.5～0.7cmの粘土板を2～3枚

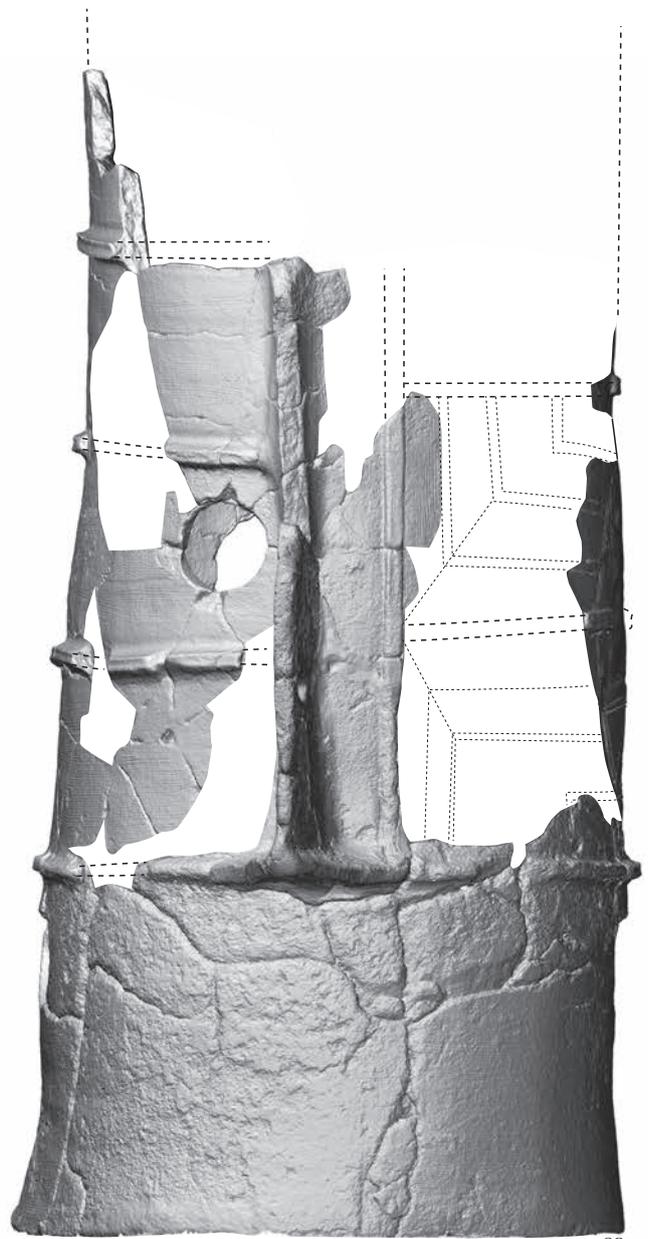
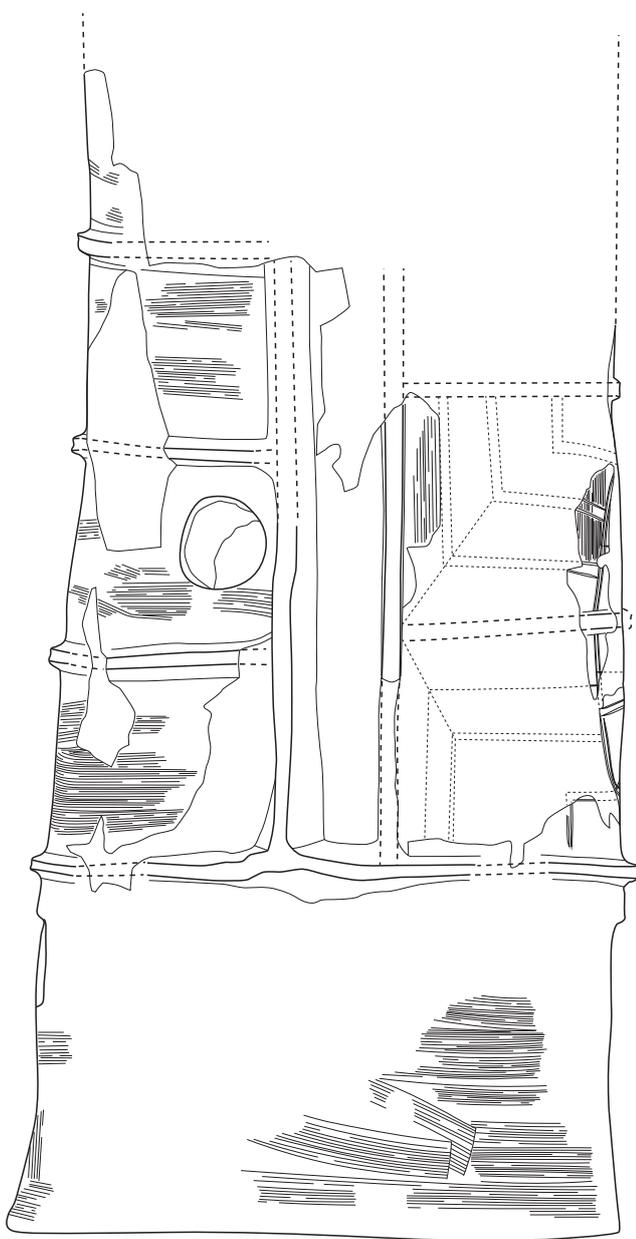


図73 G発掘区出土冪形埴輪(右側面実測図・SfM) 1/5

貼り合わせて壁体とし、これを組み合わせて製作している。特に隅の部分は補強のためか、3枚の粘土板が使用されている。

69は68の内部に配置されていた2槽式の構造物である。粘土板を貼り合わせ底のない方形枠を構築したのち、枠の中央に粘土板で仕切りをして2槽を表現する。2槽の前面にはそれぞれの中央に2段の切れ込みがある。切れ込みまでの高さは約4.5cmと約3cmで差がある。2槽自体の高さも異なり、背面で約8cmと約6cm、前面で約6cmと約4cmである。側面は上方へ向かって広がる。このような2槽式の構造物が家形埴輪内に設置された事例はない。

70～74は家形埴輪の屋根部と考えられる。湧水施設形埴輪として組み合う家形埴輪の他例は今のところ全て切妻造りであるが、棟の破片が全く出土していない。70・71のような屈曲をもつ破片は、破風にしてはやや短いため、片流れ造りの屋根である可能性がある。

81はE発掘区で出土したもので埴頂部から転落してきたものとみられる。屋根部の破片で網代表現がある。82はU発掘区のやや北東部で台風による倒木があり、その根元で表採したものである。埴頂部からの転落である可能性もあるが、U発掘区での事例から付近に家形埴輪が配置されるような遺構も想定できる。表面にみられる段差は壁体の柱部を表現したものとみられる。

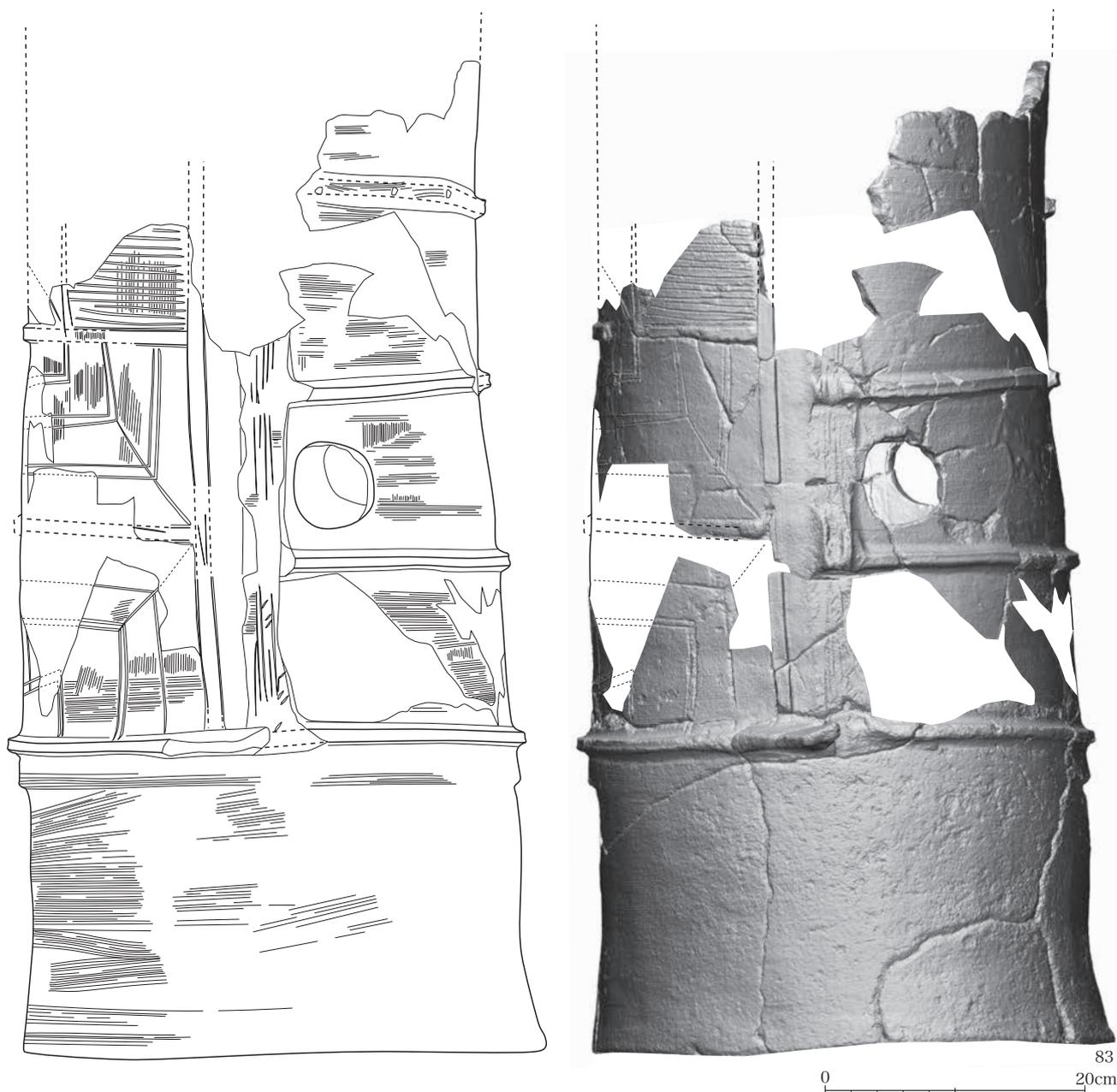


図74 G発掘区出土盾形埴輪（左側面実測図・SF） 1/5

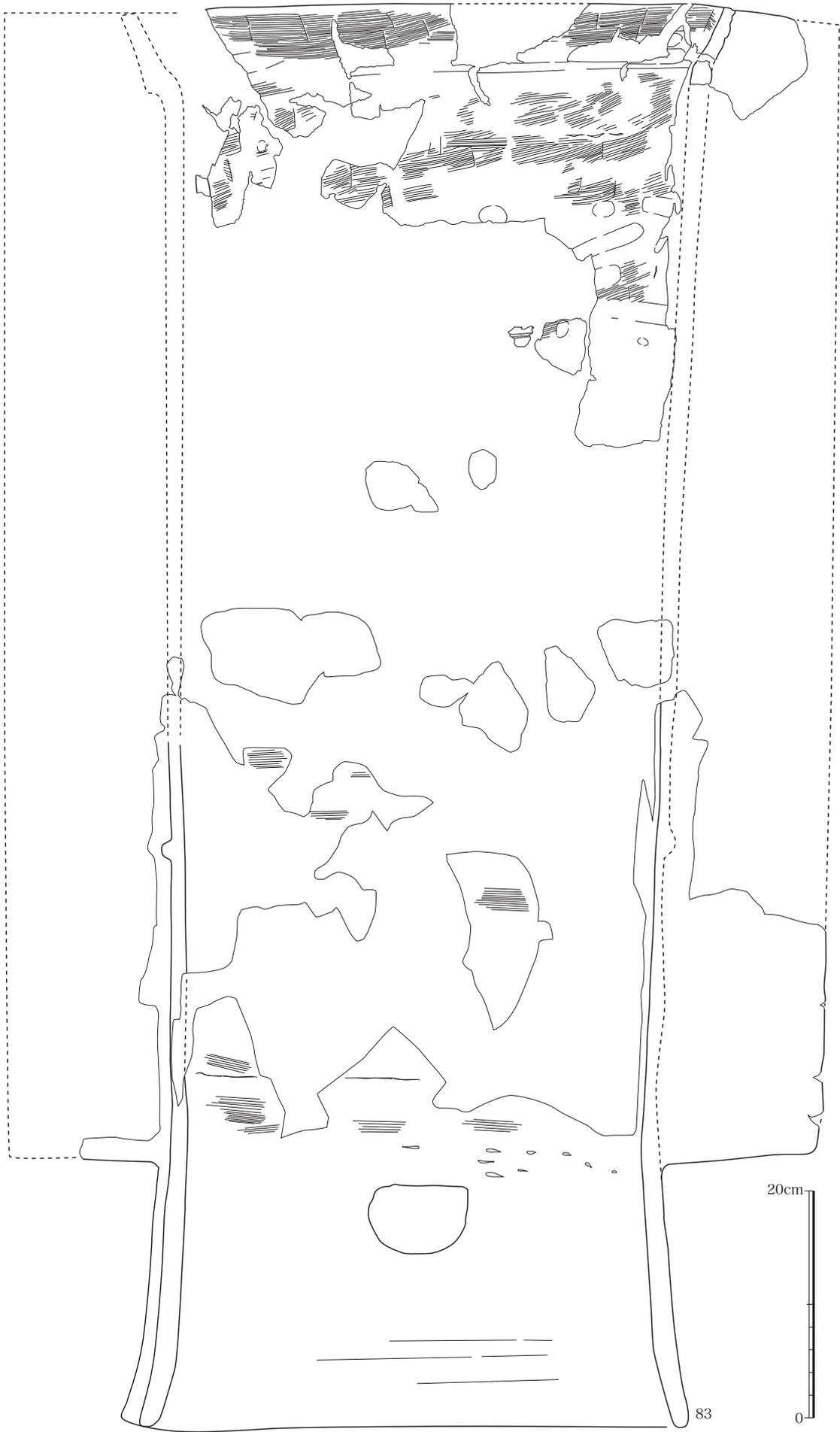


图 75 G 瓮掘区出土盾形植輪 (内面実測図・断面図) 1 / 5

罎・家形埴輪 U発掘区で出土しているため、67・68に関連する破片とみられるが、罎・家形埴輪のいずれかが判断できないもの（75～80）である。

75は窓や柱などの角に位置すると推測できる破片である。76は直角に屈曲する透かしをもつことから、罎形埴輪の入口または家形埴輪の窓の破片と考えられる。

77～80は線刻がみられる破片である。77はL字に屈曲する破片で、側面に線刻が施される。端面に対して斜め方向に側面が残存しており、形状は70等と類似するが別の部位の破片とみられる。屈曲面に剥離痕があることから、罎形埴輪の入口部下方の剥離面に対応する階段状構造物などの可能性もある。底面には、粘土のヨレや板目が残ったままで調整されていない。78は内面、

外面ともに直線状の沈線が施される。外面に立ち上がりの痕跡が観察できる。79はL字に屈曲する破片で、直角に近い鈍角をなす。外面の1面のみに直線状の沈線が認められる。80はL字に屈曲する破片で、内面に直線状の沈線が施される。
(木村日向子)

第3項 盾形埴輪 (図69～79-83～94)

G発掘区で原位置を保った状態で出土した個体（83）のほか、A・C・E・F・R発掘区からも破片が出土しており、それらは埴頂部に樹立していたものが割れて転落したものとみられる。いずれも胎土に3～5mmの白色粒を含み、焼成は良好で多くが黒斑をもつ。

G発掘区盾形埴輪 (図69～77-83) 83は、埴輪内部

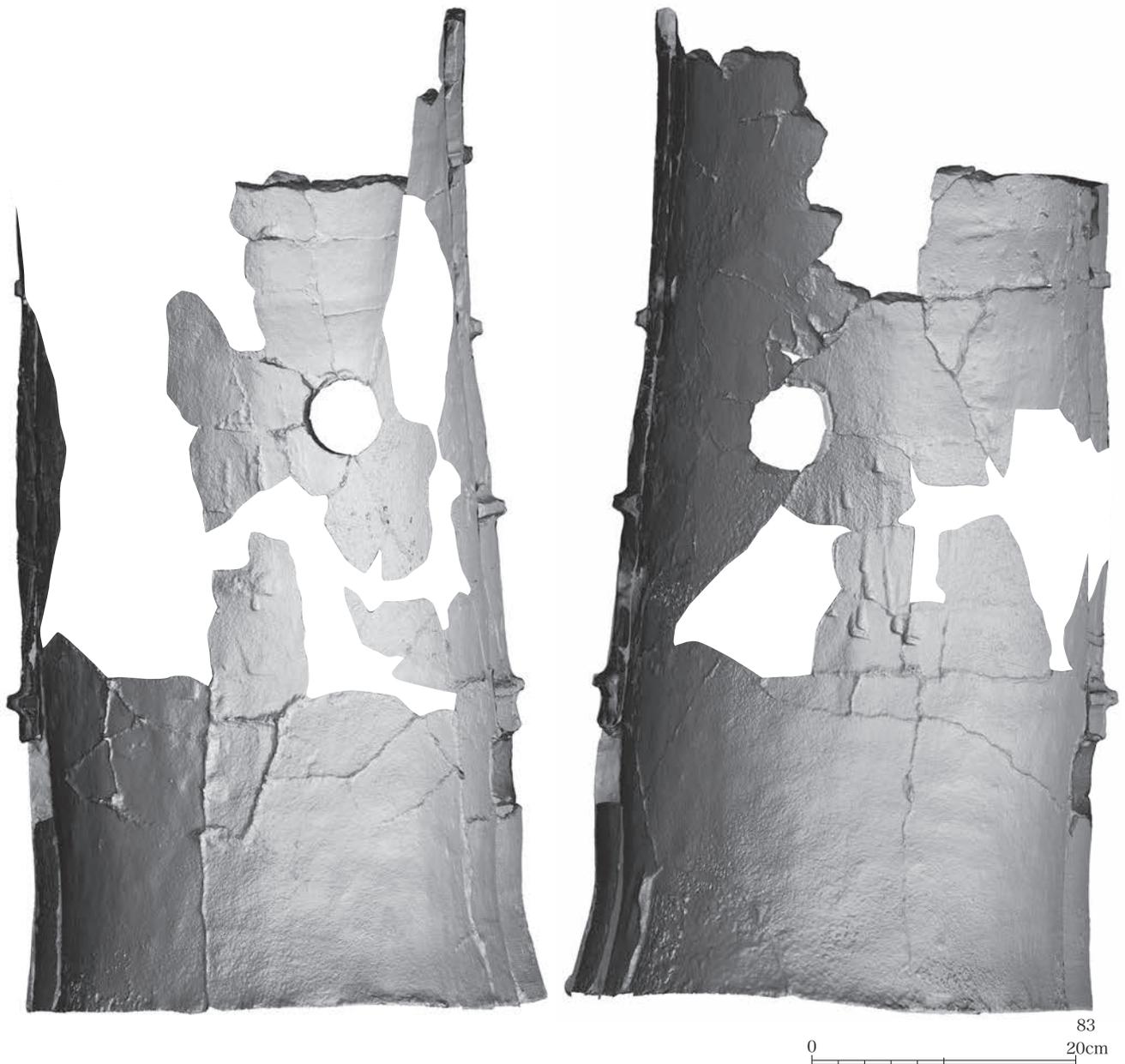
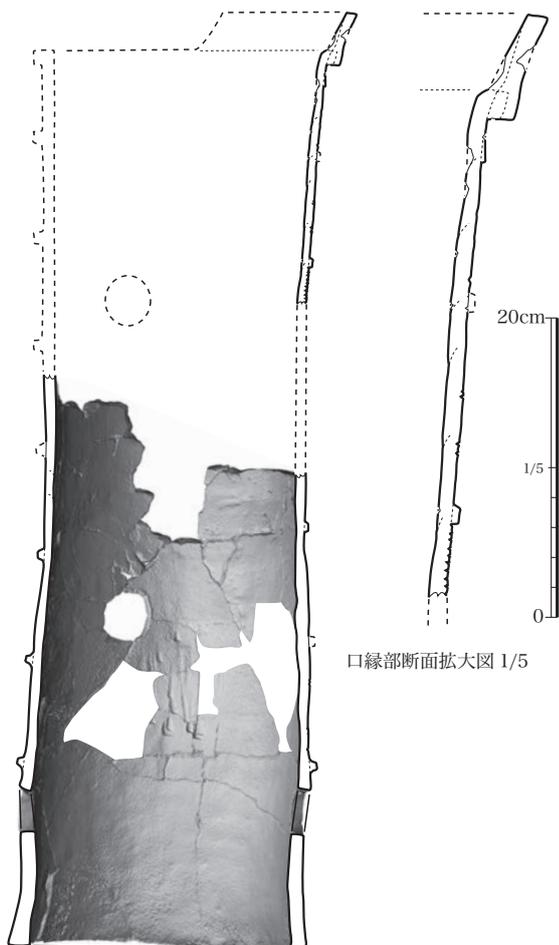


図76 G発掘区出土盾形埴輪 (内左右側面 SfM) 1 / 5



口縁部断面拡大図 1/5

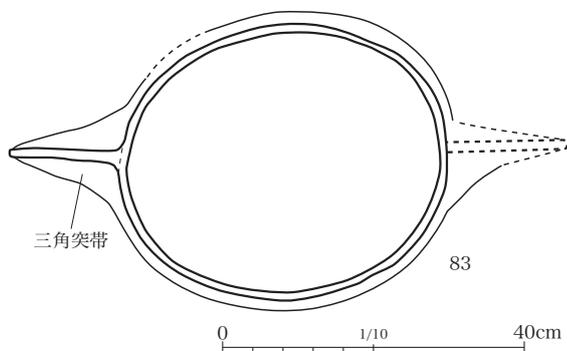


図 77 G 発掘区出土盾形埴輪（縦・横断面図） 1/10

および周辺に散布した破片を接合して復元（一部は図上復元）した。底部から形象部下半にかけての破片と表面（盾面側）の口縁部及び内区の破片からなるが、直接接合しない。左右に鱗を貼り付ける。断面は楕円形を呈し、形態としては鱗付楕円筒埴輪の表面に盾の形状を表現したといってもよい。基底部に2つの半円形透孔が対向する位置にあり、裏面3・6段目の鱗との接合部付近に円形透孔が2方向に穿たれる。以下、製作工程ごとの特徴と文様構成について述べる。なお、各部の名称については図78に示したとおりである。

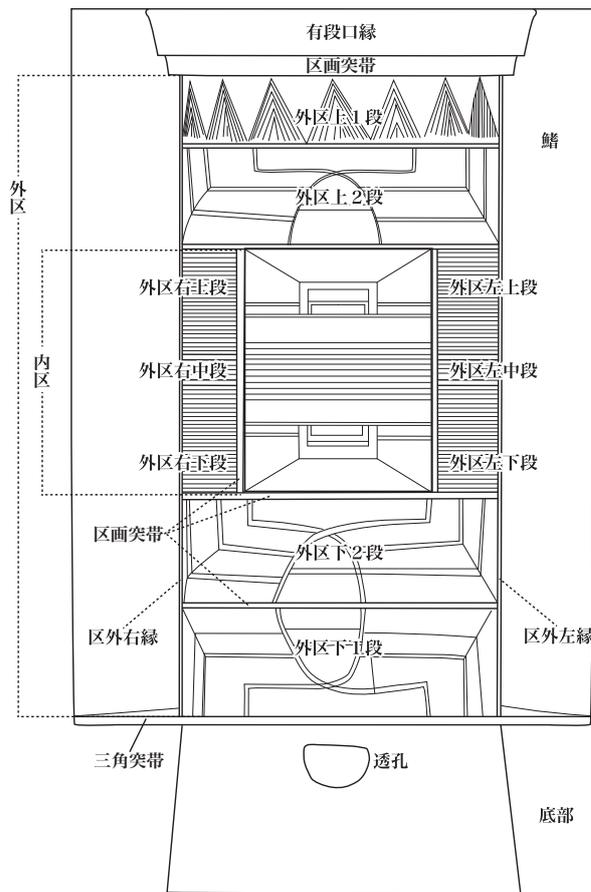


図 78 盾形埴輪の部位名称

製作工程 大まかな製作工程は、①楕円筒（体部）の製作→②表面口縁部の製作→③鱗部の貼り付け→④盾面の整形・施文といった手順に復元することができる。なお、楕円筒部分の外表面調整や突帯貼り付けの手法には、④2段目以上も外表面ヨコハケ及び突帯を一周させ、鱗を接合した後に表面の突帯を削り取って再調整を行う場合と、⑤2段目以上は裏面の半周のみにヨコハケ調整を行い、突帯を貼り付ける場合の2通りを考慮することができる。④は京都府黄金塚2号墳出土の盾形埴輪に採用されており、円筒埴輪の製作技法と共通する。ただし、本例には方形刺突痕や、内面の突帯貼り付け時のヨコナデなど、表面に突帯を一周させた痕跡を確認できないため、④の手法で製作されたと推察できるものの、⑤の可能性も否定できない。

①楕円筒の製作 最初に下から粘土を積み上げて楕円筒を製作する。丁寧に調整されており、底部の積み上げが粘土帯であるか粘土紐であるかは不明確である。底部径

は長径約49.2cm、短径約40.2cmである。器壁の厚さは底部で約2.0cm、口縁部で約1.3cmとなり上部へ行くほど薄くなる。外面調整は底部にタテハケのちヨコハケ(7~8条/cm)を行うが、複数周丁寧に行なうヨコハケによってタテハケはほとんどみえない。底部と2段目以上では表面と裏面で調整が異なる。表面では2段目にタテハケのちヨコハケを部分的に施し、3段目以上は一次タテハケ調整のみを行う。一方、裏面は2段目以上もタテハケのちヨコハケで丁寧に調整しており、突帯剥離面から突帯貼り付け前にヨコハケしたことがわかる。内面調整はヨコハケのちナデで、接合痕を丁寧にナデ消している。

次に突帯貼り付けを行う。第1段突帯は表裏一周貼り付けられるが、2条目以上は裏面の半周のみ突帯が残る。突帯は台形状を呈し、4条目突帯の剥離面には突帯設定技法の方形刺突痕が残る。楕円筒の口縁部にも突帯を貼り付け、貼付突帯口縁をつくる。第1段突帯までの底部高は約25.5cm、裏面の突帯間隔は13.5~14.0cmである。

②表面口縁部の製作 口縁部は、表面のみ貼付突帯口縁の上に粘土をさらに積み上げ、外反する有段口縁をつくる。有段口縁の内外面はヨコハケで調整している。表面の口縁部復元長径は約54.3cmである。

③鱗部の貼り付け 第1段突帯から有段口縁部にかけて鱗を接合する。この際に、鱗接合部の突帯はすべて切り取られる。鱗部は幅約14cm、厚さ1.4cmで、貼り付け部分には4~5条の縦方向の沈線を刻む。沈線は外反口縁にも及んでおり、口縁部製作後に鱗を貼り付けたことがわかる。第1段突帯には、三角形に粘土を補充して、鱗下端部を補強する(図77三角突帯)。また、鱗接合部の内面下部には細板状工具による押圧痕が残り、接合の際の当て具痕跡とみられる。鱗面の調整は、主に縦方向のナデであるが、口縁部表面側にはヨコハケが認められる。

④盾面の整形・施文 表面の突帯を削除して表面を再調整したのちに、区画突帯を縦横に貼り付けて盾面を成形し文様を刻む。区画突帯は低平台形を呈するが、外区上1段と有段口縁を画する突帯は幅広くつくられる。裏面の突帯と形状が異なり、数条の沈線を刻み割付してから貼り付ける。

文様構成 盾面には、内区を中心として、その上下左右に区画突帯を貼り付け外区を配置する。外区は上下各2段にわかれ、左右も他例と同様に3段構成と想定される。外区下1・2段の区画には直弧文が上下対称に線刻されており、外区上2段にも下向きの直弧文を線刻する可能

性が高い。外区上1段には上向きの鋸歯文が7つ線刻されており、右の1点のみ縦線、それ以外は山形の沈線で充填する。外区左右段は幅約12.0cmで横線文が線刻される。3段構成と想定した場合、中段の区画は上下段に比べて著しく狭く復元せざるを得ない。内区文様は遺存状態が悪く不明瞭だが、中央に横線文帯が線刻され、その上下には主に2条沈線で鍵手文を表現したと考えられる。上下に突出する方形区画線の角から内区の四隅に向かって対角線が伸びると復元できる。

裏面の7段目に復元できる位置には、逆「く」字状の2条沈線が線刻されている。

口縁部側から表面に3段分、底部側から裏面に5段分の高さが残存しており、裏面で7条8段構成に復元できる。表面の復元高は約125.2cmで、裏面では有段の外反口縁がない分だけ低くなり約119.6cmとなる。

その他の盾形埴輪 (図79-84~94) 84~94は盾面、および円筒部の破片である。盾面片は、横断面が扁平で、盾面が円筒部から張り出す形状に復元できるもの(84)と、横断面が弧状を呈し、円筒面に文様を描く83と同様の形状に復元可能なもの(87~90・92・93)とに分類される。特に、84は斜線または綾杉文の圈帯の外側に鋸歯文を施文し、内面には支持粘土帯の剥離痕が残ることから、内区から外区の境界に位置づけられる破片とみられる。

後者には、横線文を線刻するもの(85~88)、縦方向の平行沈線を線刻するもの(89・90)、鋸歯文を線刻するもの(92・93)がある。横線文は、刻線の密度が13本/5cmと高いもの(86)と7本/5cmと低いもの(85・87・88)とにわかれる。このうち87・88は幅21.3cm以上、突帯間隔10.9cm前後で83の外区左右より大きいため、外区上下の段に横線文を線刻していたものと考えられる。一方、90は数条の縦線が横線1条に区切られており、内区を中心部分を囲む平行沈線の一部である可能性が高い。鋸歯文は92・93とも内部を縦線で充填している。

91・94は円筒部の破片である。91は鱗部にかけての破片で、裏面の突帯が2条分残存しており、突帯間隔は約15cmである。94は貼付突帯口縁であるため、裏面の口縁部と考えられる。(山口)

第4項 蓋形埴輪(図80-95~107)

埴頂部やそこから転落してきたとみられる埴丘各所で、黒斑をもち野焼き焼成の立ち飾り部片と筈部片が出土した。台部片はみつかっていない。完形に復元できる

個体はないが、回転復元が可能なもの、形状・文様・調整および製作技法を観察できる資料が含まれる。以下、立ち飾り部と笠部に分けて記す。

立ち飾り部 立ち飾り部の飾板頂辺は直線状を呈する(95)。内側には低い位置に鱗がつくものがある(98)。飾板下部片には軸受部が剥離した痕跡が認められる(101・102)。飾板受部には飾板との接合痕跡がみられない(103)。透孔の有無等がわかる破片は出土していない。

飾板には線刻文様が認められる。線刻は両面とも同様ではなく、横帯・縦帯ともに異なる構成のものがほとんどで、片面の文様は簡略化され粗雑なものが多い。文様構成は、用形文が主体である(95・96)が、直弧文のようなもの(97)、鍵手文のようなもの(99・100)などもある。鱗部はその形状に平行する線刻によって表現

される(98)。なお、残存状態の良い個体には赤色顔料が付着する(96・100・102)。

笠部 出土した個体はすべて布貼りを段差表現するもので、線刻表現の個体はみつかっていない。外面の中位に突帯を貼り付けて分割し(104)、下半部にはこれに直交する2段の布貼りを段差で表現する(106)。段差表現は全て反時計回りに低くなる。軸受部の口縁は出土していない。過去の調査を含めて肋木が出土しておらず、笠部に剥離痕跡もみられないことから、肋木を有さないものである可能性が高い。内面はナデにより調整される。接合痕より台部から笠部へ粘土紐を積み上げた後、笠先端部を接合していく順序がわかるもの(104)や、笠部先端の形状がわかるもの(107)がある。笠部にも赤色顔料がみられるものがある(107)。 (水川慶紀)

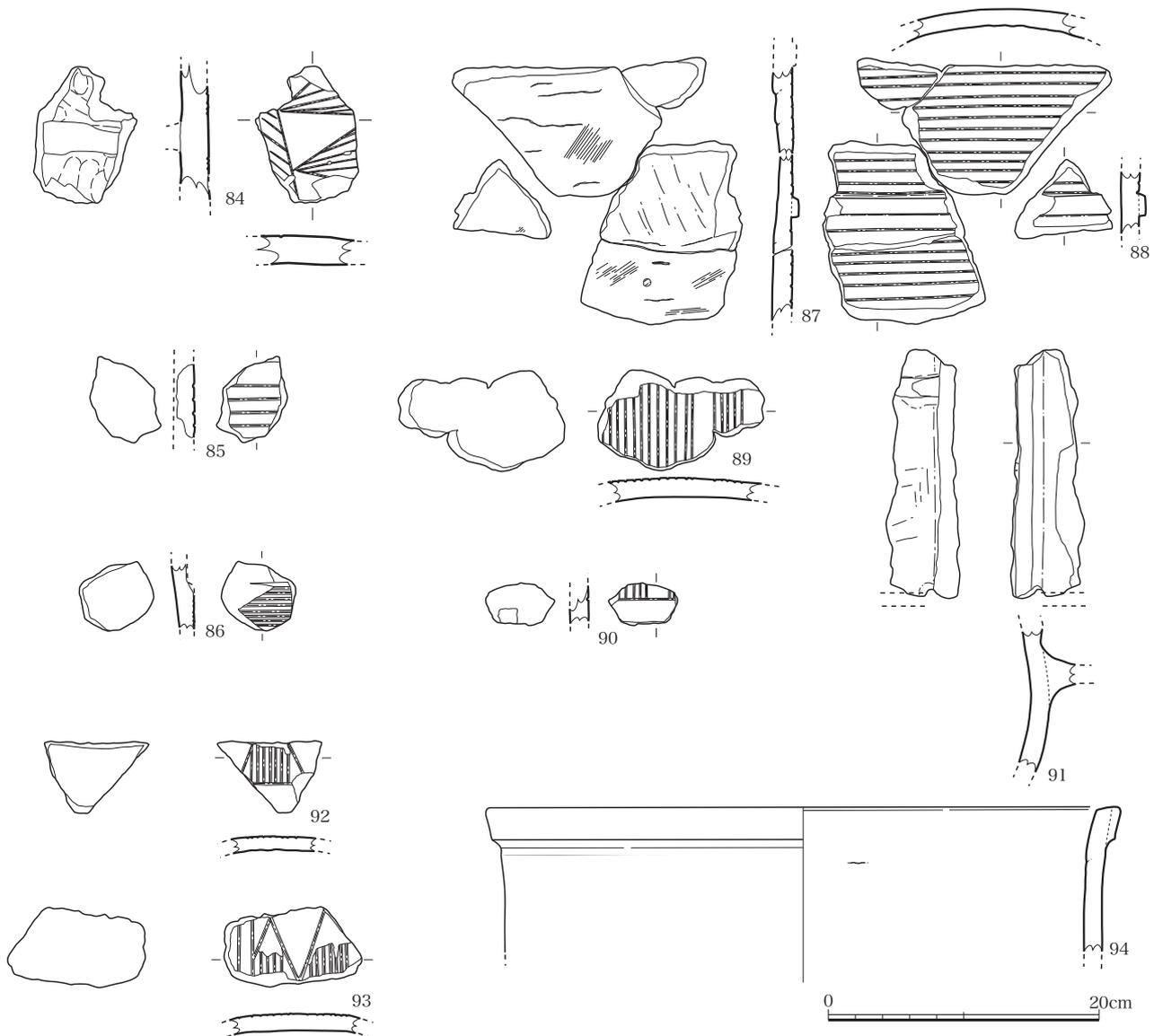


図79 各発掘区出土盾形埴輪 1 / 5

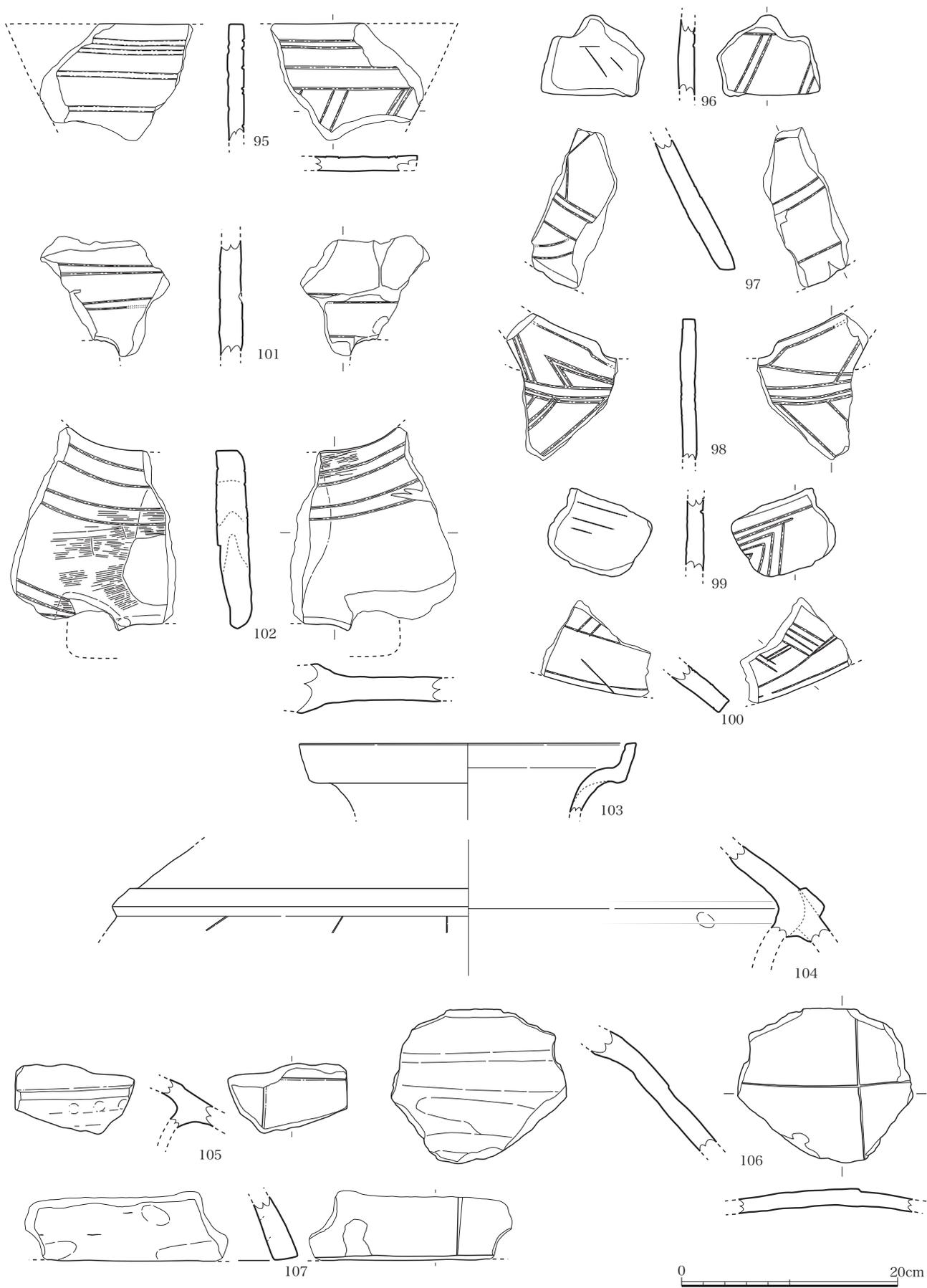


图 80 各発掘区出土蓋形埴輪 1 / 5

第5項 甲冑形埴輪 (図81-108)

富雄丸山古墳では、既往の調査も含めて甲冑形埴輪の草摺部のみが出土している。108は草摺部の鋸歯文帯とそれに直交する縦方向の分割帯が施文された破片である。奈良県の報告では、鋸歯文帯が5段1組となっており、同様の個体の一部と考えられるが摩滅して不明瞭である。

第6項 その他の埴輪 (図81-109～112)

109は1条の横線とそれに直交する縦線が線刻された破片で、赤色顔料がわずかに残る。甲冑形埴輪や盾形埴輪と組み合う冑部等である可能性もあるが不明確である。110には2条の弧文状沈線が認められ、湾曲からみて円筒埴輪のヘラ記号である可能性もあるが、詳細は不明である。111は板状の破片に弧を描く梯子状の線刻が認められるが詳細は不明である。112は、粘土紐積み上げで板状を呈し、端部には幅4.3cmの貼付突帯が認められるが、詳細は不明である。

第3節 土器 (図82-1～7)

少量であるが、墳丘の各所で土器が出土した。1は、K発掘区北東壁断面17層(図49)で図示した弥生土

器の壺底部片である。墳丘の各所で弥生時代後期の土器類を含む堆積層が見つかっており、古墳築造以前に当該期の遺跡が広がっていたことを示す。

2・3はU発掘区の北東側区画溝から出土したミニチュア高杯である。これらは別個体であるため、少なくとも2個体以上が区画施設で用いられたと考えられる。

4は、K発掘区の葺石直上で出土した須恵器杯蓋である。稜線が沈線化するもケズリを比較的丁寧に施していることからTK10型式に位置づけられる。5は、B発掘区北東側の転落石断割中の流土から出土した須恵器杯身である。立ち上がりの形状等からTK10型式に位置づけられる。富雄丸山2号墳出土須恵器が概ねTK10～TK43型式であることから、それと時期的に関連する遺物と考えられる。

6はG発掘区の盾形埴輪上面検出中に出土した須恵器壺である。高台部のみ破片で全体の形状等も不明であるが、7世紀中頃以降のものと考えられる。

7はK発掘区の墳丘裾補修後の遺構面から出土した土師器杯Gである。内外面ともに丁寧なナゲ調整で暗文はみられない。直径12cm、器高4cmであり径口指数や形態的特徴でみれば7世紀中頃～後半に類例が多いものである。(村瀬)

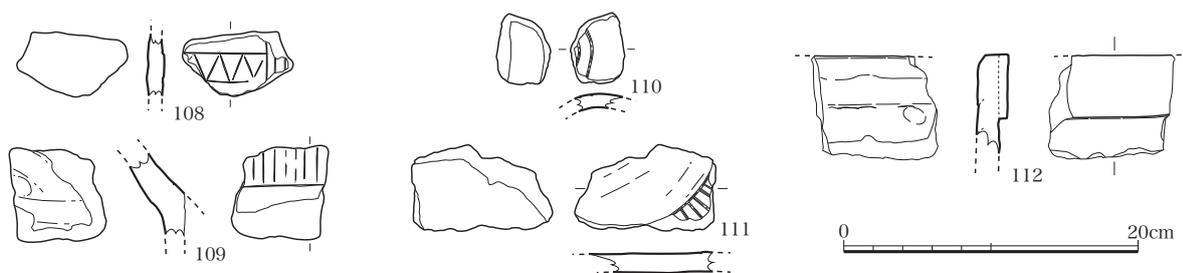


図81 甲冑形埴輪・その他出土埴輪 1/5

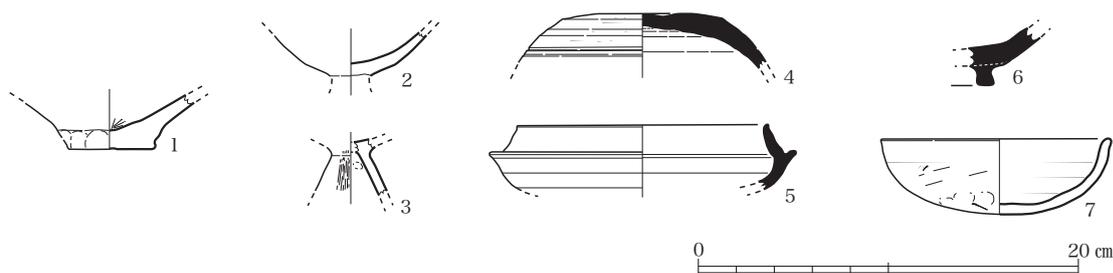


図82 出土土器 1/4

表2 出土遺物観察表

図 番号	報告 番号	調査回数	出土地点	遺物名	計測値	色調	材質等	備考	登録番号
51	1	TOM 3	A区-NWa1 旧発掘区埋土	斜縁神獸鏡	長さ 幅 2.8cm 1.7cm	灰黒色	銅	鏡片、わずかに赤色顔料が付着	0030
51	2	TOM 3	A区-SEb1 旧発掘区埋土	銅鏃	長さ 幅 2.1cm 0.5cm	淡緑色	銅	茎部の破片	0178
51	3	TOM 2	A区-NEb3 旧発掘区埋土	鍬形石	長さ 幅 1.2cm 1.4cm	淡緑色	緑色凝灰岩	京都国立博物館所蔵品と同一個体	0036
51	4	TOM 2	A区-NEe3 旧発掘区埋土	管玉	長さ 幅 3.05cm 0.3cm	淡緑色	緑色凝灰岩	赤色顔料付着	0110
51	5	TOM 2	A区-NEe3 旧発掘区埋土	管玉	長さ 幅 2.45cm 0.4cm	淡緑色	緑色凝灰岩	赤色顔料付着	0110
51	6	TOM 2	A区-NEc3 旧発掘区埋土	管玉	長さ 幅 1.7cm 0.5cm	灰白色	?		0057
51	7	TOM 2	A区-NEb3 旧発掘区埋土	管玉	長さ 幅 1.4cm 0.5cm	濃緑色	碧玉	わずかに屈曲しており手玉か	0032
51	8	TOM 2	A区-NWc4 旧発掘区埋土	鉄剣	長さ 幅 5.9cm 3.6cm		鉄		0133
51	9	TOM 2	A区-SEe4 旧発掘区埋土	鉄剣	長さ 幅 11.1cm 3.5cm		鉄	木質付着	0195
51	10	TOM 2	A区-SEg3 旧発掘区埋土	鉄剣	長さ 幅 3.0cm 2.7cm		鉄	木質付着	0205
51	11	TOM 2	A区-SEb1 旧発掘区埋土	鉄剣	長さ 幅 6.7cm 2.4cm		鉄	木質付着	0163
51	12	TOM 2	A区-NWc3 旧発掘区埋土	鉄刀	長さ 幅 4.6cm 3.2cm		鉄		0137
51	13	TOM 2	A区-SEc1 旧発掘区埋土	鉄刀	長さ 幅 2.4cm 2.9cm		鉄	木質付着	0171
51	14	TOM 2	A区-NEe3 旧 発掘区埋土	刀子	長さ 幅 4.7cm 1.7cm		鉄		0022
51	15	TOM 2	A区-SWd2 旧発掘区埋土	刀子	長さ 幅 4.3cm 1.9cm		鉄	木質付着	0253
51	16	TOM 3	A区-NEa4 旧発掘区埋土	鉄鏃	長さ 幅 3.5cm 2.6cm		鉄	根挟みの木質残存	0008
51	17	TOM 3	A区-SEp1 旧発掘区埋土	鉄鏃	長さ 幅 2.8cm 3.0cm		鉄		0178
51	18	TOM 3	A区-NEe4 旧発掘区埋土	鉄鏃	長さ 幅 3.7cm 2.1cm		鉄		0124
51	19	TOM 2	A区-NEf3 旧発掘区埋土	鉄鏃	長さ 幅 3.1cm 0.9cm		鉄	口巻の痕跡あり	0124
51	20	TOM 3	A区-SEb1 旧発掘区埋土	鉄鏃	長さ 幅 3.7cm 2.1cm		鉄		0178
51	21	TOM 3	A区-NWb1 旧発掘区埋土	鉄鏃	長さ 幅 3.3cm 1.0cm		鉄	口巻の痕跡あり	0058
51	22	TOM 3	A区-NWf3 旧発掘区埋土	鋤先	長さ 幅 3.7cm 2.2cm		鉄	内部に木質痕跡あり	0164
51	23	TOM 3	A区-NEe1 旧発掘区埋土	鋤先	長さ 幅 3.3cm 3.8cm		鉄	内部に木質痕跡あり	0020
51	24	TOM 3	A区-NWb1 旧発掘区埋土	小札	長さ 幅 4.9cm 2.7cm		鉄	小孔あり	0054
51	25	TOM 2	A区-SEg3 旧発掘区埋土	小札	長さ 幅 3.5cm 1.9cm		鉄	小孔あり	0204
51	26	TOM 3	A区-NWc2 旧発掘区埋土	小札	長さ 幅 3.2cm 3.4cm		鉄	小孔あり	0087

図 番号	報告 番号	調査回数	出土地点	遺物名	計測値	色調	材質等	備考	登録番号
51	27	TOM 3	A区-NWe3 旧発掘区埋土	円板状土製品	直径 3.5cm 厚み 1.4cm 重さ 19g	暗灰色	粗、2mm以下の砂 粒含む		0145
51	28	TOM 3	A区-SWb2 旧発掘区埋土	円板状土製品	直径 2.9cm 厚み 1.1cm 重さ 10g	灰褐色	やや粗、2mm以下 の砂粒、シャモッ ト含む		0006
51	29	TOM 3	A区-NWc3 旧発掘区埋土	円板状土製品	直径 2.8cm 厚み 1.0cm 重さ 10g	暗褐色	粗、2mm以下の砂 粒・シャモット含 む		0092
51	30	TOM 5	A区-SWe3 旧発掘区埋土	円板状土製品	直径 2.8cm 厚み 0.9cm 重さ 10g	淡褐色	やや粗、1mm以下 の砂粒・シャモッ ト含む		0174
51	31	TOM 3	A区-NWe2 旧発掘区埋土	円板状土製品	直径 2.7cm 厚み 1.1cm 重さ 9g	暗褐色	粗、2mm以下の砂 粒・シャモット含 む		0132
51	32	TOM 3	A区-SWe3 旧発掘区埋土	円板状土製品	直径 2.4cm 厚み 0.7cm 重さ 5g	暗赤褐 色	粗、2mm以下の砂 粒・シャモット含 む		0269
51	33	TOM 5	A区-SWb3 旧発掘区埋土	円板状土製品	直径 2.4cm 厚み 0.6cm 重さ 4g	暗褐色	粗、3mm以下の砂 粒含む		0153
51	34	TOM 3	A区-SWc2 旧発掘区埋土	円板状土製品	直径 2.3cm 厚み 0.6cm 重さ 4g	褐色	粗、2mm以下の砂 粒・シャモット含 む		0236
53	1	TOM 2	B区-2段目 埴輪列 No.1	朝顔形埴輪?	底径 37.0cm 残高 18.4cm	褐色	やや粗、3mm以下 の砂粒含む。焼成 良好、黒斑あり	原位置で出土した底部片。直径がやや大きく朝顔形埴輪の可能性あり。外面摩滅、内面ナデ。半円または円形透孔の痕跡あり。底部は約12cmの粘土板から粘土縦積み上げ。約1/2遺存。	0339
53	2	TOM 2	B区-2段目 埴輪列 No.2	鱧付円筒埴輪?	底径 26.0cm 残高 13.0cm	褐色	やや粗、5mm以下 の砂粒含む。焼成 良好、黒斑あり	原位置で出土した底部片。外面摩滅、内面ナデ。底部は自重でやや潰れている。約2/3遺存。	0340
53	3	TOM 5	M区-2段目 埴輪列 No.1	鱧付円筒埴輪?	復元 底径 29.8cm 残高 13.7cm	淡黄褐 色	やや粗、3mm以下 の砂粒含む。焼成 良好、黒斑あり	原位置で出土した底部片。外面タテハケ(8条/cm)、内面ナデ。外面の底面から約6cmの位置に工具痕あり。約1/4遺存。	0209
53	4	TOM 5	M区-2段目 埴輪列 No.2	鱧付円筒埴輪?	復元 底径 24.0cm 残高 10.2cm	淡黄褐 色	やや粗、3mm以下 の砂粒含む。焼成 良好、黒斑あり	原位置で出土した底部片。内外面ともに板ナデ。底部が潰れており直径はやや大きくなる可能性あり。赤色顔料は塗布していないが、上方の塗布時に垂れた痕跡あり。約1/4遺存。	0210
53	5	TOM 5	M区-2段目 埴輪列 No.3	鱧付円筒埴輪?	高さ 4.2cm 幅 5.7cm	淡橙色	やや粗、3mm以下 の砂粒含む。焼成 良好	原位置付近で破損し散乱した状態で出土した口縁部片。調整不明瞭だが、外面に赤色顔料が残る。	0215
53	6	TOM 5	M区-2段目 埴輪列 No.3	鱧付円筒埴輪?	復元 胴径 28.2cm 残高 12.2cm	淡褐色	やや粗、3mm以下 の砂粒含む。焼成 良好、黒斑あり	原位置付近で破損し散乱した状態で出土した胴部片。外面Ca種ヨコハケ(8条/cm)で、一部意図的ではない静止痕のようなものあり。内面ナデ。長方形透孔の痕跡あり。突帯は上端がやや突出する断面M字形を呈し、突帯間隔設定技法の凹線が認められる。約1/4遺存。	0215
53	7	TOM 5	M区-2段目 埴輪列 No.3	鱧付円筒埴輪?	復元 胴径 34.0cm 残高 21.5cm	淡褐色	やや粗、3mm以下 の砂粒含む。焼成 良好、黒斑あり	原位置付近で破損し散乱した状態で出土した胴部片だが、厚みや突帯下部の間隔から底部片とみられる。外面タテハケ(8条/cm)、内面ハケで突帯裏面はヨコナデ。ハケとは異なる工具痕あり。突帯は台形を呈する。約1/6遺存。	0215
53	8	TOM 5	T区-2段目 埴輪列 No.1	鱧付円筒埴輪?	高さ 3.1cm 幅 7.9cm	淡黄褐 色	やや粗、3mm以下 の砂粒含む。焼成 良好、黒斑あり	原位置で出土した底部片の内部に落ち込んで出土した口縁部片。外面に赤色顔料が付着する。器壁はやや厚めで口縁端部がやや屈曲する。	0257
53	9	TOM 5	T区-2段目 埴輪列 No.1	鱧付円筒埴輪	底径 30.5cm 残高 29.1cm	淡黄褐 色	やや粗、3mm以下 の砂粒含む。焼成 良好、黒斑あり	原位置で出土した底部片。外面は横方向の板ナデのち3条のU字状線刻あり。内面は摩滅しているわけではないが調整不明瞭(ナデか)。底部は粘土板を合わせた際の接合痕が明瞭で器壁も厚い。底部高は20cmで、第1段突帯から鱧を貼り付ける。鱧は貼り付け部分に刻み目を入れている。鱧の下辺はやや削り込まれたようにのびる。鱧の幅は約7cm。底端部内面には製作後に持ち上げた際の指圧痕がある。底部完存。	0257
53	10	TOM 5	T区-2段目 埴輪列 No.3	鱧付円筒埴輪	復元 口径 36.0cm 残高 12.6cm	淡黄褐 色	やや粗、3mm以下 の砂粒含む。焼成 良好	原位置で出土した底部片の内部に落ち込んで出土した口縁部片。外面には赤色顔料が塗布され摩滅していないが調整不明瞭(ナデか)で、内面ナデ。口縁部高は7.2cmで、やや外反し端部はわずかに屈曲する。胎土が11と類似し、口縁部高が概ね10の突帯間隔の半分となるため、同一個体とみられる。約1/10遺存。	0261
53	11	TOM 5	T区-2段目 埴輪列 No.3	鱧付円筒埴輪	底径 30.0cm 残高 51.5cm	淡黄褐 色	やや粗、3mm以下 の砂粒含む。焼成 良好、黒斑あり	原位置で出土した底部片。外面には2段目以上に赤色顔料が塗布されよく残る。内外面ともに指ナデと板ナデが施されるが、板ナデは若干ハケメがみえる部分もあり、工具を使い分けているのかハケメが薄い。底部高27cm、突帯間隔16cmで設定技法は不明。ただし、底面から約5~7cmの位置に横方向の擦痕あり。2段目に2方向の長方形透孔あり。第1段突帯から鱧を貼り付け、鱧下辺は水平であり幅約7cm。突帯は上端がやや突出する断面M字形。外面の底面から約14.5cmの位置に斜上する工具痕が3つ連続して観察できる。底部外面の一部は大きく剥離しているが、その内面には当て具痕のような圧痕がみられるため、補修したが最終的に剥離した状態で設置したとみられる。底部完存。	0261
53	12	TOM 5	T区-2段目 埴輪列 No.6	鱧付円筒埴輪?	底径 29.5~ 31.5cm 残高 18.3cm	淡褐色	やや粗、3mm以下 の砂粒含む。焼成 良好、黒斑あり	原位置で出土した底部片。外面タテハケ(8条/cm)、内面ハケのちナデ。底部に半円または円形透孔があり、T区-2段目埴輪列の他2個体とは様相が異なる。底部完存。	0270
54	13	TOM 2	D区-1段目 埴輪列 No.1	円筒埴輪	復元 底径 26.6cm 残高 9.9cm	淡褐色	やや粗、3mm以下 の砂粒・シャモッ ト含む。焼成良好	原位置で出土した底部片。外面タテハケ(10条/cm)、内面ナデ。約1/5遺存。	0384

図番号	報告番号	調査回数	出土地点	遺物名	計測値	色調	材質等	備考	登録番号
54	14	TOM 2	D区 - 1段目 埴輪列 No.2	円筒埴輪	底径 29.8cm 残高 17.5cm	赤褐色	やや粗、3mm以下の砂粒含む。焼成良好、黒斑あり	原位置で出土した底部片。外面タテハケ(8~10条/cm)であるが、底端部に横方向の工具痕あり。内面はナデ調整だがそれとは異なる工具痕あり。半円または円形透孔あり。約1/2遺存。	0385
54	15	TOM 2	D区 - 1段目 埴輪列 No.3	円筒埴輪	復元 底径 26.8cm 残高 10.7cm	橙~赤褐色	やや粗、3mm以下の砂粒含む。焼成良好	原位置で出土した底部片。外面は摩滅するが、ケズリのような砂粒の動きがみえる。内面はナデ調整。約1/5遺存。	0386
54	16	TOM 5	N区 - 1段目 埴輪列 No.2	円筒埴輪	復元 口径 32.4cm 底径 31.0cm 復元 高 93.6cm	淡橙色	粗、5mm以下の砂粒含む。焼成良好、黒斑あり	原位置で出土した底部片(4段分)とその内部に落ち込んだ口縁部片(3段分)。接点はないが突帯間隔をもとに図上復元した。外面は摩滅するが底部にわずかなタテハケ、内面はナデ・オサエ。底部高21.5cm、突帯間隔15.4cm、口縁部高10.7cm。2・4段目に2方向の長方形透孔あり。底部に透孔と高さの揃う長方形の線刻が片面だけにあるが機能等不明確。5条目突帯の剥離部分に設定技法の刺突痕跡がみえる。底部完存。	0225. 0226
54	17	TOM 5	N区 - 1段目 埴輪列 No.2	円筒埴輪	復元 口径 27.3cm 残高 28.8cm	橙色	粗、3mm以下の砂粒多く含む。焼成良好	16の内部に落ち込んだ口縁部片。ただし、胎土等が酷似する16の口縁部とは形態が異なる。19の内部に落ち込んだ18と特徴が一致するため19の口縁部であると想定できる。内外面ともに摩滅し不明瞭。突帯間隔12.5cm、口縁部高12.4cmで突帯間隔=口縁部高となる。口縁は屈曲し端部がつまみ上げられている。約1/4遺存。	0225
54	18	TOM 5	N区 - 1段目 埴輪列 No.3	円筒埴輪	高さ 3.9cm 幅 6.7cm	淡橙色	やや粗、3mm以下の砂粒多く含む。焼成良好	19の内部に落ち込んだ口縁部片。屈曲口縁で端部がつまみ上げられる特徴は17と共通する。	0227
54	19	TOM 5	N区 - 1段目 埴輪列 No.3	円筒埴輪	底径 25.8cm 残高 24.4cm	淡橙色	やや粗、3mm以下の砂粒多く含む。焼成良好、黒斑あり	原位置で出土した底部片。外面タテハケ(8~10条/cm)、内面ナデ。底部にやや小さめの円形透孔が1方向のみにあり、ここから約50度ふった位置にそれよりさらに小さい円形透孔がある。2段目には長方形透孔が2方向にある。底部高15.8cm。底部完存。	0227
54	20	TOM 5	N区 - 1段目 埴輪列 No. 4	円筒埴輪	高さ 3.9cm 幅 4.7cm	淡橙色	やや粗、3mm以下の砂粒多く含む。焼成良好	21の内部に落ち込んだ口縁部片。内外面ともに摩滅。口縁端部は外側へ屈曲する。	0228
54	21	TOM 5	N区 - 1段目 埴輪列 No. 4	円筒埴輪	底径 23.5cm 残高 29.5cm	淡橙色	やや粗、3mm以下の砂粒多く含む。焼成良好、黒斑あり	原位置で出土した底部片。内外面ともにタテハケ(9~10条/cm)で、外面の2段目にはその後横方向の板ナデが部分的に観察できる。底部高16cm、突帯間隔13.3cm。底部外面には1方向のみに小円形透孔があり、第1段突帯から下に約12cmの位置に刺突痕跡がやや不連続ながらみられる。ただし、第1段突帯の剥離面にみられる方形刺突とはやや形状が異なる。底部の小円形透孔から90度の位置に盾を沈線で表現した線刻がある。盾は鋸歯文がめぐり、内部を×印で区画し、上部には綾杉文を施す。2段目には2方向に長方形透孔がある。底部完存。	0028
55	22	TOM 3	E区 - 埴輪列 No.13	円筒埴輪	復元 口径 35.5cm 残高 23.1cm	淡黄褐色	粗、3mm以下の砂粒含む。焼成良好、黒斑あり	23の内部に落ち込んだ口縁部片。外面タテハケ(9~10条/cm)のちヨコハケ、内面タテハケのちナデ。口縁部高10.0cm。外面に所々赤色顔料が残る。約1/2遺存。23と組み合う同一個体とみられ、透孔配置等から5条6段構成に復元できる。	0223. 0224
55	23	TOM 3	E区 - 埴輪列 No.13	円筒埴輪	底径 26.5cm 残高 43.7cm	淡黄褐色	粗、10mm以下の砂粒含む。焼成良好、黒斑あり	原位置で出土した底部片。外面は底部をタテハケ(10条/cm)、2段目以上をタテハケのちCa種ヨコハケ。内面はタテハケがまばらに観察でき、多くはナデ調整。底部高20.3cm、突帯間隔13~13.5cm。第1段突帯から下方に約12cmのところに横方向の擦痕あり。突帯剥離面に突帯間隔設定技法の凹線がみえる。2段目に2方向の長方形透孔あり。底部完存。	0322~ 0324
55	24	TOM 3	E区 - 埴輪列 No.14	円筒埴輪	復元 口径 24.9cm 残高 5.7cm	淡黄褐色	粗、3mm以下の砂粒含む。焼成良好	25の内部に落ち込んだ口縁部片。外面タテハケ(10条/cm)、内面タテハケのちヨコナデ。口縁部は緩やかに外反するが端部は屈曲しない。端面はナデにより窪む。胎土等の類似から25と同一個体とみられる。約1/8遺存。	0326. 0327
55	25	TOM 3	E区 - 埴輪列 No.14	円筒埴輪	底径 24.7cm 残高 45.6cm	淡黄褐色	粗、10mm以下の砂粒含む。焼成良好、黒斑あり	原位置で出土した底部片。外面タテハケのちCa種ヨコハケ(10条/cm)、内面タテハケのちナデ。底部高20.1cm、突帯間隔12.6~13.2cmで、突帯は剥離していないため設定技法は不明。2段目に2方向の逆三角形透孔あり。底部完存。	0325 ~0327
56	26	TOM 3	E区 - 埴輪列 No. 6	円筒埴輪	底径 30.0cm 残高 24.5cm	淡黄褐色	粗、3mm以下の砂粒含む。焼成良好、黒斑あり	原位置で出土した底部片。外面は摩滅していないが調整不明瞭で一部に板の圧痕あり、内面は板ナデ。突帯間隔設定技法の方形刺突は水平に施されているが、突帯が波打って貼り付けられており、刺突があらわになる部分がある。このため底部高は18.1~20.0cmと幅がある(刺突までの高さは19cm)。また、第1段突帯の上辺に径3mmの棒状刺突痕跡が認められ、上部の突帯を設定する際の工具痕とみられる。さらに外面の底面から約4cm付近には、第1段突帯の設定に伴うとみられる棒状刺突痕跡や工具の擦痕が認められる。2段目には2方向の長方形透孔の痕跡あり。底部完存。	0296~ 0298
56	27	TOM 3	E区 - 埴輪列 No. 8	円筒埴輪	底径 22.7~ 24.0cm 残高 33.8cm	褐色	粗、3mm以下の砂粒多く含む。焼成良好、黒斑あり	原位置で出土した底部片。外面わずかにCa種ヨコハケ(6~7条/cm)がみえ、内面もハケ・ナデがわずかに観察できる。底部高17.9~19.2cm、突帯間隔14.0cmで、2段目に2方向の長方形透孔あり。突帯はやや細長く突出する。底部外面の一部で粘土板を貼り合わせた部分が剥離し、その状態で補修せず設置されたとみられる。底部完存。	0303~ 0306
56	28	TOM 3	E区 - 埴輪列 No. 2	円筒埴輪	底径 28.8cm 残高 16.0cm	褐色	粗、5mm以下の砂粒含む。焼成良好、黒斑あり	原位置で出土した底部片。外面タテハケのちCa種ヨコハケ(10条/cm)、内面タテハケ。外面には底面から約4cm付近に棒状工具の刺突痕跡が認められる。底部完存。	0283~ 0285
56	29	TOM 3	E区 - 埴輪列 No. 4	円筒埴輪	底径 26.0cm 残高 17.0cm	褐色	粗、3mm以下の砂粒含む。焼成良好、黒斑あり	原位置で出土した底部片。内外面ともにタテハケ(6~7条/cm)で、外面はわずかにヨコハケも観察できる。底部の一部分は半円状に欠損しており、その状態で補修せず設置したとみられる。底部完存。	0288~ 0291
56	30	TOM 3	E区 - 埴輪列 No. 3	円筒埴輪	底径 28.0cm 残高 18.3cm	褐色	粗、5mm以下の砂粒含む。焼成良好、黒斑あり	原位置で出土した底部片。外面タテハケ(9~10条/cm)、内面は横方向に連続する指オサエが目立つ。底部には2方向の円または半円形透孔の痕跡がある。	0286. 0287

図 番号	報告 番号	調査回数	出土地点	遺物名	計測値	色調	材質等	備考	登録番号
56	31	TOM 3	E区 - 埴輪列 No. 7	朝顔形埴輪?	底径 30.2cm 残高 21.2cm	褐色	粗、3mm以下の砂粒多含む。焼成良好、黒斑あり	原位置で出土した底部片。外面斜めハケのちCa種ヨコハケ(6~7条/cm)、内面タテハケ。底部高18.3cmで、底部には1方向のみ半円形透孔がある。2段目にはこれと直交する2方向の長方形透孔と思われる痕跡あり。同様の規格である33の配置場所が造出しのくびれ部にあたり内部から朝顔形埴輪の口縁部が出土していること、やや直径が大きいことから朝顔形埴輪の可能性はある。底部完存。	0299 ~ 0302
56	32	TOM 3	E区 - 埴輪列 No.12	朝顔形埴輪	高さ 4.9cm	橙色	粗、3mm以下の砂粒含む。焼成良好	33の内部に落ち込んだ朝顔形埴輪の口縁部片・内外面ともに摩滅。突帯はやや太い印象をもつ。約1/10遺存。	0320
56	33	TOM 3	E区 - 埴輪列 No.12	朝顔形埴輪?	底径 34.0cm 残高 33.2cm	橙~淡 黄褐色	粗、3mm以下の砂粒含む。焼成良好、黒斑あり	原位置で出土した底部片。外面Ca種ヨコハケ(6~7条/cm)、内面タテハケ。底部高20.2cmで突帯間隔は14.1cm以上ある。突帯はやや太い印象をもつ。底部には2方向の半円形透孔があり、2段目には底部透孔と直交する位置に2方向の長方形透孔あり。配置場所や内部へ落ち込んだ個体から朝顔形埴輪とみられる。底部完存。	0318 ~ 0321
57	34	TOM 3	E区 - 埴輪列 No. 5	鰭付楕円筒埴輪	底径 29.2× 20.5cm 残高 25.0cm	淡黄褐色	粗、3mm以下の砂粒含む。焼成良好、黒斑あり	原位置で出土した底部片。外面タテハケのちCa種ヨコハケ(6~8条/cm)、内面タテハケのちナデ。内面はヨコナデが目立ち楕円に成形する際の痕跡か。底部高17.5cmで突帯間隔設定技法に凹線を用いる。2段目に2方向の長方形透孔あり。鰭は第1段突帯のやや下方から側面に刻み目を入れて貼り付けられている。鰭の下辺は斜め方向にのびる。底部完存。	0292 ~ 0295
57	35	TOM 3	E区 - 埴輪列 No. 9	鰭付楕円筒埴輪	底径 31.0× 19.5cm 残高 34.6cm	淡橙色	粗、3mm以下の砂粒含む。焼成良好、黒斑あり	原位置で出土した底部片。外面タテハケ(6~8条/cm)、内面ナデ。底部高17.2cm、突帯間隔15.0cmで、突帯剥離部分に設定技法の痕跡は確認できない。2段目に2方向の長方形透孔あり。鰭は第1段突帯のやや下方から側面に刻み目を入れて貼り付けられている。鰭の下辺は斜め方向にのびる。鰭の幅は約8.5cm。底部完存。	0307 ~ 0311
57	36	TOM 3	E区 - 埴輪列 No.10	鰭付楕円筒埴輪	底径 27.7× 21.2cm 残高 29.5cm	淡黄褐色	粗、3mm以下の砂粒含む。焼成良好、黒斑あり	原位置で出土した底部片。外面タテハケのちCa種ヨコハケ(6~7条/cm)、内面タテハケ。底部高16.8~17.5cmで、2段目に2方向の長方形透孔あり。鰭は第1段突帯のやや下方から側面に刻み目を入れて貼り付けられている。鰭の下辺は斜め方向にのびる。鰭貼り付け部分にもヨコハケがみえることから、外面の調整→突帯の貼り付け→鰭の貼り付けという順序がわかる。底部完存。	0312 ~ 0314
57	37	TOM 3	E区 - 埴輪列 No.11	鰭付楕円筒埴輪	底径 26.5× 22.1cm 残高 35.6cm	淡黄褐色 ~ 暗赤褐色	粗、5mm以下の砂粒含む。焼成良好、黒斑あり	原位置で出土した底部片。外面の多くは摩滅するが2段目にCa種ヨコハケがわずかに見え、内面はタテハケ(6条/cm)。底部高18.2~19.3cm、突帯間隔15.0cmで突帯の剥離面がないため設定技法は不明。2段目に2方向の長方形透孔あり。鰭は第1段突帯のやや下方から側面に刻み目を入れて貼り付けられている。鰭の下辺は斜め方向にのびる。底部完存。	0315 ~ 0317
58	38	TOM 4	H区 - 埴輪列 No. 2	円筒埴輪	残高 13.1cm	褐色	粗、3mm以下の砂粒含む。焼成良好	39の内部に落ち込んだ胴部片。外面タテハケ(8条/cm)、内面摩滅。突帯の上方に横方向の擦痕あり。約1/8遺存。	0119 ~ 0122
58	39	TOM 4	H区 - 埴輪列 No. 2	円筒埴輪	底径 27.7cm 残高 28.1cm	黄褐色 ~ 暗赤褐色	粗、3mm以下の砂粒含む。焼成良好、黒斑あり	原位置で出土した底部片。外面タテハケ(8条/cm)、内面摩滅。底部高21.2cmで、底面から約6.5cmの位置に横方向の擦痕あり。底部には対置する逆三角形透孔とこれに直交して対置する円形透孔が穿たれ合計4つの透孔がある。底部完存。	0119 ~ 0122
58	40	TOM 4	H区 - 埴輪列 No. 3	円筒埴輪	復元 口径 32.0cm 残高 24.1cm	橙色	粗、3mm以下の砂粒含む。焼成良好	41の内部に落ち込んだ口縁部片。外面タテハケ(8条/cm)、内面ナデ。口縁部高6.9cm、突帯間隔14.6cmで、上から2条目の突帯上辺には凹線による設定技法に伴うとみられる横方向の工具痕が認められる。外面には平行する2条の圧痕がみられるが要因は不明。口縁部は緩やかに外反し端面は平滑である。口縁部高+底部高=21.5cmと41よりも39に近いことから、そちらの個体に伴う可能性もあるが、規格は両者とも同様であり判断が難しい。約1/4遺存。	0123 ~ 0126
58	41	TOM 4	H区 - 埴輪列 No. 3	円筒埴輪	底径 29.1cm 残高 25.7cm	淡黄褐色	粗、5mm以下の砂粒含む。焼成良好、黒斑あり	原位置で出土した底部片。外面タテハケ(8条/cm)、内面は基本的にナデとみられるが単位不明瞭で一箇所ケズリのような横方向の擦痕がある。底部高20.0cmで、底部には対置する逆三角形透孔とこれに直交して対置する円形透孔が穿たれ合計4つの透孔がある。底部完存。	0123 ~ 0126
58	42	TOM 4	H区 - 埴輪列 No.14	円筒埴輪	底径 27.7cm 残高 16.0cm	黄橙色	粗、3mm以下の砂粒含む。焼成良好、黒斑あり	原位置で出土した底部片。内外面ともにタテハケ(8条/cm)。器壁は比較的薄い。底部には対置する逆三角形透孔とこれに直交して対置する円形透孔が穿たれ合計4つの透孔がある。底部完存。	0175 ~ 0177
58	43	TOM 4	H区 - 埴輪列 No.15	円筒埴輪	高さ 3.5cm 幅 9.2cm	黄橙色	粗、2mm以下の砂粒含む。焼成良好	44の内部に落ち込んだ口縁部片。内外面ともに摩滅。口縁部は外側へ屈曲する。	0179. 0180
58	44	TOM 4	H区 - 埴輪列 No.15	円筒埴輪	底径 30.4cm 残高 18.8cm	黄橙色	粗、2mm以下の砂粒含む。焼成良好	原位置で出土した底部片。外面タテハケ(8条/cm)で、横方向の擦痕がみられる。内面はナデ。底部高20.0cmで、底部には対置する逆三角形透孔とこれに直交して対置する円形透孔が穿たれ合計4つの透孔がある。透孔配置が39・41・42と同一であるが、調整や口縁部形態が異なるため、工人差が原因か。底部完存。	0178 ~ 0180
58	45	TOM 4	H区 - 埴輪列 No. 5	円筒埴輪	底径 30.2cm 残高 22.0cm	黄橙色	粗、10mm以下の砂粒含む。焼成良好、黒斑あり	原位置で出土した底部片。内外面ともに摩滅が激しいが、外面にはわずかにCa種ヨコハケらしき痕跡あり。底部高21.0cmで、第1段突帯は剥離面に設定技法の凹線が認められる。底部には2方向に円形透孔あり。底面には1箇所割れている部分があり、底部外面も剥離した部分があるが、底部は埋めて設置されていることから設置時には割れていたとみられる。内部に落ち込んだ破片のなかには直線状の透孔痕跡のあるものがあり、2段目以上は円形でない可能性がある。底部完存。	0132 ~ 0135
58	46	TOM 4	H区 - 埴輪列 No. 9	円筒埴輪	復元 口径 40.0cm 残高 17.4cm	黄橙色	粗、3mm以下の砂粒含む。焼成良好、黒斑あり	47の内部に落ち込んだ口縁部片。内外面ともに摩滅が激しいが、外面にはわずかにタテハケ、内面はナデが観察できる。口縁部高8.4cmで口縁部は緩やかに外側へ屈曲する。約1/4遺存。	0151 ~ 0154
58	47	TOM 4	H区 - 埴輪列 No. 9	円筒埴輪	底径 30.2cm 残高 24.7cm	黄橙色	粗、3mm以下の砂粒含む。焼成良好、黒斑あり	原位置で出土した底部片。外面摩滅、内面は縦方向の板ナデ。底部高21.0cmで実際は突帯の一部がわずかに残るのみ、底部にはやや小さめの方形透孔が2方向にある。底部付近はやや器壁が厚い。底部完存。	0151 ~ 0154

図番号	報告番号	調査回数	出土地点	遺物名	計測値	色調	材質等	備考	登録番号
59	48	TOM 4	H区-埴輪列 No. 6	円筒埴輪	底径 32.5cm 残高 24.3cm	黄橙色	粗、3mm以下の砂粒含む。焼成良好、黒斑あり	原位置で出土した底部片。外面はタテハケ(10条/cm)が主体だがあまり回転性のないヨコハケや不定方向のハケが2次的に施される。内面はタテハケ。底部高20.8cmで第1段突帯の剥離面に設定技法の凹線がみられる。底部には2方向に半円形透孔がある。底部完存。	0136～0142
59	49	TOM 4	H区-埴輪列 No. 8	円筒埴輪	復元口径 39.0cm 残高 11.0cm	黄橙色	粗、3mm以下の砂粒含む。焼成良好、黒斑あり	50の内部に落ち込んだ口縁部片。外面タテハケのちヨコハケ(8～10条/cm)、内面ナデ。口縁部高は推定10.5cmで、端部は垂下口縁のような形状を呈する。約1/6遺存。	0147～0150
59	50	TOM 4	H区-埴輪列 No. 8	円筒埴輪	底径 28.2cm 残高 23.3cm	橙色	粗、3mm以下の砂粒含む。焼成良好、黒斑あり	原位置で出土した底部片。外面はタテハケのちナメハケ(8～10条/cm)、内面はハケを施す部分とナデを施す部分とがある。底部高20.6cmであり、突帯はやや突出した印象をもつ。底部には2方向の半円形透孔がある。底部完存。	0147～0150
59	51	TOM 4	H区-埴輪列 No.10	円筒埴輪	底径 35.3cm 残高 33.8cm	黄橙色	粗、3mm以下の砂粒含む。焼成良好、黒斑あり	原位置で出土した底部片。外面タテハケ(8～10条/cm)で、2段目にはその後Ca種ヨコハケ。内面はタテハケ。底部高21.5cmで突帯はやや太い印象をもつ。底部には2方向の半円形透孔がある。底部完存。	0157～0161
59	52	TOM 4	H区-埴輪列 No.12	円筒埴輪	底径 32.0cm 残高 28.0cm	黄橙色	粗、3mm以下の砂粒含む。焼成良好、黒斑あり	原位置で出土した底部片。内外面ともに摩滅するがわずかにタテハケ(8～10条/cm)がみえる。底部高20.6cmで突帯は下端が突出する形状を呈する。底部には2方向の半円形透孔がある。底部完存。	0166～0171
59	53	TOM 4	H区-埴輪列 No. 7	円筒埴輪	復元口径 43.6cm 残高 24.3cm	黄橙色	粗、3mm以下の砂粒含む。焼成良好、黒斑あり	55の内部に落ち込んだ口縁部片。外面タテハケのち横方向基調のヨコハケ(8～10条/cm)、内面はハケ・ナデがところどころにみえる。口縁部高12.4cmで端部は外側へ屈曲する。約1/4遺存。	0143～0146
59	54	TOM 4	H区-埴輪列 No. 7	円筒埴輪	残高 31.8cm	黄橙色	粗、3mm以下の砂粒含む。焼成良好	55の内部に落ち込んだ胴部片。外面は摩滅し不明瞭だがタテ・ヨコハケや板ナデのような痕跡がみえる。内面は不定方向のハケ。突帯間隔は14.3cmで、突帯はやや突出した印象をうける。逆三角形透孔あり。約1/10遺存。	0143～0146
59	55	TOM 4	H区-埴輪列 No. 7	円筒埴輪	底径 32.0cm 残高 22.7cm	黄橙色	粗、3mm以下の砂粒含む。焼成良好、黒斑あり	原位置で出土した底部片。内外面ともに摩滅。底部高20.8cmで突帯剥離面に設定技法の凹線が認められる。底部には2方向に半円形透孔あり。底部完存。	0143～0146
60	56	TOM 4	H区-埴輪列 No.13	円筒埴輪	高さ 7.6cm 幅 13.8cm	黄橙色	粗、3mm以下の砂粒含む。焼成良好、黒斑あり	58の内部に落ち込んだ口縁部片。外面にはわずかにヨコハケがみえ、内面は摩滅。口縁部は外側へ屈曲する。	0172～0174
60	57	TOM 4	H区-埴輪列 No.13	円筒埴輪	残高 16.8cm	黄橙色	粗、3mm以下の砂粒含む。焼成良好、黒斑あり	58の内部に落ち込んだ胴部片。外面にはわずかにハケと板ナデがみえ、内面はナデ。突帯はやや突出し断面が特徴的なM字状を呈する。突帯間隔は推定で13.0cm。半円形透孔が2方向にある。破片下方が58に接合せず、半円形透孔の存在から透孔が4段目に想定できる。約1/2遺存。	0172～0174
60	58	TOM 4	H区-埴輪列 No.13	円筒埴輪	底径 27.5cm 残高 19.2cm	黄橙色	粗、3mm以下の砂粒含む。焼成良好、黒斑あり	原位置で出土した底部片。外面はわずかにタテ・ヨコハケがみえ、内面はナデ。底部高18.6cmで突帯の剥離面に設定技法の凹線が認められる。突帯は上端がやや突出する形状を呈する。底面から約10cm上方の外面に横方向の擦痕あり。底部完存。	0172～0174
60	59	TOM 4	H区-埴輪列 No.11	朝顔形埴輪	残高 9.7cm	黄橙色	粗、3mm以下の砂粒含む。焼成良好	60の内部に落ち込んだ朝顔形埴輪の頸部片。外面ヨコハケ(8条/cm)、内面ヨコハケ・ナデ。約1/4遺存。	0162～0165
60	60	TOM 4	H区-埴輪列 No.11	朝顔形埴輪?	底径 34.8cm 残高 29.0cm	黄橙色	粗、3mm以下の砂粒含む。焼成良好、黒斑あり	原位置で出土した底部片。外面タテハケのちCa種ヨコハケ(8～10条/cm)、内面ナデのち横方向の板ナデ。底部高21.1cmで、2段目には2方向の逆三角形透孔あり。埴輪列の屈曲部にあたり、内部から朝顔形埴輪の破片が出土し、やや大型な点からみても朝顔形埴輪であると考えられる。底部完存。	0162～0165
61	61	TOM 4	H区-埴輪列 No. 4	朝顔形埴輪	高さ 10.4cm 幅 15.5cm	黄橙色	粗、3mm以下の砂粒含む。焼成良好	64の内部に落ち込んだ朝顔形埴輪の口縁部片。内外面ともに摩滅するが、内面に直径約1cmの竹管文が2つおさされている。天理市東大寺山古墳でも同様のスタンプが朝顔形埴輪にみられるほか、兵庫県五色塚古墳にも類似がある。62と同一個体とみられ、一部に施されたものと考えられる。	0127～0130
61	62	TOM 4	H区-埴輪列 No. 3	朝顔形埴輪	復元口径 72.0cm 残高 15.4cm	黄橙色	粗、5mm以下の砂粒含む。焼成良好、黒斑あり	41の内部に落ち込んだ朝顔形埴輪の口縁部片であるが、41は円筒埴輪であるため、隣に樹立された64の朝顔形埴輪に伴うものであると考えられる。外面ヨコハケ(10条/cm)、内面横方向のナデ。口縁部はゆるやかに広がる形状を呈する。約1/8遺存。	0123～0126
61	63	TOM 4	H区-埴輪列 No. 4	朝顔形埴輪	復元残高 33.9cm	黄橙色	粗、3mm以下の砂粒含む。焼成良好、黒斑あり	64の内部に落ち込んだ朝顔形埴輪の胴部片で、接点のない同一個体を図上復元した。外面は摩滅するがわずかにハケ、内面はハケが一部にみえるが概ねナデ。円筒埴輪の口縁部高に相当する部分の突帯間隔は6.9cm、そこから頸部までの高さは13.8cmで、頸部の突帯はやや接着が甘い。約1/4遺存。	0127～0130
61	64	TOM 4	H区-埴輪列 No. 4	朝顔形埴輪?	底径 34.0cm 残高 36.2cm	黄橙色	粗、3mm以下の砂粒含む。焼成良好、黒斑あり	原位置で出土した底部片。外面は摩滅するがタテ・ヨコハケがわずかにみえる。内面はタテハケ(10条/cm)のちナデ。底部高20.9cm、突帯間隔14.3cm、2段目に2方向の逆三角形透孔あり。内部に落ち込んだ破片や、やや大型であることから朝顔形埴輪と考えられる。底部完存。	0127～0130
62・63	65	TOM 5	U区-原位置取り上げ	円形埴輪	長さ 46.0cm 幅 59.0cm	淡橙色	やや粗、3mm以下の砂含む。焼成良好	原位置より出土した円形埴輪。上部は欠損するが底部は約1/2残存し、角は緩やかなカーブを描く。平面形は鉤形か隅丸方形かは不明であるが、屈曲する破片がないことから後者の可能性が高い。積み上げ痕跡は不明瞭だが、割れ面からみて粘土紐を壁体が外傾するように積み上げている。厚さは底部で約2.5cm、突帯付近で約1.8cm、底部より約10cmのところでは約1.5cmと上部ほど薄くなる。残存する底部の二辺中央には、幅約11cmの半円形の割込みあり。割込みは、外側から内側へ削り抜く。壁体には底部より約6cmの位置に1条の突帯がつく。突帯の幅は約1cmと、家形埴輪の裾廻突帯より細く、角を持たない。突帯下部に接合痕が残る。	0284～0330
64	66	TOM 5	U区-形象埴輪周辺	円形埴輪	高さ 11.2cm 幅 14.3cm	淡橙色	やや粗、1.5mm以下の砂含む。焼成良好	円形埴輪の上端部分の破片。上端面から約6cmのところには1条の突帯がつく。突帯の位置関係が底部と類似するが、厚さ約1.1cmと薄いことから上端部と判断した。この天地でみた場合に、突帯下部に接合痕が残ることも上端部片であることを担保する。	0331

図 番号	報告 番号	調査回数	出土地点	遺物名	計測値	色調	材質等	備考	登録番号
64	67	TOM 5	U区-形象埴輪 周辺	圓形埴輪	高さ 15.2cm 幅 17.9cm	淡橙色	やや粗、3mm以下の砂含む。焼成良好	圓形埴輪の入口部片とみられる。底部から約6cmの位置に横方向の突帯があり、これと直交する縦方向の突帯がみられる。さらにその外側には平行する透かしの残存面があることから、これを入口部と判断した。貼り付け順序は、縦方向の突帯の上に横方向の突帯が重複する。入口と想定した部分の下には、直角な角を持つ剥離痕がある。また、縦方向の突帯の端部から約6cmの位置に横方向の突帯がのびると想定される突帯片も合わせて出土しており、厚みや形状からみて上端部側の突帯とみられる。	0331
65	68	TOM 5	U区-原位置取り 上げ	家形埴輪	長さ 30.5cm 幅 34.8cm	淡橙色	やや粗、3mm以下の砂含む。焼成良好	圓形埴輪(65)の内部で出土した家形埴輪。割れているため歪みがあるが、平面形はほぼ正方形を呈する。一般に家形埴輪は粘土紐を積み上げて壁体を製作するが、厚さ0.5～0.7cmの粘土板を2～3枚貼り合わせて厚さ約2cmの壁体としている。各辺の底部中央に、幅約7cmの半円形の刃込みをもつ。底部より約6cmの位置に1条の台形突帯がつく。家形埴輪の突帯は圓形埴輪と違い、幅約2cmで奥行き約2.5cmと太い。また貼り付け後に突帯上辺を工具で水平になるように調整しており、壁体にはその際の工具痕が認められる。	0284～ 0330
66	69	TOM 5	U区-原位置取り 上げ	家形埴輪 (湧水施設?)	長さ 13.8cm 幅 18.3cm	淡橙色	やや粗、3mm以下の砂含む。焼成良好	家形埴輪(68)の内部に置かれていた2槽式構造物を模した埴輪である。まず、長辺2枚の粘土板に短辺の粘土板を貼り合わせて箱型にする。この中央に粘土板で仕切りをする。厚さ約1cmで概ね揃う。2槽の前面にはそれぞれの中央に2段の切れ込みがある。切れ込みの高さは約4.5cmと約3cmで高さに差がある。2槽自体の高さも異なり、背面で約8cmと約6cm、前面で約6cmと約4cmである。側面は上方へ向かって広がる。	0284～ 0330
68	70	TOM 5	U区-形象埴輪 周辺	家形埴輪	高さ 6.7cm 幅 12.5cm	淡橙色	やや粗、3mm以下の砂含む。焼成良好	L字に屈曲する破片で、剥離痕の立ち上がりから片流れ造り家形埴輪の屋根上端部と想定して図化した。切妻造り屋根の破風の可能性もある。裏面のL字状に剥離した痕跡を水平にみると、屈曲面は圭頭形を呈する可能性があり、幅もやや広がる。	0331
68	71	TOM 5	U区-形象埴輪 周辺	家形埴輪	高さ 5.3cm 幅 9.3cm	赤橙色	やや粗、5mm以下の砂含む。焼成良好	L字に屈曲する破片で、70と類似する個体とみられる。	0331
68	72	TOM 5	U区-形象埴輪 周辺	家形埴輪	高さ 12.1cm 幅 26.5cm	淡橙色	やや粗、3mm以下の砂含む。焼成良好	胎土等が70と類似することから家形埴輪の屋根片とみられる。内面に直線状の剥離痕がある。	0331
68	73	TOM 5	U区-形象埴輪 周辺	家形埴輪	高さ 10.9cm 幅 22.7cm	淡橙色	やや粗、3mm以下の砂含む。焼成良好	家形埴輪の屋根片。剥離痕の立ち上がりから家形埴輪の屋根の下端であると推測できる。緩やかな直角を描く剥離痕がある。剥離痕と端部は平行する。剥離痕より内側は調整されておらず、接合痕や指オサエが残る。	0331
68	74	TOM 5	U区-形象埴輪 周辺	家形埴輪	高さ 4.9cm 幅 12.1cm	淡橙色	やや粗、3mm以下の砂含む。焼成良好	端部と剥離面までの距離が73と類似するため、家形埴輪の屋根片とみられる。内面は摩擦が激しく、指オサエが残る。外面、両側面は工具で丁寧に調整される。	0331
68	75	TOM 5	U区-形象埴輪 周辺	家・圓形埴輪	高さ 7.6cm 幅 4.0cm	淡橙色	やや粗、1mm以下の砂含む。焼成良好	窓や柱など、何らかの角に位置すると推測できる破片。上端面、底面、外面は丁寧に調整される。	0331
68	76	TOM 5	U区-形象埴輪 周辺	家・圓形埴輪	高さ 4.2cm 幅 3.9cm	淡赤褐色	やや粗、2mm以下の砂含む。焼成良好	直角に屈曲する透かしをもつことから、圓形埴輪の入口または家形埴輪の窓の破片と考えられる。	0331
68	77	TOM 5	U区-形象 No.1	家・圓形埴輪	高さ 4.8cm 幅 9.2cm	赤褐色	やや粗、2mm以下の砂含む。焼成良好	L字に屈曲する破片。側面に線刻が施される。端面に対して斜め方向に側面が残存しており、形状は70等と類似するが別の部位の破片とみられる。屈曲面に剥離痕があることから、圓形埴輪の入口部下方の剥離面に対応する階段状構造物などの可能性もある。底面には、粘土のヨレや工具痕が残ったままで調整されていない。	0284
68	78	TOM 5	U区-形象 No.4	家・圓形埴輪	高さ 3.6cm 幅 4.5cm	淡赤褐色	やや粗、2mm以下の砂含む。焼成良好	内面、外面ともに直線状の沈線が施される。外面に立ち上がりの痕跡が観察できる。	0287
68	79	TOM 5	U区-形象 No.12	家・圓形埴輪	高さ 6.2cm 幅 4.2cm	淡橙色	やや粗、2mm以下の砂含む。焼成良好	L字に屈曲する破片。直角に近い鈍角をなす。外面の1面のみ直線状の沈線が認められる。	0295
68	80	TOM 5	U区-形象埴輪 周辺	家・圓形埴輪	高さ 5.6cm 幅 5.8cm	淡橙色	やや粗、2mm以下の砂含む。焼成良好	L字に屈曲する破片。内面に直線状の沈線が施される。	0331
68	81	TOM 3	E区-SWh13 検出中	家形埴輪	高さ 12.7cm 幅 13.4cm	淡黄褐色	粗、5mm以下の砂粒含む。焼成良好、黒斑あり	家形埴輪の屋根部片。外面には網代表現の線刻が施される。縦線の横線の罫線で区画した内部にさらに縦線3条または横線6条を概ね2マス続けて施している。縦方向の罫線は横方向の下辺の罫線を突き抜けておりやや粗雑である。破風が取り付いたためか片側が厚みをもつてのびる。	0446
68	82	TOM 2	南側1段目平坦 面倒木根の下 で表採	家形埴輪	高さ 6.2cm 幅 8.8cm	淡黄褐色	粗、3mm以下の砂粒多く含む。焼成良好	家形埴輪の壁体部片。柱を表現したと思われる部分が約0.5cm貼り足すことで立体的に表現されている。南側の1段目平坦面が想定される部分の本根が台風により起こされた部分で採集したもので、埴輪部からの転落の可能性もあるが、U発掘区で家形埴輪の出土がみられることから、それに関連する遺構等が広がる可能性もある。	0413

図番号	報告番号	調査回数	出土地点	遺物名	計測値	色調	材質等	備考	登録番号
69～78	83	TOM 4	G区-形象(盾)	盾形埴輪	復元口径 54.3cm 49.2× 底径 40.2cm 復元高 125.2cm	淡黄褐色	粗、3mm以下の砂粒含む。焼成良好、黒斑あり	盾面側(表面)を外側に向けた状態で原位置で出土。底部から形象部にかけての破片(円筒部5段分)と、口縁部の盾面側の破片からなる。接点はないが、盾面の文様構成から図上で復元した。盾面を施文した楕円筒の左右に鱗をもつ。口縁部は裏面に貼付突帯口縁、表面に貼付突帯の上に粘土を積み上げ外反する有段口縁をつくる。鱗は最下段突帯から口縁端部までおよび、貼り付け部分に刻み目を入れている。鱗接合部下端の内面には棒状工具による押圧痕が残り、当て具として利用したものとみられる。透孔は、基部に半円形透かしが対向する位置に2か所あり、3段目の円筒部側の鱗との接合面付近に円形透かしが2方向に穿たれ、6段目にも同様に円形透孔が穿たれる。盾面は突帯で内区と外区に区画される。外区は、内区を挟んで左右に位置する幅12.0cmの平行横線文帯であり、さらに外側には文様帯を区画するように基底部突帯から口縁部にかけて縦方向の突帯が貼り付けられる。内区は遺存状態が悪く不明瞭だが、中央に横線文帯が線刻され、上下に2条沈線で鍵手文を表現し、内区の頂点からの斜線が施されている。内外区の下には上1段分、下2段分の直弧文が施され、その上段には上向きの鋸歯文が7つ施文されており、右の1点は縦線、それ以外は山形の線刻で充填する。線刻下の調整はタテハケのちヨコハケ(7～8条/cm)を行っており、剥離面から突帯貼り付け前にヨコハケを施したことがわかる。表面の3段目以上はタテハケのみで調整を行う。内面調整はヨコハケのちナデ。底部高は25.5cm、円筒部側の突帯間隔は13.5～14.0cmであり、4条目突帯の剥離面には突帯設定技法の刺突痕が確認できる。底部完存。	0018. 0019. 0051. 0053～ 0057
79	84	TOM 5	A区-SEa2	盾形埴輪	高さ 10.7cm 幅 7.6cm	淡橙色	粗、3mm以下の砂粒を含む。焼成良好、黒斑あり	盾形埴輪の盾面片。外面は縦方向に1条の沈線とその内側に斜線または綾杉文を線刻する。この帯の外側に鋸歯文を線刻し2つ分が残存する。鋸歯文は外縁を描いた後に内部を縦線で充填する。内面は支持粘土帯の剥離痕が残りナデ調整。	0083
79	85	TOM 2	A区-北西拡張部	盾形埴輪	高さ 6.4cm 幅 5.2cm	褐色	粗、3mm以下の砂粒含む。焼成良好	盾形埴輪の盾面片。外面は4条の沈線が線刻される。調整は不明瞭。内面は残存面がない。	0253
79	86	TOM 2	C区-流土掘削中	盾形埴輪	高さ 5.2cm 幅 5.5cm	淡褐色	粗、3mm以下の砂粒多く含む。焼成良好、黒斑あり	盾形埴輪の盾面片。外面は段差表現があり、8条の横線を線刻する。調整は不明瞭。	0379
79	87	TOM 3	F区-SE15 流土中・SEm5 検出中	盾形埴輪	高さ 18.9cm 幅 21.3cm	淡黄褐色	粗、5mm以下の砂粒含む。焼成良好	盾形埴輪の盾面片。外面には低平台形状を呈する横方向の突帯が施され、外面上端にも、突帯下端部分のナデの一部が確認できる。突帯間には12条の横線が線刻され、中央の突帯の下部にも横線が7条分残存する。横線は、突帯成形時のナデで消された痕跡はなく、突帯貼付後に線刻する。突帯間隔は上側の立ち上がりから復元すると約11.5cmとなる。内面は粘土紐接合痕が残りナデ、およびナメハケ(8条/cm)で調整。下部には下方から棒状の工具を刺した痕跡があり、乾燥工程時の支持具に関連するものか。	0490. 0497
79	88	TOM 3	F区-SEm5 検出中	盾形埴輪	高さ 5.9cm 幅 7.2cm	淡黄褐色	粗、3mm以下の砂粒含む。焼成良好	盾形埴輪の盾面片。外面には低平台形状を呈する突帯と、その上側に横方向の沈線が2条残存する。内面はハケ調整か。87と同一個体か。	0497
79	89	TOM 3	F区-SE15 流土中	盾形埴輪	高さ 7.5cm 幅 12.3cm	淡褐色	粗、5mm以下の砂粒含む。焼成良好、黒斑あり	盾形埴輪の盾面片。外面は右側からみて5条の沈線を施し、約1.5cmの間隔をとって残存するだけで12条の線刻がある。線刻下はナデ調整。内面は摩滅。出土地点や胎土が87と同一個体か。	0490
79	90	TOM 3	F区-SE16 流土中	盾形埴輪	高さ 3.1cm 幅 5.1cm	淡褐色	粗、3mm以下の砂粒含む。焼成良好	盾形埴輪の盾面片。外面は左から縦方向の沈線を5条線刻し、約1.5cmの間隔をとって2条以上の線刻を施した後、横方向の沈線を1条線刻する。内面は摩滅。出土地点や胎土が87と同一個体か。	0491
79	91	TOM 3	F区-SE15 流土中	盾形埴輪	高さ 18.4cm 幅 5.3cm	橙色	粗、3mm以下の砂粒含む。焼成良好	盾形埴輪の円筒部から鱗部にかけての破片。盾面側は一部残存するが施文はない。背面側は突帯が残存し下部には突帯の剥離痕跡があり、その間隔は約15cm。鱗部はナデ調整。内面はナデ調整で、粘土紐接合痕が残る。出土地点や胎土が87と同一個体か。	0490
79	92	TOM 3	E区-SWi11 検出中	盾形埴輪	高さ 5.3cm 幅 7.7cm	淡褐色	粗、3mm以下の砂粒含む。焼成良好、黒斑あり	盾形埴輪の盾面片。外面には鋸歯文が線刻され、内部は7条の縦線を線刻し外縁との施文順は不明瞭であるが、下辺は縦線の後に施す。内面は摩滅。	0454
79	93	TOM 3	E区-SWp11 検出中	盾形埴輪	高さ 5.9cm 幅 10.2cm	淡橙色	粗、3mm以下の砂粒含む。焼成やや不良	盾形埴輪の盾面片。盾面を区画する2条沈線と鋸歯文2つ分が残存する。鋸歯文は山形の外縁を連続して描き、縦線で充填するが、区画沈線に近い鋸歯文は縦線が4条と少なく鋸歯文自体も圧迫された印象をもつ。内面は摩滅。	0469-2
79	94	TOM 5	R区-表土掘削中	盾形埴輪	復元口径 46.9cm 残高 10.7cm	淡褐色	粗、5mm以下の砂粒含む。焼成良好	盾形埴輪の可能性のある口縁部片。貼付突帯口縁を呈し、口径が大きく復元できることから大型円筒埴輪の可能性もあるが、83の盾形埴輪の口縁部径と近似することや、盾裏面は貼付突帯口縁となることから盾形埴輪と考えた。内面には口縁端部から2.1cmの位置に粘土紐接合痕が残る。内外面ともに摩滅。約1/10遺存。	0245
80	95	TOM 2	D区-表土掘削中	蓋形埴輪	高さ 10.9cm 幅 14.1cm	褐色	粗、5mm以下の砂粒含む。焼成良好	蓋形埴輪の立ち飾り部上辺の破片。上辺から2条・1条・1条の横帯を施し、斜め方向に2条1組の沈線が2つある。片面は線刻が粗雑で斜め方向の沈線がみられない。線刻下の調整は不明瞭。	0406
80	96	TOM 2	D区-流土	蓋形埴輪	高さ 7.6cm 幅 9.5cm	淡黄褐色	粗、3mm以下の砂粒含む。焼成良好	蓋形埴輪の立ち飾り部片。横帯とそこから斜め方向にのびる2条1組の沈線が2つある。ただし、片面は遺存状態が悪く不鮮明。線刻が良好な面に赤色顔料が所々に残る。線刻下の調整は不明瞭。	0402
80	97	TOM 5	M区-化粧土断割り中	蓋形埴輪	高さ 14.9cm 幅 5.7cm	黄褐色	粗、2mm以下の砂粒含む。焼成良好	蓋形埴輪の立ち飾り部片。3条の横帯が幅に違いがあるが、表裏ともにあり基本構造となる。片面は工具によって斜めに入る2条沈線もあり、直弧文状の文様構成がみられる。線刻の良好な面に赤色顔料が所々に残る。	0217
80	98	TOM 5	U区-表土掘削中	蓋形埴輪	高さ 13.2cm 幅 9.0cm	黄灰色	粗、5mm以下の砂粒を含む。焼成良好	蓋形埴輪の立ち飾り部の上鱗の一部を含む破片である。面によって線刻の入り方に差が生じている。基本は軸部方向から斜めに伸びる3条の横帯が基本となるが、そこからくの字状に伸びる沈線など複雑な線刻構造をもつ。上鱗は形状に平行した沈線が続く。施文の切り合いが明瞭なところがある。	0334
80	99	TOM 2	D区-転落石検出中	蓋形埴輪	高さ 8.2cm 幅 9.7cm	淡黄褐色	粗、3mm以下の砂粒含む。焼成良好	蓋形埴輪の立ち飾り部片。縁部に2条1組の沈線を施し、その内側にくの字状の線刻を4本施す。100と同様の施文であることから鱗部である可能性が高い。片面は摩滅し、線刻下の調整も不明瞭。	0398

図 番号	報告 番号	調査回数	出土地点	遺物名	計測値	色調	材質等	備考	登録番号
80	100	TOM 2	D区-流土	蓋形埴輪	高さ 8.0cm 幅 10.5cm	淡黄褐色	粗、3mm以下の砂粒含む。焼成良好	蓋形埴輪の立ち飾り部片。緑部に1条、その内側に1条の沈線を施し、4条の横帯と2条の横帯の間に直交する2条1組の沈線が施される。ただし、片面は対応するような線刻でなくやや簡略化された印象をもつ。また、線取り沈線の後に施した焼成前の線刻があるが、片面にしきみられず意図せずついたものの可能性が高い。線刻の残りが良い面の内郭線は補刻したように沈線が2重になった部分がある。	0402
80	101	TOM 5	N区-転落石検出中	蓋形埴輪	高さ 10.3cm 幅 10.1cm	明黄褐色	粗、2mm以下の砂粒含む。焼成良好	蓋形埴輪の立ち飾り部片。線刻による施文は中央部の2条は同様であるものの、表裏では異なっている。沈線の間隔は均一ではなく、頂部方向に広がっていきものと狭くなっていくものと両種みられる。また、屈曲部には軸受部が続く。一部に赤色顔料が残る。	0230
80	102	TOM 5	R区-流土	蓋形埴輪	高さ 16.6cm 幅 15.3cm	茶褐色	粗、2mm以下の砂粒含む。焼成良好	蓋形埴輪の立ち飾り部片。線刻による施文があり、両面とも4条の横帯がみられる。片面にはさらに3条の沈線がある。摩滅しているものの、ハケ目が残存し静止痕も確認できる。片面には全体的に赤色顔料が残る。また、屈曲した部分には軸受部が続く。	0247
80	103	TOM 3	E区-SWi14検出中	蓋形埴輪	復元 口径 31.1cm 残高 6.3cm	淡黄褐色	粗、3mm以下の砂粒含む。焼成良好	蓋形埴輪の立ち飾り部片。内外面ともに摩滅。立ち飾りとの接合痕跡が認められず接していない部分とみられる。約1/10遺存。	0459
80	104	TOM 5	N区-転落石検出中	蓋形埴輪	復元 胴径 65.2cm 残高 9.0cm	黄褐色	粗、3mm以下の砂粒含む。焼成良好	蓋形埴輪の笠部上半部片。外面には横方向の突帯とそれに直行する縦方向の布貼りを段差で表現した痕跡が残る。段差は反時計回りに低くなっている。内面では、傾きの変化点にナデによる調整がみられる。断面では、成形時の接合痕が明瞭である。	0230
80	105	TOM 2	B区-NEa15検出中	蓋形埴輪	高さ 6.5cm 幅 11.0cm	淡褐色 (黒斑が主)	粗、3mm以下の砂粒多く含む。焼成良好、黒斑あり	蓋形埴輪の笠部片。外面には横方向の突帯とそれに直交する縦方向の布貼りを段差で表現した痕跡が残る。内面には円筒部への屈曲があるが接合関係は不明確。	0262
80	106	TOM 5	M区-表土掘削中	蓋形埴輪	高さ 14.3cm 幅 16.2cm	黄褐色	粗、2mm以下の砂粒含む。焼成良好	蓋形埴輪の笠部片。外面には横方向と縦方向に布貼りを段差で表現した痕跡が残る。横方向では笠部先端側が低くなり、縦方向では反時計回りに低くなる。内面はナデによって整形がされる。	0221
80	107	TOM 5	R区-流土	蓋形埴輪	高さ 5.9cm 幅 17.6cm	黄茶褐色	粗、3mm以下の砂粒含む。焼成良好	蓋形埴輪の笠部片。外面には笠部先端の辺が残り、そこに垂直に布貼りを段差で表現した痕跡が残る。段差は反時計回りに低くなる。外面には赤色顔料が僅かに残る。また、断面では等間隔に接合痕がみられる。	0247
81	108	TOM 2	A区-SWF4旧発掘区埋土	甲冑形埴輪	高さ 4.5cm 幅 7.5cm	淡黄褐色	粗、3mm以下の砂粒多く含む。焼成良好	甲冑形埴輪の草摺部片。外面には3条以上の縦帯とそれに直交する方向に鋸歯文が観察できるが、摩滅して不明瞭。沈線部分に赤色顔料が残る。	0244
81	109	TOM 2	A区-NEc3旧発掘区埋土	不明形象埴輪	高さ 6.5cm 幅 6.5cm	橙色	粗、3mm以下の砂粒多く含む。焼成良好	1条の横線とそれに直交する縦線が7条観察できる。やや丸みを帯びる形状を呈するが、蓋形埴輪とは印象が異なる。甲冑形埴輪あるいは盾形埴輪に組み合う冑形埴輪等の可能性もあるが判然としない。沈線部分に赤色顔料が残る。	0066
81	110	TOM 2	B区-SEa16検出中	不明形象埴輪 or 円筒埴輪	高さ 4.9cm 幅 3.6cm	赤褐色 (黒斑が主)	粗、3mm以下の砂粒多く含む。焼成良好、黒斑あり	やや屈曲した破片で、外面に2条1組の線刻がある。なんらかの形象埴輪、または円筒埴輪のヘラ記号の可能性もある。	0294
81	111	TOM 3	A区-SWc2旧発掘区埋土	不明形象埴輪	高さ 6.0cm 幅 9.6cm	橙色	粗、3mm以下の砂粒含む。焼成良好、黒斑あり。	表面にやや弧を描く梯子状の線刻がある形象埴輪片。外面ナデ、内面摩滅。板状の破片であるが線刻は片面のみで冑形埴輪の可能性もあるが、それにしてはやや薄い。	0242
81	112	TOM 5	U区-表土掘削中	不明形象埴輪	高さ 7.0cm 幅 8.4cm	橙褐色	やや粗、3mm以下の砂粒含む。焼成良好。	幅約4cmの粘土板を貼り付けた形象埴輪とみられるが種類は不明。U発掘区では湧水施設形埴輪に伴う破片しか基本的に出土していないが、この個体は明らかに胎土等が異なるため切り分けた。内面は横方向のナデを基調とするが、端部に近い部分はケズリ調整である。	0334
82	1	TOM 5	K区-断面10層	弥生土器 壺	底径 4.5cm 残高 2.9cm	淡褐色	やや粗、2mm以下の砂粒含む。焼成良好	弥生土器の壺底片。外面は摩滅、内面は底付近のみクモの巣状ハケの痕跡がみえる。底面中央はやや窪みドーナツ底状を呈する。約2/3遺存。	0200-2
82	2	TOM 5	U区-谷部断割中	土師器 ミニチュア高杯	残高 2.3cm	褐橙色	やや粗、3mm以下の砂粒・シャモット含む。焼成良好	ミニチュア高杯の杯部片。内外面ともに摩滅するが碗形状に立ち上がる。3とは別個体。脚部の剥離痕跡がほぼ完全に残る。	0332
82	3	TOM 5	U区-谷部断割中	土師器 ミニチュア高杯	残高 3.0cm	褐橙色	やや粗、3mm以下の砂粒・シャモット含む。焼成良好	ミニチュア高杯の脚部片。外面にはわずかにハケ調整が観察できる。	0332
82	4	TOM 5	K区-転落石上面出土	須恵器 杯蓋	残高 2.9cm	灰色	密、2mm以下の砂粒含む。焼成良好、堅緻	杯蓋にみられる段差が沈線化したものであるが、その部分までの頂部をクロケズリ、内面はクロコナデ。この特徴や直径から概ねTK10型式。約1/2遺存。	0189
82	5	TOM 2	B区-NBk1葦石検出中	須恵器 杯身	復元 口径 13.2cm 残高 3.4cm	灰色	密、1mm以下の砂粒含む。焼成良好、堅緻	内外面ともにクロコナデが基本で、外面下半部にわずかにクロケズリの痕跡がみえる。口縁部はやや内傾して立ち上がり、端部がわずかに外反する。概ねTK10型式に位置づけられる。葦石直上の初期流土に含まれるもので、墳丘が崩れた時期を示す。約1/6遺存。	0277
82	6	TOM 4	G区-盾形埴輪付近検出中	須恵器 壺	高さ 3.0cm	暗灰色	密、ほとんど砂粒なし。焼成良好、堅緻	遺存率1/32以下の小片。基本的に内外面ともにクロコナデだが、外面には沈線のような痕跡あり。ややしっかりした高台が貼り付けられており、厚みや形状から壺底である可能性が高い。概ね7世紀中頃～8世紀頃に位置づけられる。	0057
82	7	TOM 5	K区-土師器杯(記録あり)	土師器 杯身	口径 12.0cm 器高 4.0cm	橙～赤褐色	やや密、1mm以下の砂粒わずかに含む。焼成良好	ほぼ完形で正立して出土した。出土層位は概ね葦石の補修後の面に相当する。外面は口縁部付近をヨコナデ、以下は不定方向のナデ・オサエが目立つが、これらの下にわずかにケズリがみえる。内面はヨコナデ。口縁部のヨコナデによりわずかに端部が外反する。	0195

第5章 総括

第1節 墳丘

円丘部の復元 第1次調査で明らかになった通り、円丘部が3段築成であることが発掘によって裏付けられた。1段目は道路建設によって半分近くが消滅しているため、比較的旧状を留める第3段から検討する。

3段目裾はB・E・M・Q発掘区で確認したほか、測量図でも明確な傾斜変換点を読み取れ、直径約55mの正円をなす。標高は102m前後で水平に近い。墳頂は大きく変形しているが、A発掘区東拡張区での斜面上端の復元位置を基準に考えると、墳頂平坦面は直径約27mに復元できる。高さは約7mである。

2段目裾はD・L・N発掘区で確認した。その標高はD発掘区では約97mであるのに対し、西側のN発掘区では1m以上高く、水平とならない。南東側の乱れが少い等高線を参照して復元円を描くと、直径約86m、

高さ約4mとなる。テラス幅は6.5m(M発掘区)～7m(B・E発掘区)で一周し、中央よりやや外側に鱗付円筒埴輪列がめぐる。

1段目裾はC・G・J・O発掘区で確認した。北東側で近接するC・G発掘区での標高約94.3mに対し、北側のJ発掘区では約93.6m、西側O発掘区では約96.7mと最大で約2.4mの高低差がある。これにより平面形は正円をなさず、中心点も2・3段目とは一致しない。東側から南側にかかる部分が不明であるうえ、都合3点から円周を復元することになるので確実ではないが、現地形の等高線から判断して標高の高い西側がつぶれたような不整形円形をなすと考えられる。現在は失われているが西側には丘尾切断による残丘があり、墳丘との間には掘割状の平坦面がある。地山掘削を省略した結果、本来設計された円形に施工できていないのだろう。同様の省

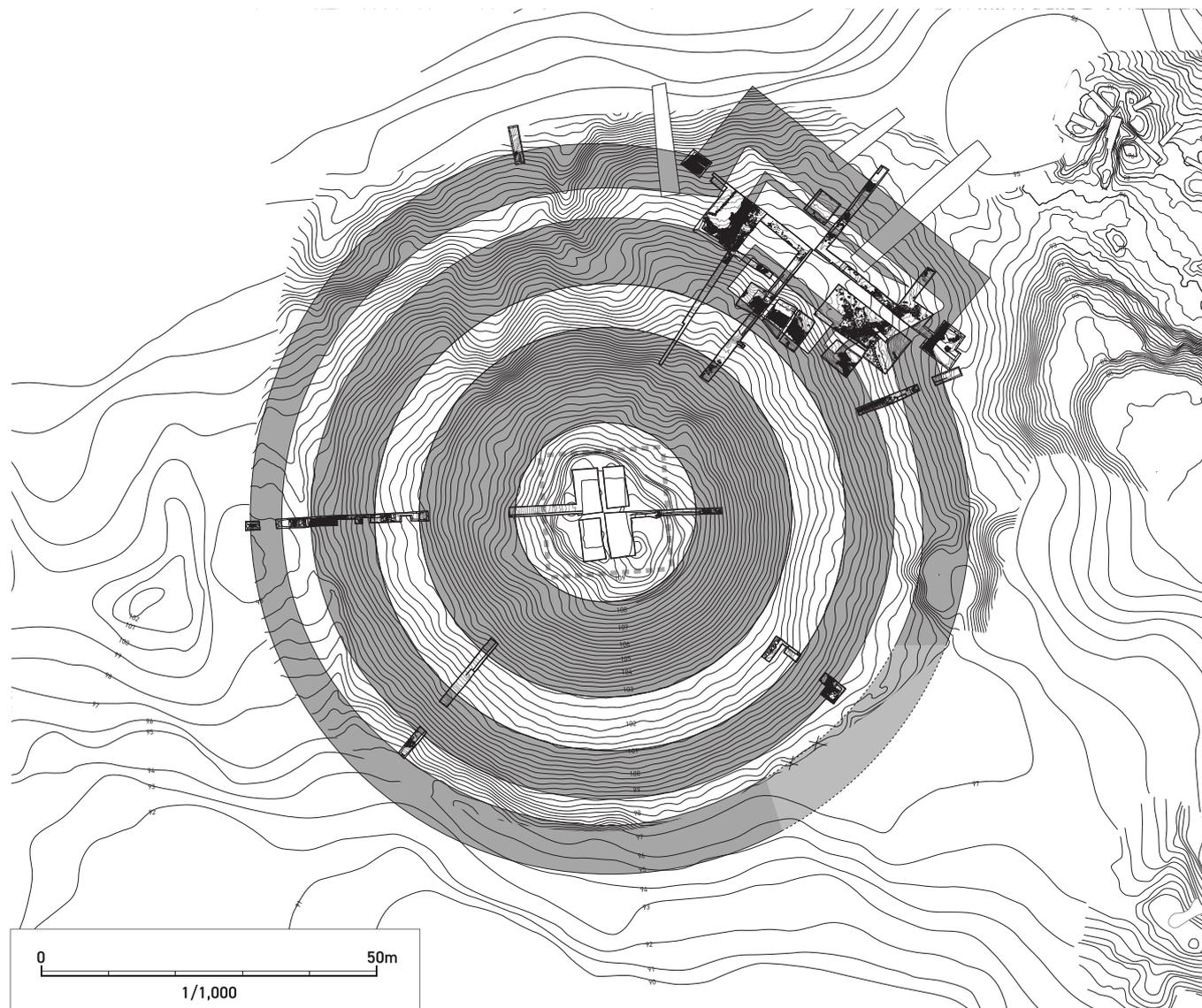


図83 富雄丸山古墳の墳丘復元図 1/1,000

略は南東側にも認められ、尾根上面の標高が1段目平坦面と一致することから、この部分は1段目斜面がまったく西側同様に埋没した可能性が高い。それ以外の部分が正円に施工されているとすれば1段目の直径は約109mとなる。1段目斜面上端は流出により確かでないが、平坦面幅は約4.5mで、中心に円筒埴輪列がめぐり、**造出しの復元** 造出しでは上・中・下段の3段構造（左右非対称）を確認した。

下段は側面が主軸に平行する幅約46m、長さ約9mの方形である一方、側面斜面上端は「ハ」の字に開く。平坦面は円丘部1段目平坦面と接続し、造出し前面では盛土の流出により明確でないが、B・P発掘区の成果からは幅の狭い平坦面がめぐっていたと推定できる。標高は約96.5mに一定する。埴輪列も円丘部から屈曲して連続するが、造出し側面の途中で途切れている。

中段は「ハ」の字に開くが、その上面は円丘部から離れるにつれ高さを減じ、南側側面では斜面が収束して下段平坦面と接続する複雑な構造である。削平による変形も懸念されるが、中段上面で原位置を留める石敷が残ることに加え、南側側面を延長すると埴輪列と干渉することから、南東側隅部では中段が消失するのが本来の形状であったと考えておく。中段平坦面は円丘部2段目斜面の中位に取り付く。

上段は変形が著しく復元が難しいが、I発掘区で確認した石敷の空白域を参照すると、幅約17m、長さ約

5mの長方形に復元できる。上段上面は円丘部2段目平坦面よりわずかに低く、短い斜面によって区画されている。上段平坦面に存在するSX02の掘込開始面が標高約99.2mであり、造出し全体の高さは約5.2mとなる。

以上から埴丘を復元すると図83のようになる。

富雄丸山古墳の設計 以上の復元を踏まえ、富雄丸山古墳の設計を検討したい。検討の枠組みには、前方後円墳の精密な測量成果に立脚した新納泉による成果を参照する（新納2018）。

先に確認したように、富雄丸山古墳は尾根を削り出すことで構築されており、当初の設計を正確に施工していない部分がある。特に西側の尾根に連なる部分は丘尾切断の省略によって埴丘基底が東側より1m以上高くなっており、平面的にも大きく内側に入り込んでいる。したがって埴丘構造の検討には、当古墳の築造にあたって意識されたと思われる北東側の構造を重視した。

まず、円丘部で確実な円周が復元できる3段目に着目すると、その直径は23.1cm/尺（6尺=1歩=1.386m）前後の漢尺で40歩に相当する。1段目の直径は3段目のほぼ倍の80歩として復元円を書くと現況によく一致する。ここで両者の公約数である4.0歩が基本単位として用いられたと仮定すると、2段目直径は16単位（64歩）に近似する。埴頂平坦面の直径は5単位（20歩）となる。平坦面幅は基本単位と一致することが多いが、当古墳では土壌の流出により平坦面幅を確定させるのが困難である。第5次調査までの成果からは1段目・2段目平坦面幅はいずれも基本単位に一致しないが、これは地形の制約から施工が不安定なことに起因しており、設計上の平坦面幅を復元することが今後の課題となる。

各段斜面下端からひとつ上位の段の斜面下端（3段目の場合は埴頂平坦面）までの高さを各段高として計測すると、1段目高2.9m（C・D発掘区間）、2段目高4.2～4.5m、3段目高6.7～7.5mとなり、それぞれ2歩、3歩、5歩、円丘部全体の高さは10歩となる。

造出しは構造が複雑である上、少なからず変形を被るため厳密な設計の復元は難しい。平面形の計測値を機械的に漢尺に換算するならば、幅33歩、長さ6歩、高さ4歩に相当する。幅は完数値とならないが、円丘部直径の2/5に近似する点は企画性を反映するとみなせる。

以上から、富雄丸山古墳の設計を模式的に示したのが図84である。なお、第6次調査成果をふまえて、埴頂部の埴、造出し上段や円丘部南東側区画施設等の評価は改めて行う。（柴原）

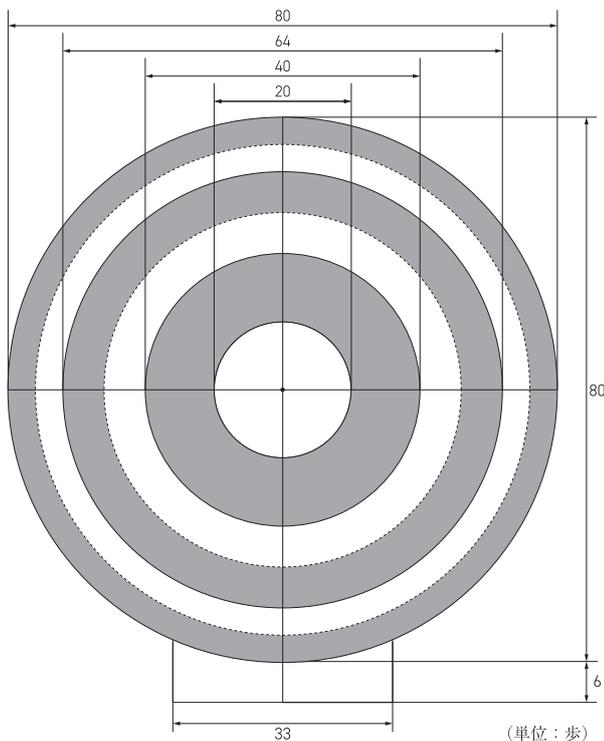


図84 富雄丸山古墳の埴丘設計模式図

第2節 副葬品

本調査で出土した副葬品は、旧発掘区の墓坑1段目内埋土（表土下約0.5mまで）を再掘削した際に出土したものである。盗掘や既往の発掘調査で取りこぼされたものであるため、多くが既知の出土品の小片である。よって、本調査で新たに判明した副葬品等についてまとめる。

銅鏡 これまで銅鏡の確実な出土はなく、伝資料としての銅鏡も三角縁神獸鏡であった。今回出土した斜縁神獸鏡は、華北東部～楽浪郡で3世紀前半頃から製作されたとみられる舶載品であり、列島内では古墳時代に入ってから出土事例が認められる（實盛2009）。製作年代に対して、比較的時間を問わずに副葬された事例（大阪府安満宮山古墳など）もあるが、古墳時代前期後半～中期初頭に副葬例が増加するのが特徴である。また、鏡背面の図像文様が摩滅したような状態を呈するものが多いことから、出土傾向とあわせて長期保有や踏み返し等が想定される。斜縁神獸鏡を副葬する古墳の多くは各地の首長墳であるため、日本最大の円墳である富雄丸山古墳から出土したことは、こういった傾向を補強する。

鍬形石 明治時代の盗掘品のなかに一部が欠損する2個体が存在する。奈良県による1972年の調査では、板状部隅角が欠損する個体と接合する破片が出土している。今回出土した小片は上半部が欠損する個体に接合するものであることが判明した。なお、2022年1月30日に終了したヤフーオークションで、伝富雄丸山古墳出土とする鍬形石の上半部片1点、管玉2点、山谷式の車輪石片1点が出品されていた。このうちの鍬形石は、表面状態や装飾表現からみて、京都国立博物館蔵の上半部が欠損するものと同一個体であるとみられる。残念ながら落札されて行方不明となった。なお、伝富雄丸山古墳出土車輪石として、正木美術館（大阪府）に1点、九州国立博物館に1点が所蔵されている。発掘調査出土品のなかに車輪石は知られていないが、これらが実際に富雄丸山古墳出土品の可能性がある。

管玉 既往の調査でも出土しているが、長さ約3cmの細長い個体はこれまで出土していなかった型式である。また、やや湾曲がみられ手玉を構成していたと思われる管玉もはじめて確認された。

土製品 副葬品ではないが墳頂部での祭祀に用いられたと考えられる円板状土製品もはじめて確認されたものである。餅などの食物を模した土製品と一般には考えられているが、このような土製模造品祭祀は4世紀末以降に盛行すると考えられてきた。富雄丸山古墳の時期を評価する上でも重要な遺物である。なお、1972年の調査報

告のなかで、不明土製品として報告されたものは、アケビ形土製品の可能性があるもので、食物形土製品を用いた祭祀が行われた可能性を高める。

年代的位置づけ 副葬品の位置づけについては、大きく二つの見解がある。大賀克彦は埴輪編年Ⅰ期新相とⅡ期が一部同時期であることを認める立場であり、古墳時代前期後半の画期である大賀編年前Ⅴ期に富雄丸山古墳を位置づけた（大賀2002）。この理解は、都出比呂志が指摘した滑石製模造品のなかでも農具形が他より一段階後出するという見解（都出1979）から距離を置くもので、写実的な滑石製模造品を古く位置づけようとしたものである⁽¹⁾。

しかし、近年では埴輪編年Ⅰ期とⅡ期の時間的前後関係を認める立場が優勢（鐘方2003・廣瀬2015）であり、Ⅱ群埴輪で構成される古墳は大賀編年前Ⅵ期以降に位置づけられる場合が多い（森下2005・岩本2018）。

森下章司は、都出の見解を追認し、富雄丸山古墳を前期古墳5区分のうち5段階（大賀編年前Ⅶ期相当）に位置づけた（森下2005）。近年では、岩本崇も同様の理解に基づいて位置づけている（岩本2018）。つまり、副葬品からみた位置づけでは、大賀のようないわゆる紫金山古墳併行期（大賀編年Ⅴ期）に遡らせる場合と、森下・岩本のように帯金式甲冑出現期に下らせる場合（大賀編年Ⅶ期）とがある。

今回の調査を経て、いずれかを判断できるだけの新たな副葬品はないが、円板状土製品は土製模造品祭祀に関わるものであるとみられるため、より後出的な立場を支持するものである。とはいえ、大賀編年前Ⅶ期として位置づけるか、前Ⅵ期とするかは滑石製模造品の理解に関わる部分であり、検討する必要がある。とくに前Ⅵ期は鐘方正樹による前期埴輪編年のⅡ期1・2段階を包括するものであり、仮に農具形を後出させるとしても前Ⅵ期に含められる余地はある。この点は、埴輪の分析と合わせて今後検証すべき課題であろう。

第3節 埴輪

第1項 円筒埴輪

分類 第2～5次調査で、円丘部1・2段目と造出し下段平坦面の円筒埴輪列を検出し、合計約40点を取り上げて観察した。大きく鱗付円筒埴輪、鱗付楕円筒埴輪、普通円筒埴輪、朝顔形埴輪の4種類があり、規格等からさらに細分できる。段数構成が明らかなのは5条6段構成であり、透孔配置からみてこれと同様のものが多いと考えられるが、一部に6条7段構成となる可能性が高

い一群がある。まず、これらの型式分類を行う。

鱈付円筒埴輪 A 型式: 底部高約 27cm、突帯間隔約 16cm、口縁部高約 7cm で、各部位の数値が相関性を持たない。2 段目（4 段目）に長方形透孔がある。鱈の下辺は水平である。

鱈付円筒埴輪 B 型式: 底部高 20cm で突帯間隔と口縁部高は不明。ただし、鱈付 A 型式の底部外面で底面から約 7cm（＝口縁部高）の位置に突帯設定工具に関わると見られる擦痕があり、底部高約 27cm から差し引くと鱈付 B 型式の底部高と一致する。仮に、同じ設定工具でこれら 2 型式を設定したとすれば、これとは別に突帯間隔を設定できる工具があればよい。普通円筒埴輪も突帯間隔が揃う傾向にあることをふまえて、突帯間隔と口縁部高を鱈付 A 型式に揃えて復元した。鱈の下辺は水平である。

鱈付楕円筒埴輪: 底部高約 17cm、突帯間隔約 15cm で口縁部高は不明。口縁部高＝底部高－突帯間隔では短すぎするため、1/2 底部高で口縁部高を復元した。2 段目（4

段目）に長方形透孔をもつ。鱈の下辺は斜めに立ち上がる形状を呈する。

普通円筒埴輪 A 型式: 唯一 6 条 7 段構成に復元でき、底部高約 22cm、突帯間隔約 14cm、口縁部高約 12cm で各部位の数値が相関性を持たない。底部に半円、3 段目（5 段目）に逆三角形透孔をもつ。

普通円筒埴輪 B 型式: 底部に円・逆三角形の透孔を交互に 4 方向に穿つ特徴をもつ。底部高約 21cm、突帯間隔約 14cm、口縁部高約 7cm で口縁部高＝底部高－突帯間隔であり 1/2 突帯間隔でもある相関性をもつ。

普通円筒埴輪 C 型式: 5 条 6 段構成で 2・4 段目に透孔をもち、口縁部高＝1/2 底部高となるものであるが、規格工具の長さが異なることから C1・C2 型式に細分できる。C1 型式は底部高約 22cm、突帯間隔約 15cm、口縁部高約 11cm で 2・4 段目に長方形透孔をもつ。C2 型式は底部高約 20cm、突帯間隔約 14cm、口縁部高約 10cm で 2 段目（4 段目）に長方形または逆三角形の透孔をもつ。

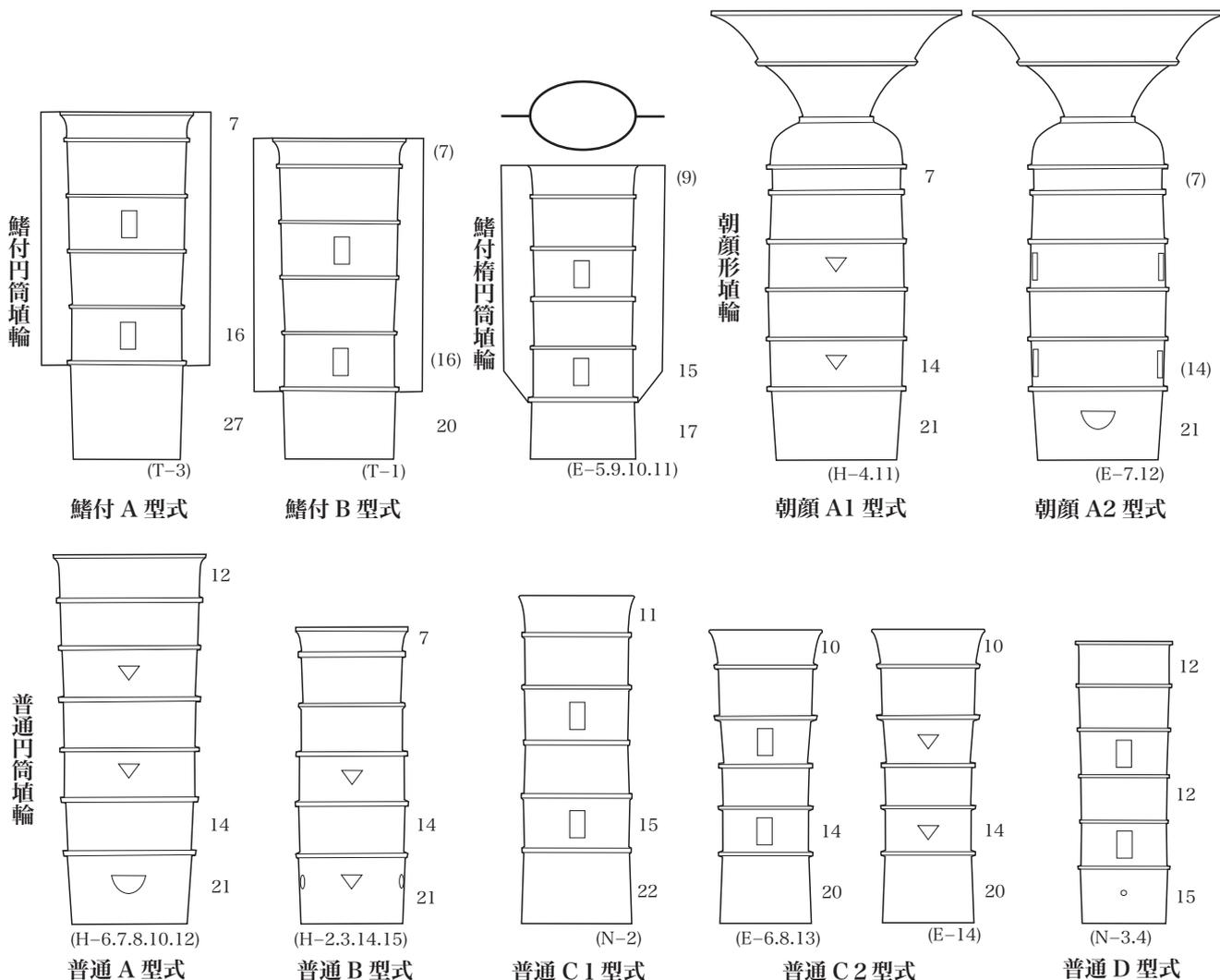


図 85 富雄丸山古墳出土埴輪の復元類型模式図

普通円筒埴輪 D 型式：底部高約 15cm、突帯間隔＝口縁部高約 12cm で、底部に小円孔、2 段目（4 段目）に長方形透孔をもつ。

朝顔形埴輪 A 型式：朝顔形埴輪で各部の数値がわかるものは、底部高約 21cm、突帯間隔約 14cm、口縁部高に相当する部分が約 7cm で口縁部高＝底部高－突帯間隔であり 1/2 突帯間隔でもある相関性をもつ。2 段目（4 段目）に逆三角形透孔をもつものを A1 型式とした。これとは別に底部高が同様の約 21cm であり、底部に半円、2 段目に千鳥配置の長方形透孔をもつ朝顔形埴輪があり、底部高が一致することから突帯間隔・口縁部高を A1 型式と同様と考えて復元した A2 型式がある。

以上の各型式は、従来より II 群埴輪としてまとめられてきた範疇（廣瀬 2015）におさまるものである。

配列 円丘部 2 段目に鱗付円筒埴輪、1 段目に普通円筒埴輪を主に配列することが判明した。このような事例は他に確認されていない。渋谷向山古墳では 1 段目が普通円筒埴輪列であることが発掘調査で明らかとなっているが、表採資料には鱗付円筒埴輪が少なくないことから同様の事例となる可能性がある。

また、造出し下段のくびれ部両側を調査したが、埴輪の特徴が異なることを確認した。すなわち、E 発掘区（北西側くびれ部）では普通 C2 型式、H 発掘区（南東側くびれ部）では、普通 A・B 型式が主体を占める。一般に、II 群埴輪の透孔は 1 段 2 孔となる特徴があるが、H 発掘区で 4 点出土した普通 B 型式は底部に 4 方向の透孔をがあり I 群的特徴を残すものである。この型式は口縁部高＝底部高－突帯間隔の相関性をもつ割付 2 式であり、これより新しい割付方法の口縁部高＝1/2 底部高（突帯間隔）となる割付 3 式の一群（普通 C 型式）が共存するなかで古い割付の特徴を兼ね備える。鐘方編年（鐘方 2003）では、割付 3 式の出現が埴輪編年 II 期を二分する新相の指標とされるが、割付 2 式の個体により古い属性の 4 方向透孔が認められることは、割付方式と属性の新古関係が調和的である。また、H 発掘区の普通 A・B 型式は底部透孔があり、E 発掘区の普通 C2 型式には認められない。III 群埴輪以降には底部に透孔がある個体が減少するため、底部高・割付方式・底部透孔の観点から、全体の傾向として E 発掘区出土埴輪より H 発掘区出土埴輪の方が古相の印象をもつ。

さらに、造出し下段埴輪列の屈曲点には E・H 発掘区ともに朝顔形埴輪を樹立する。E 発掘区では No.7・12、H 発掘区では No. 4・11 が朝顔形埴輪であり、5～7 本に 1 本程度で配列されたとみられる。そして、両

側ともに屈曲部付近の埴輪配列は特殊である。すなわち、円丘部 1 段目～造出し下段は原則普通円筒埴輪であるのに対し、E 発掘区では屈曲部から造出し側の 3 本が鱗付円筒埴輪である。H 発掘区では 6 条 7 段構成の可能性が高い普通 A 型式の存在を示したが、これらは屈曲点の朝顔形埴輪の両側とそれに続く円丘部 1 段目側にのみまとまって配列されている。このように、造出し下段くびれ部付近は特殊な埴輪配列を意識した可能性が高い。

以上のように、1・2 段目で鱗付・普通円筒埴輪を置き分けているだけでなく、造出しくびれ部周辺には特異な埴輪配列状態が認められる。それぞれに型式が異なる埴輪が配置されることから、生産と供給に一定程度の相関性がありそうである。ただし、今回サンプルをとった資料の多くが造出しくびれ部付近の資料であるため、円丘部平坦面に配列された資料にどういった傾向が認められるかは今後の課題である。

規格と工具痕跡 円筒埴輪を製作するのに、底部高・突帯間隔・口縁部高が工具を用いて設定され規格化していることはすでに知られている（鐘方 1997、辻川 1999）。しかし、これまで注目されてきたのは、突帯剥離面にみられる刺突や凹線、突帯上辺にみられる L 字形工具痕跡に代表される突帯間隔設定技法であった。

富雄丸山古墳出土埴輪には、底部外面に横方向の擦痕や刺突痕跡を認める個体があることを報告した。この痕跡は突帯設定などのように意識的につけた痕跡ではなく、偶発的についたものであると考えられる。痕跡と各部位の数値関係をみると、4 つの相関性が認められる。

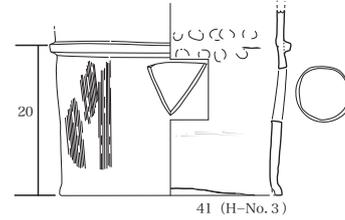
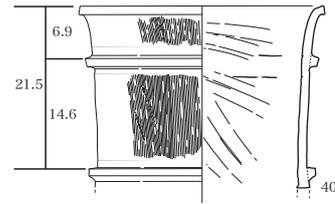
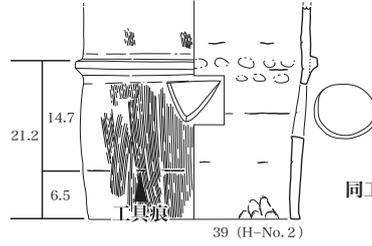
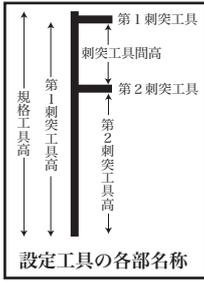
- ①口縁部高かつ突帯間隔の数値にも合うもの
- ②口縁部高の数値のみと合うもの
- ③突帯間隔の数値のみと合うもの
- ④突帯間隔＝口縁部高の数値と合うもの

具体的に、①であるものは H-No. 2、②であるものは T-No. 3、③であるものは E-No. 2・6・13、④であるものは N-No.4 が該当する。このような相関性があるということは、偶発的であるにしても設定工具に関わる痕跡であると判断できる。①～④の差は、規格工具自体の違いや使用方法の差を反映した可能性を考慮することができる。

すなわち、①は鐘方分類の割付 2 式に対応するもので、すでに鐘方が着脱式の設定工具を使用し、ひとつの工具で全ての設定を可能にする方法を想定している（鐘方 2003）。今回着目した底部の痕跡は、着脱可能な刺突工具を取り外し忘れた際に偶発的に付いた痕跡であると考えられる。だからこそ、同じような規格の個体であって

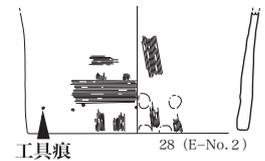
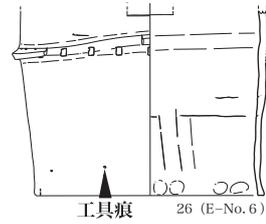
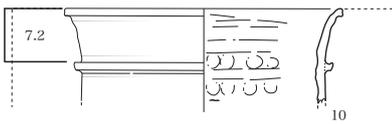
割付と設定工具の復元

割付 2 式



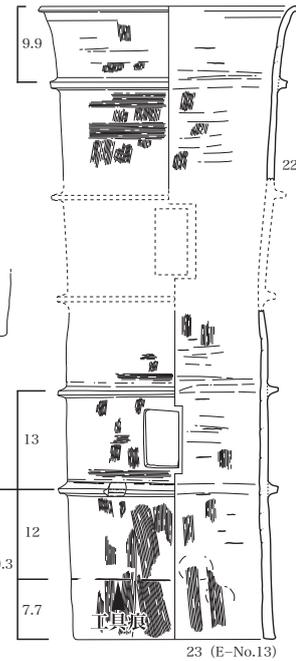
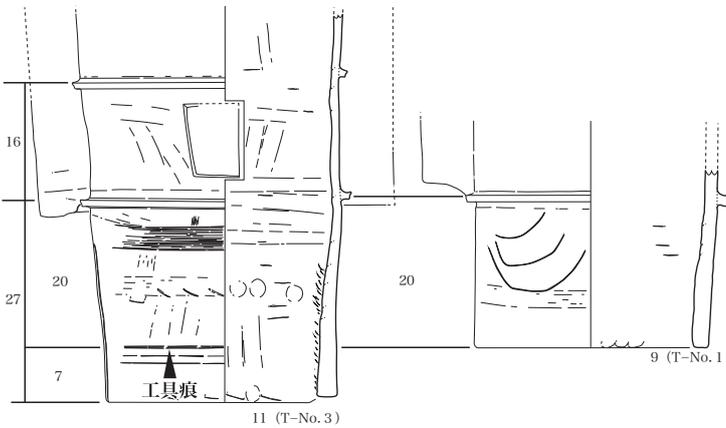
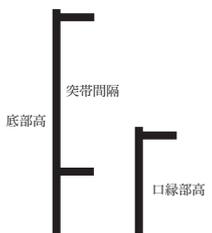
同工品

割付 3 式



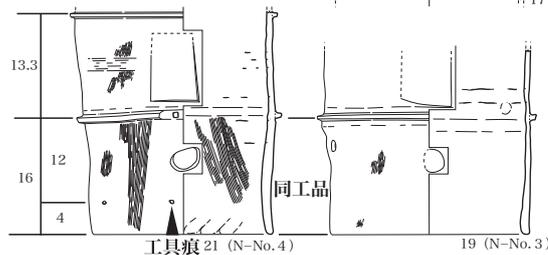
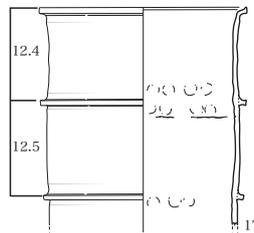
工具痕

工具痕



工具痕

割付 4 式



工具痕

同工品

19 (N-No. 3)

図 86 工具痕と規格工具の復元

も、多くの場合この痕跡が認められない。

次に②の具体例である T-No. 3 は、底面から約 7 cm の位置に横方向の擦痕が認められ、口縁部高 (7.2 cm) と一致する。しかし、底部高 (27 cm) から差し引くと突帯間隔 (16 cm) とは誤差の範囲を超えて一致せず、①とは別の理由を考える必要がある。相関性からみて、底部高を設定する工具に口縁部高も設定できる刺突工具があり、その擦痕がついたと考えられるが、①のように刺突工具間高または第 2 刺突工具高で口縁部高を設定すると、割付 2 式の場合では突帯間隔が約 20 cm と長くなる。よって、底部高と口縁部高をひとつの設定工具で設定したと想定するならば、突帯間隔は別途設定工具が必要となる。この要因に対する一案として、底部高-口縁部高=約 20 cm は T-No. 1 の底部高と一致する点に着目したい。つまり、ひとつの工具を使い分けることで 2 段階目埴輪列の底部高 2 種類を規格化することができる。T-No. 1 は底部高しかわからないが、仮に突帯間隔・口縁部高が T-No. 3 と一致すれば、この想定はより確かなものとなる。今回はあくまで仮定としての提示であるが、類例調査等で明らかにできる可能性がある。

③については、底面から約 4 cm の位置に刺突がみられる E-No. 2・6、底面から約 7.7 cm に横方向の擦痕がみられる E-No.13 が該当する。底部高のわかる E-No. 6 は約 19 cm であり、刺突までの高さを差し引いた約 15 cm は同様の形態を呈する E-No.8 の突帯間隔 (約 14 cm) と概ね一致する。つまり、底部高を設定する工具で突帯間隔も設定するが、割付 2 式のように同じ工具で口縁部高を設定すると 4 cm となる。口縁部高が 4 cm 程度のは I 群埴輪に多く、II 群埴輪ではほとんど確認できず、富雄丸山古墳にもない。よって、E-No. 2・6 の口縁部高は別途工具を用いて設定されたと想定できる。おそらく 1/2 底部高 (約 10 cm) または 1/2 突帯間隔 (約 7 cm) となる割付 3 式に対応するものと考えられる。E-No.13 も第 1 段突帯から擦痕までが約 12 cm で突帯間隔とほぼ一致する。しかし、差し引いた 7.7 cm は口縁部高 9.9 cm とは一致せず E-No. 2・6 と同様の理解ができる。なお、口縁部高は 1/2 底部高となる割付 3 式の関係性があり、上述の想定を裏付ける。

最後の④については、N-No. 3 が形態的に同工品だとすると、刺突の位置は口縁部高=突帯間隔と一致する。つまり、設定工具の第 1 刺突工具高で底部高、刺突工具間高あるいは第 2 刺突工具高のどちらかのみを使用することで突帯間隔=口縁部高を設定したと判断できる。

以上のように、底部外面にみる設定工具の痕跡から大

きく 4 つのパターンを想定できることを示した。すなわち、鐘方分類に照合すれば①が割付 2 式、③が割付 3 式、④が III 群埴輪的割付と対応する痕跡といえる。④については鐘方分類で名称が与えられていないため、ここでは割付 4 式とする。このような偶発的な工具痕跡は、規格工具と刺突工具が固定できないものでは起こり得ず、鐘方が想定したような着脱式設定工具であった可能性を補強するものといえる。基本的にどれも 2 つの刺突工具を着脱できる設定工具を用いる点で共通するが、割付 3 式では別途口縁部または突帯間隔を設定する工具が必要となる。割付 3 式が出現する背景は②の説明で述べたように、割付 2 式がひとつの工具で 1 個体を規格することを重視したのに対し、ひとつの工具で 2 個体を規格しようとした結果である可能性を指摘した。実際、II 群埴輪はその後半期になると様々な規格の個体が一古墳にみられるようになるが、突帯間隔が比較的揃う一方で底部高や口縁部高に差が出る場合が多い。底部高は埴輪を設置する際の高さ調整に関わり差を生むものと考え、突帯間隔を固定し、底部高をひとつの工具で 2 種類規格化することは生産面での合理性がある。しかし、III 群埴輪でより斉一性の高い埴輪が志向されるに伴い、④で説明した単純化された規格工具の使用法へ推移していくものと考えられる。富雄丸山古墳出土埴輪には、そういった規格工具および使用法が混在する点でも過渡期的様相を示しており、II 群埴輪を検討する上で重要な資料である。

第 2 項 形象埴輪

形象埴輪は数が少ないが、蓋形埴輪では五線帯を維持する立ち飾り部と段差表現の笠部をもつ個体が出土した。笠部は鐘方編年 III 期 1 段階 (廣瀬 II 期新相) 以降になると線刻表現が主体となるため、立ち飾り部と合わせて最古相の表現である。

造出し南東側くびれ部裾の外側では盾形埴輪を 1 点だけ樹立していた。類例には、桜井市茅原大墓古墳のくびれ部で盾持形埴輪が出土した例がある。出土埴輪は、大型の鱗付楕円筒埴輪の正面を盾面にしたともいえる形態である。一般に黄金塚タイプと呼ばれるもの (西光 1997) であるが、横線文・直弧文・鋸歯文等を組み合わせたもので、類例には奈良市不退寺裏山古墳出土資料がある。今のところ、同タイプの盾形埴輪は鐘方編年 II 期 2 段階～III 期 1 段階に限定される。

U 発掘区で出土した囲・家形埴輪は、組み合わせて使用したものである。組み合わせて配置したものは、一般に樋が伴う導水施設、あるいは井戸形等の構造物を伴う

湧水施設を模したものと評価される。前方後円墳の造出し谷部に配置される傾向がある。今回出土したのは、円丘部2段目裾付近の1段目平坦面であり、その面に溝を掘って区画した内部に埴輪を設置していた。溝内からミニチュア高杯も出土していることから、異質な空間をつくりだすための区画施設の一画であったと想定できる。円形埴輪は隅丸方形を呈し、上・下端部から約6cmの位置に突帯をめぐらす。円形埴輪としては天理市赤土山古墳とともに最古例である。内部の家形埴輪は底部のみが残存するものの、周辺に散在する破片には屋根部と思われる個体が数点ある。円形埴輪と組み合わせる場合の家形埴輪は、今のところ切妻造りであるものしかみつからない。しかし本例の場合、棟の破片が全く認められないことや、L字形を呈する屋根破片の存在から片流れ造りである可能性がある。また、家形埴輪内部の2槽式構造物も類例がない。樋や導水の根拠となる構造物がないため、現状では高さが異なりそれぞれに切り込みがある2槽の水を利用するための施設を表現したものと考え、湧水施設として評価しておく。このような円・家形埴輪が組み合わせる事例としては三重県石山古墳や広陵町巢山古墳より遡る最古事例として評価できる。

第3項 年代的位置づけ

円筒埴輪は、ほとんどがⅡ群埴輪として問題ないものである。しかし、普通D型式とした個体を含めた位置づけとなると課題が生じる。すなわち、普通D型式は廣瀬分類ⅡD型式に対応するが、この型式にはB種ヨコハケが認められる場合が多い。実際に、廣瀬編年（廣瀬2015）ではⅡC型式の出現がB種ヨコハケの出現と対応する段階（Ⅱ-3期）とするが、Ⅱ-4期の指標であるⅡD型式が認められる富雄丸山古墳にはB種ヨコハケが全くみられない。廣瀬編年の型式設定を重視すると、富雄丸山古墳ではⅡB～ⅡD型式が共伴しており、ⅡD型式の存在を重視すればⅡ-4期まで下ることになる。そもそも、廣瀬編年では複数型式が一古墳で共伴することを前提とした編年ではないため、富雄丸山古墳の様相を位置づけるのが難しい。

一方、鐘方編年（鐘方2003）では普通D型式はⅢ群の特徴とされる。Ⅱ群とⅢ群が共存する時期をⅢ期1段階に位置づけているが、鐘方編年ではB種ヨコハケの出現をⅢ期としての画期ととらえているため、これが全くみられない点を考慮すると鐘方編年Ⅱ期2段階として位置づけられる。とはいえ、その段階のなかですでにⅢ群的な規格が出現していることが明らかとなり、規格や

調整といった属性を指標とする編年を行う場合でも再検討が必要であるといえよう。

このように、富雄丸山古墳出土埴輪は既往の円筒埴輪編年の枠組みで理解するのが難しい資料群である。この原因は、埴輪編年Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ期が大型古墳を指標とする様式的なまとまりで検討されてきたが、Ⅱ期は中小規模古墳の様相で細分されてきたところにある。だからこそ、富雄丸山古墳のような大型古墳では細分された指標が共伴しうるのである。このことは、これまで細分化されたⅡ期の指標が一部同時期となるような脆弱性があることを示す。今後はその点に留意したⅡ群埴輪の検討が必要となろう。

他方、形象埴輪では蓋形埴輪が小栗編年の最古段階に位置づけられ（小栗2007）、鐘方編年Ⅱ期（廣瀬編年Ⅱ期古相）に相当する。黄金塚タイプの盾形埴輪は、今のところ形象埴輪出現期（鐘方編年Ⅰ-5～Ⅱ-1段階）にはない。鱗付円筒埴輪の減少期に同様の経過をたどることからみても、その成立を受けて考案された型式であるとみられる。このような円筒・形象埴輪の様相をふまえれば、概ね鐘方編年Ⅱ期2段階（廣瀬編年Ⅱ-2期）に位置づけるのが妥当である。（村瀬）

註

(1) 大賀氏によると近年は再検討し、富雄丸山古墳は前Ⅵ期に位置づけを変更したようである（2022年9月21日日本人談）。

引用文献

- 岩本崇 2018 「副葬品と埴輪による前期古墳広域編年」『前期古墳編年を再考する』中国四国前方後円墳研究会
- 大賀克彦 2002 「凡例 古墳時代の時期区分」『小羽山古墳群』福井県清水町教育委員会
- 小栗明彦 2007 「蓋形埴輪編年論」『埴輪考Ⅰ』大阪大谷大学博物館
- 鐘方正樹 1997 「中期古墳の円筒埴輪」『史跡大安寺旧境内Ⅰ』奈良市教育委員会
- 鐘方正樹 2003 「古墳時代前期における円筒埴輪の研究動向と編年」『埴輪論叢』第4号 埴輪検討会
- 西光慎治 1997 「盾形埴輪の製作技法-黄金塚タイプの意義-」『黄金塚2号墳の研究』花園大学黄金塚2号墳発掘調査団
- 實盛良彦 2009 「斜縁神獸鏡の変遷と系譜」『広島大学大学院文学研究科帝釈遺跡群発掘調査室年報』広島大学大学院文学研究科帝釈遺跡群発掘調査室
- 辻川哲郎 1999 「円筒埴輪の突帯間隔設定技法の復元-埴輪受容形態検討の基礎作業として-」『埴輪論叢』第1号 埴輪検討会
- 都出比呂志 1979 「前方後円墳出現期の社会」『考古学研究』26-3 考古学研究会
- 新納泉 2018 「前方後円墳の設計原理と墳丘大型化のプロセス」『国立歴史民俗博物館研究報告』211 国立歴史民俗博物館
- 廣瀬覚 2015 「古代王権の形成と埴輪生産」同成社
- 森下章司 2005 「前期古墳副葬品の組合せ」『考古学雑誌』89-1 日本考古学会

写真図版



1. 入口から墳頂方向を望む（調査前、北東から）
2016年9月15日



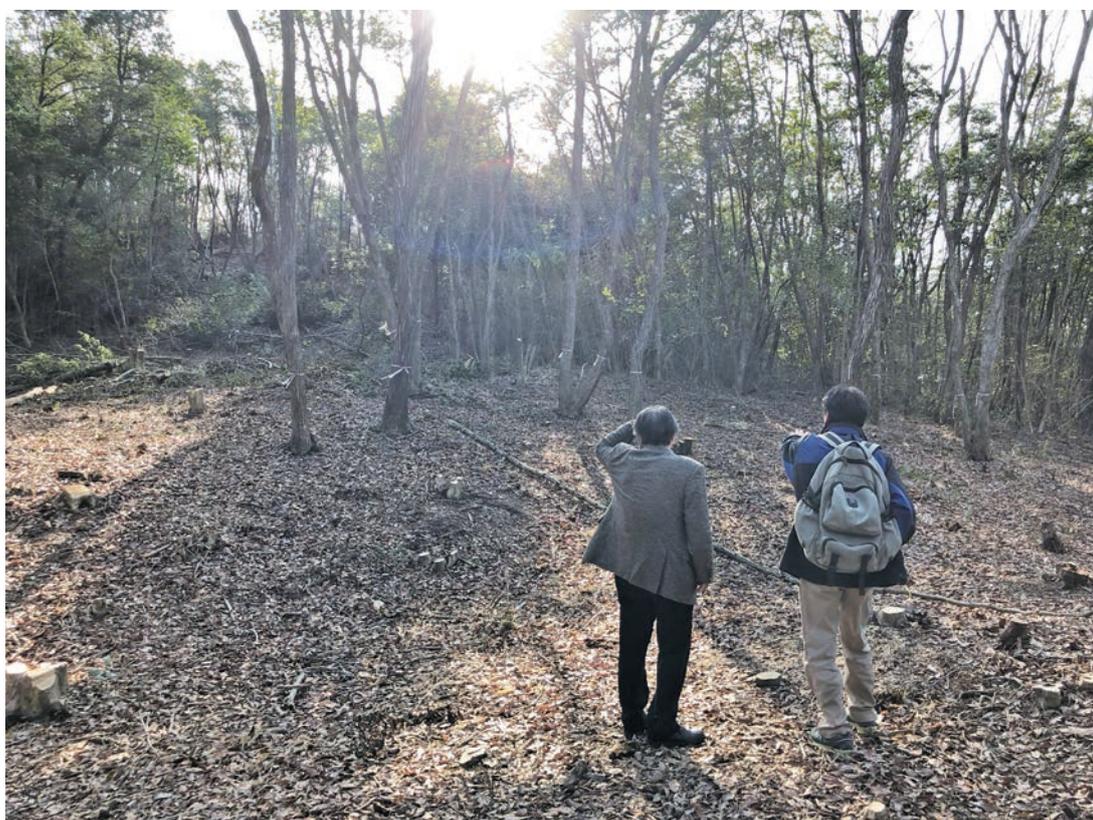
2. 丸山第1号街区公園から墳頂方向（調査前、北から）
2016年9月15日



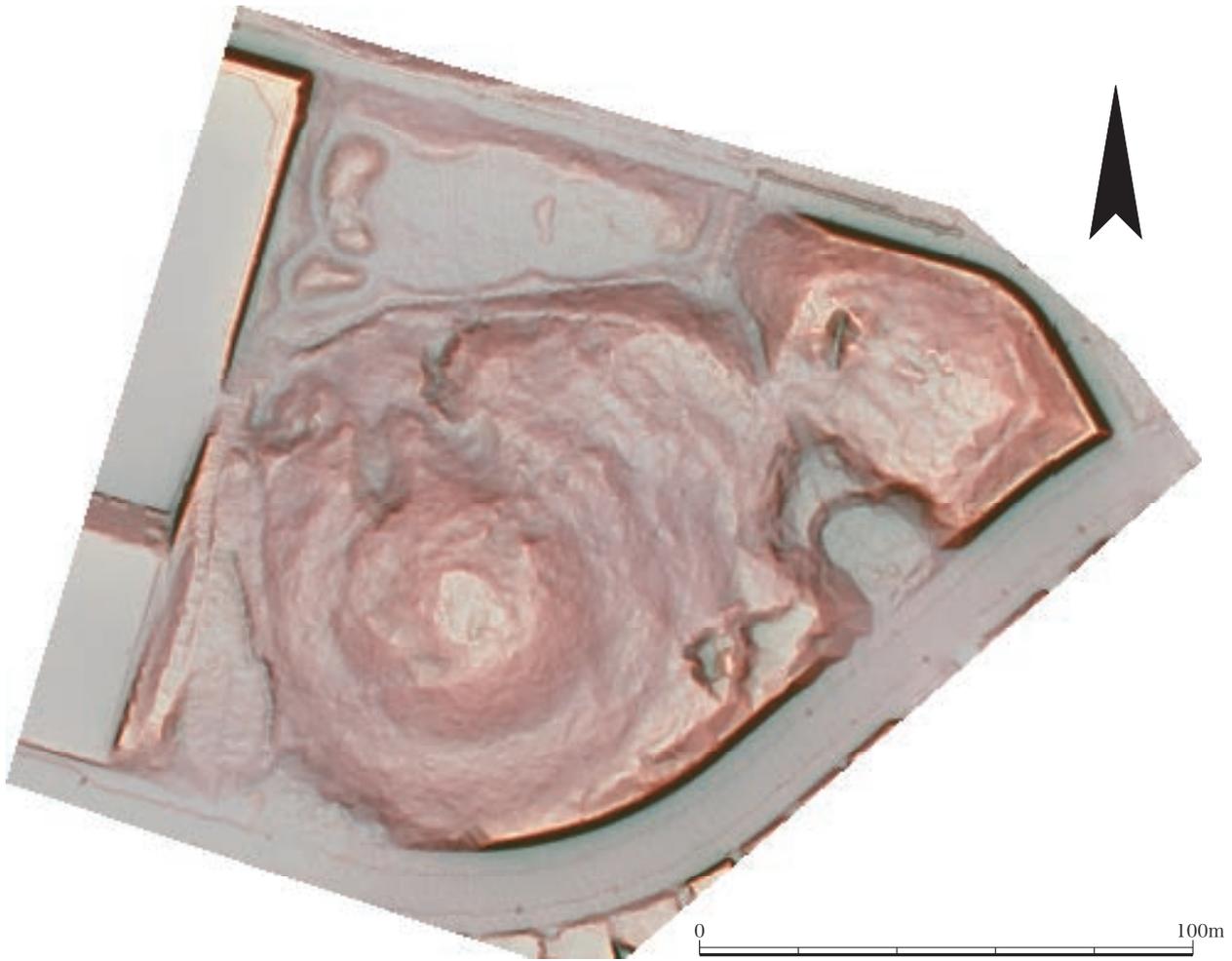
3. 墳頂部（調査前、東から）
2016年9月15日



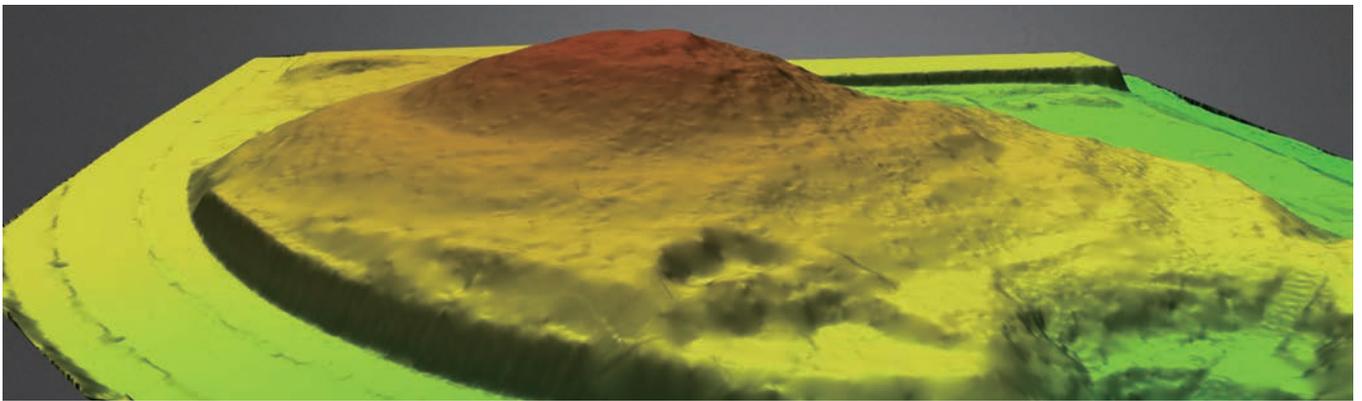
4. 墳頂から造出し方向（調査前、南西から）
2016年9月15日



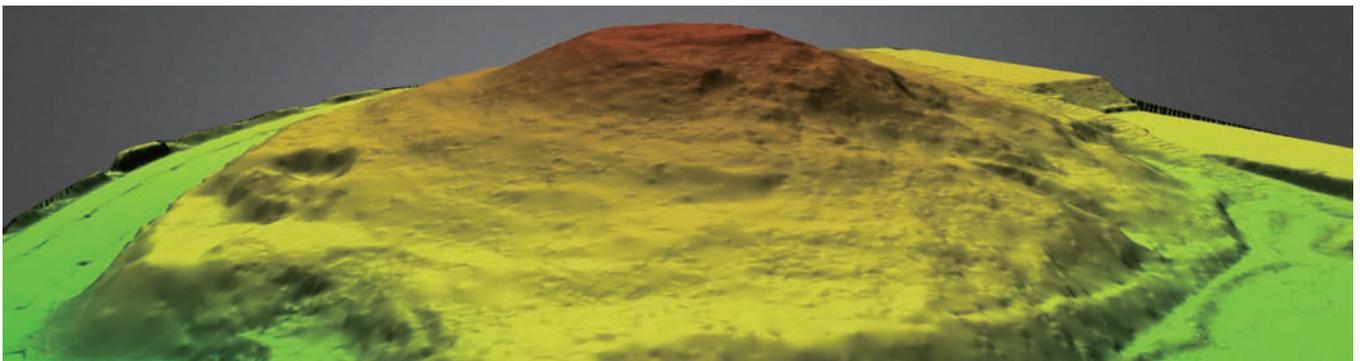
5. 和田晴吾氏視察（造出し付近伐採後に墳頂を望む、北東から） 2018年3月23日



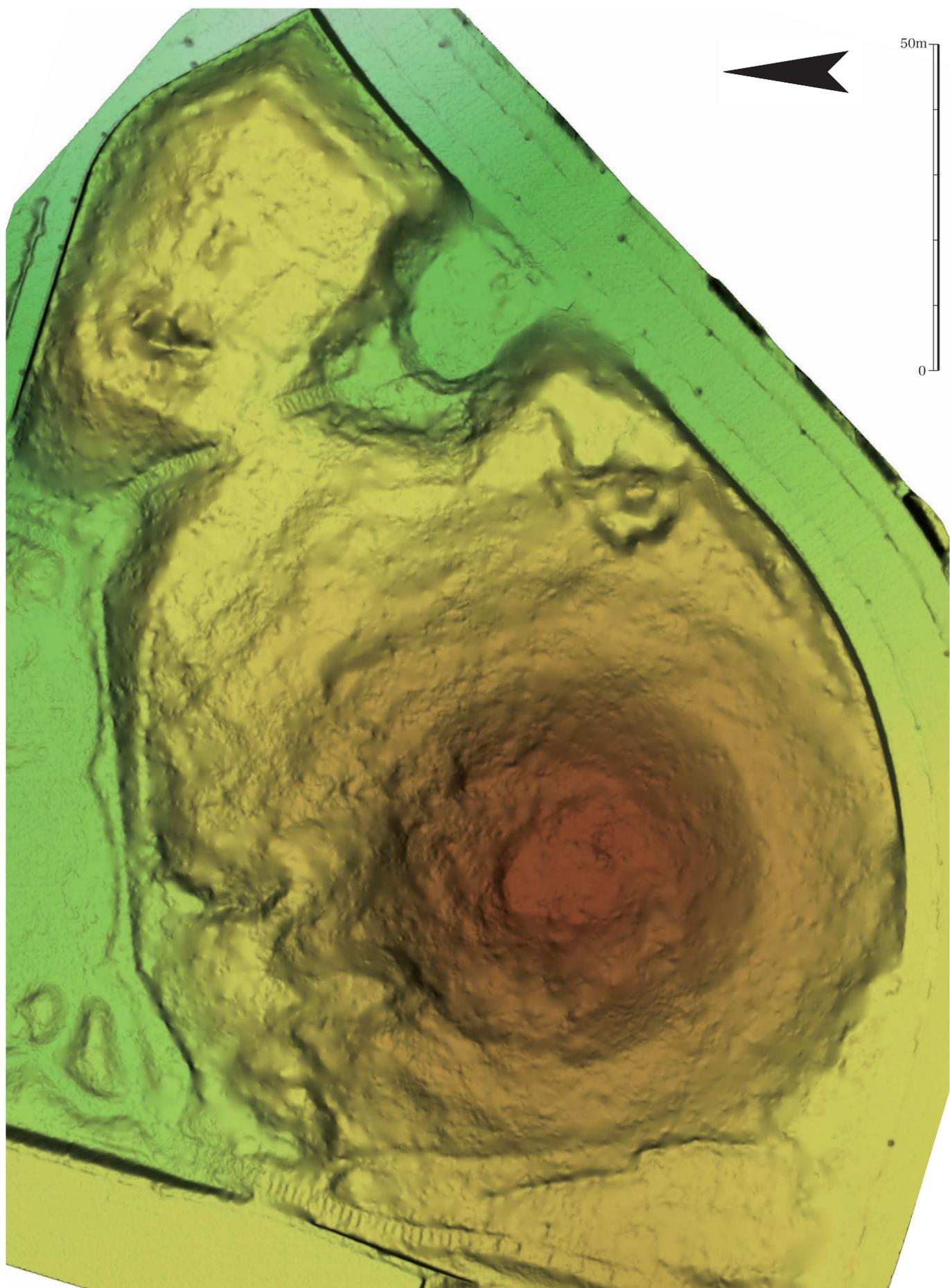
1. 航空レーザ測量による赤色立体地図 1/1,500 (第1次)



2. 三次元立体画像 南東から (大手前大学史学研究所作成)



3. 三次元立体画像 北東から (大手前大学史学研究所作成)



1. 三次元立体画像 1/800 (大手前大学史学研究所作成)



1. 墳頂部 墓坑全景 (第3次A区:垂直写真)



2. 墳頂部東側 3段目全景
(第3次A区東拡張部:左 [西から]、右 [東から])



3. 墳頂部東側 壇・盛土の状態
(第3次A区東拡張部:北から)



1. 円丘部西側 3段目斜面全景
(第5次A区西拡張部:西から)



2. 墓坑付近の化粧土 (第5次A区発掘区西拡張部:北から)



3. 炭層検出状態 (第5次A区西拡張部:北から)



4. 円丘部北東側 2・3段目全景 (第2次B区南西側:北東から)



5. 円丘部北東側 2・3段目全景 (第3次E区:北東から)



1. 円丘部北東側 2段目全景
(第2次B区南西側：北東から)



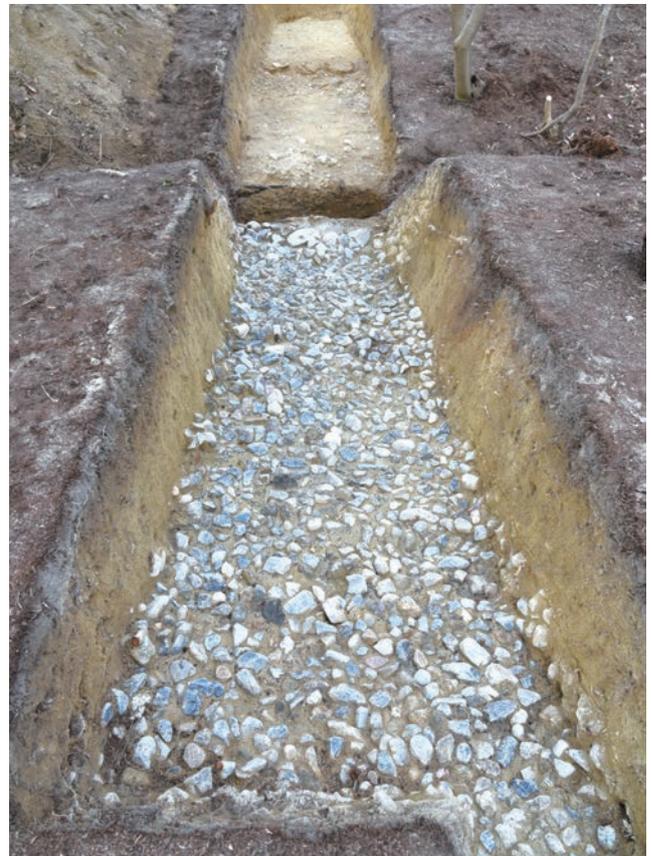
2. 円丘部北東側 2段目埴輪列検出状態
(第2次B区南西側：北東から)



3. 溝SD03 検出状態 (第2次B区南西側：北西から)



4. 円丘部西側 2段目埴輪列検出状態
(第5次M区：東から)



5. 円丘部西側 2段目斜面葺石検出状態
(第5次N区：東から)



1. 円丘部西側 全景 (第5次M・N区:西から)



1. 円丘部南西側 2・3段目全景
(第5次Q区:南西から)



2. 円丘部南西側 2段目全景
(第5次R区:南西から)



3. 円丘部南西側 2段目全景
(第5次R区:北東から)



4. 円丘部南東側 2段目全景 (第5次T区:西から)



5. 円丘部南東側 2段目埴輪列検出状態
(第5次T区:北東から)



1. 円丘部南東側2段目 鱗付円筒埴輪列検出状態 (第5次T区:南東から)



2. 埴輪列 No.T-1 断面 (第5次T区:南東から)



3. 埴輪列 No.T-3 断面 (第5次T区:南東から)



5. 埴輪列 No.T-6 断面 (第5次T区:南東から)



4. 埴輪列 No.T-3 断面 (第5次T区:北東から)



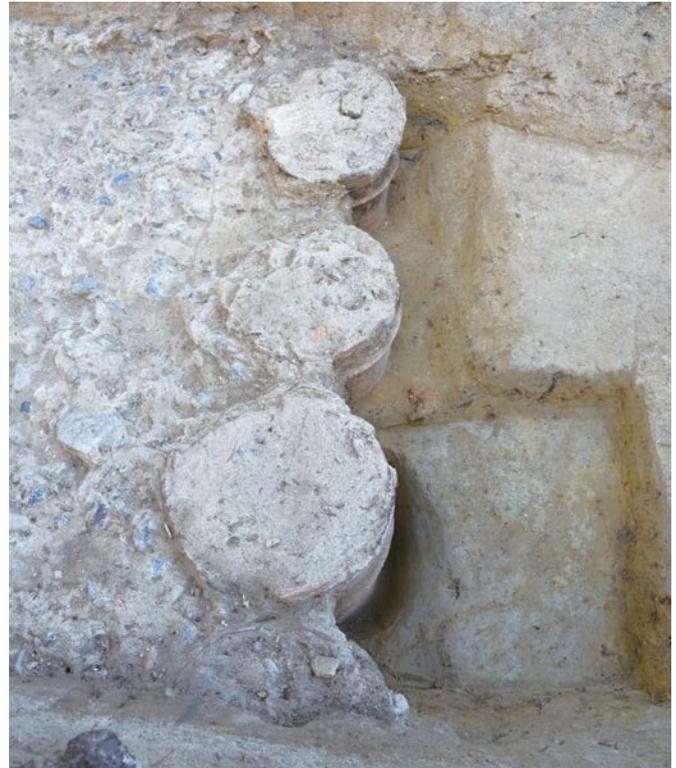
1. 円丘部北東側 1・2段目 全景
(第2次C・D区:北東から)



2. 円丘部北東側 1段目埴輪列検出状態
(第2次D区:北東から)



3. 円丘部西側1段目 埴輪列検出状態
(第5次N区:北から)



4. 円丘部西側1段目 埴輪列壺掘り検出状態
(第5次N区:北から)



1. 円丘部西側1段目 埴輪列検出状態 (第5次N区: 西から)



1. 円丘部西側1段目 埴輪列半截状態 (第5次N区:西から)



2. 円丘部西側1段目 小礫敷に混じる埴輪片 (第5次N区:南東から)



1. 円丘部西側 1段目全景 (第5次0区:西から)



2. 円丘部西側 基底石検出状態 (第5次0区:西から)



3. 円丘部西側 1段目斜面と堆積状態 (第5次0区:南から)



1. 円丘部北西側 1段目裾全景 (第5次S区:北西から)



2. 南側断面 (第5次S区:北東から)



3. 北側断面 (第5次S区:北東から)



4. 円丘部南東側 湧水施設形埴輪調査風景 (第5次U区:南東から)



1. 円丘部南東側 区画施設上面検出状態 (第5次U区:南東から)



2. 円丘部南東側 区画施設検出状態 (第5次U区:南東から)



1. 円丘部南東側 区画施設検出状態 (第5次U区：南から)



2. 円丘部南東側 区画施設検出状態 (第5次U区：南西から)



1. 円丘部南東側 区画施設検出状態 (第5次U区：北西から)



2. 円丘部南東側 区画施設検出状態 (第5次U区：北東から)



1. 円丘部南東側 湧水施設形埴輪上面検出状態 (第5次U区：垂直写真)



2. 円丘部南東側 湧水施設形埴輪検出状態 (第5次U区：垂直写真)



1. 円丘部南東側 湧水施設形埴輪検出状態 (第5次U区:南東から)



2. 円丘部南東側 湧水施設形埴輪検出状態 (第5次U区:北西から)



1. 円丘部南東側 湧水施設形埴輪検出状態 (第5次U区：南西から)



2. 円丘部南東側 湧水施設形埴輪内部の状態 (第5次U区：南西から)



1. 円丘部南東側 湧水施設形埴輪と葺石の重複関係 (第5次U区:南西から)



2. 円丘部南東側 湧水施設形埴輪と葺石の重複関係 (第5次U区:垂直写真)



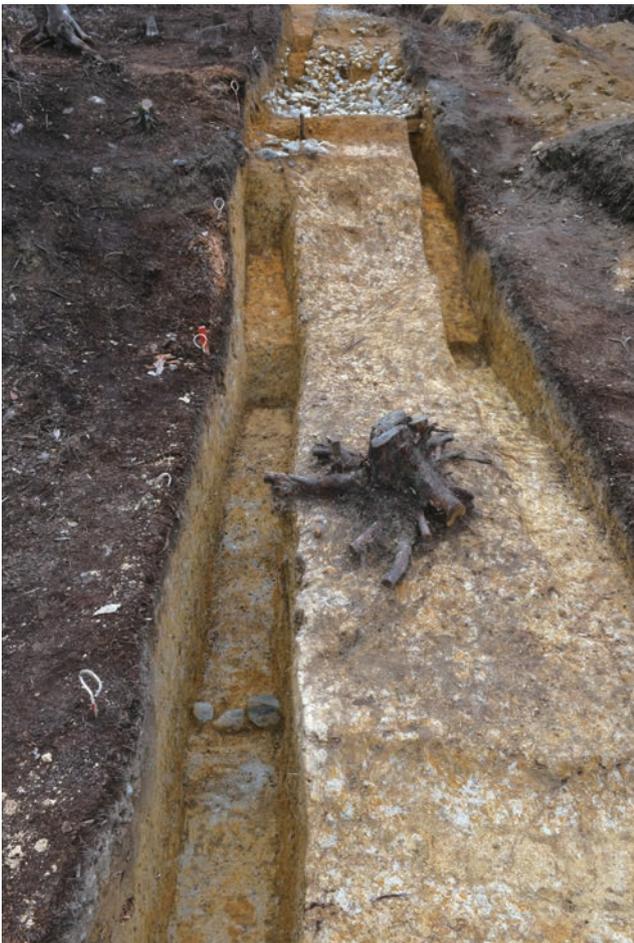
1. 造出し部上段 SX02 全景 (第3次F区:北東から)



2. 造出し部上段 SX02 全景 (第3次F区:南東から)



1. 造出し部南東側 中段の検出状態 (第4次I区:北東から)



2. 造出し部中央 中段平坦面盛土下の列石
(第2次B区南西側:北東から)



3. 造出し部南東側 中段平坦面検出状態
(第2次B区南東側:北西から)



1. 造出し部北西側 中段平坦面検出状態
(第2次B区北西側：南東から)



2. 造出し部北西側 埴輪検出状態
(第2次B区北西側：北西から)



3. 造出し部北西側 下段埴輪列検出状態 (第2次B区北西側：北西から)



1. 造出し部北西側 中・下段全景 (第3次E区: 垂直写真)



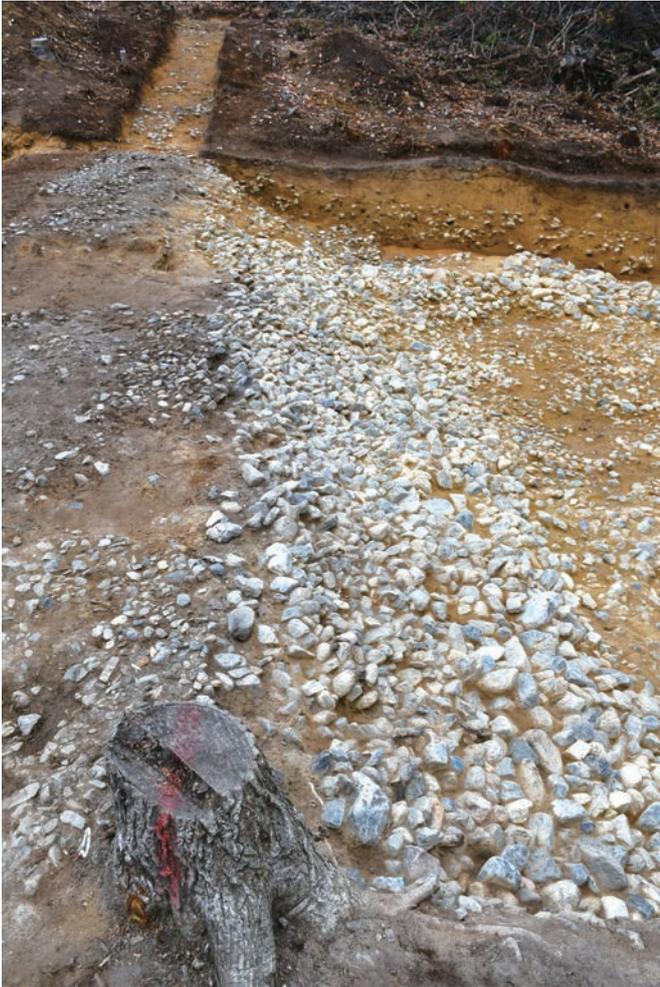
2. 造出し部北西側 E発掘区南西壁断面と石組遺構 (第3次E区: 北東から)



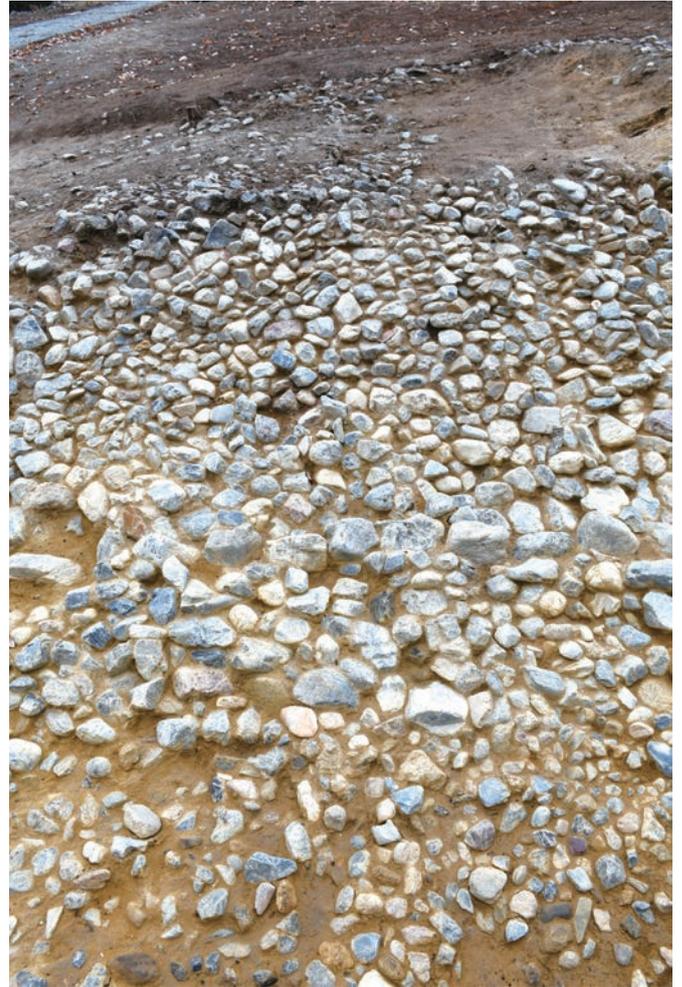
1. 造出し部北西側 中・下段検出状態 (第3次E区:北から)



2. 造出し部北西側 中・下段検出状態 (第3次E区:北西から)



1. 造出し部北西側 中段斜面検出状態
(第3次E区:北東から)



2. 造出し部北西側 中段斜面葺石・小礫敷検出状態
(第3次E区:北西から)



3. 造出し部北西側 中段平坦面小礫敷検出状態 (第3次E区:南から)



1. 造出し部北西側 中段斜面裾検出状態
(第3次E区:北から)



2. 造出し部北西側 下段石組遺構検出状態
(第3次E区:北西から)



3. 造出し部北西側 下段石組遺構と小礫敷の重複関係
(第3次E区:北西から)



4. 造出し部北西側 下段埴輪列検出状態 (第3次E区:北から)



1. 造出し部北西側 下段埴輪列断割状態 (第3次E区:北から)



2. 造出し部北西側 下段埴輪列の屈曲部配列状態 (第3次E区:北から)



1. 造出し部北西側 下段埴輪列 No.E-1～7 検出状態
(第3次E区：南西から)



2. 埴輪列 No.E-1 縦断面上部
(第3次E区：南西から)



3. 埴輪列 No.E-1 縦断面下部
(第3次E区：南西から)



4. 埴輪列 No.E-7 縦断面 (第3次E区：北東から)



1. 埴輪列 No.E-4 断面 (第3次E区:北西から)



5. 埴輪列 No.E-11 断面 (第3次E区:北西から)



2. 埴輪列 No.E-5 断面 (第3次E区:北西から)



6. 埴輪列 No.E-12 断面 (第3次E区:北西から)



3. 埴輪列 No.E-9 断面 (第3次E区:北西から)



4. 埴輪列 No.E-10 断面 (第3次E区:北西から)



7. 埴輪列 No.E-13 断面 (第3次E区:北東から)



1. 造出し部南東側 中段平坦面検出状態 (第4次I区:西から)



2. 造出し部南東側 中段斜面検出状態 (第5次L区:南西から)



1. 造出し部南東側 中段と円丘部の接続状態 (第5次L区:北東から)



1. 造出し部北東側 下段崩落葺石の堆積状態
(第2次B区北東側：北東から)



2. 造出し部北東側 下段検出状態
(第2次B区北東側：北東から)



3. 造出し部北東側 下段平坦面検出状態 (第5次P区：北東から)



1. 造出し部北西側 下段裾と円丘部1段目裾の接続箇所検出状態 (第4次J区:北から)



1. 造出し部北西側 下段裾と円丘部1段目裾の接続箇所検出状態 (第4次J区: 南西から)



2. 造出し部北西側 下段裾と円丘部1段目裾の接続箇所検出状態 (第4次J区: 北西から)



1. 造出し部北西側 下段裾と円丘部1段目裾の接続箇所検出状態 (第4次J区:北東から)



2. 造出し部北西側 円丘部1段目斜面葺石検出状態 (第4次J区:北東から)



3. 造出し部北西側 造出し部下段斜面葺石検出状態 (第4次J区:北西から)



1. 造出し部南東側 全景 (第4次G・H・I区:東から)



2. 造出し部南東側 上～下段全景 (第4次H・I区:南東から)



1. 造出し部南東側 円丘部1段目～造出し部下段全景 (第4次H区:東から)



1. 造出し部南東側 円丘部1段目～造出し部下段埴輪列検出状態 (第4次H区:北東から)



2. 造出し部南東側 円丘部1段目～造出し部下段埴輪列(拡張部)検出状態 (第4次H区:北東から)



1. 造出し部南東側 円丘部1段目～造出し部下段埴輪列検出状態 (第4次H区:北東から)



1. 造出し部南東側 中段斜面と埴輪列検出状態
(第4次H区:東から)



2. 造出し部南東側 埴輪列と中段斜面の収束状態
(第4次H区:南東から)



3. 埴輪列 No.H-3 断面と掘方
(第4次H区:北西から)



4. 埴輪列 No.H-5 断面 (第4次H区:北東から)



5. 埴輪列 No.H-15 断面 (第4次H区:南東から)



6. 造出し部南東側 下段全景 (第4次G区:南西から)



1. 造出し部南東側 円丘部1段目・造出し部下段接続箇所全景 (第4次G・H区:東から)



1. 造出し部南東側 下段裾・盾形埴輪検出状態 (第4次G区:南東から)



2. 造出し部南東側 円丘部1段目・造出し部下段接続箇所検出状態 (第4次G区:北東から)



1. 盾形埴輪検出状態 (第4次G区: 南西から)



2. 盾形埴輪内部断面状態 (第4次G区: 南西から)



3. 盾形埴輪内の埴輪出土状態 (第4次G区: 垂直から)



4. 造出し部南東側 下段裾転落石検出状態 (第5次K区: 南西から)



1. 造出し部南東側 下段裾検出状態 (第4次G区:南西から)



2. 造出し部南東側 下段裾外側土師器杯出土状態 (第5次K区:南から)



3. 造出し部南東側 下段斜面出土須恵器蓋出土状態 (第5次K区:南東から)



4. 造出し部南東側 下段裾外側整地土と埴輪包含状態 (第5次K区:南西から)



1. 造出し部南東側 溝 SD04 検出状態 (第5次K区:北東から)



2. 造出し部南東側 下段裾検出状態 (第5次K区:南西から)



1. 造出し部南東側 下段斜面葺石検出状態 (第5次K区：南東から)



2. 造出し部南東側 下段斜面崩落状態 (第5次K区：西から)



1. 斜縁神獸鏡 (図 51-1)



2. 銅鏃 (図 51-2)



3. 鍬形石 (図 51-3)



4. 管玉 (図 51-4~7)



6. 円板状土製品 (図 51-27~34)



5. 鉄器 (図 51-8~23)



1. 円筒埴輪：底部 (図 53-1)



2. 円筒埴輪：底部 (図 53-2)



5. 円筒埴輪：口縁部 (図 53-5)



3. 円筒埴輪：底部 (図 53-3)



6. 円筒埴輪：胴部 (図 53-6)



4. 円筒埴輪：底部 (図 53-4)



7. 円筒埴輪：底部 (図 53-7)



1. 鱗付円筒埴輪：口縁部 (図 53-8)



2. 鱗付円筒埴輪：底部 (図 53-9)



3. 底部の線刻 (図 53-9)



4. 鱗の剥離部分 (図 53-9)



5. 鱗付円筒埴輪：口縁部 (図 53-10)



6. 鱗付円筒埴輪：底部 (図 53-11)



7. 鱗付円筒埴輪の側面と鱗の剥離部分 (図 53-11)



1. 円筒埴輪：底部 (図 54-13)



2. 円筒埴輪：底部 (図 54-14)



3. 円筒埴輪：底部 (図 54-15)



4. 円筒埴輪：口縁部 (図 54-16 の上部)



6. 円筒埴輪：口縁部 (図 54-17)



7. 円筒埴輪：口縁部 (図 54-18)



5. 円筒埴輪：底部 (図 54-16 の下部)



8. 円筒埴輪：底部 (図 54-19)



1. 円筒埴輪：口縁部 (図 54-20)



4. 円筒埴輪：口縁部 (図 55-22)



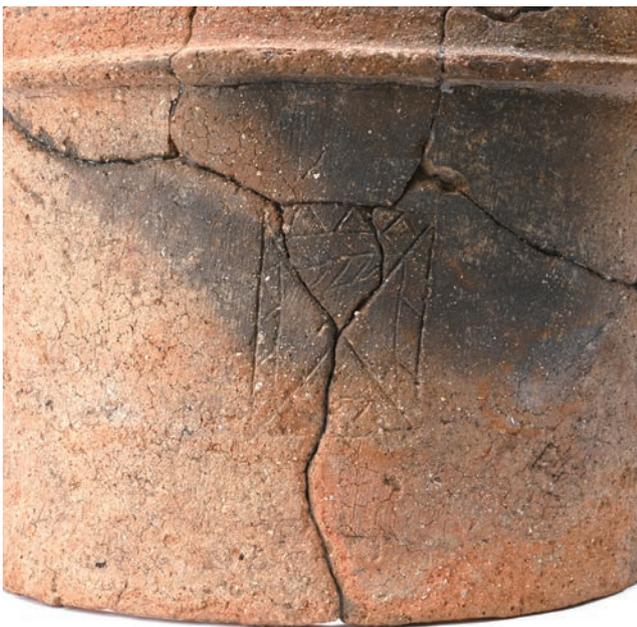
2. 円筒埴輪：底部 (図 54-21)



5. 円筒埴輪：底部 (図 55-23)



6. 円筒埴輪：口縁部 (図 55-24)



3. 底部の盾形線刻 (図 54-21)



7. 円筒埴輪：底部 (図 55-25)



1. 円筒埴輪：底部 (図 56-26)



2. 突带上辺の刺突工具圧痕 (図 56-26)



3. 円筒埴輪：底部 (図 56-27)



8. 円筒埴輪：底部 (図 56-31)



4. 円筒埴輪：底部 (図 56-28)



5. 底部の刺突痕跡 (図 56-28)



6. 円筒埴輪：底部 (図 56-29)



7. 円筒埴輪：底部 (図 56-30)



9. 1方向の底部透孔 (図 56-31)



1. 朝顔形埴輪：口縁部 (図 56-32)



2. 朝顔形埴輪：底部 (図 56-33)



3. 鱗付楯円筒埴輪：底部 (図 57-34)



4. 鱗付楯円筒埴輪：底部 (図 57-35)



1. 鱗付筒埴輪：底部、鱗剝離部分 (図 57-36)



2. 鱗付筒埴輪：底部 (図 57-37)



3. 円筒埴輪：胴部 (図 58-38)



4. 円筒埴輪：底部 (図 58-39)



1. 円筒埴輪：口縁部 (図 58-40)



4. 円筒埴輪：底部 (図 58-42)



5. 円筒埴輪：口縁部 (図 58-43)



2. 円筒埴輪：底部 (図 58-41)



6. 円筒埴輪：底部 (図 58-44)



3. 4方向の底部透孔 (図 58-41)



7. 円筒埴輪：底部 (図 58-45)



1. 円筒埴輪：口縁部 (図 58-46)



2. 円筒埴輪：底部 (図 58-47)



3. 底部内面の板ナデ痕跡 (図 58-47)



4. 円筒埴輪：底部 (図 59-48)



5. 円筒埴輪：口縁部 (図 59-49)



6. 円筒埴輪：底部 (図 59-50)



7. 円筒埴輪：底部 (図 59-51)



8. 円筒埴輪：底部 (図 59-52)



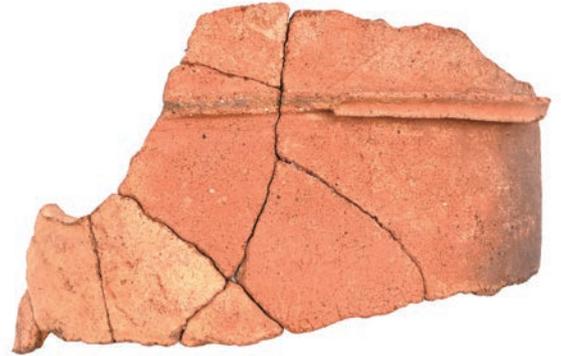
1. 円筒埴輪：口縁部 (図 59-53)



4. 円筒埴輪：口縁部 (図 60-56)



2. 円筒埴輪：胴部 (図 59-54)



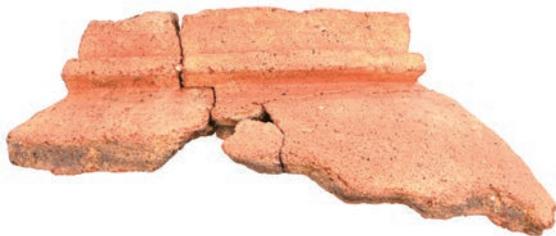
5. 円筒埴輪：胴部 (図 60-57)



3. 円筒埴輪：底部 (図 59-55)



6. 円筒埴輪：底部 (図 60-58)



7. 朝顔形埴輪：頸部 (図 60-59)



8. 朝顔形埴輪：底部 (図 60-60)



1. 朝顔形埴輪口縁部と内面の竹管文 (図 61-61)



2. 朝顔形埴輪：口縁部 (図 61-62)



3. 朝顔形埴輪：肩～胴部 (図 61-63)



4. 朝顔形埴輪：底部 (図 61-64)



1. 湧水施設形埴輪 (図 62-65・図 65-68・図 66-69)

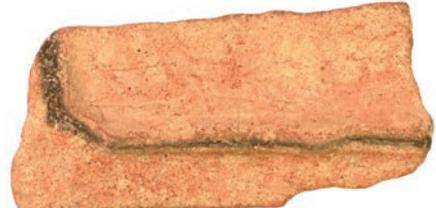


3. 湧水施設形埴輪（囲または家形埴輪の破片）
（図 67-75 ~ 80）



1. 湧水施設形埴輪（囲形埴輪の破片）（図 64-66・67）

4. 各発掘区出土家形埴輪（図 67-81・82）



2. 湧水施設形埴輪（家形埴輪の破片：両面）（図 67-70 ~ 74）



1. 盾形埴輪 表面 (図 69-83)



1. 盾形埴輪 口縁部断面 (図 69-83)



2. 盾形埴輪 口縁部の赤色顔料 (図 69-83)



4. 盾形埴輪 裏面の線刻 (図 71-83)



3. 盾形埴輪 中央部破片 (図 69-83)



1. 盾形埴輪 裏面 (図 71-83)



2. 盾形埴輪 方形刺突 (図 71-83)



3. 盾形埴輪 内側面の圧痕 (図 76-83)



4. 盾形埴輪 右側面 (図 73-83)



5. 盾形埴輪 左側面 (図 74-83)



1. 盾形埴輪 (A区出土: 図79-84・85、C区出土: 図79-86)



2. 盾形埴輪 (F区出土: 図79-87~91)



3. 盾形埴輪 (E区出土: 図79-92・93)



4. 盾形埴輪 (R区出土: 図79-94)



1. 蓋形埴輪の立ち飾り部 A 面 (図 80-95 ~ 102)



2. 蓋形埴輪の立ち飾り部 B 面 (図 80-95 ~ 102)



1. 蓋形埴輪の軸受部 (図 80-103)



2. 蓋形埴輪の笠部 (図 80-104 ~ 107)



3. その他の形象埴輪 (図 81-108 ~ 112)



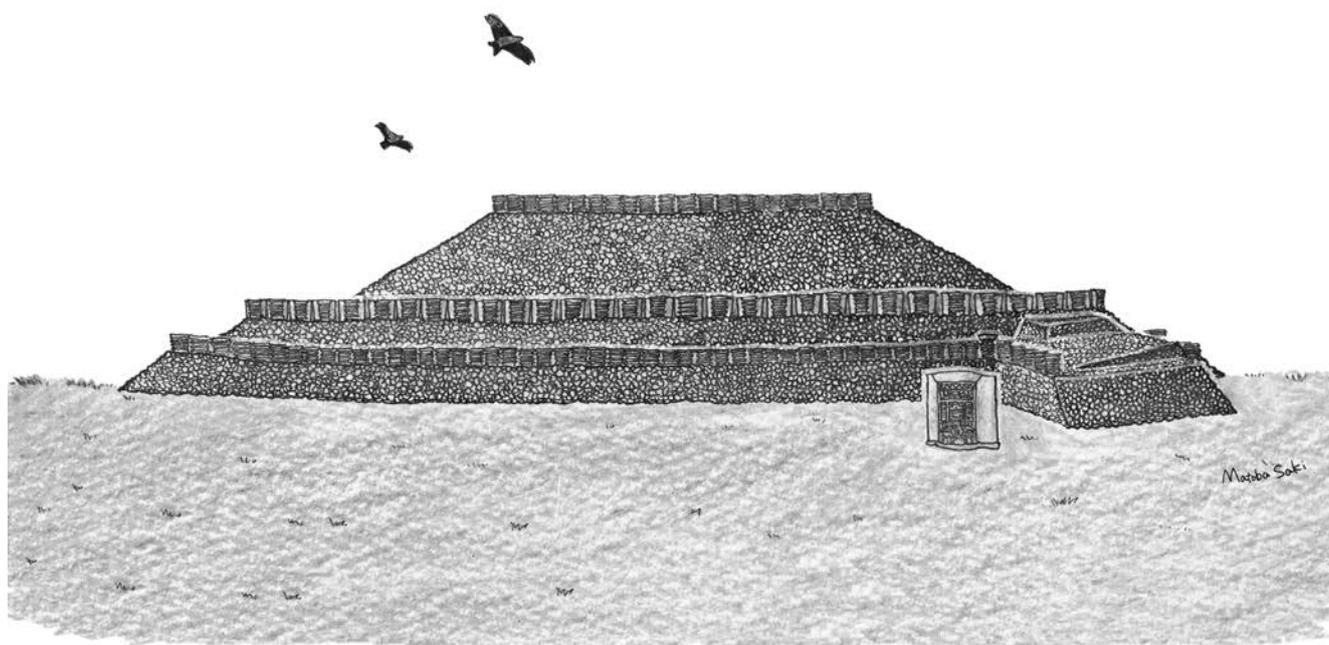
4. 弥生土器 (図 82-1)、土師器 (図 82-2・3)、須恵器 (図 82-4 ~ 6)



5. 土師器杯 (図 82-7)

報告書抄録

ふりがな	とみおまるやまこふんはくつちょうさほうこくしょいち							
書名	富雄丸山古墳発掘調査報告書 1							
副書名	-第 1～5 次調査-							
シリーズ名	奈良市埋蔵文化財調査研究報告							
シリーズ番号	7							
編著者名	村瀬陸 (編著)、鐘方正樹、山口等悟、荒井啓汰、柴原聡一郎、小林友佳、木村日向子、水川慶紀							
編集機関	奈良市教育委員会文化財課埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒 630-8135 奈良県奈良市大安寺西二丁目 281 番							
発行年月日	令和 4 (2022) 年 12 月 25 日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	° , ' , ''	° , ' , ''			
富雄丸山古墳	奈良県 奈良市 丸山一丁目	29201	04D-0023	34° 39' 59''	135° 45' 07''	1 次 : 2017 年 5 月 22 日～8 月 31 日	20,267㎡	緊急調査
						2 次 : 2018 年 12 月 3 日～2019 年 1 月 31 日	242.5㎡	
						3 次 : 2019 年 10 月 21 日～12 月 20 日	275㎡	
						4 次 : 2020 年 12 月 21 日～2021 年 2 月 19 日	260㎡	
						5 次 : 2021 年 12 月 20 日～2022 年 2 月 18 日	278㎡	
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
富雄丸山古墳	古墳	古墳時代	粘土槨、造出し、葺石、円筒埴輪列、区画施設	銅鏡、銅鏃、鍬形石、管玉、鉄剣、鉄刀、刀子、鉄鏃、農工具、小札、円板状土製品、円筒埴輪、鱗付円筒埴輪、鱗付楯円筒埴輪、朝顔形埴輪、囀形埴輪、家形埴輪、盾形埴輪、蓋形埴輪、甲冑形埴輪、土師器、須恵器、弥生土器				
要約	<p>富雄丸山古墳は、直径約 109m の造出し付円墳であり円墳としては日本最大である。墳頂部の埋葬施設（粘土槨）からは明治時代の盗掘、奈良県による発掘調査により多数の副葬品・埴輪が出土した。第 2～5 次調査では、発掘調査体験事業のなかで墓坑の再発掘を行い、銅鏡や鍬形石等が出土した。三段築成の円丘部では 2 段目平坦面（幅約 7m）に鱗付円筒埴輪列、1 段目平坦面（幅約 4.5m）に普通円筒埴輪列をめぐらす。主軸から南東側へ直交する方向の 1 段目平坦面には、区画施設が設けられ湧水施設形埴輪が出土した。造出しは長さ約 20m、幅約 46m の三段築成であるものの、段が収束する部分があるなど特殊な構造である。造出し上段中央には埋葬施設が設けられ、南東部のくびれ部裾付近では盾形埴輪 1 点出土した。また、墳頂部の断割調査では地山直上に焚火の痕跡を確認した。</p>							



富雄丸山古墳の復元イメージ（絵：的場紗希）

富雄丸山古墳発掘調査報告書 1

-第1～5次調査-

奈良市埋蔵文化財調査研究報告第7冊

発行日：令和4（2022）年12月25日

編集：奈良市教育委員会文化財課
埋蔵文化財調査センター

発行：奈良市教育委員会

印刷：株式会社 JITSUGYO



TOMIO-MARUYAMA KOFUN

THE REPORT OF ARCHAEOLOGICAL EXCAVATION 1

2022

Board of Education Secretariat, City of Nara